野内（のうち）遺跡Ａ地区

２００７

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター

野内遺跡A地区　b東区全景（南東から）

野内遺跡A地区　b西区全景（北東から）

野内遺跡A地区　主要出土遺物（古墳時代中期）

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。高山市は、平成17年２月に１市２町７村の合併により、市町村として面積が日本最大の“新高山市”として生まれ変わりました。

飛騨の地は古くから各地と盛んに交流を持ちつつ豊かな文化を生み続けてきたことで広く知られています。高山市内には、国指定史跡の堂之上遺跡（縄文時代）、赤保木瓦窯跡（奈良時代）、高山陣屋跡（江戸時代）をはじめとして、数々の注目すべき遺跡があります。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による一般国道41号高山国府バイパス建設に伴い、高山市上切町にある野内遺跡の発掘調査を実施しました。野内遺跡は、縄文時代から中世にかけての長い時代にわたる大規模な複合遺跡です。本報告書は平成15年度に実施した野内遺跡Ａ地区の調査成果をまとめたもので、野内遺跡としてはこれが初めての調査報告書となります。

今回の調査では、これまで当地域ではあまり報告例のない古墳時代中期の集落跡を発見しました。土器類をはじめとする多彩な出土遺物からは、当時の人々の暮らしぶりをうかがうことができます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成19年３月

財団法人岐阜県教育文化財団
文化財保護センター
所長　田口　久之

例　　言

1　本書は、岐阜県高山市上切町野内に所在する野内遺跡(岐阜県遺跡番号21203-09624)A地区の発掘調査報告書である。

2　本調査は、一般国道41号高山国府バイパス建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、平成15年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆・編集は小淵忠司が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

　伊藤秋男、牛丸岳彦、佐藤公保、下畑五夫、城ヶ谷和広、田中彰、広瀬和雄、藤本健三、
　堀正人、松井朗、松本優、望月精司
　高山市教育委員会

9　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。（従来の当遺跡の発掘調査との整合性を考慮し、日本測地系を使用。）

10　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2002『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

11　調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例言
第１章　調査の経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の方法と経過…… 3
第２章　遺跡の立地と環境…… 6
　第１節　歴史的環境…… 6
　第２節　地理的環境…… 8
　第３節　遺跡の基本層序…… 9
第３章　遺構…… 11
　第１節　遺構の概要…… 11
　第２節　竪穴建物跡…… 12
　第３節　その他の遺構…… 30
　全体図・遺構配置図…… 31
　主要遺構詳細図…… 43
第４章　遺物…… 91
　第１節　遺物の概要…… 91
　第２節　土器・陶磁器類…… 94
　第３節　土器・陶磁器類以外の遺物……105
　遺物実測図……107
第５章　総括……128
　第１節　「コの字状石囲炉」について……128
　第２節　古墳時代中期の土師器・須恵器について……131
　第３節　集落の存続年代と変遷について……133
　第４節　県内の主要調査例との比較検討……135
　第５節　まとめ……137
引用・参考文献……140
別表……143
　１　遺構一覧表……144
　２　包含層出土遺物一覧表……152
　３　遺物観察表……153
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　野内遺跡の位置…… 1
第２図　野内遺跡Ａ～Ｄ地区の配置…… 2
第３図　調査区とグリッドの設定…… 3
第４図　野内遺跡周辺の古墳時代中期の遺跡…… 7
第５図　周辺地形と遺跡の立地…… 8
第６図　遺跡の基本層序…… 9
第７図　調査区全体図…… 32
第８図　遺構配置略図（ｂ西区・ｂ北西区）…… 33
第９図　遺構配置略図（ｂ東区・ｂ北東区）…… 34
第10図　遺構配置図（ａ区）…… 35
第11図　遺構配置図（ｂ西区）（１）…… 36
第12図　遺構配置図（ｂ西区）（２）…… 37
第13図　遺構配置図（ｂ北東区）（１）…… 38
第14図　遺構配置図（ｂ北東区）（２）…… 39
第15図　遺構配置図（ｂ東区）（１）…… 40
第16図　遺構配置図（ｂ東区）（２）…… 41
第17図　遺構配置図（ｂ北西区）…… 42
第18図　竪穴建物跡（1号遺構）…… 44
第19図　竪穴建物跡（2･4号遺構）…… 45
第20図　竪穴建物跡（3･7号遺構）（１）…… 46
第21図　竪穴建物跡（3･7号遺構）（２）…… 47
第22図　遺物出土状況（3号遺構）…… 48
第23図　竪穴建物跡（5号遺構）…… 49
第24図　竪穴建物跡（6･25号遺構）…… 50
第25図　竪穴建物跡（12･13号遺構）…… 51
第26図　竪穴建物跡（38･53号遺構）…… 52
第27図　竪穴建物跡（56･57号遺構）…… 53
第28図　竪穴建物跡（70･71･125号遺構）（１）… 54
第29図　竪穴建物跡（70･71･125号遺構）（２）… 55
第30図　竪穴建物跡（70･71･125号遺構）（３）… 56
第31図　竪穴建物跡（80･102号遺構）…… 57
第32図　竪穴建物跡（118･120･121･129･130号遺構）、竪穴建物跡（118号遺構）（１）…… 58
第33図　竪穴建物跡（118号遺構）（２）…… 59
第34図　竪穴建物跡（120･121号遺構）（１）…… 60
第35図　竪穴建物跡（120･121号遺構）（２）…… 61
第36図　竪穴建物跡（129･130号遺構）（１）…… 62
第37図　竪穴建物跡（129･130号遺構）（２）…… 63
第38図　竪穴建物跡（129･130号遺構）（３）…… 64
第39図　竪穴建物跡（131号遺構）…… 65
第40図　竪穴建物跡（132･133号遺構）（１）…… 66
第41図　竪穴建物跡（132･133号遺構）（２）…… 67
第42図　竪穴建物跡（128･162号遺構）…… 68
第43図　竪穴建物跡（301･312号遺構）…… 69
第44図　遺物出土状況（302～305･307･308号遺構）…… 70
第45図　竪穴建物跡（302･303号遺構）…… 71
第46図　竪穴建物跡（304･305号遺構）…… 72
第47図　竪穴建物跡（307･308号遺構）…… 73
第48図　竪穴建物跡（309･310号遺構）（１）…… 74
第49図　竪穴建物跡（309･310号遺構）（２）…… 75
第50図　竪穴建物跡（309･310号遺構）（３）…… 76
第51図　竪穴建物跡（315～317･319号遺構）…… 77
第52図　竪穴建物跡（318号遺構）…… 78
第53図　竪穴建物跡（328～331号遺構）…… 79
第54図　竪穴建物跡（531号遺構）…… 80
第55図　竪穴建物跡（553･569･559号遺構）…… 81
第56図　竪穴建物跡（536号遺構）（１）…… 82
第57図　竪穴建物跡（536号遺構）（２）…… 83
第58図　竪穴建物跡（560･561･602号遺構）…… 84
第59図　竪穴建物跡（603号遺構）…… 85
第60図　竪穴建物跡（604号遺構）（１）…… 86
第61図　竪穴建物跡（604号遺構）（２）…… 87
第62図　土坑（40･41･79号遺構）…… 88
第63図　土坑（350･511･535･539･554号遺構）… 89
第64図　溝（200号遺構）…… 90
第65図　土師器の部位名称と計測位置…… 92
第66図　竪穴建物跡（1･3号遺構）出土遺物 ……108
第67図　竪穴建物跡（3･5号遺構）出土遺物 ……109

第68図　竪穴建物跡（5･6･7･13･25･38･53･57･70号遺構）・土坑（40号遺構）出土遺物……110
第69図　竪穴建物跡（70･71号遺構）・土坑（74･79号遺構）出土遺物 ……111
第70図　竪穴建物跡（80･102･118号遺構）・ピット（108号遺構）出土遺物 ……112
第71図　竪穴建物跡（121･125･128･129号遺構）・土坑（126号遺構）出土遺物 ……113
第72図　竪穴建物跡（130号遺構）出土遺物 ……114
第73図　竪穴建物跡（131～133･162･301･302号遺構）・ピット（138･182･187号遺構）出土遺物……115
第74図　竪穴建物跡（302～305号遺構）出土遺物……116
第75図　竪穴建物跡（305･307～309号遺構）出土遺物……117
第76図　竪穴建物跡（310･312･315･319･328･330･331号遺構）・土坑（313･507号遺構）・ピット（320･363･504号遺構）出土遺物……118
第77図　竪穴建物跡（531･536号遺構）・土坑（511･535号遺構）・ピット（527･530号遺構）出土遺物……119
第78図　竪穴建物跡（536･553･560号遺構）・土坑（554号遺構）・ピット（538号遺構）出土遺物……120
第79図　竪穴建物跡（561･602～604号遺構）出土遺物……121
第80図　a区包含層出土遺物（1）……122
第81図　a区包含層出土遺物（2）……123
第82図　b区包含層出土遺物（1）……124
第83図　b区包含層出土遺物（2）……125
第84図　b区包含層出土遺物（3）……126
第85図　b区包含層出土遺物（4）……127
第86図　野内遺跡A地区の土師器高杯……131
第87図　土師器高杯Cの類例の分布……136

表目次

第1表　検出遺構集計表 ……11
第2表　1号遺構出土遺物 ……12
第3表　3号遺構出土遺物 ……13
第4表　7号遺構出土遺物 ……13
第5表　5号遺構出土遺物 ……14
第6表　6号遺構出土遺物 ……14
第7表　13号遺構出土遺物 ……15
第8表　25号遺構出土遺物 ……15
第9表　38号遺構出土遺物 ……15
第10表　53号遺構出土遺物 ……15
第11表　57号遺構出土遺物 ……16
第12表　70号遺構出土遺物 ……16
第13表　71号遺構出土遺物 ……16
第14表　125号遺構出土遺物 ……17
第15表　80号遺構出土遺物 ……17
第16表　102号遺構出土遺物……17
第17表　118号遺構出土遺物……18
第18表　121号遺構出土遺物……18
第19表　130号遺構出土遺物……18
第20表　128号遺構出土遺物……19
第21表　131号遺構出土遺物……20
第22表　132号遺構出土遺物……20
第23表　133号遺構出土遺物……20
第24表　162号遺構出土遺物……21
第25表　301号遺構出土遺物……21
第26表　302号遺構出土遺物……21
第27表　303号遺構出土遺物……22
第28表　304号遺構出土遺物……22
第29表　305号遺構出土遺物……22
第30表　307号遺構出土遺物……22

第31表　308号遺構出土遺物……22
第32表　309号遺構出土遺物……23
第33表　310号遺構出土遺物……23
第34表　312号遺構出土遺物……24
第35表　315号遺構出土遺物……24
第36表　319号遺構出土遺物……24
第37表　328号遺構出土遺物……25
第38表　330号遺構出土遺物……25
第39表　531号遺構出土遺物……26
第40表　536号遺構出土遺物……26
第41表　553号遺構出土遺物……27
第42表　560号遺構出土遺物……27
第43表　561号遺構出土遺物……27
第44表　602号遺構出土遺物……28
第45表　603号遺構出土遺物……28
第46表　604号遺構出土遺物……28
第47表　出土遺物集計表 ……91
第48表　野内遺跡Ａ地区の「コの字状石囲炉」…128
第49表　「コの字状石囲炉」検出例……130
第50表　竪穴建物跡内出土遺物の組成……132

別表
1　遺構一覧表……144
2　包含層出土遺物一覧表……152
3　遺物観察表……153

写真図版目次

巻頭図版
巻頭図版１
　野内遺跡Ａ地区　ｂ東区全景（南東から）
　野内遺跡Ａ地区　ｂ西区全景（北東から）
巻頭図版２
　野内遺跡Ａ地区　主要出土遺物（古墳時代中期）

巻末図版
図版１
　調査前全景（西から）
　ｂ西区全景（南東から）
図版２
　ｂ西区全景（上が東）
　ｂ東区全景（北から）
図版３
　ｂ東区全景（上が南西）
　ｂ北西区全景（上が南西）
図版４
　ｂ北東区西端部（上が南西）
　ｂ北東区中央部（上が南西）
図版５
　ａ区全景（南から）
　１号遺構（北西から）
　１号遺構炉跡（北西から）
　２号遺構（南から）
　３号遺構炭化材検出状況（南から）
　３号遺構（南から）
　３号遺構炉跡（西から）
　４号遺構（南から）
図版６
　５号遺構（南から）
　５号遺構炉跡（北から）
　６号遺構（北から）
　12･13号遺構（西から）
　25号遺構（西から）
　38号遺構（東から）
　53号遺構（南から）
　56･57号遺構（南西から）
図版７
　70･71･125号遺構（北から）
　80号遺構（北から）
　102号遺構（西から）

128号遺構（南から）
131号遺構（西から）
132号遺構（南西から）
133号遺構（西から）
162号遺構（南西から）
図版８
118･120･121･129･130号遺構（上が西）
118号遺構（南西から）
118号遺構炉跡（西から）
120･121号遺構（北から）
129･130号遺構（南西から）
図版９
301号遺構（北西から）
302･303･304号遺構（西から）
305号遺構（西から）
307･308号遺構（北西から）
309号遺構（東から）
309号遺構炉跡（東から）
310号遺構炭化材検出状況（南西から）
310号遺構（南西から）
図版10
310号遺構炉跡（南西から）
312号遺構（西から）
315･316･317･319号遺構（南西から）
318号遺構（東から）
328号遺構（西から）
330号遺構（西から）
531号遺構（東から）
531号遺構炉跡（南から）
図版11
536号遺構遺物出土状況（東から）
536号遺構（南から）
553号遺構（北西から）
559号遺構（北から）
560･561号遺構（南東から）
602号遺構（南から）
603号遺構（南から）
604号遺構（南東から）
図版12
竪穴建物跡（1･3号遺構）出土遺物
（１・２・３・４・６・７・９・10･13･14･15･17･18）
図版13
竪穴建物跡（3･5･53･70号遺構）・土坑（40号遺構）
出土遺物
（20･21･22･28･29･30･31･45･46･47･52･55･57･58
･61）
図版14
竪穴建物跡（70･71･80号遺構）・土坑（74号遺構）
出土遺物
（59･62･64･66･67･68･69･71･74）
図版15
竪穴建物跡（80･102･118･121号遺構）・ピット
（108号遺構）出土遺物
（75･76･77･79･82･83･86･87･89･92･100･101･102
･106）
図版16
竪穴建物跡（125･128･129･130号遺構）出土遺物
（114･119･120･122･123･125･126･127･129･131･133
･134･135･136･137･138･139･140）
図版17
竪穴建物跡（130･132･133･162･301･302号遺構）・
ピット（182号遺構）出土遺物
（144･145･146･156･157･158･165･166･169･172･175
･176･181･182）
図版18
竪穴建物跡（302･303･304･305･308号遺構）
出土遺物
（183･184･185･188･189･190･191･192･193･194･195
･196･201･207）
図版19
竪穴建物跡（308･309･310･312･315･319･330号遺構）
出土遺物
（209･211･212･213･214･216･219･220･225･226･227
･231･233･234･235･238･239）

図版20

竪穴建物跡（531･536号遺構）・土坑（507号遺構）出土遺物

（244･248･250･251･252･255･259･260･263･264･265･266･267･268･270･271･272･274･275）

図版21

竪穴建物跡（536･560･561･602号遺構）・土坑（554号遺構）出土遺物

（276･277･279･280･281･282･295･296･297･301･304･305･307･310･311･314･315）

図版22

竪穴建物跡（603･604号遺構）・ａ区包含層出土遺物

（319･322･323･327･328･329･333･336･337･341･347･348･351･355･357･361･368）

図版23

ａ区包含層・ｂ区包含層出土遺物

（369･370･376･377･378･381･384･385･386･387･388･396･399）

図版24

ｂ区包含層出土遺物

（403･408･409･410･411･421･425･427･428･430･431･433）

図版25

須恵器破片集合

（63･72･108･151･170･237･246･257･291･292･331･342･419･426）

石器･石製品集合

（32･109･124･383･437･438･439･440･441･442）

第1章　調査の経緯

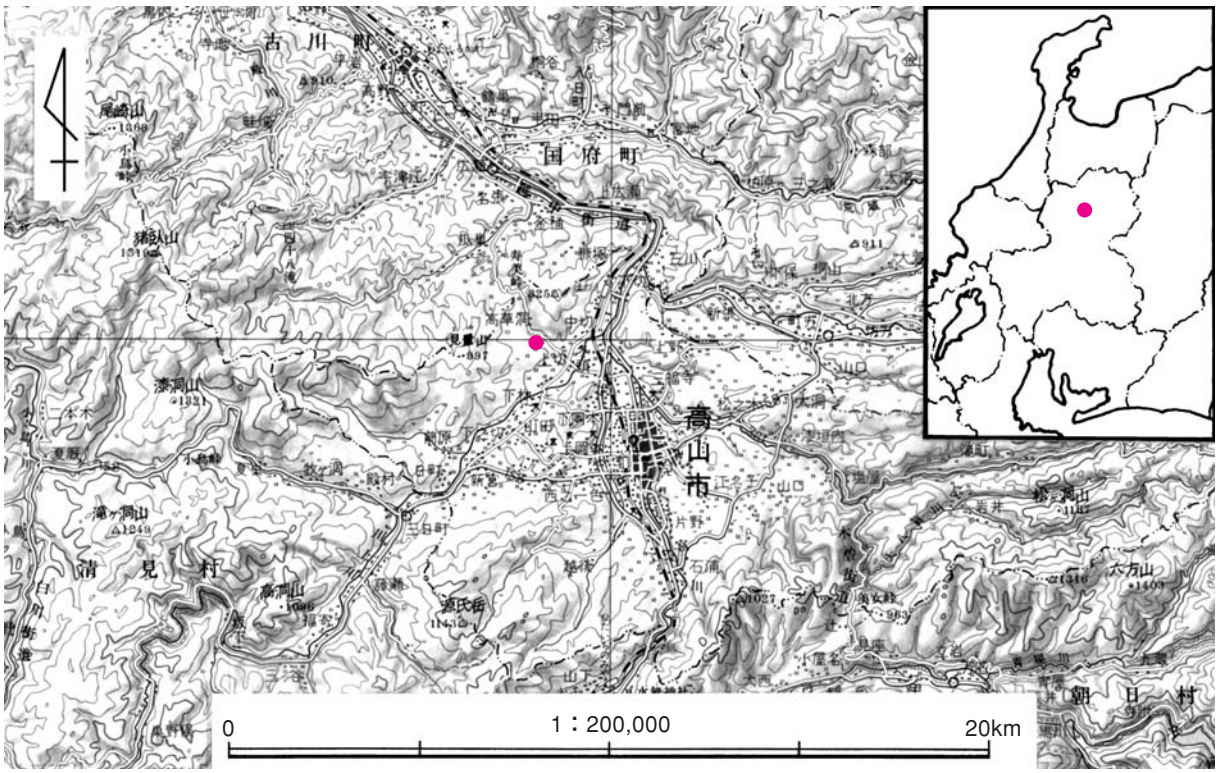
第1節　調査に至る経緯

野内遺跡は、高山市上切町野内に所在し、調査地点は高山市街地中央のJR高山駅から北西に3.5㎞の地点に当たる。

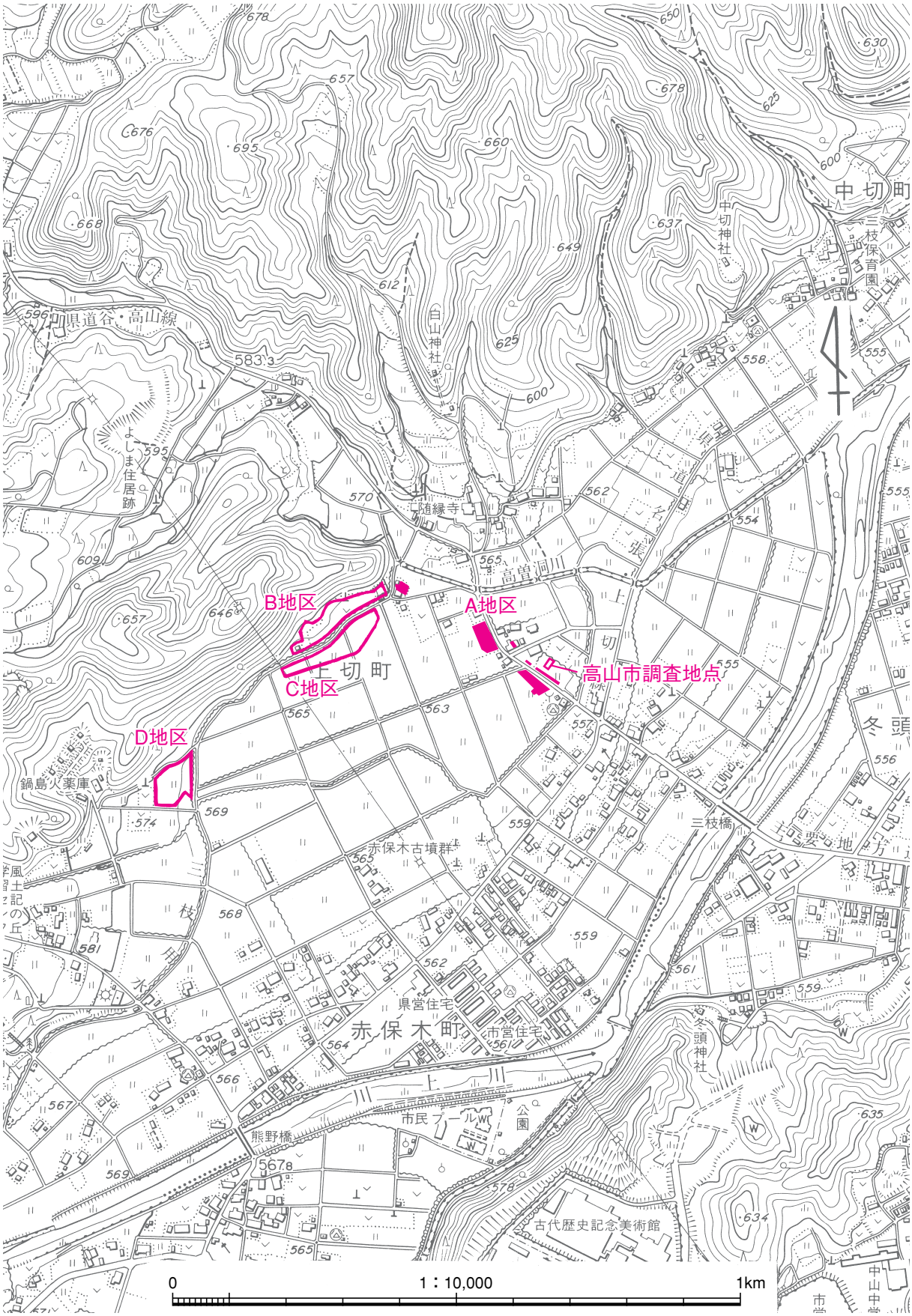
今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による一般国道41号高山国府バイパス建設事業に伴い実施したものである。高山国府バイパスは、建設中の中部縦貫自動車道へのアクセス道路として計画された。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていなかったが、大規模開発の進んでいない水田地帯が含まれ、付近に県指定史跡赤保木古墳群が分布することなどから遺跡の存在が予想された。そこで、事業の実施に先立って平成12年５月11日から７月31日にかけて高山市教育委員会による試掘確認調査が行われた[1)]。調査の結果、古墳時代の集落跡が確認され、平成12年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において本発掘調査を要することが決定した。

さらに、平成15年度に本発掘調査に着手するに当たり、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが主体となり、平成12年度に調査できなかった場所の試掘確認調査を実施した。その結果を受けて、平成15年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、本発掘調査対象範囲が決定した。

なお、中部縦貫自動車道予定地については、平成12年度から13年度にかけて当センターが試掘確認調査を実施し、野内遺跡の範囲が確定された。遺跡は広範囲に及ぶため調査区をＡ～Ｄ地区に分けた。本書で報告するのは、平成15年度に本発掘調査を実施したＡ地区で、調査面積は3,000㎡である。



第1図　野内遺跡の位置



第2図　野内遺跡Ａ～Ｄ地区の配置

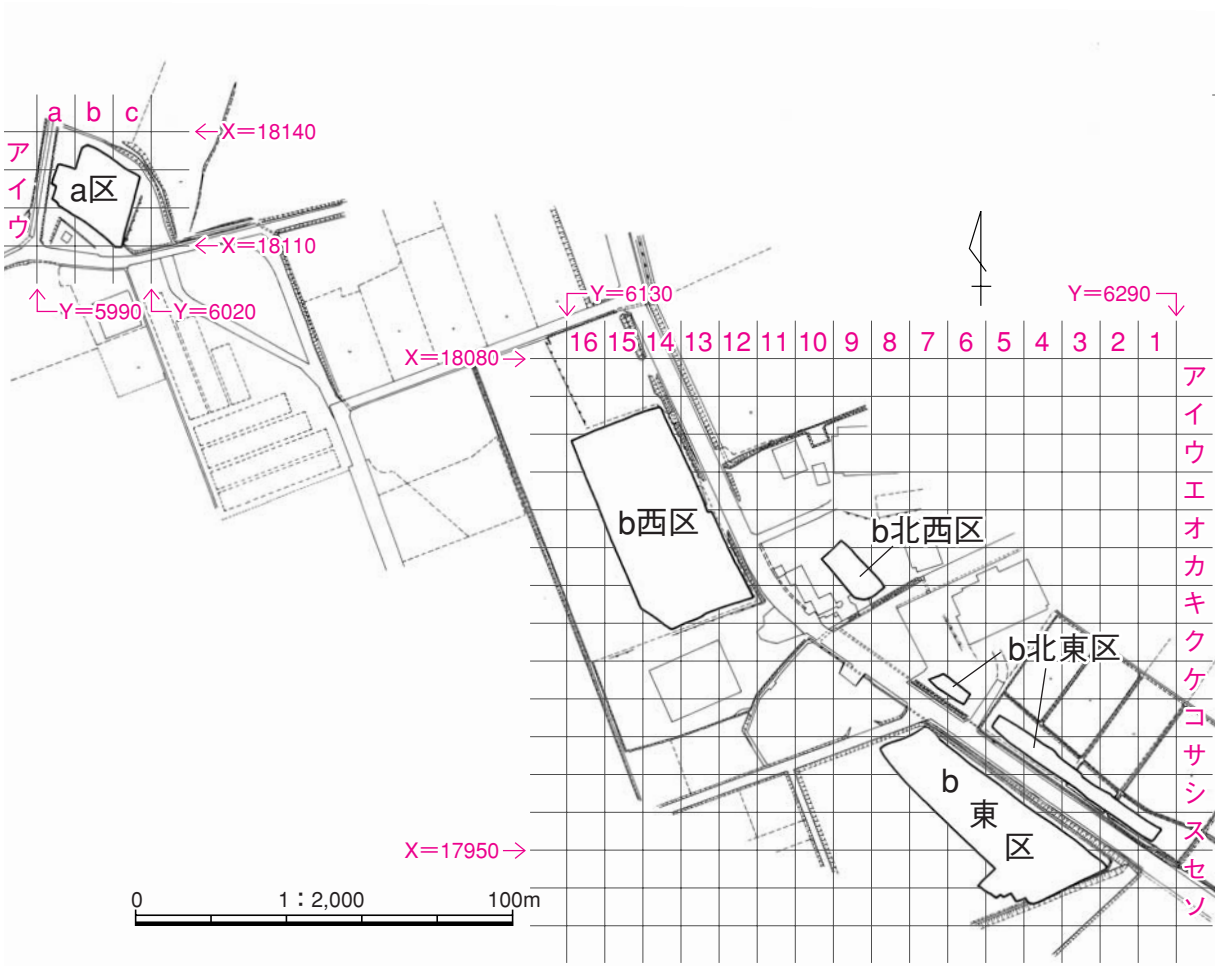
第２節　調査の方法と経過

野内遺跡Ａ地区は、試掘調査の結果から調査区を２か所に分け、西の調査区をａ区、それ以外をｂ区とした。さらにｂ区については西から順に、ｂ西区、ｂ北西区、ｂ東区、ｂ北東区と細分して呼ぶこととした。

Ａ地区内のａ区とｂ区とでグリッド原点とグリッド名を共有することは行っていない。日本測地系に基づいた10mグリッドとした。

表土掘削は重機を使用して行い、遺物包含層（以下、包含層という。）掘削、遺構検出、遺構掘削を人力作業により行った。主要な遺構については平面形や土層断面を手測り実測し、観察所見を記録した。遺構検出作業に並行して遺構配置略測図を作成し、遺構配置の検討や遺構番号登録に活用した。調査区全域にわたる広域実測は、空中写真測量により実施した。また、出土遺物の一次整理作業（洗浄・注記）を現地において行った。

現地での調査経過は次のとおりである。



第3図 調査区とグリッドの設定

第１週(５/６～５/９)

５月６日　現地における作業を開始する。ｂ北西区のトレンチ掘削を行う。

５月９日　ｂ北西区トレンチ掘削完了。

第２週(５/12～５/16)

５月12日　ａ区の表土掘削作業を実施する。

５月13日　ｂ区はｂ東区から表土掘削作業を開始する。

第３～９週(５/19～７/４)

５月19日　ａ区・ｂ東区の人力掘削作業を開始する。ａ区とｂ東区の作業を併行する。

７月３日　ａ区の作業完了。ａ区では遺構の検出はなかった。

第10～17週(７/７～８/29)

７月７日　ｂ東区の人力掘削作業を続行する。

７月25日　ｂ西区の表土掘削作業を開始する。人力掘削作業はｂ東区に専念して行う。

７月28日　飛騨地区高等学校教員の初任者研修を現場にて行う。参加者８名。

８月５日　久々野中学校１年生の発掘体験を実施する。

８月18日　八賀晋指導調査員の指導を受ける。

第18～23週(９/１～10/11)

９月１日　現場での出土遺物整理作業を開始する。

９月２日　ｂ西区の人力掘削作業を開始する。ｂ東区とｂ西区の作業を併行する。

９月４日　八賀晋指導調査員の指導を受ける。

10月９日　ｂ東区の空中写真測量を実施する。

10月11日　現地説明会を開催する。参加者155名。

第24～31週(10/14～12/５)

10月14日　ｂ北東区の表土掘削作業を開始する。

10月16日　ｂ北東区の人力掘削作業を開始する。

10月17日　三枝小学校児童８名（引率１名）が見学。地元の長寿会12名が見学。

10月22日　ｂ北西区の人力掘削作業に着手する。ｂ西区・ｂ北東区・ｂ北西区の作業を併行する。

10月24日　南山大学教授伊藤秋男氏の指導を受ける。

11月19日　ｂ西区・ｂ北東区・ｂ北西区の空中写真測量を実施する。

12月３日　発掘作業及び現場での出土遺物整理作業終了。

発掘作業終了後、埋め戻し作業と出土遺物整理作業を続行し、すべての作業完了後、現場事務所を撤収した。

現場撤収後、平成17年度まで、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター飛騨出張所において、整理作業及び報告書作成作業を行った。

発掘調査及び整理作業の体制は、次のとおりである。

	平成15年度	平成16年度	平成17年度
理事長	日比治男	日比治男	日比治男
副理事長	高橋宏之	高橋宏之	高橋宏之
副理事長	平光明彦	平光明彦	平光明彦
常務理事兼センター所長	福田安昭	福田安昭	田口久之
経営課長	川瀬崇敏	川瀬崇敏	川瀬崇敏
調査部長	武藤貞昭	川部　誠	川部　誠
飛騨出張所長	上原真昭	小谷和彦	小谷和彦
担当調査員	竹本哲行	小淵忠司　岡崎敏彦	小淵忠司
整理作業員	上田里香　垣添敦子	清田由美子　瀬戸幸子	田井孝子　所洋子
	前畑裕美　村田明美	柚村幸子　横山美寧子	脇淵純子

第１章　注

１）高山市教育委員会2005『高山市内遺跡発掘調査報告書（高山市埋蔵文化財調査報告書第28号）』。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　歴史的環境

野内遺跡Ａ地区は、主として古墳時代中期[1]の集落跡であるので、本節では高山市域の古墳時代中期の様相を中心に概観する。

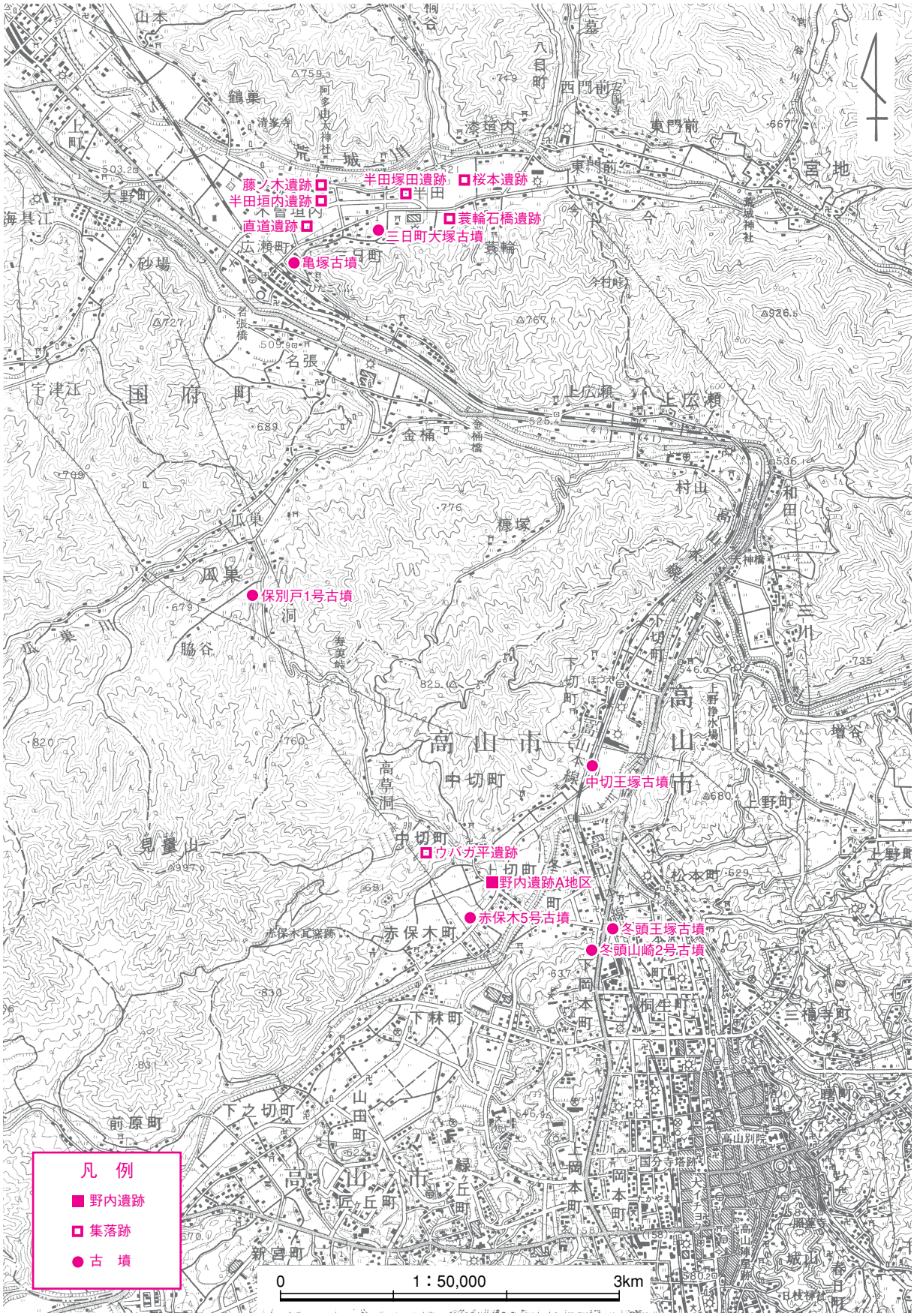
飛騨地域で古墳が確認されているのは、高山市中心部の高山盆地から古川盆地（高山市北部の旧国府町域と飛騨市南部の旧古川町域）にかけての地域に限られる。全体では数百基の古墳が存在すると見込まれるものの[2]、大半は古墳時代後期の小円墳であり、古墳時代中期に遡る可能性があるのは、三日町大塚古墳、亀塚古墳、保別戸（ほべっと）１号古墳、冬頭（ふいとう）王塚古墳、冬頭山崎２号古墳、中切（なかぎり）王塚古墳、赤保木（あかほぎ）５号古墳など、ごく少数にとどまる。ただし、それらのうち高山盆地所在の４基すべてが野内遺跡から1.5㎞以内に位置していることは、当遺跡の置かれた環境を考える上で大いに注目される。

野内遺跡の東方1.3㎞に位置する冬頭王塚古墳は1970年に発掘調査が行われ、直径20ｍの二段築成円墳であることが判明している。２基の竪穴式石室が検出され、２号石室からは直弧文鹿角装具着装の鉄剣が出土した[3]。そのわずか200ｍ西には冬頭山崎２号古墳が位置する。1998年に当センターが発掘調査を行い、二段築成の円墳で竪穴式石室を持つことが判明した。鉄剣や鉄鏃等が出土した[4]。当遺跡の1.5㎞北東に位置する中切王塚古墳では、発掘調査は実施されていないものの、明治時代に行われた墳丘の伐採時に竪穴式石室が確認され、鉄剣などが出土している[5]。今回の調査地区の南西約300ｍという至近距離に位置する赤保木５号古墳は、赤保木古墳群（県指定史跡）のうちの１基である。９基からなる古墳群であったとされ、そのうち５基が現存する。1992年に高山市教育委員会により５号古墳の発掘調査が行われた。竪穴式石室２基が検出され、１基は川原石積み、もう１基は板状石材を組み合わせた石室と判明した。川原石積みの石室から鉄槍及び鉄剣が出土している[6]。以上の４基は、いずれも埋葬施設内から年代判定の決め手となる須恵器が出土していないため築造年代を絞り込むのが難しいが、概ね５世紀半ばから後半の古墳と推測されている。

古墳時代中期の遺構を含む集落跡の分布は、古川盆地側に偏る傾向が著しい。高山盆地に所在するものとしては、野内遺跡とその北西500ｍに位置するウバガ平遺跡が知られるにすぎない一方で、古川盆地に所在するものとしては、半田塚田遺跡、半田垣内（はんだがいと）遺跡、蓑輪石橋遺跡、桜本遺跡、藤ノ木遺跡、直道遺跡を挙げることができる。これら６遺跡のうち概要が報告されているのは桜本遺跡のみであるが[7]、いずれも大規模な集落跡であることが明らかとなっている。

当遺跡近隣の代表的な遺跡としては、赤保木遺跡（縄文時代中期、弥生時代～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代）、赤保木古窯跡群（古代）、与島（よしま）古墳群（古墳時代後期）などが知られている（第５図）。野内遺跡各地区の調査の進展に伴い、多くの成果が確認されている。詳しくは発掘調査と資料精査の進展を待つこととしたいが、Ｂ地区では縄文時代から古代にかけて、Ｃ地区とＤ地区では弥生時代から中世にかけての遺構を検出しており、野内遺跡では弥生時代以来、長期にわたり人々の生活の痕跡が確認できる。

なお、平成16年度に高山市教育委員会がＡ地区の北隣接地（第２図）を対象に行った発掘調査にお



第4図　野内遺跡周辺の古墳時代中期の遺跡

いて、古墳時代中期の溝や住居跡などが検出され、須恵器の甕・瑳、土師器の甕・高杯・壷・甑などが出土した[8)]。当調査区の直接の比較検討対象とすべき事例として注目される。

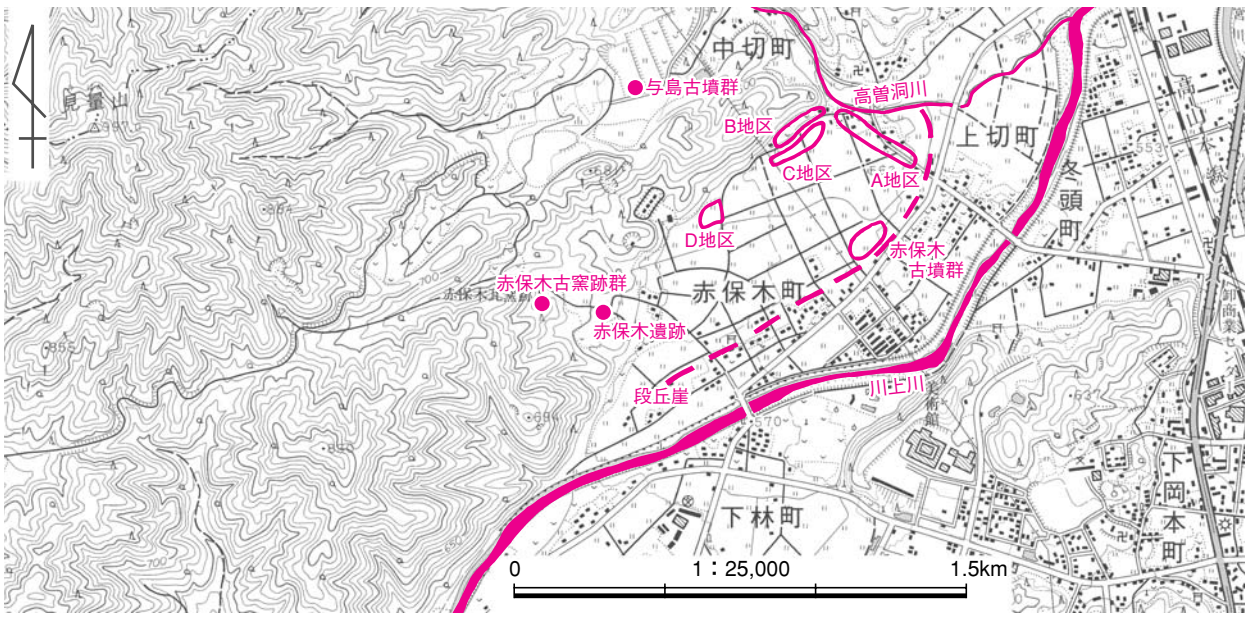
第２節　地理的環境

野内遺跡は、高山市街地を中心に広がる高山盆地の北西端部、北西に山を背負い、南東に開けた日当たりの良い緩斜面に位置する。東方と南方の眺望が良好で、晴天時には長野県との県境に当たる北アルプスを望むことができる。

遺跡全域は、遺跡の所在する上切町の西隣の赤保木町方面から流れる川上（かわかみ）川の左岸に形成された河岸段丘上位面に立地する。遺跡南方には川上川に平行して東西に連なる段丘崖が認められ、当遺跡や赤保木古墳群は、いずれもこの段丘崖より上位の段丘面に立地している。ただし、Ａ地区は遺跡の東端部に位置しているため、川上川よりも遺跡の北西方向から流れてくる高曽洞（こうそほら）川に近い。そのため、高曽洞川によって形成された小規模な扇状地上に立地すると捉えることもでき、この点がＢ～Ｄ地区とは立地上の相違点となっている[9)]。

調査区域の調査前状況は、宅地を一部含むが、大部分が水田であった。ａ区の位置する北西側が高く、南東側に向って緩やかに降る地形となっている。調査前の地表面の標高は、ａ区では565ｍ台を測るが、ｂ区ではやや低くなり、最も高いｂ西区北端部でも564.1ｍ、最も低いｂ北東区の南端部では560.1ｍとなる。調査地区南東側の段丘崖より下位の区域では湧水が激しく、立地の上からは遺跡の存在を想定するのは難しい。

高山盆地から高曽洞川沿いに北西へ登る寿美（すみ）峠（高曽洞峠）越えの街道（通称「瓜巣（うりす）街道」）は古川盆地への最短ルートとして古くから使われた。Ａ地区はその登り口に近く、集落の選地に当たっては、これも大きな利点として考えられたことは想像に難くない。



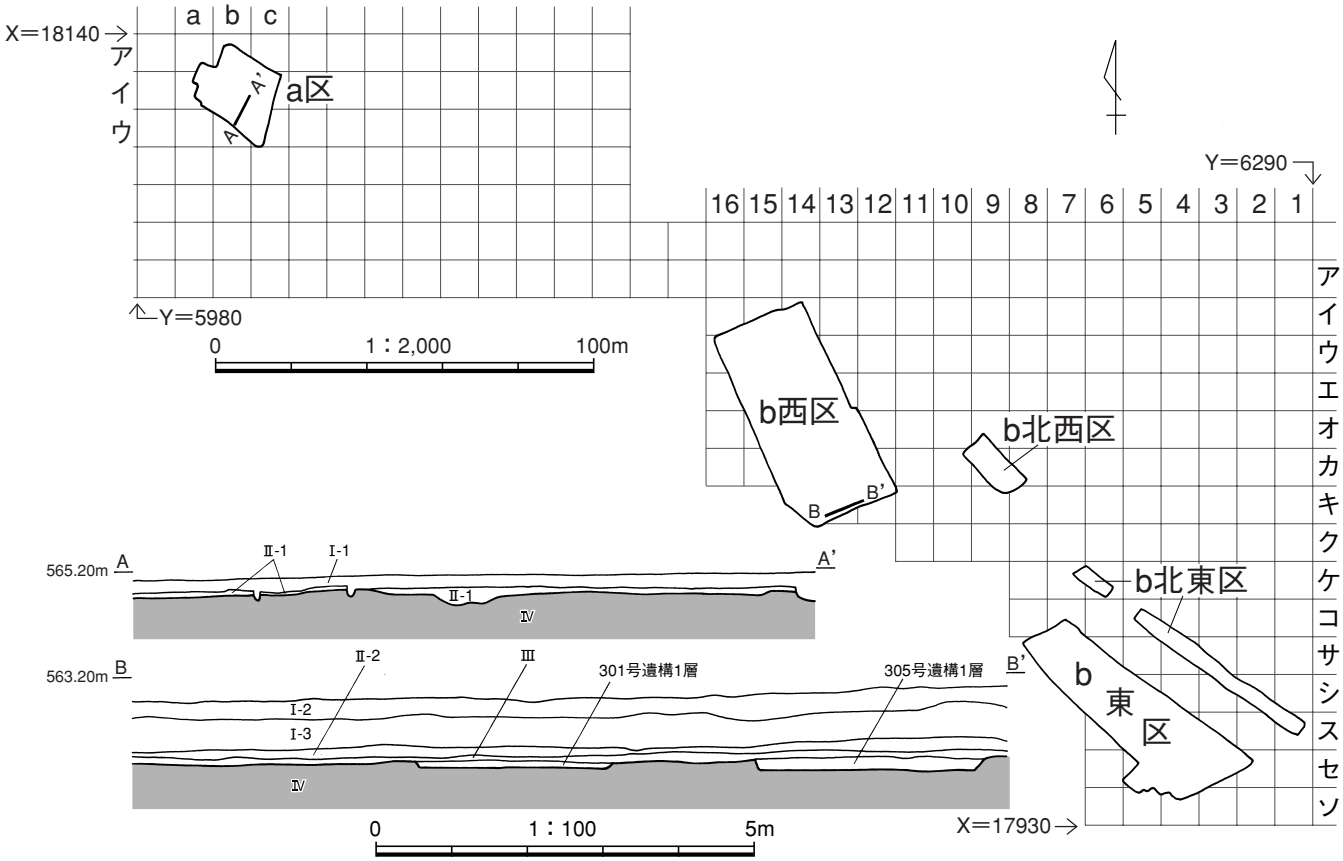
第5図　周辺地形と遺跡の立地

第３節 遺跡の基本層序

調査前まで宅地であった部分を含むａ区では近年の撹乱が著しく、本来の層序を把握するのが困難な状態であった。他方、ｂ区では調査地の大部分が水田として利用されていたため、層序は概ね安定していた。

Ⅰ層は表土である。現代の整地層、現代の水田耕作土、近年の客土などからなり、近現代製品を含む。Ⅱ層は、須恵器・土師器・灰釉陶器等を含む遺物包含層である。ａ区に広がるⅡ-1層は主に古代の遺物を多く含むが、部分的にみられるにとどまり、含まれる遺物量はⅠ層に比べむしろ少ない。ｂ区に広がるⅡ-2層では、古代の遺物も含むものの、主として古墳時代の遺物を多く含んでいる。Ⅲ層は多くの土師器と少量の須恵器を含み、形成時期をほぼ古墳時代中期に限定できる遺物包含層である。ａ区にはみられないが、ｂ区では広範囲にわたり確認された。Ⅳ層は流水により形成された堆積層である。図示した地点では主として灰黄褐色砂からなるが、地点により色調や粒子の大きさに相違がみられ、一様ではない。遺物を含まない地山である。ａ区・ｂ区に共通して認められた[10)]。

遺構を検出したｂ区では遺構検出面はⅣ層上面を基本とする。ただし、遺構埋土とⅢ層との判別が困難であったため、本来の検出面をⅣ層上面より上とみなすべきケースもあることを付記しておく。



基本層序
Ⅰ-1　撹乱層　主に住宅下の整地時の客土で、古墳時代から現代に至る遺物を含む
Ⅰ-2　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色シルト　現代水田耕作土
Ⅰ-3　10ＹＲ6/6明黄褐色砂質シルト　礫を多く含む　客土
Ⅱ-1　10ＹＲ3/2黒褐色粘質シルト　主に須恵器・土師器・灰釉陶器を含む古代の包含層
Ⅱ-2　10ＹＲ4/2灰黄褐色砂質シルト　鉄分を多く含む　しまり強い　旧水田耕作土か　主に土師器・須恵器を含む古代から古墳時代にかけての包含層
Ⅲ　10ＹＲ3/3暗褐色砂質シルト　炭を含む　主に土師器・須恵器を含む古墳時代の包含層
Ⅳ　10ＹＲ4/2灰黄褐色砂　流水による堆積層　地山

第6図　遺跡の基本層序

第２章　注

１）本書では古墳時代を前期・中期・後期に３区分する立場をとる。

２）飛騨地域の古墳分布状況については、以下の文献に記述がある。

上嶋善治2004「古代の飛騨における古墳と集落に関する一考察」八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに（八賀晋先生古稀記念論文集）』三星出版。

田中彰2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社。

３）高山市教育委員会1971『冬頭王塚発掘調査報告』。

４）財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎１号古墳・冬頭山崎２号古墳・冬頭山崎１号横穴』。

５）田中彰2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社。

６）高山市教育委員会1995『高山市内遺跡発掘調査報告書 （高山市教育委員会調査報告書第22号）』。

田中彰2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』同成社。

７）国府町教育委員会1998『桜本遺跡』。

８）平成16年度に高山市教育委員会が行った調査については、次の文献に概要が報告されている。また、調査担当者の牛丸岳彦氏からご教示を賜った。

高山市教育委員会2005「野内遺跡」『岐阜県新発見考古速報2005』財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター。

９）野内遺跡とその周辺の地理的環境については、以下の文献を参照した。

高山市教育委員会2005『高山市内遺跡発掘調査報告書（高山市埋蔵文化財調査報告書第28号）』。

高山市教育委員会2005「野内遺跡」『岐阜県新発見考古速報2005』財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター。

上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』。

10）本書では、調査区全体に関わる基本層序については層番号にローマ数字を用い、個々の遺構埋土では算用数字を用いて区別している。なお、調査終了後、層番号等を整理し直す必要が生じたため、層名や層番号は調査時のものをそのまま踏襲してはいない。今後の遺物照合のために付記しておくと、ｂ区の主要な包含層であるⅢ層の出土遺物は、ｂ東区では主として「Ⅴ層」と注記している。

第３章　遺構

第１節　遺構の概要

今回の調査で検出した遺構の総数は288基である[1)]。形状や想定される機能から、竪穴建物跡[2)]、ピット（小型の穴）、土坑（大型の穴）、溝の４種別に分類した。58基の竪穴建物跡を検出し、それらの多くは住居跡と考えられることから、当遺跡は集落跡と捉えることができる。

遺構番号については、調査現場で検出時の番号をそのまま本書でも用いた[3)]。この番号は通番であり、遺構種別ごとに分けることは行っていない。遺構内で検出した遺構内付属遺構、例えば竪穴建物跡の床面で検出したピットなどは、「1-1号」のように本体遺構番号のあとに枝番号を付して表示した。

遺構内での遺物の出土層位については、現地調査での所見にしたがい、以下のように記号で示した。

Ｕ＝埋土上層部
Ｍ＝埋土中央部
Ｌ＝埋土下層部
ＵＭ＝埋土上層部と中央部の中間
ＭＬ＝埋土中央部と下層部の中間
Ｕ・Ｍ＝埋土上層部から出土した破片と中央部から出土した破片が接合
Ｍ・Ｌ＝埋土中央部から出土した破片と下層部から出土した破片が接合
Ｕ・Ｍ・Ｌ＝埋土上層部・中央部・下層部から出土した破片が接合
「－」＝不明

検出遺構の地区別の内訳は第１表の通りである。遺構密度はｂ東区とｂ北東区で高く、ｂ西区とｂ北西区ではやや希薄となり、さらに西方のａ区では皆無となる。

時代別では古墳時代中期に属する遺構が大半を占めており、ほかには古代の遺構がごく少数みられるにとどまる。遺構の推定年代については、第５章において見解を示す。なお、近代以降の生活痕跡は遺構として扱わず、平面図ではケバ付き破線記号で上端平面形のみを表示し区別している。遺構の寸法や遺構内出土遺物破片数については、別表１「遺構一覧表」（144頁～151頁）を参照されたい。

第１表　検出遺構集計表

地区／遺構種別	ａ区（300㎡）	ｂ東区（1,150㎡）	ｂ北東区（350㎡）	ｂ西区（1,100㎡）	ｂ北西区（100㎡）	合　計（3,000㎡）
竪穴建物跡	0	29	7	19	3	58
ピット	0	134	52	17	0	203
土坑	0	12	8	2	1	23
溝	0	3	1	0	0	4
合計	0	178	68	38	4	288

第２節　竪穴建物跡

地面を竪穴状に掘り窪めた大型の遺構を竪穴建物跡とする。58基検出した。地区別の内訳は、ｂ東区29基、ｂ北東区７基、ｂ西区19基、ｂ北西区３基である。時代別では古墳時代中期に偏る傾向が顕著で、58基中54基は遺構内出土遺物から当該期に属することが確かめられる。それ以外の時代に属することが確実なのは、平安時代の遺構とみられる602号遺構１基のみである。遺物が出土しなかった３基（316号、329号、559号）については帰属時代の判定が困難である。

遺構の残存状態は必ずしも良好とは言えず、全体を窺うことのできるケースは遺構数の割に多くはない。また、遺構埋土は遺構間の差異がほとんど認められず、重複する遺構同士の切り合い関係の判定が困難なケースがあった。床面の判定は全体に困難であり、本来の床面が図示したレベルよりやや高い位置にあると思われる事例もみられる。また、遺構埋土中に焼土が面状に拡がる遺構が複数みられ、本書ではそのようなケースでは焼土の範囲を平面図に破線で示し、断面図を添えてある。それらの中には、改築により複数の床面を持つ事例が含まれる可能性がある。

カマド跡が確認された建物跡はないが、コの字状に石を組んだ炉跡を多数検出している。屋根を支える柱の立つ主柱穴は４基を基本とするとみられるが、定かでないケースも多い。遺構内出土遺物は、摩滅するものが多いものの、土師器を中心に質・量ともに豊富である。古墳時代中期の土師器高杯がまとまって出土したことや、飛騨地域で最古級の須恵器が出土したことが注目される。出土遺物については、第４章と第５章を参照されたい。

以下、各々の遺構について報告する。原則として遺構番号順に報告するが、実測図の配列や遺構重複の関係上、番号が前後する箇所もある。図示した遺物は遺構毎に表にして示した。遺構の深さは、遺構内のピットや土坑など、遺構内付属施設を除いた箇所での計測値とした。

１号遺構（第18図）

ｂ東区の北端部、「７コ」グリッドに位置する。平面形はやや菱形に近い方形である。長軸3.00ｍ、短軸2.81ｍを測る。深さは確認面から最大で0.26ｍを測る。床面上に炭化材の堆積が認められることから、焼失した建物跡とみられる。床面で検出した６基のピットのうち、位置から判断して1-1・3・5・6号の４基が屋根を支える柱の立っていた主柱穴である可能性が高い。

建物の中央から１ｍほど北東壁側に寄った地点で、炉跡とみられる遺構を検出した。３個の川原石をコの字状に配置した構造で、石の間を特に掘り窪めてはいない。炉石間とその東方、南方には炭混じり焼土の散布が認められる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。

出土遺物はすべて土師器で、破片数で数えて347点である。目立って多いのは高杯で、口縁部が外反する碗状の杯部に低い脚が付くタイプで占められる（高杯の分類については94、95頁を参照）。全形を窺うことのできる碗２個体（１・２）も出土している。

第2表　1号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器碗（２）・高杯（７）・大型高杯（５）・直口壺（10）・甕（12）
L	土師器碗（１）・高杯（３・４・６・８・９）・直口壺？（11）・甕（13）

２号遺構（第19図）

ｂ東区の中央やや北寄り、「６サ」グリッドに位置する。東西2.81ｍを測るが、南端部が残存せず、南北長は不明である。平面形は方形とみられる。深さは確認面から最大で0.23ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器62点、須恵器２点、中近世施釉陶器１点、合わせて65点であるが、図示できる個体はない。

３号遺構・７号遺構（第20～22図）

ｂ東区の北端部、「７サ・８サ」グリッドに位置する。重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、７号遺構の方が３号遺構より新しい。

３号遺構は長軸4.06ｍ、短軸3.83ｍを測り、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.19ｍを測る。床面上に炭化材の堆積が認められることから、焼失した建物跡とみられる。床面で検出した15基のピットのうち、位置から判断して3-5・7・10・15号の４基が主柱穴である可能性が高い。建物の中央から1.5ｍほど北東壁側に寄った地点で、炉跡とみられる遺構を検出した。１号遺構と同様に、３個の川原石をコの字状に配置した構造である。炉石間とその周辺には炭混じり焼土の散布が認められる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物は、弥生土器１点、土師器773点、須恵器６点、灰釉陶器３点、合わせて783点を数える。これは当遺跡の遺構内出土遺物として３番目に多い点数である。弥生土器と灰釉陶器は混入品である。須恵器も摩滅した小破片のみで律令時代の器種がみられることから、いずれも混入品と判断する。土師器高杯は、杯部の体部と底部の境に段を持つ有段杯部に長い脚が付くタイプであり、１号遺構のものとは異なっている。

７号遺構は、全体規模や形状は不明であるが、検出部分は全体の４分の１程度である。深さは確認面から最大で0.19ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器34点、須恵器１点、中近世施釉陶器１点、鉄滓１点、合わせて37点である。土器類には図示できる個体がないが、鉄滓（40）が出土していることは、鍛冶作業が行われたことを示唆するものとして注目される。

４号遺構（第19図）

ｂ東区の中央部、「５シ」グリッドに位置する。東西2.47ｍを測るが、南端部が残存せず、南北長は不明である。平面形は方形とみられる。深さは確認面から最大で0.19ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物はすべて土師器で破片数89点を数えるが、図示できる個体はない。

第3表　3号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U・M・L	土師器甕（20）
M・L	土師器大型高杯（16）・小型壺（17）
L	土師器高杯？(15)・大型高杯（14）・小型壺（18）・甕（19・21・22・23・24・25・26）

第4表　7号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
―	鉄滓（40）

５号遺構（第23図）

ｂ東区の中央部、「５シ・６シ」グリッドに位置する。長軸3.71ｍ、短軸3.30ｍを測り、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.20ｍを測る。床面で検出した13基の土坑・ピットのうち、位置から判断して5-3・5・9・11号の４基が主柱穴となる可能性があろうが、定かではない。建物の中央から1.2ｍほど北壁側に寄った地点で、３個の川原石をコの字状に配置した炉跡とみられる遺構を検出した（炉１）。炉石間とその北方には炭混じり焼土の散布が認められる。その0.5ｍ南方にも床面が被熱変色する部分が確認された（炉２）。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。

出土遺物破片数は、土師器432点、須恵器３点、砥石１点、合わせて436点である。土師器高杯は碗状杯部低脚タイプである。また、須恵器の甕（31）は、当遺跡で出土した須恵器の大型器種としては最も型式的特徴の明瞭な個体として注目される。

６号遺構（第24図）

ｂ東区の中央やや西寄り、「６シ」グリッドに位置する。長軸3.38ｍ、短軸2.95ｍを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.09ｍを測る。柱の並びについては不明である。建物の中央から１ｍほど西壁側に寄った地点に地山上の貼土が被熱変色する部分があり、炉石は残存しないものの、炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物破片数は、土師器220点、鉄釘１点、合わせて221点である。土師器には全形を窺える個体はないが、鉄釘（39）は当遺跡での唯一の確認個体として注目される。

12号遺構・13号遺構（第25図）

ｂ東区の北端付近、「７サ」グリッドに位置する２基の建物跡である。両者で１基の建物跡を構成する可能性もあるが、トレンチをはさんで平面形がうまくつながらないことから別遺構として扱う。ともに全体規模や形状は明らかでなく、柱の並びや炉の有無についても不明である。深さは、12号遺構が0.20ｍ、13号遺構が0.16ｍを測る。12号遺構の出土遺物破片数は、土師器63点、器種不明の金属製品１点、合わせて54点、13号遺構は土師器15点である。13号遺構の土師器甕（41）を図示した。

25号遺構（第24図）

ｂ東区の中央やや西寄り、「７シ」グリッドに位置する。東西3.30ｍを測るが、南半部が残存せず、

第5表　5号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器甕（30）、須恵器甕（31）、打製石斧（32）
L	土師器高杯（28）・壺（29）
５－1号　－	土師器高杯（27）

第6表　6号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器碗？（33）・高杯（35）・大型高杯？（36）・直口壺？（37）・甕（38）
M	土師器大型高杯？（34）
６－２号　－	鉄釘（39）

南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.23mを測る。柱の並びについては不明である。残存部分の南端中央部に焼土が床面上に堆積する部分があり、炉石は残存しないものの炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物は土師器64点である。全形を窺うことのできる個体はない。

38号遺構（第26図）

b東区の中央やや西寄り、「6シ」グリッドに位置する。南北3.70mを測るが、東半部が残存せず、東西長は不明である。平面形は方形とみられる。深さは確認面から最大で0.20mを測る。

西壁と南壁の壁際には、部分的に周壁溝が認められる。これは当遺跡では稀な構造で、ほかには133号遺構にしかみられない。柱の並びについては不明である。残存部分の南端部に炭混じり焼土が床面上に堆積する部分があり、炉石は残存しないものの炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物破片数は、縄文土器2点、土師器111点、合わせて113点である。全形を窺うことのできる個体はない。

53号遺構（第26図）

b東区の中央部、「5シ」グリッドに位置する。やや小型の建物跡とみられるが、全体規模や形状は不明である。深さは確認面から最大で0.11mを測る。柱の並びや炉の有無についても明らかではない。出土遺物はすべて土師器で、破片数で132点を数える。高杯は有段杯部タイプである。

56号遺構・57号遺構（第27図）

b東区の中央部、「5ス・6ス」グリッドに位置する。近接する2基の建物跡であるが、両者の切り合いは明確でない。

56号遺構は長軸4.05m、短軸3.10mを測る。平面形は長方形を基本とするが、南東隅に張り出し部を持つ特異な形状である。深さは確認面から最大で0.17mを測る。柱の並びについては不明である。炉の痕跡は確認していない。出土遺物はすべて土師器で、破片数で143点を数える。図示できる個体

第7表　13号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器甕（41）

第8表　25号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器小型壺（42）
L	土師器大型高杯（43）

第9表　38号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器甕（44）

第10表　53号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器高杯（47）・甕（48）

はない。

57号遺構は長軸3.16m、短軸2.04mを測り、平面形は三角形状の特異な形状を呈する。深さは確認面から最大で0.17mを測る。床面でピット２基を検出しているが、主柱穴かは定かでない。炉の痕跡は確認していない。出土遺物は土師器22点である。全形を窺うことのできる個体はない。

70号遺構・71号遺構・125号遺構（第28～30図）

ｂ東区の中央やや東寄り、「４ス・５ス」グリッドに位置する。３基の重複する建物跡である。切り合い関係から判断して、古い方から71号→125号→70号の順である。

70号遺構は長軸5.40m、短軸4.13mを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.19mを測る。70－5・6号遺構では柱痕跡を確認しているが柱の並びは不明である。建物の中央から0.8mほど東壁側に寄った地点に床面が被熱変色する部分があり、石組は残存しないものの、これが炉の痕跡である可能性が考えられる。

当遺構は出土遺物の質・量の両面で特に注目される。出土遺物破片数は当遺跡で最も多く、土師器1,114点、須恵器２点、鉄滓２点、合わせて1,118点を数える。土師器では甕の良好な個体（59・61・62）を初めとして、高杯・壺・小型壺が出土している。土師器高杯の組成は、有段杯部の個体（50）、長脚の個体（55）、低脚の個体（56）が混在する。これは当遺跡では稀な過渡的状況を呈する例と捉えることができる。さらに、須恵器・瑕（64）は、胴部以下が完全な形で残る良好な個体で、飛騨地域で最古級の須恵器の一つとなる可能性が高い。鉄滓（65）は、鍛冶作業が行われたことを示唆するものとして注目される。

71号遺構は全体規模や形状は不明であるが、おそらく検出部分は全体の４分の１程度であろうと思

第11表　57号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
57－１号　－	土師器高杯（49）

第12表　70号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（51）・大型高杯（54）・大型高杯？（52）
U・M	土師器壺（57）
M	土師器大型高杯（53）・小型壺（58）
M・L	土師器甕（59・61）
L	土師器高杯（50・55）・甕（60・62）、須恵器高杯？（63）・瑕（64）、鉄滓（65）
70－4号　－	土師器高杯（56）

第13表　71号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器高杯（66・68・69）
L	土師器高杯（67）・甕（70）

われる。深さは確認面から最大で0.16mを測る。柱の並びや炉の有無についても不明である。出土遺物はすべて土師器で、破片数で127点を数える。土師器高杯の残存状態の良好な個体(66・67・68)がまとまって出土したことが注目される。杯部は碗形であるが口縁部が外反せず、脚部は長脚である。これは当遺跡では特異なタイプであり、70号遺構で出土した高杯とは違いが大きい。

125号遺構は長軸4.32m、短軸4.07mを測り、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.11mを測る。損なわれている部分が大きいため、柱の並びや炉の有無については明らかにできない。出土遺物はすべて土師器で、破片数で173点を数える。全形を窺うことのできる個体はない。

80号遺構（第31図）

ｂ東区の中央やや東寄り、「４シ・４ス」グリッドに位置する。全体規模や形状は不明であるが、南北長は2.90m程度になるとみられる。深さは確認面から最大で0.18mを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物はすべて土師器で、破片数で543点を数える。全形を窺える甕（75・77）が出土している。

102号遺構（第31図）

ｂ東区の南端付近、「４セ」グリッドに位置する。長軸2.74m、短軸2.47mと小型で、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.12mを測る。柱の並びについては不明である。炉の痕跡は確認していない。出土遺物破片数は、土師器284点、須恵器５点、合わせて289点である。全形を窺うことのできる個体はない。

第14表　125号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器高杯（111）・大型高杯（110・112・113）・甕（116）
－	土師器甕（115）
125－１号　１層	土師器壺（114）

第15表　80号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器大型高杯（74）・甕（78・80）・壺？（82）
U・L	土師器甕（76）
M	土師器甕（79）
M・L	土師器甕（77）
L	土師器甕（75・81）

第16表　102号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（86）・甕（83・84）
M	土師器大型高杯（85）

118号遺構・120号遺構・121号遺構・129号遺構・130号遺構（第32～38図）

ｂ東区の東端付近、「３ス・３セ・４ス・４セ」グリッドに位置する。この区域には標記の５基の竪穴建物跡が重なり合っており、複雑な切り合い関係を呈している（第32図上段）。

118号遺構は、120号遺構を切っており、121号遺構と接している。長軸4.95ｍ、短軸4.67ｍを測る大型の建物跡である。平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.17ｍを測る。柱の並びについては明瞭で、118-1・3・6・9号の４基を主柱穴とみてよい。建物の中央から１ｍほど北西壁側に寄った地点で、炉跡とみられる遺構を検出した。ちょうど西側の柱間に当たる位置である。３個の川原石を置く点は他の炉跡と同様であるが、配置はコの字型ではなく、中央の石を他の２つと平行する方向に置いている。検出時の所見によれば、石はしっかり固定されており、後世に動いた形跡は認められない。石の間を特に掘り窪めてはいないが、床面には被熱変色が認められる。炉石間とその周辺には炭混じり焼土の散布が認められる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物はすべて土師器で、破片数で496点を数えるが、全形を窺うことのできる個体はない。

第17表　118号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（93）・高杯？（92）・大型高杯（91）
M	土師器高杯（89）・高杯？（90）
M・ML	土師器大型高杯（88）
ML	土師器甕（97・98）
L	土師器大型高杯（95）
118－３号　－	土師器大型高杯（96）・甕（99）
118－４号　－	土師器大型高杯（94）

第18表　121号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器大型高杯（105）・壺（106）
M	土師器高杯（102）・高杯？（104）・大型高杯（103）、打製石斧（109）
L	土師器高杯（100・101）・甕（107）、須恵器甕（108）

第19表　130号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器大型高杯（130）・大型高杯？（135）・甕（145）、鉄滓（147）
M・L	土師器高杯（134）・直口壺（146）
L	土師器碗（125）・高杯（126・127・129・131・132・133・136・137・138・139） 大型高杯（128）・甕（140・143・144）、鉄滓（148）
130－１号　L	土師器甕（141）
130－５号　－	土師器甕（142）

120号遺構は、118号遺構と121号遺構に切られる。検出部分が全体のごく一部にとどまるとみられるため、全体規模や形状、それに柱の並びや炉の有無は不明である。深さは確認面から最大で0.13mを測る。床面上に炭化材の堆積が認められたことから、焼失した建物跡の可能性がある。出土遺物は土師器24点である。図示できる個体はない。

121号遺構は、前掲の120号遺構を切るほか、さらに後掲の129号遺構も切っている。長軸5.49m、短軸3.20mを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.20mを測る。柱の並びについては不明である。床面上で多数の石が出土しているが、炉石は確認できなかった。出土遺物破片数は、土師器298点、須恵器１点、打製石斧１点、合わせて300点である。全形を窺うことのできる個体はない。土師器の有段口縁壺（106）が出土している。

129号遺構は、121号遺構と130号遺構に切られる。南北3.35mを測るが西端部が残存せず。東西長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.11mを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器93点、砥石１点、合わせて94点である。図示できる個体はない。

130号遺構は、129号遺構を切る。長軸4.40m、短軸4.14mを測る大型の竪穴建物跡で、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.20mを測る。遺構埋土の断面観察によれば、当遺構には上下２面の床面が認められる。つまり、１回の床面かさ上げが行われたことが分かる。第38図は上側の床面検出状態での平面図である。炉跡は上側の床面において確認している。位置は建物の中央から1.2mほど北壁側へ寄っており、ほとんど壁際と呼んでもよいほど北壁に近接している。３個の川原石をコの字状に配置しているが、他事例に比べ石の間の間隔が開いている。炉石間とその北方には焼土の散布が認められる。炉が存在することから当遺構は住居跡と考えられる。柱の並びについては明瞭で、130-2・4・5・9号の４基を主柱穴とみてよい。このほか、下側の床面において、粘土塊を検出している（５層）。出土遺物破片数は、70号遺構に次いで２番目に最も多く、1,059点を数える。内訳は、土師器1,047点、須恵器１点、灰釉陶器１点、中近世施釉陶器３点、近世磁器３点、鉄滓４点である。土師器碗・高杯・甕の全形を窺える個体が出土している。高杯は主として碗状杯部で低脚のタイプである。鉄滓（147・148）が出土していることは、鍛冶作業が行われたことを示唆するものとして注目される。なお、出土遺物のほとんどは上側の床面より上の高さで出土している。

128号遺構（第42図）

ｂ東区の中央やや西寄り、「７シ」グリッドに位置する。東西3.72mを測るが、南半部が残存せず、南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.12mを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器189点、中近世施釉陶器１点、合わせて190点である。土師器高杯は、脚部に円孔を穿つタイプである。

131号遺構・132号遺構・133号遺構（第39～41図）

ｂ東区の南端部、「４セ・４ソ・５セ」グリッドに位置する。３基の重複する建物跡である。

第20表　128号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（118・119・120）・壺（121）
M	土師器小型壺（122）

131号遺構は、132号遺構に切られている。大型の竪穴建物跡とみられるが、検出部分が全体の一部にとどまるため、全体規模や形状、それに柱の並びは不明である。深さは確認面から最大で0.18mを測る。検出部分の中央よりやや南側に地山面上の貼土が被熱変色する部分が２箇所あり、炉石は残存しないものの、これらが炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物破片数は、土師器359点、須恵器１点、合わせて360点である。全形を窺える個体はない。

132号遺構は、131号遺構と133号遺構を切っている。長軸3.86m、短軸3.17mを測り、南西隅を欠くものの平面形は長方形であるとみられる。深さは確認面から最大で0.24mを測る。柱の並びについては、132－1・2・6号の３基に主柱穴の可能性があると考えるが、定かではない。建物の中央から1.2mほど北東壁側へ寄った地点で炉の痕跡とみられる炭混じり焼土を検出した。ただし炉石は原位置を保ってはおらず、２個しか見つかっていない。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物破片数は、土師器363点、須恵器２点、合わせて365点である。土師器直口壺の比較的良好な個体（156）が出土している。

133号遺構は132号遺構に切られている。長軸3.90m、短軸3.25mを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.22mを測る。ほぼ全形を窺えるにもかかわらず、柱の並びについては合理的な解釈が難しい。建物中央よりやや北側に床面が被熱変色する部分があり、石組は残存しないものの、これが炉の痕跡である可能性が考えられる。また、当遺構では壁際に周壁溝が巡っている。前述のとおり、これは当遺跡の建物跡では稀なことであり、他には38号遺構にしかみられない。出土遺物破片数は、土師器313点、灰釉陶器１点、合わせて314点である。有段杯部長脚タイプの土師器高杯などが出土している。

第21表　131号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器大型高杯（149）
M	土師器大型高杯（150）

第22表　132号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器大型高杯（153）、須恵器甕（151）
M	土師器高杯（154）
M・L	土師器直口壺（156）
L	土師器高杯（155）
132－７号　１層	土師器大型高杯（152）

第23表　133号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器甕（158）
L	土師器高杯（157）

162号遺構（第42図）

ｂ東区の南端付近、「５セ」グリッドに位置する。南北3.47ｍを測るが、西半部が残存せず、東西長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.18ｍを測る。柱の並びについては不明である。炉については、炉石は見つかっていないものの、残存部分の中央より１ｍほど南側に床面が被熱変色する部分があり、これが炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物破片数は、土師器181点、須恵器２点、合わせて183点である。土師器の小型壺（165）と直口壺（166）が出土している。土師器高杯は、碗形杯部低脚タイプである。土師器以外では須恵器の高杯（169）と甕（170）が出土している。

301号遺構（第43図）

ｂ西区の南端部、「13キ」グリッドに位置する。東西2.72ｍを測るが、南半部が残存せず、南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.15ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物は土師器39点である。全形を窺うことのできる甕（175）が出土している。

302号遺構・303号遺構・304号遺構・305号遺構・307号遺構・308号遺構（第44～47図）

ｂ西区の南端付近、「12カ・12キ・13カ・13キ」グリッドに位置する。この区域には６基の竪穴建物跡が重なり合っており、複雑な切り合い関係を呈している（第44図）。

302号遺構は303号遺構と重なっており、切り合い関係から当遺構の方が新しいと判断される。長軸3.53ｍ、短軸2.80ｍを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.08ｍを測る。ほぼ全形を窺えるにもかかわらず、床面には柱穴が見当たらない。規模が小型であることから、建物内に屋根を支える柱を持たない構造を採っていたものと思われる。炉の痕跡は確認していない。出土遺物はすべて土師器で、破片数で365点を数える。大型高杯の良好な個体（176・181）がみられる。

303号遺構は302号遺構と307号遺構に切られる一方で、304号遺構と305号遺構を切る。ただし305号

第24表　162号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（164）・甕（167）、須恵器高杯（169）
U・L	土師器直口壺（166）
M	土師器甕（168）
L	土師器高杯（161・163）・大型高杯（160）・小型壺（165）、須恵器甕（170）
162－５号　－	土師器高杯（162）

第25表　301号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器高杯（174）・甕（175）

第26表　302号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器大型高杯（176・181）
L	土師器高杯（179・180）・大型高杯（177・178）・小型壺（182）・甕（183・184・185）

遺構との切り合い関係は、重複部分が狭いため確実ではない。長軸5.30m、短軸4.60mを測り、平面形は方形である。深さは確認面から最大で0.12mを測る。中央部を重複する302号遺構によって削り取られているため、柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、縄文土器３点、土師器408点、合わせて411点である。出土遺物には、302号遺構と同様に、大型高杯の良好な個体（189・191）がみられる。高杯（190）は、有段杯部長脚タイプである。

304号遺構は303号遺構に切られる。東西2.84mを測るが、北半部が残存せず、南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.05mを測る。柱の並びについては不明である。残存部分の中央付近に、石組は認められないものの、炉の痕跡が認められる。出土遺物は土師器85点である。全形を窺うことのできる土師器碗（196）がある。

305号遺構も303号遺構に切られる。ただし、先にも記したように両者の先後関係については重複部分が狭いため確実ではない。東西3.00mを測るが、南半部が残存せず、南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.18mを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数

第27表　303号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（187）
M	土師器大型高杯（189）・甕（193）
L	土師器高杯（186・188・190）・大型高杯（191）・小型壺（194）・甕（192）

第28表　304号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器碗（196）・甕（195）

第29表　305号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	須恵器杯身（201）
１層	土師器高杯（197）・甕（199・200）
305－１号　１層	土師器甕（198）

第30表　307号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器高杯（202）・高杯？（203・204）
１層	土師器大型高杯（205）・甕（206）

第31表　308号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器高杯（207・208）・甕（209）

は、土師器68点、須恵器１点、合わせて69点である。破片数としては少ないが、須恵器杯身の良好な個体（201）が出土した。飛騨地域で最古級の須恵器の一つとして特に注目される。

307号遺構は303号遺構と308号遺構を切っている。南北4.10ｍを測るが東半部が残存せず、東西長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.09ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物はすべて土師器で、破片数で132点を数える。全形を窺える個体はない。

308号遺構は307号遺構に切られる。長軸4.30ｍ、短軸3.45ｍを測り、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.06ｍを測る。遺構の半分以上を重複する307号遺構により削り取られているため、柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物は土師器94点である。全形を窺える個体はないが、丁寧な調整が認められる甕の良好な個体（209）がある。

309号遺構・310号遺構（第48～50図）

ｂ西区の中央部、「13オ・14オ」グリッドに位置する重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、310号遺構の方が309号遺構より新しい。また、310号遺構は329号遺構ともわずかに接している。

309号遺構は、長軸7.60ｍ、短軸4.43ｍを測り、平面形は長大な長方形を呈する。遺構埋土に重複関係を示す痕跡が認められなかったことから１基の遺構として扱っているが、本来は重複ないし接触する２基の建物跡であった可能性がある。平面図には北半部と南半部とを分ける境界推定線を破線で加えてある。深さは確認面から最大で0.09ｍを測る。柱の並びについては解釈が難しい。南半部の中央から1.5ｍほど北西壁側に寄った地点で、３個の川原石をコの字状に配置した炉跡とみられる遺構を２基検出した（炉１・２）。２基の炉は近接して並列する。炉石間とその周辺には炭混じり焼土の散布が認められる。さらに、北半部の南端付近中央部には床面が被熱変色する部分が認められる。石組は確認されないものの、これも炉の痕跡である可能性がある（炉３）。炉が存在することから、当遺構は北半部・南半部いずれも住居跡と考えられる。出土遺物はすべて土師器で、破片数で320点を数える。出土点数自体は少ないわけではないが、状態の良い破片はあまりなく、全形を窺うことのできる個体はない。碗状杯部の大型高杯（213）が出土している。なお、主要な遺物の出土位置は、遺

第32表　309号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
ＭＬ	土師器高杯？（210）・壺（214）
Ｌ	土師器高杯（211）・大型高杯（212・213）・甕（217・219）
１層	土師器甕（218）
309－７号　Ｌ	土師器直口壺？（215）・甕（216）

第33表　310号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
ＭＬ	土師器甕（222）
Ｌ	土師器高杯（220）・甕（223・224・225）
１層	土師器高杯（221）

構南半部に偏っている。

310号遺構は、長軸3.56m、短軸2.92mを測り、平面形は長方形である。深さは、確認面から最大で0.14mを測る。床面上には、建物中央から放射状に広がる炭化材の堆積が認められた。このことから焼失建物跡と考えられる。柱の並びについては、床面で検出した8基のピットのうち、310-3・4・6・8号の4基に規則性が認められる。これらが主柱穴である可能性が高い。建物の中央から0.5mほど北東壁側に寄った地点で、3個の川原石をコの字状に配置した炉跡とみられる遺構を検出した。炉石間とその周辺には炭混じり焼土の散布が認められるが、散布方向が建物中央側に偏る点が他の事例とは異なる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物はすべて土師器で、破片数で215点を数える。ほぼ完形の小型の甕（225）が出土している。

312号遺構（第43図）

b西区の東南端付近、「12カ」グリッドに位置する。南北3.75mを測るが、東半部が残存せず、東西長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.08mを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物は土師器75点である。全形を窺うことのできる碗（227）が出土している。

315号遺構・316号遺構・317号遺構・319号遺構（第51図）

b西区の東南端付近、「12オ・12カ・13カ」グリッドに位置する。4基の竪穴建物跡が複雑に重なり合っている。切り合い関係から判断して、古い方から315号・319号→316号→317号の順である。

いずれも部分検出にとどまったため、全形を窺うことはできない。316号遺構が東西長5.02mを測る大型の建物跡と分かる以外は、全体規模や形状については明らかでない。柱の並びや炉の有無についても不明である。出土遺物破片数は、315号遺構が土師器79点、317号遺構が土師器16点、319号遺構が土師器54点である。316号遺構では遺物は出土していない。315号遺構で出土した碗の比較的良好な個体（231）と、319号遺構で出土した全形を窺うことのできる甕（235）が注目される。

318号遺構（第52図）

b西区の中央やや北寄り、「14エ」グリッドに位置する。長軸5.10m、短軸4.42mと大型で、平面形は長方形である。深さは確認面から最大で0.08mを測る。ほぼ全形を窺うことができるものの、柱

第34表　312号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器碗（227）・高杯（226）・甕（228・229）

第35表　315号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器碗（231）・大型高杯（232）・壺（234）・甕（233）

第36表　319号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器甕（235）

の並びについては解釈が難しい。炉の痕跡も確認できない。出土遺物破片数は、土師器65点、中近世施釉陶器２点、合わせて67点である。図示できる個体はない。

328号遺構・329号遺構（第53図）

ｂ西区の中央やや東寄り、「13オ」グリッドに位置する。重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、328号遺構の方が329号遺構より新しい。329号遺構は310号遺構とわずかに接している。

328号遺構は、南北は3.78ｍを測るが東半部が残存せず、東西長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.10ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器27点、須恵器３点、合わせて30点である。須恵器甕の胴部破片（237）を図示した。

329号遺構については検出範囲が狭小であるため特記すべき事項はなく、遺物は出土していない。

330号遺構・331号遺構（第53図）

ｂ西区の中央東端部、「13エ・13オ」グリッドに位置する。重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、330号遺構の方が331号遺構より新しい。

330号遺構は、全体規模や形状は不明である。深さは確認面から最大で0.12ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。特記すべき事項として、南壁付近において粘土塊が床に載った状態で出土したことを挙げることができる。出土遺物は土師器61点のみである。全形を窺える個体はない。

331号遺構も全体規模や形状は不明である。深さは確認面から最大で0.08ｍを測る。柱の並びについては不明である。南壁付近に床面が被熱変色する部分が認められ、これが炉の痕跡である可能性がある。出土遺物は土師器10点のみである。図示できる個体はない。

531号遺構（第54図）

ｂ北東区の中央部、「３サ・３シ」グリッドに位置する。東西は4.50ｍを測るが、南半部が残存せず、南北長や平面形は不明である。深さは確認面から最大で0.22ｍを測る。柱の並びについては、建物全体を検出してはいないので判然としないが、531-1・3号が主柱穴である可能性が高いと考える。北壁から0.5ｍ、建物の中央からは1.5ｍほど北壁側寄りと推定される地点で、３個の川原石をコの字状に配置した炉跡とみられる遺構を検出した。炉石間とその周辺、特に北方には炭混じり焼土の散布が認められる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物破片数は、土師器294点、須恵器２点、中近世施釉陶器３点、合わせて299点である。土師器高杯は碗状杯部低タイプであるが、比較的大型である。大型高杯（250）もみられる。須恵器甕の破片（257）も出土している。

第37表　328号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	須恵器甕（237）

第38表　330号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器大型高杯（238）
L	土師器小型壺（239）

536号遺構（第56・57図）

ｂ北東区の中央やや西寄り、「４サ」グリッドに位置する。全体規模や形状は不明であるが、検出部分は全体の３分の１程度であろうと思われる。深さは確認面から最大で0.19ｍを測る。柱の並びについては不明である。炉については、536-5号遺構の西側で検出した２個の石が炉石となる可能性があるが、その周辺を十分に検出できなかったため断定はできない。検出部分が狭小であるが、炭化材が出土していることから、焼失した建物跡とみられる。出土遺物数は非常に多い。土師器607点、須恵器３点、中近世施釉陶器２点、合わせて612点を数える。器種別では土師器高杯が最も多い。碗状杯部低脚タイプがまとまって出土している。高杯以外にも、碗（259・260）、大型高杯（277）、小型壺（279）、甕（280・281・282）など、残存状態の比較的良好な個体が多く、土師器の器種構成を窺うことができるのも当遺構の特徴である。

553号遺構・569号遺構（第55図）

ｂ北東区の南西端部、「１ス」グリッドに位置する。重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、569号遺構の方が553号遺構より新しい。

553号遺構は、全体規模や形状は不明であるが、検出部分は全体の４分の１程度であろうと思われる。深さは確認面から最大で0.32ｍを測る。柱の並びや炉の有無については不明である。出土遺物破片数は、土師器114点、須恵器４点、中近世施釉陶器１点、鉄滓12点、合わせて131点である。土師器以外では、須恵器の壺とみられる破片（291）と甕の破片（292）、鉄滓（293・294）が出土している。鉄滓が出土したことは、鍛冶作業が行われたことを示唆するものとして注目される。

569号遺構については検出範囲が狭小であるため特記すべき事項はない。出土遺物破片数は、土師器25点、須恵器６点、中近世施釉陶器２点、合わせて33点である。図示できる個体はない。

第39表　531号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器高杯（251）
ML	土師器高杯（249・252）・壺（254）
L	土師器高杯（248）・大型高杯（250）・壺（253）・直口壺（255）・甕（256）、須恵器甕（257）

第40表　536号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
L	土師器碗（259・260）・高杯（263・264・265・266・267・268・270・271・272・273・274・275・276・278）・高杯？（261・262）・大型高杯（277）小型壺（279）甕（280・281・282）
536－５号　－	土師器高杯（269）

559号遺構（第55図）

ｂ北東区の中央やや西寄り、「５コ・５サ」グリッドに位置する。検出範囲が狭小であるが、炭化材が出土していることから、焼失した建物跡とみられる。遺物は出土していない。

560号遺構・561号遺構（第58図）

ｂ北東区の北西端部、「６ケ・７ケ」グリッドに位置する。重複する２基の建物跡である。切り合い関係から判断して、560号遺構の方が561号遺構より新しい。

560号遺構は、南北は1.46ｍを測るが東西長は不明である。台形状のいびつな平面形となるとみられる。深さは確認面から最大で0.14ｍを測る。柱の並びについては不明である。炉の痕跡は確認していない。出土遺物は土師器16点である。

561号遺構は部分検出にとどまったため、全形を窺うことはできない。柱の並びや炉の有無についても不明である。深さは確認面から最大で0.08ｍを測る。出土遺物は土師器66点である。

602号遺構・603号遺構（第58・59図）

ｂ北西区の「９カ」グリッドに位置する。２基の重複する建物跡である。切り合い関係から判断して602号遺構の方が603号遺構より新しい。

602号遺構は、長軸3.55ｍ、短軸3.30ｍを測る。北東と南西の隅を検出していないものの、平面形は方形になるとみられる。深さは確認面から最大で0.12ｍを測る。柱の並びについては明らかではない。検出部分の北東隅に多量の炭混じり焼土が認められる。構造は把握できなかったものの、これはカマドの跡である可能性が高い。出土遺物は当遺跡にあっては特異な組成を示す。破片数では、土師器90点、須恵器110点、灰釉陶器１点、合わせて201点を数える。他の遺構とは帰属時代が大幅に異なる。主体を占めるのは須恵器の律令時代器種で、灰釉陶器を伴う。このことから平安時代の遺構と

第41表　553号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器大型高杯（284）
M	土師器高杯（287）・大型高杯（285）・甕（289・290）、鉄滓（293・294）
ＭＬ	土師器甕（288）、須恵器壺？（291）・甕（292）
L	土師器高杯（286）

第42表　560号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器壺（300）
M	土師器高杯（298）・大型高杯（299）
L	土師器碗（297）

第43表　561号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
ＭＬ	土師器碗（301）

考えられる。なお、同時代の遺構とみられるものは、今回の調査では当遺構の他には全く検出しておらず、また、古墳時代中期に属さないことが確実な唯一の遺構でもある。

603号遺構は、長軸4.76m、短軸3.80mを測る。平面形は長方形である。深さは、確認面から最大で0.15mを測る。柱の並びについては、603-2・7号に主柱穴の可能性があると考えるが、この２基に対応すべき南列部分が損なわれているために断定はできない。建物中央から0.5mほど南西隅側へ寄った地点に床面が被熱変色する部分がある。炉石は確認されないものの、これが炉の痕跡である可能性が考えられる。出土遺物破片数は、土師器412点、須恵器36点、灰釉陶器１点、中近世施釉陶器２点、合わせて451点である。土師器高杯の脚部が603-2号遺構内からまとまって出土したのが注目される。建物廃棄時に投棄されたものであろうか。なお、須恵器と灰釉陶器も出土しているが、重なり合う602号遺構から流れ込んだ混入品と判断される。

第44表　602号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	須恵器蓋（302）・無台碗（305・306）・有台盤？（309）
UM	灰釉陶器碗（316）
U・M	須恵器壺（314）
M	須恵器有台杯（303）・無台碗（304・307）・有台碗（308）・有台盤（310）・有台盤？（312）・壺（313）
M・L	須恵器有台盤（311）
L	須恵器陶錘（315）

第45表　603号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
U	土師器高杯（324）・大型高杯（325・326）、須恵器有台杯（331）、灰釉陶器皿（332）
M	土師器大型高杯（317）
ML	土師器壺（329）
L	土師器小型壺（327）・甕（330）
603－２号　L	土師器高杯（318）・大型高杯（319・320・321・322・323）・小型壺（328）

第46表　604号遺構出土遺物

出土層位	器種（遺物番号）
M	土師器碗（333）・高杯（336・338）・高杯？（339）
ML	土師器甕（340）
L	土師器高杯（334・335・337）・甕（341）、須恵器甕（342）

604号遺構（第60・61図）

ｂ北西区の「９カ・９キ」グリッドに位置する。南西壁を検出していないが、後述する床面の柱の並びから、4.50ｍを測る北西壁・南東壁間が長軸、北東壁・南西壁間がそれよりやや短い短軸となる長方形の平面形に復元できる。深さは確認面から最大で0.08ｍを測る。北西壁際と中央部において炭の堆積を認めた。炭の検出レベルは断面図に示した床面よりやや上であるが、あるいは床面の高さの方が実際には炭の検出レベルに整合する高さであったとみるべきかもしれない。柱の並びについては明瞭で、位置から判断して604-2・4・5・6号の４基を主柱穴とみてよいであろう。建物の中央から1.8ｍほど北西壁側に寄った地点で炉跡とみられる遺構を検出した。ただし、確認できた炉石は２個のみであり、それらも原位置を保ってはいないとみられる。炉石とその周辺、特に北西方向には炭混じり焼土の散布が認められる。炉が存在することから、当遺構は住居跡と考えられる。出土遺物破片数は、土師器244点、須恵器４点、中近世施釉陶器３点、合わせて251点である。

第３節 その他の遺構

竪穴建物跡以外の遺構には、ピット、土坑、溝がある。これらには性格の明確なものはみられないので、代表的なものの実測図を掲載するにとどめておく。

ピット

小型の穴をピットとする。ピットと後掲の土坑との区別は、前者が小型の穴、後者がそれより大型の穴という使い分けを原則としているが、厳密に寸法で区分はしていない。大型の穴であっても柱穴の可能性があるものはピットに分類している。

竪穴建物跡や土坑の付属遺構は除外して、ピットは203基検出した。性格不明のものも多数含まれるが、なかには杭穴や柱穴と考えることができるものもみられる。しかし、遺構間の配置や寸法、それに遺構の切り合い関係や遺構内出土遺物から導き出される遺構相互の前後関係の検討からは、掘立柱建物跡を構成すると判断できる事例は見出すことができなかった。

土坑（第62図、第63図）

ピットより大型の穴で、杭穴や柱穴である可能性を考えがたい遺構を土坑とした。竪穴建物跡に付属するものは除外して、23基検出した。性格や用途を明らかにできたものはないが、比較的大型のものと全形を窺うことのできるものの中から７基を図示する。

溝（第64図）

平面形が細長い溝状をなす遺構を溝とした。４基を数えるが、この中には人為的な遺構というより自然流路である可能性が高いものを含む。性格の明確なものはみられない。

200号遺構は全形を確認することはできなかったものの、検出部分の長さの合計が21.4ｍを測る大型の溝である。３基の竪穴建物跡（１号・２号・３号）と重複しており、切り合い関係からそれらより前の時期の遺構であることが明らかとなっている。しかし、遺物が全く出土しなかったため、帰属時代は明確でない。

第３章　注

１）遺構としたものの中には、人為的な生活痕跡と断定はできないが否定する根拠もまた見出せないものを含む。ピット・土坑・溝に分類したものの中には、そのようなケースが含まれる。

２）地表面を竪穴状に掘り窪めた大型の遺構は「竪穴住居跡」と呼ばれてきたが、それらの中には住居としての機能を持たない施設が多数含まれることから、近年では「竪穴建物跡」と呼び替えるのが一般的となっている。当遺跡においても住居跡と考える根拠に乏しいケースがみられるので、本書では「竪穴建物跡」の名称を用いる。

３）遺構番号は、一旦番号を与えたものでも精査の過程で遺構ではないと判断できたものについては遺構登録を抹消し欠番としているため、完全な連番となってはいない。

全体図・遺構配置図

凡例

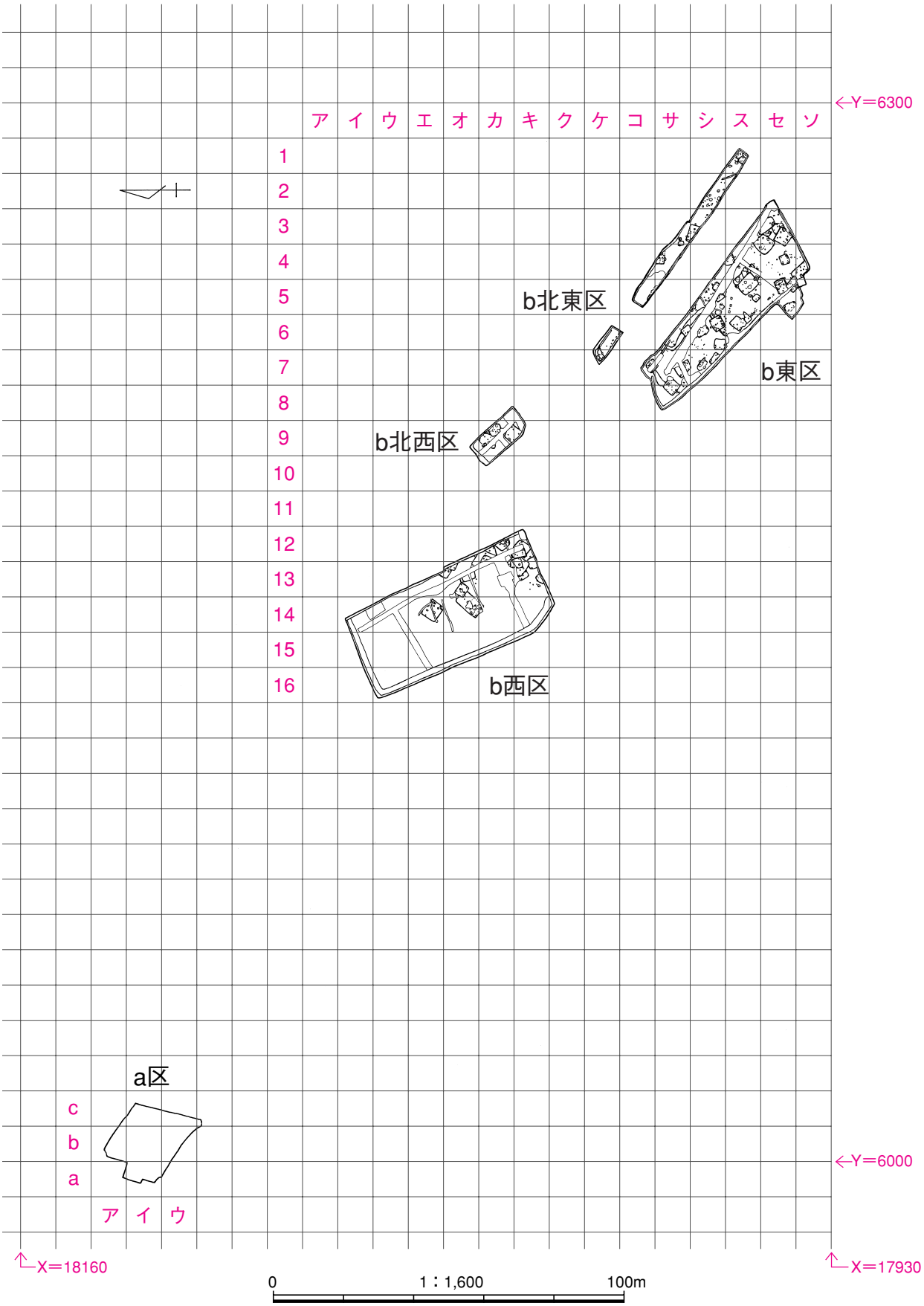
1　平面図における線種・網の使い分けは、「主要遺構詳細図」（第18図～第64図）に準ずる。

2　掲載縮尺は、次のとおりである。

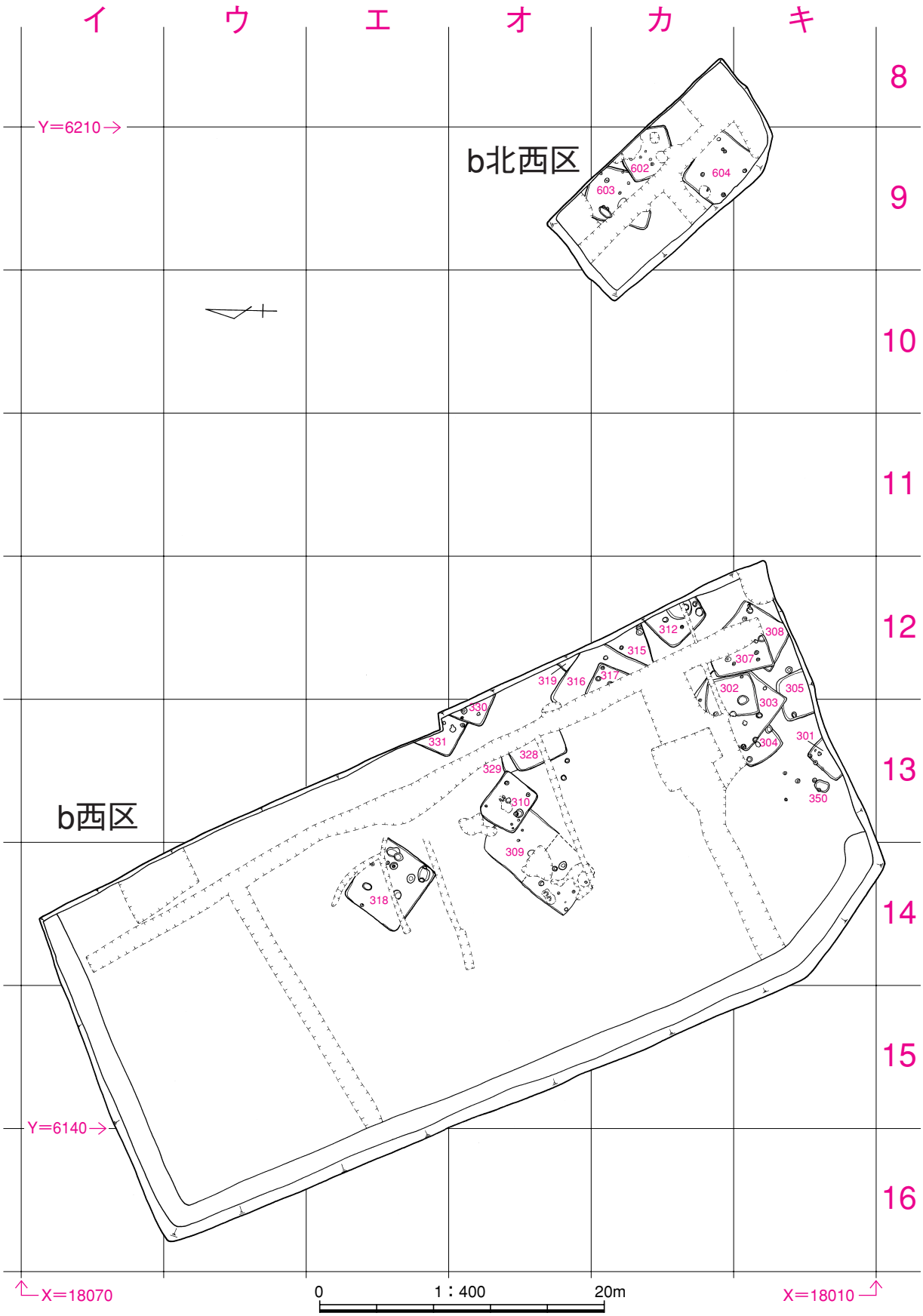
調査区全体図（第７図）…… １／1,600

遺構配置略図（第８図・第９図）…… １／400

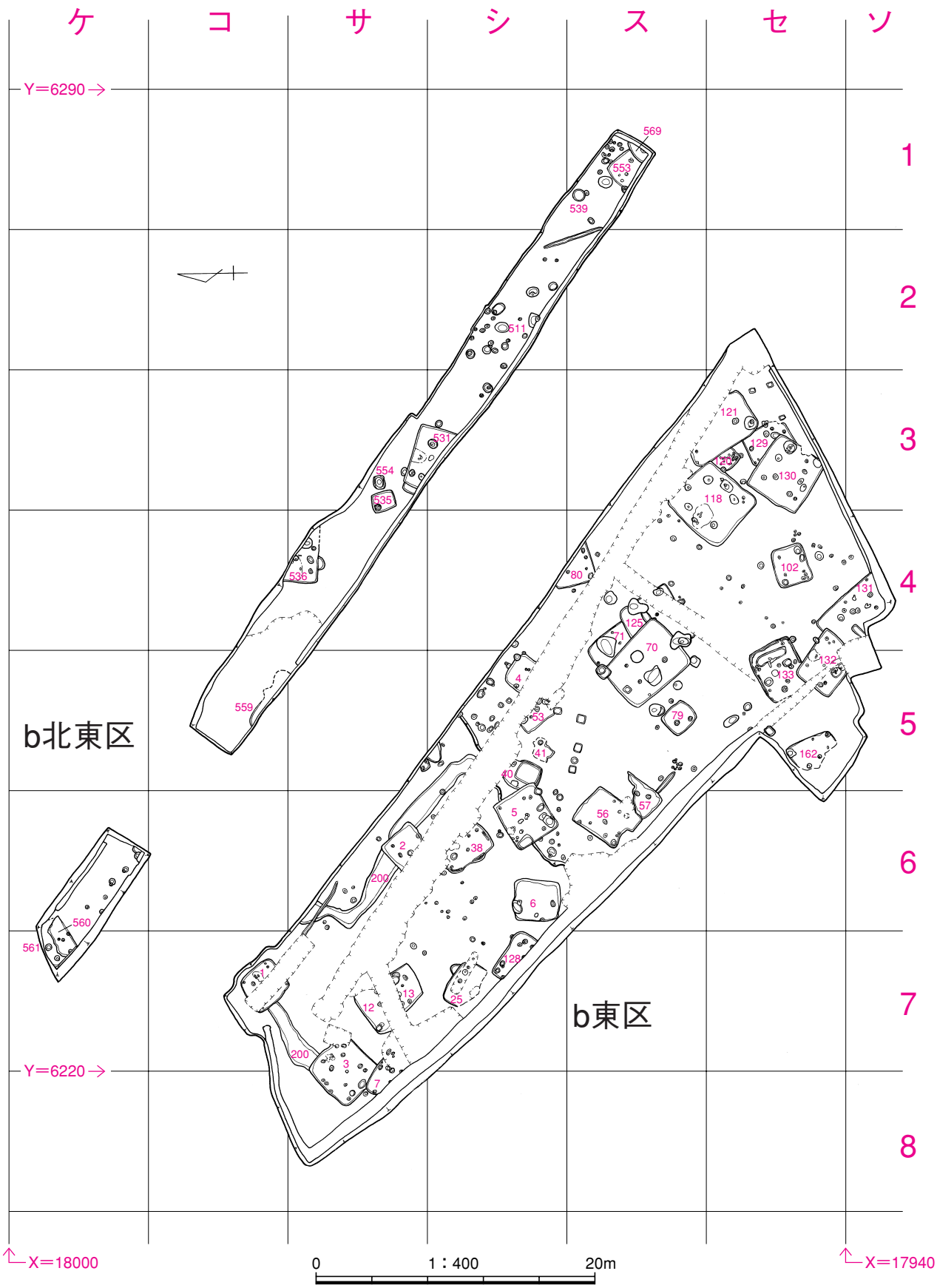
遺構配置図（第10図～第17図）…… １／160


ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ サ シ ス セ ソ
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
b北東区
b東区
b北西区
b西区
a区
c
b
a
ア イ ウ
←Y=6300
←Y=6000
X=18160
X=17930
0
1：1,600
100m

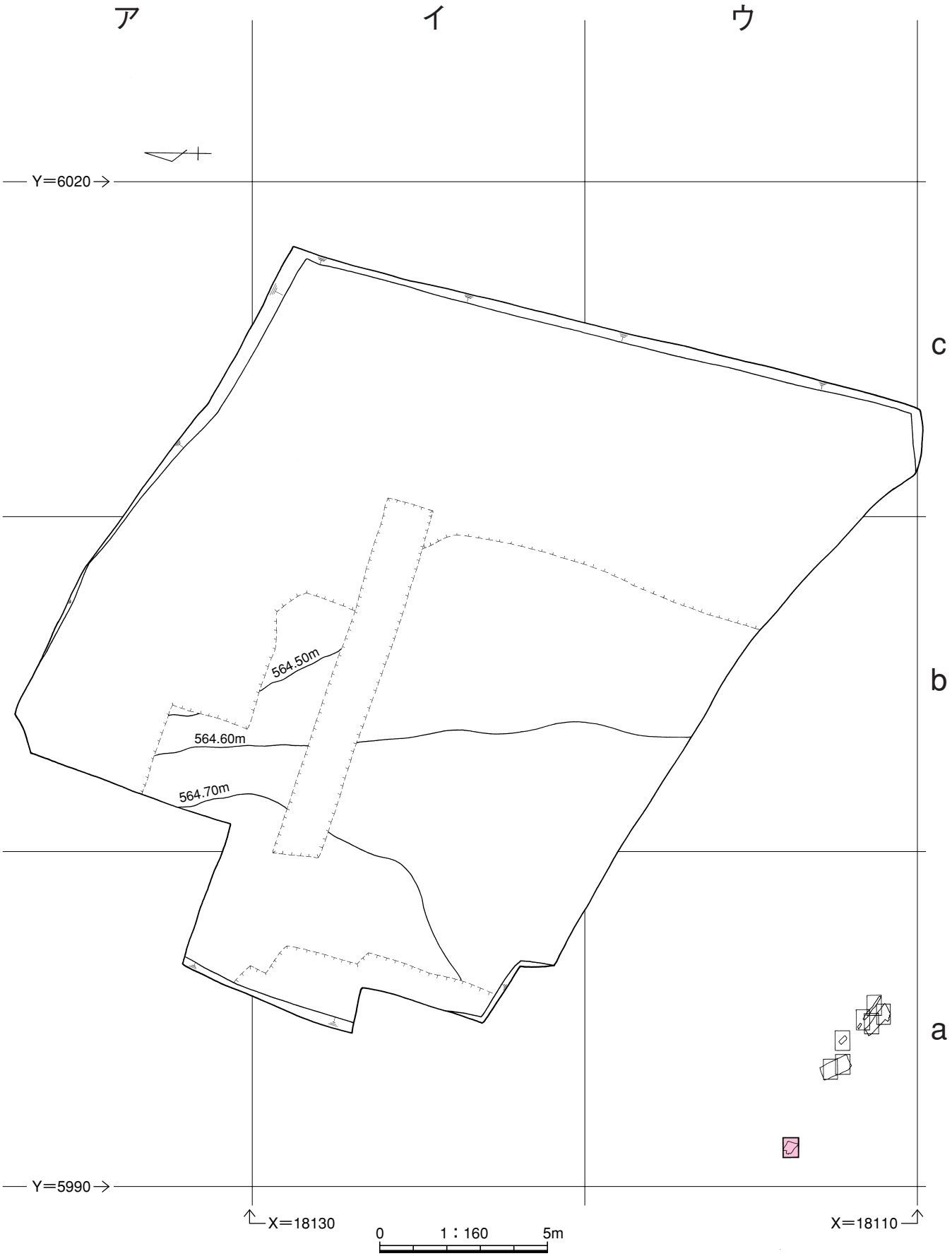
第7図　調査区全体図



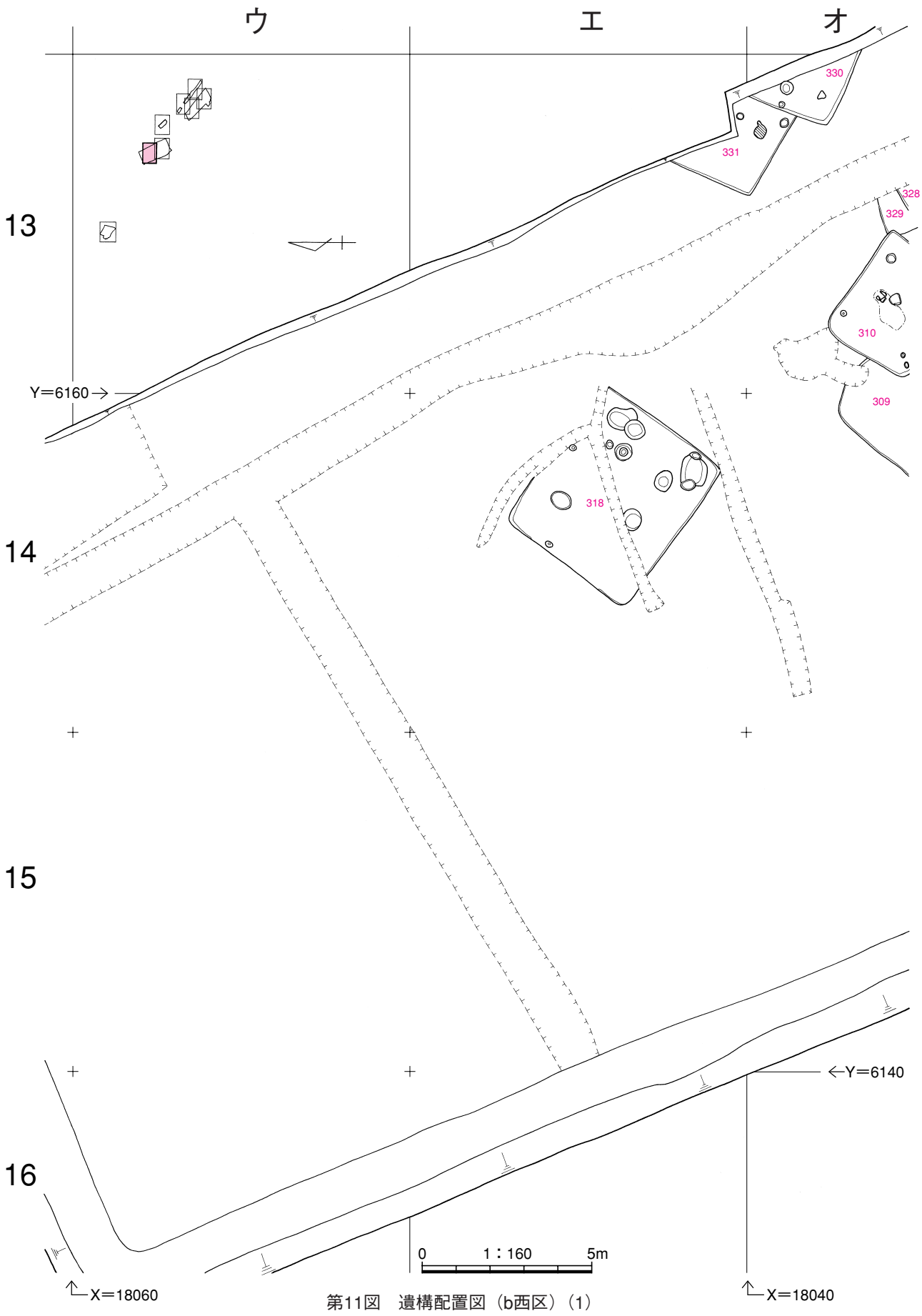
第8図　遺構配置略図（b西区・b北西区）



第9図　遺構配置略図（b東区・b北東区）



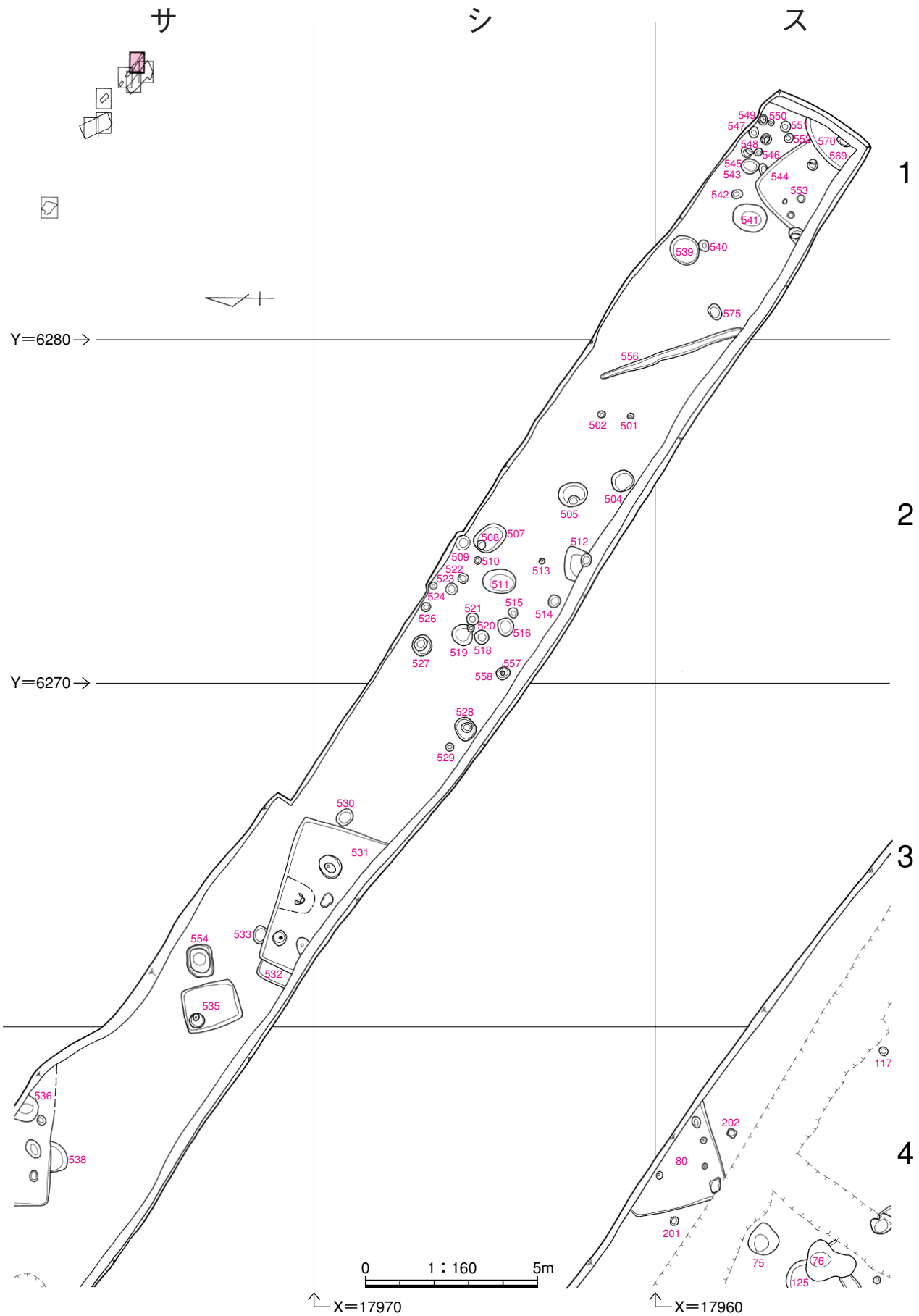
第10図　遺構配置図（a区）



第11図　遺構配置図（b西区）（1）

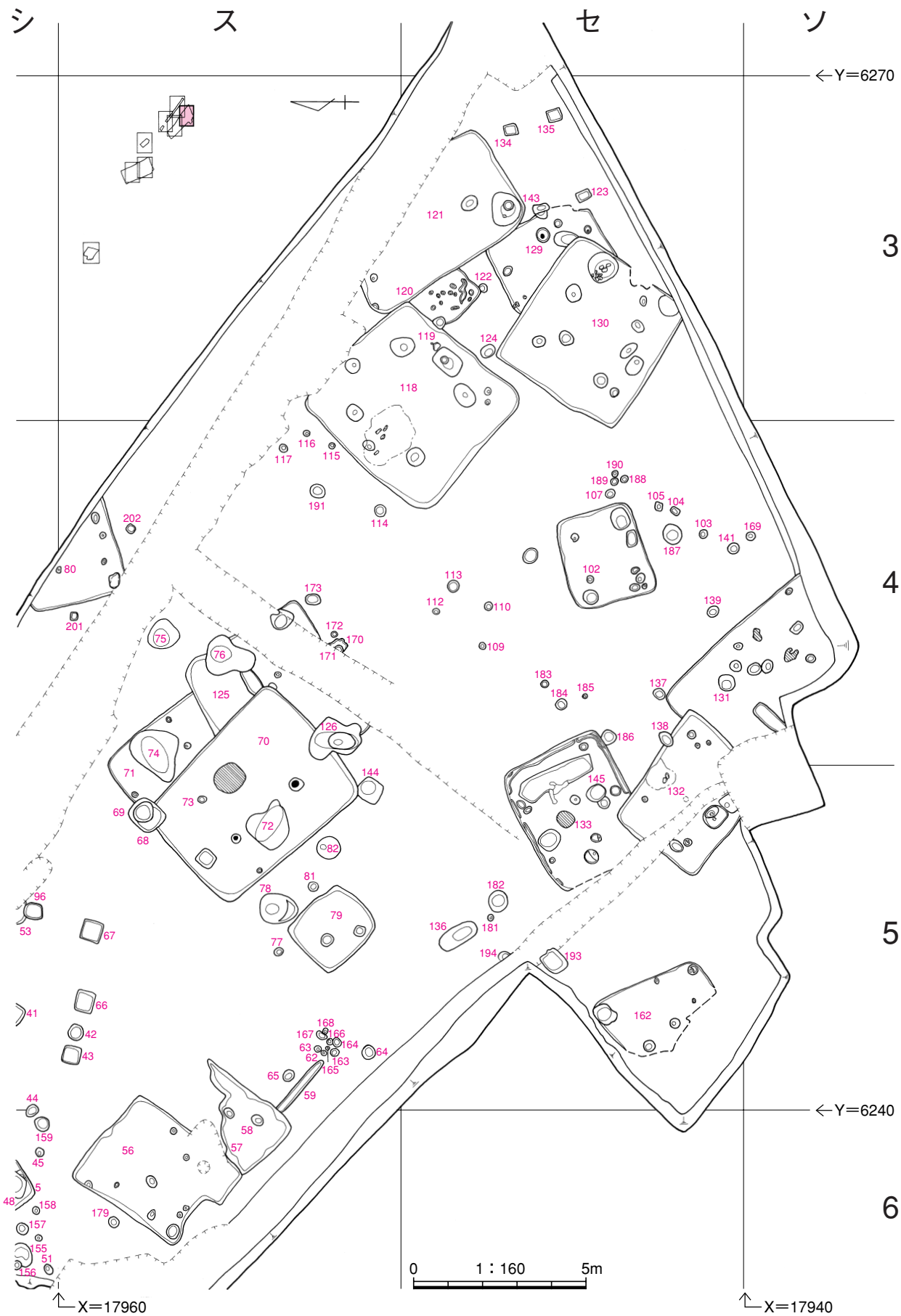
第12図　遺構配置図（b西区）（2）

第13図　遺構配置図（b北東区）（1）

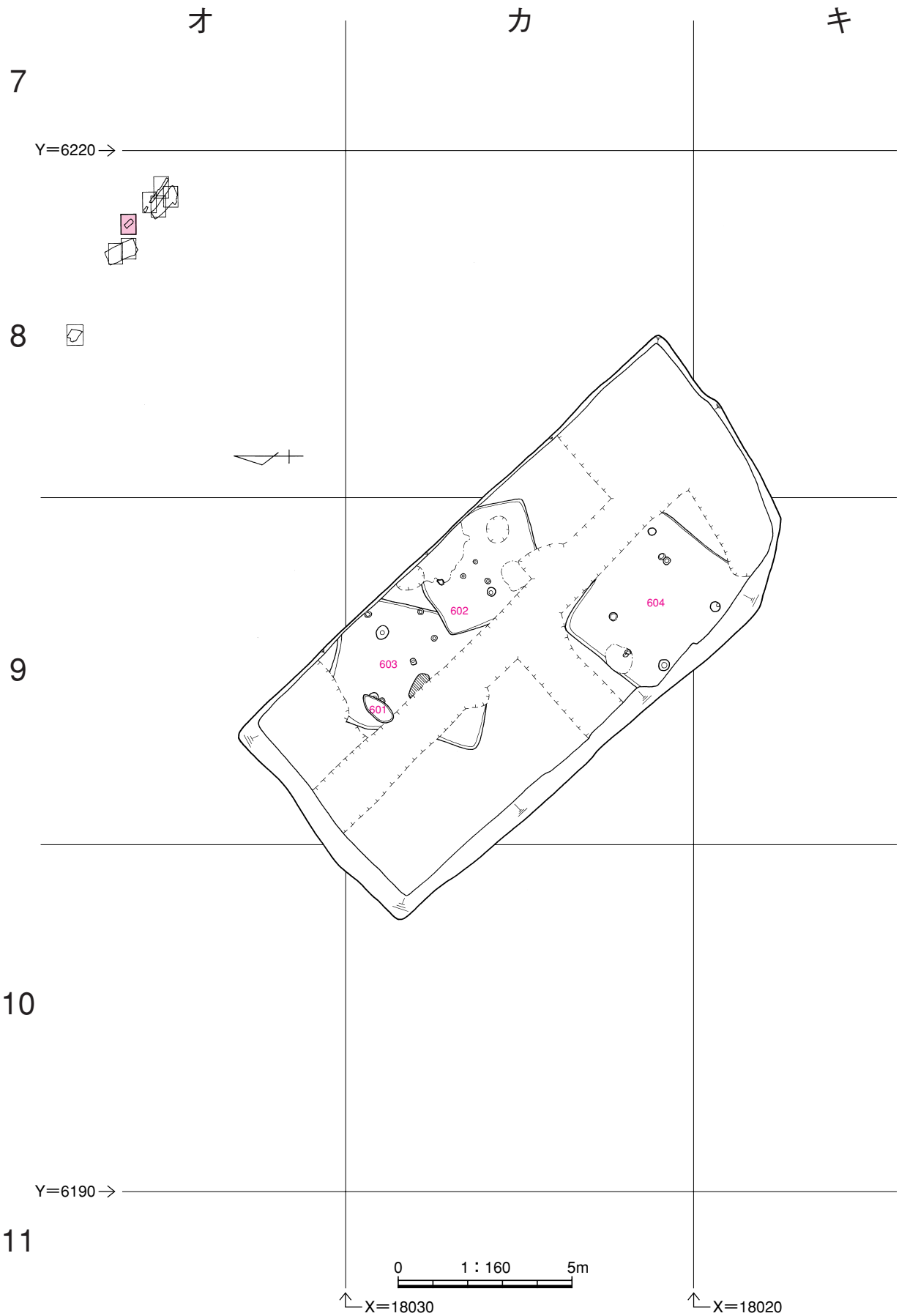


第14図　遺構配置図（b北東区）（2）

第15図　遺構配置図（b東区）（1）



第16図　遺構配置図（b東区）（2）



第17図　遺構配置図（b北西区）

主要遺構詳細図

凡例

1　平面図における線種・網の使い分けは次の通りである。

太実線：遺構上端

細実線：遺構下端

破線：遺構の残存範囲（遺構上端から続く場合）

遺構埋土中での焼土集中範囲

一点鎖線：遺構床面での炭混じり焼土集中範囲（炉跡、カマド跡）

ケバ付破線「┬」：近年の撹乱範囲

淡い網（網10％）：遺構床面被熱範囲

濃い網（網30％）：炭の集中範囲

非常に濃い網（網50％）：柱穴内の柱痕跡

2　断面図における線種・網の使い分けは次の通りである。

太実線：遺構埋土と地山の境

細実線：土層の境

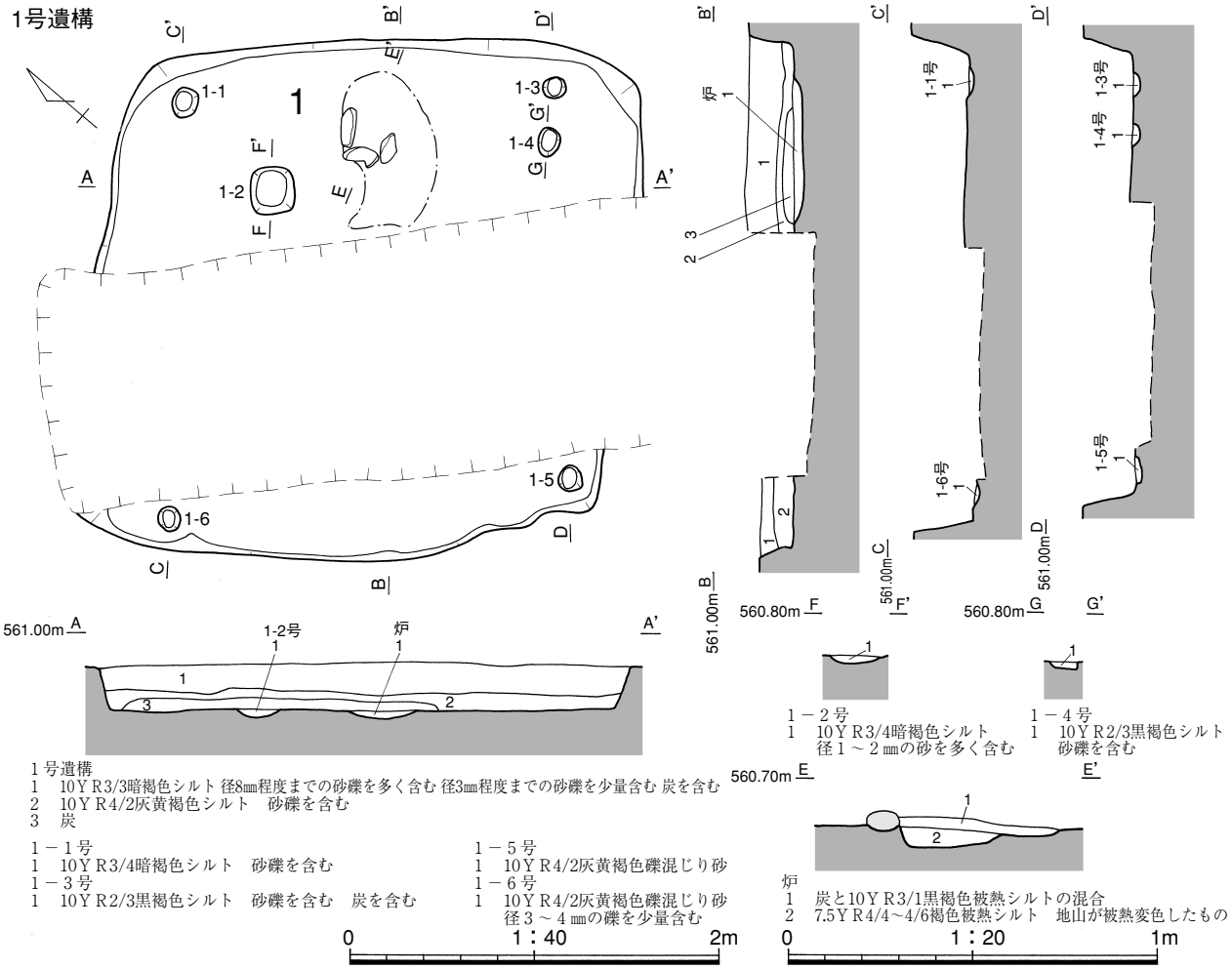
破線：近年の撹乱範囲

淡い網（網10％）：石

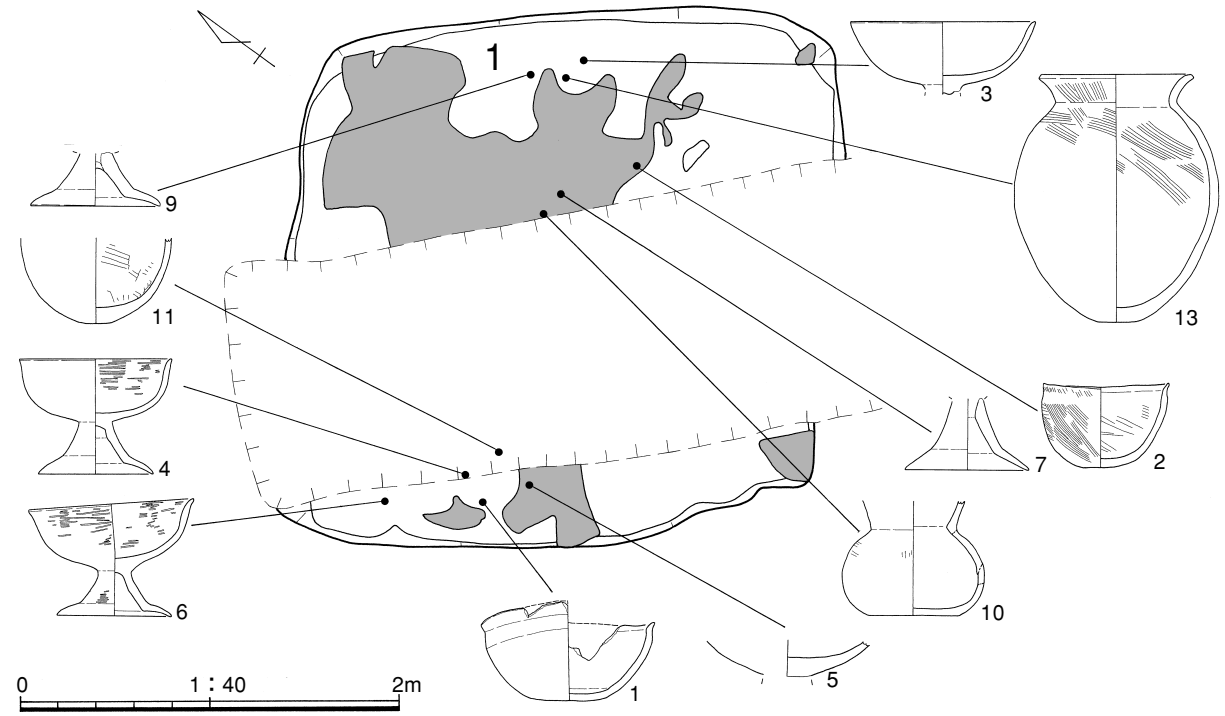
濃い網（網30％）：地山

3　掲載縮尺は1/40である。ただし、炉の部分拡大断面図は1/20である。

1号遺構

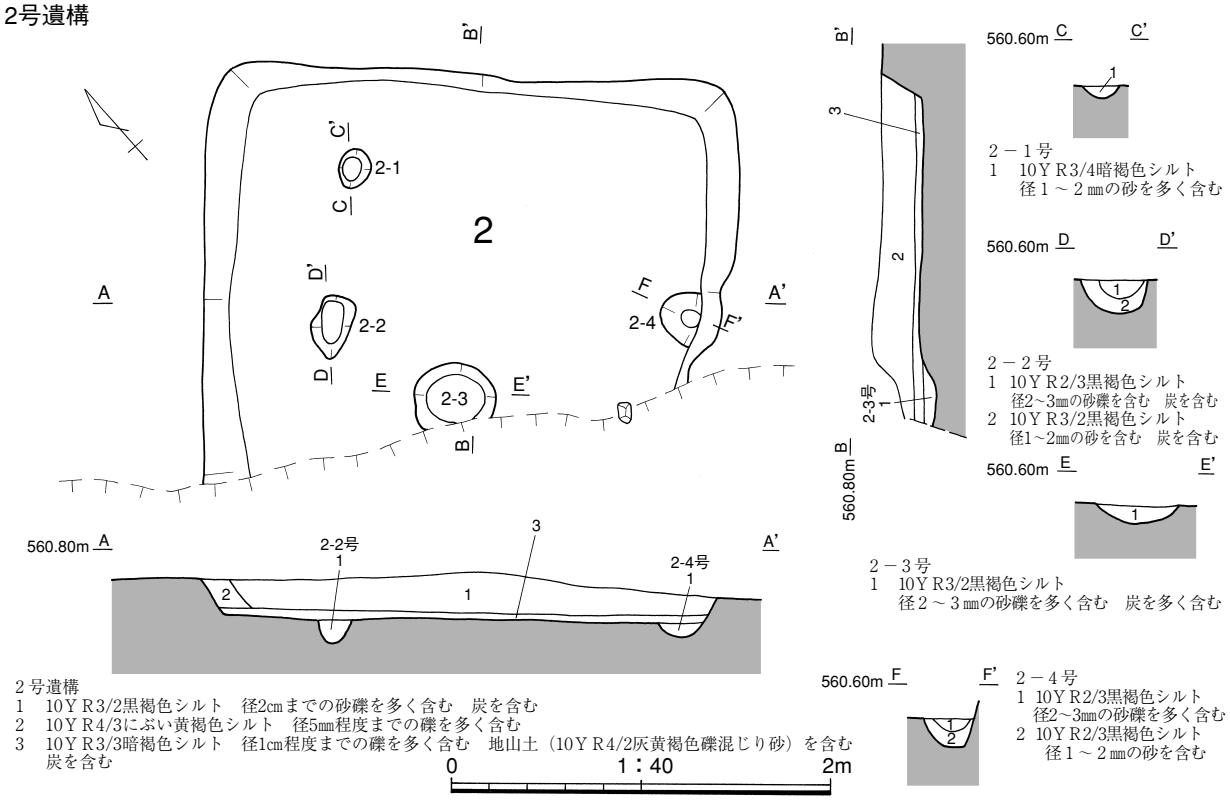


遺物出土状況（1号遺構）



第18図　竪穴建物跡（1号遺構）

2号遺構



2号遺構
1　10ＹＲ3/2黒褐色シルト　径2㎝までの砂礫を多く含む　炭を含む
2　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色シルト　径5㎜程度までの礫を多く含む
3　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　径1㎝程度までの礫を多く含む　地山土（10ＹＲ4/2灰黄褐色礫混じり砂）を含む
炭を含む

2－1号
1　10ＹＲ3/4暗褐色シルト
径１～２㎜の砂を多く含む

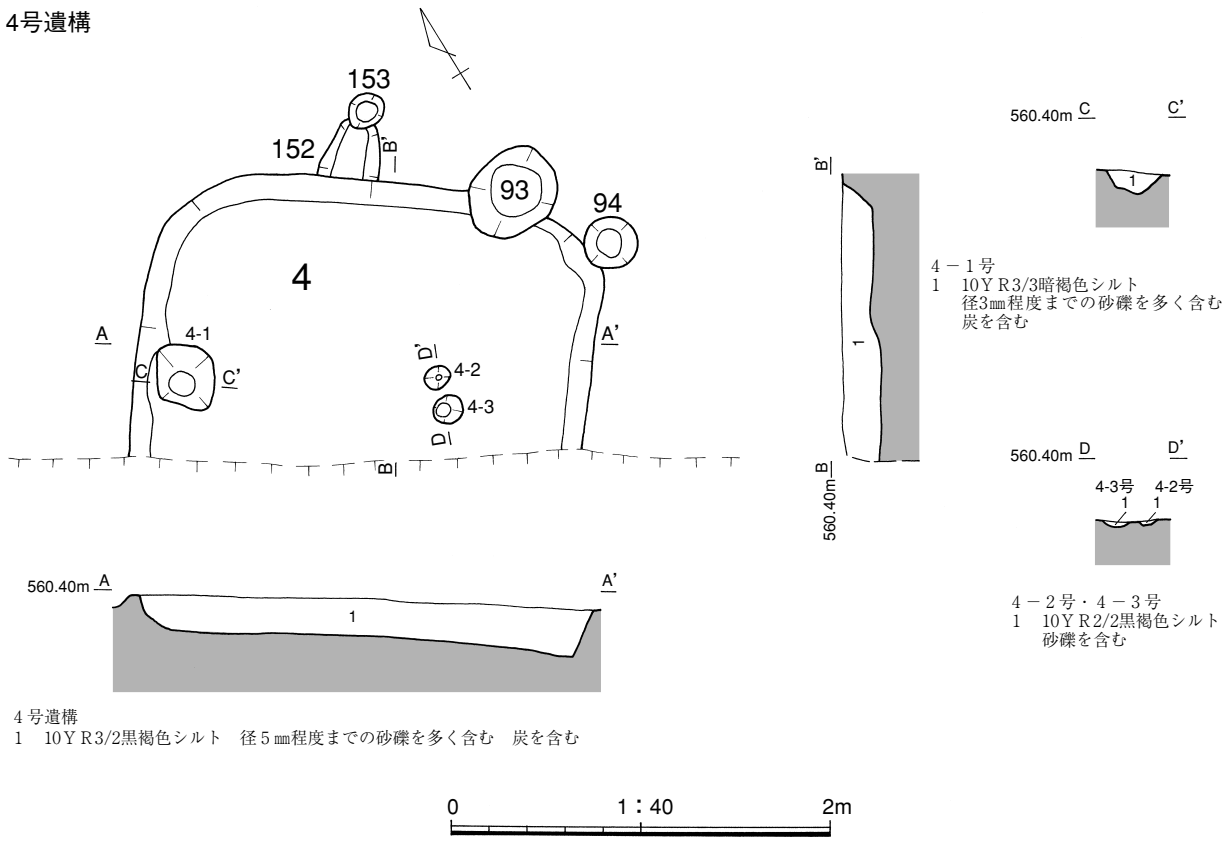
2－2号
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト
径2~3㎜の砂礫を含む　炭を含む
2　10ＹＲ3/2黒褐色シルト
径1~2㎜の砂を含む　炭を含む

2－3号
1　10ＹＲ3/2黒褐色シルト
径２～３㎜の砂礫を多く含む　炭を多く含む

2－4号
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト
径2~3㎜の砂礫を多く含む
2　10ＹＲ2/3黒褐色シルト
径１～２㎜の砂を含む

0　1：40　2m

4号遺構



4号遺構
1　10ＹＲ3/2黒褐色シルト　径５㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む

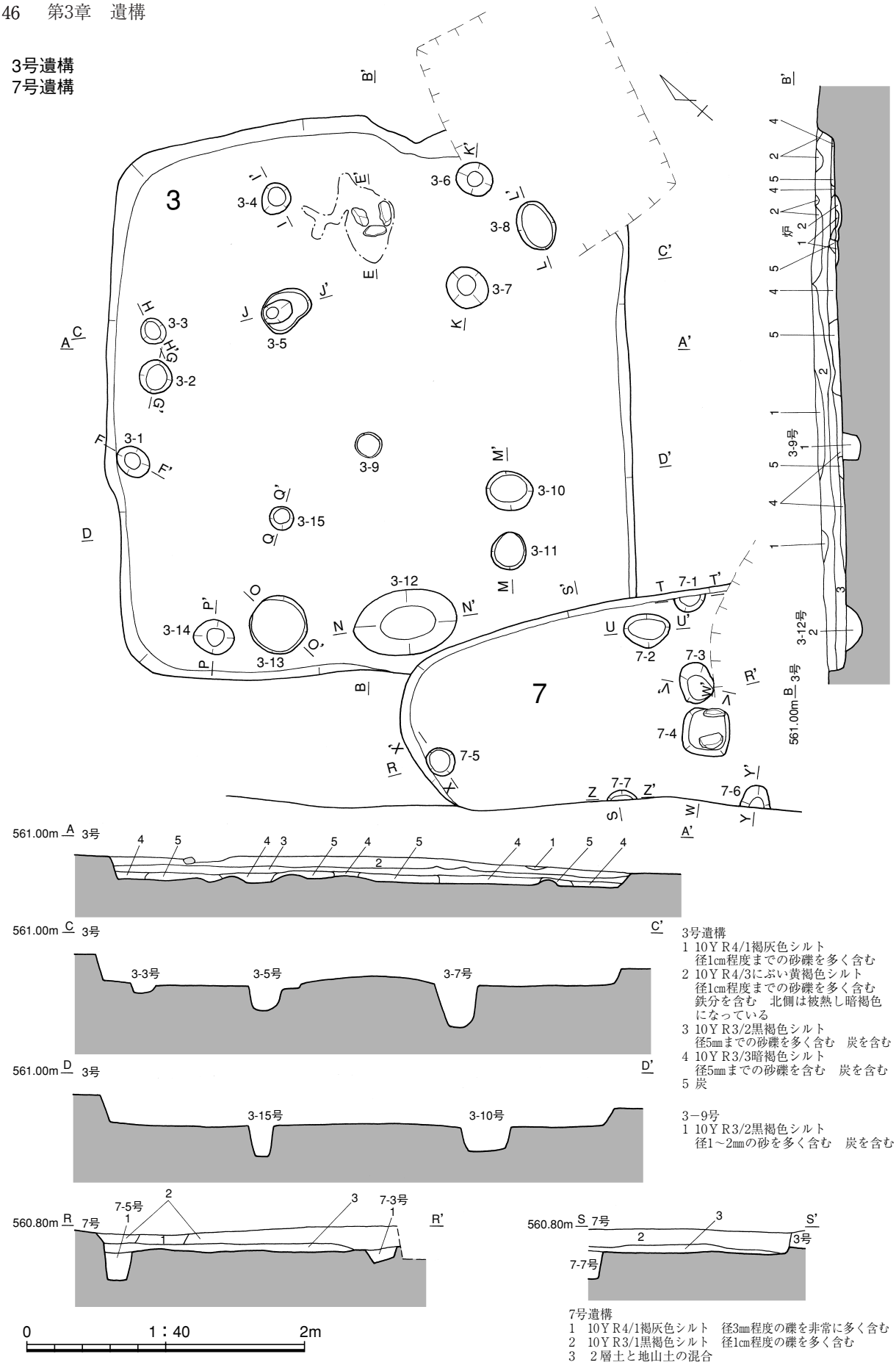
4－1号
1　10ＹＲ3/3暗褐色シルト
径3㎜程度までの砂礫を多く含む
炭を含む

4－2号・4－3号
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト
砂礫を含む

0　1：40　2m

第19図　竪穴建物跡（2・4号遺構）

3号遺構
7号遺構

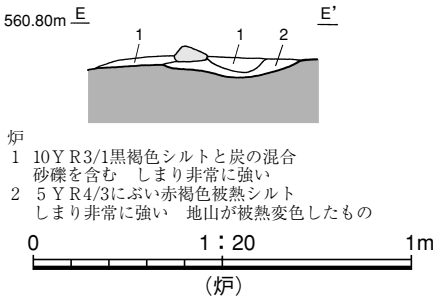


3号遺構
1 10YR4/1褐灰色シルト
　径1cm程度までの砂礫を多く含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
　径1cm程度までの砂礫を多く含む
　鉄分を含む　北側は被熱し暗褐色
　になっている
3 10YR3/2黒褐色シルト
　径5mmまでの砂礫を多く含む　炭を含む
4 10YR3/3暗褐色シルト
　径5mmまでの砂礫を含む　炭を含む
5 炭

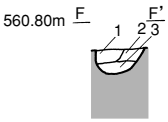
3−9号
1 10YR3/2黒褐色シルト
　径1～2mmの砂を多く含む　炭を含む

7号遺構
1　10YR4/1褐灰色シルト　径3mm程度の礫を非常に多く含む
2　10YR3/1黒褐色シルト　径1cm程度の礫を多く含む
3　2層土と地山土の混合

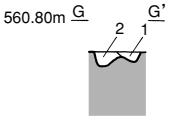
第20図　竪穴建物跡（3・7号遺構）（1）



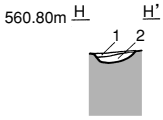
炉
1　10Y R3/1黒褐色シルトと炭の混合
　砂礫を含む　しまり非常に強い
2　5Y R4/3にぶい赤褐色被熱シルト
　しまり非常に強い　地山が被熱変色したもの



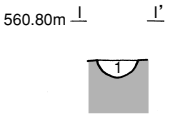
3－1号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を少量含む
　炭を含む　鉄分を含む
2　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を少量含む
　径3～4㎜の礫を少量含む
　炭を含む 鉄分を含む
3　1層土と地山土の混合　炭を含む



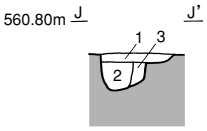
3－2号
1　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
2　1層土と地山土の混合



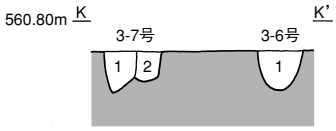
3－3号
1　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を少量含む
　炭を含む
2　1層土と地山土の混合
　炭を含む



3－4号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を非常に多く含む

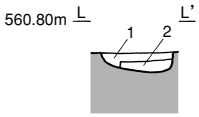


3－5号
1　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
　径3～4㎜の礫を少量含む
　しまり非常に強い
2　1層土と地山土の混合　炭を含む
3　10Y R3/2黒褐色シルト
　径3～4㎜の礫を少量含む

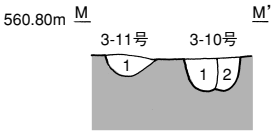


3－6号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を少量含む

3－7号
1　10Y R2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
　径1㎝程度の礫を少量含む　炭を含む
2　10Y R3/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む

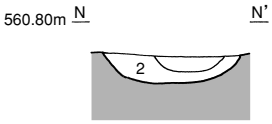


3－8号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む

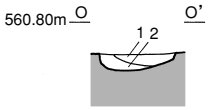


3－10号
1　10Y R2/3黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2　10Y R3/2黒褐色シルト
　径3㎜程度までの砂礫を多く含む

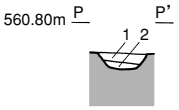
3－11号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む



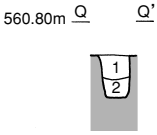
3－12号
1　10Y R3/2黒褐色シルト
　径4㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
2　10Y R2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
　地山土を含む　炭を含む



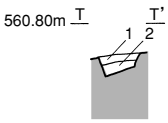
3－13号
1　10Y R3/1黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
　炭を多く含む
2　10Y R4/1褐灰色礫混じり砂
　炭を含む



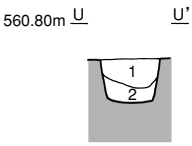
3－14号
1　10Y R3/1黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
　炭を多く含む
2　10Y R4/1褐灰色礫混じり砂
　炭を含む



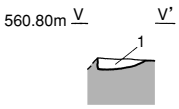
3－15号
1　10Y R2/3黒褐色粘質シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　一辺1㎝程度の炭を4～5点含む
2　10Y R2/2黒褐色粘質シルト　砂礫を含む　炭を含む　一辺3～4㎝の炭1点あり



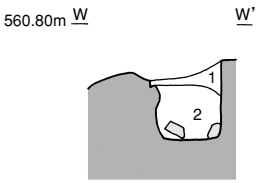
7－1号
1　10Y R2/2黒褐色シルト
　径2～3㎜の砂礫を少量含む
2　10Y R3/2黒褐色シルト
　砂礫を含む



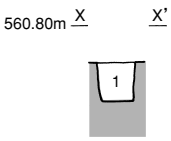
7－2号
1　10Y R2/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂（黄色）を多く含む
2　10Y R2/1黒色シルト
　径2～3㎜の砂礫を多く含む　炭を含む



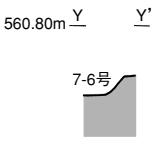
7－3号
1　10Y R2/2黒褐色シルト
　径2～3㎜の砂礫を多く含む

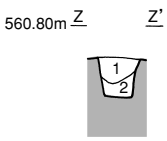


7－4号
1　10Y R2/3黒褐色シルト
　砂礫を含む　炭を含む
2　10Y R2/1黒色砂質シルト
　炭を含む



7－5号
1　10Y R2/2黒褐色シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
　炭を含む



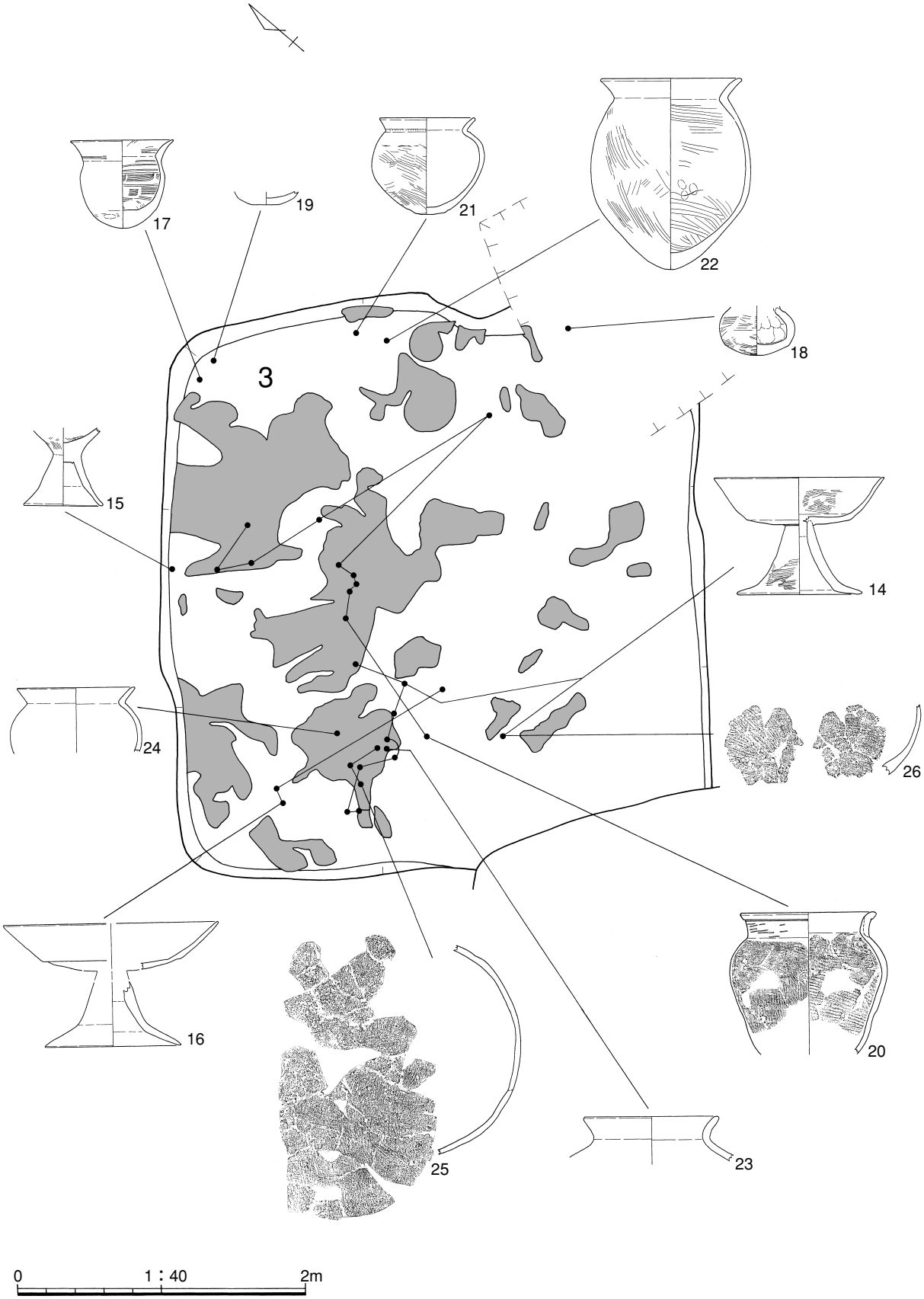


7－7号
1　10Y R2/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
2　10Y R2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

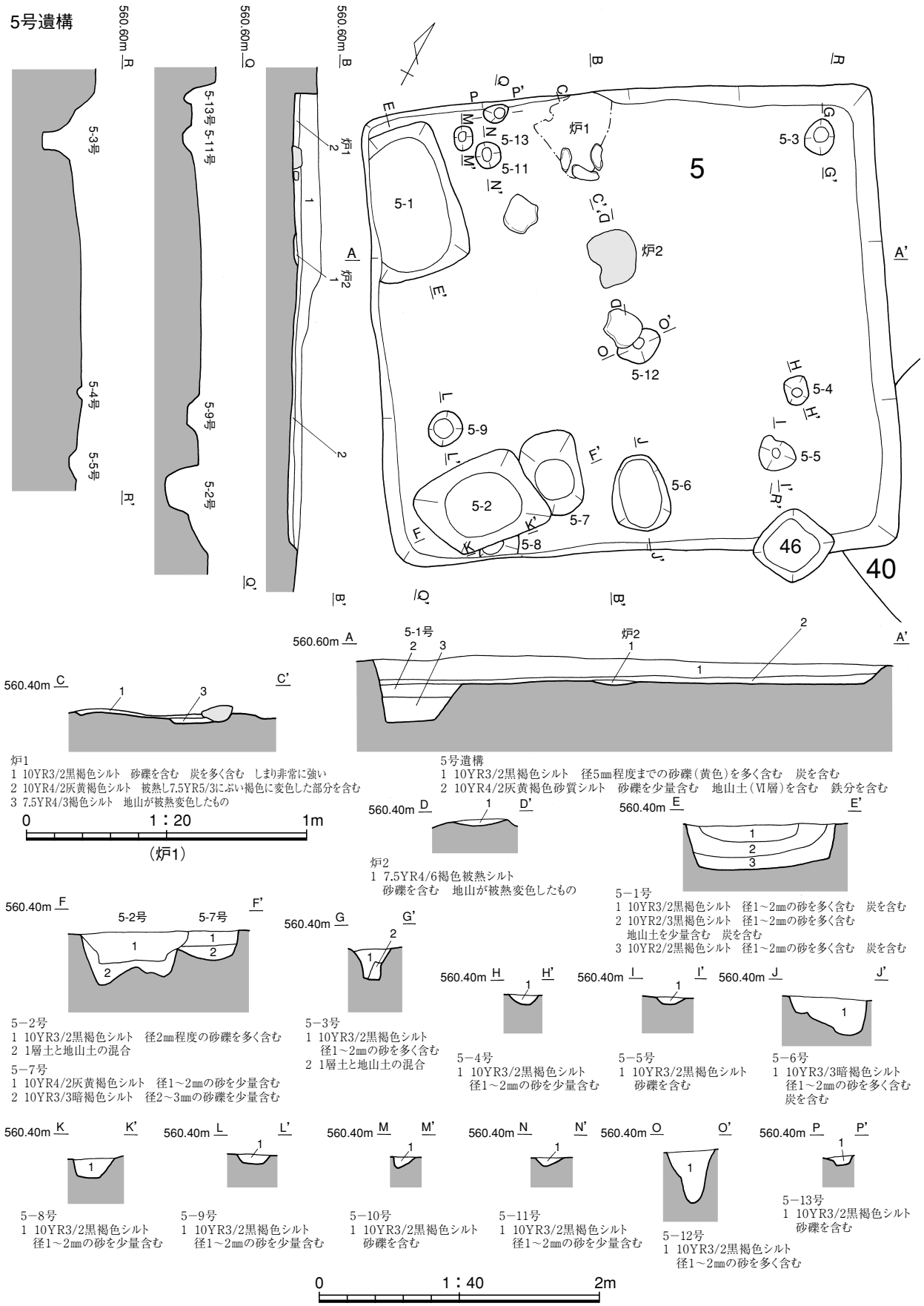
0　1：40　2m

第21図　竪穴建物跡（3・7号遺構）（2）

遺物出土状況（3号遺構）



第22図　遺物出土状況（3号遺構）



炉1
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を多く含む　しまり非常に強い
2 10YR4/2灰黄褐色シルト　被熱し7.5YR5/3にぶい褐色に変色した部分を含む
3 7.5YR4/3褐色シルト　地山が被熱変色したもの

（炉1）

5号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫（黄色）を多く含む　炭を含む
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　砂礫を少量含む　地山土（Ⅵ層）を含む　鉄分を含む

炉2
1 7.5YR4/6褐色被熱シルト
砂礫を含む　地山が被熱変色したもの

5−1号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
地山土を少量含む　炭を含む
3 10YR2/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

5−2号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径2㎜程度の砂礫を多く含む
2 1層土と地山土の混合

5−7号
1 10YR4/2灰黄褐色シルト　径1～2㎜の砂を少量含む
2 10YR3/3暗褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を少量含む

5−3号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む
2 1層土と地山土の混合

5−4号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む

5−5号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む

5−6号
1 10YR3/3暗褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む
炭を含む

5−8号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む

5−9号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む

5−10号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む

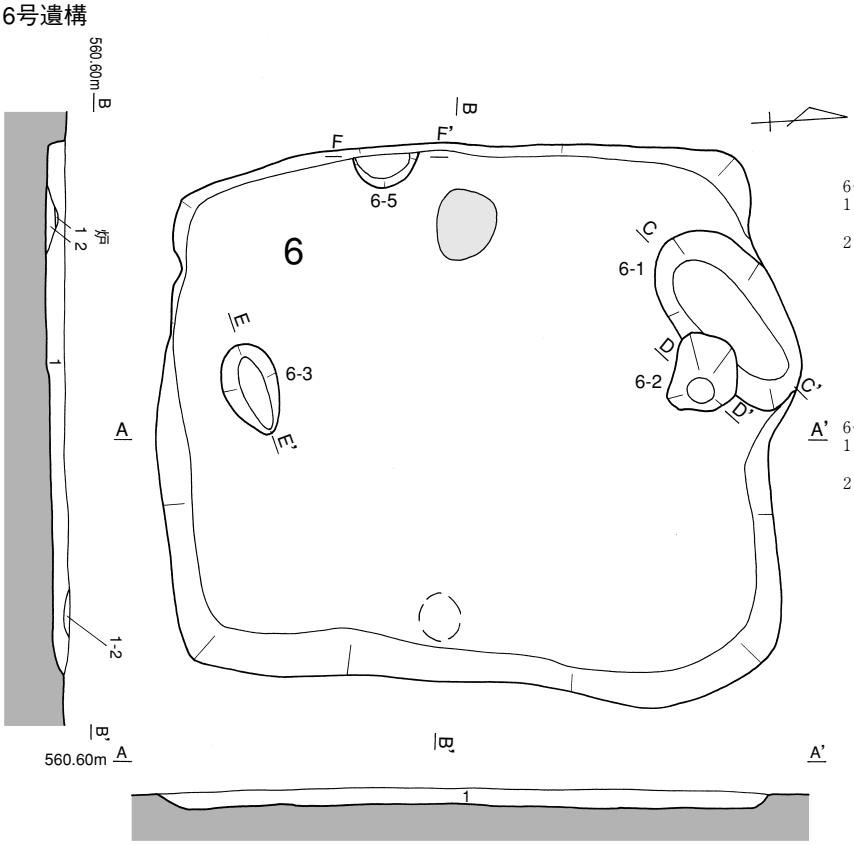
5−11号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む

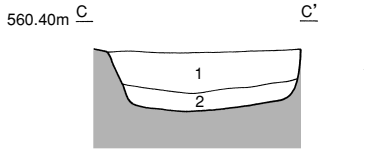
5−12号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む

5−13号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む

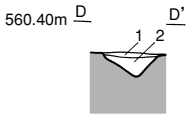
第23図　竪穴建物跡（5号遺構）

6号遺構

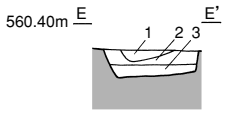




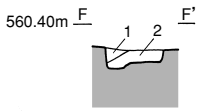
6−1号
1 10YR3/3暗褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を多く含む
炭を含む　しまり非常に強い
2 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を少量含む



6−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を少量含む
炭を含む
2 10YR3/3暗褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を少量含む
炭を含む



6−3号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径2～3㎜の砂礫を少量含む　炭を含む
2 10YR4/2灰黄褐色礫混じり砂
3 10YR2/2黒褐色粘質シルト



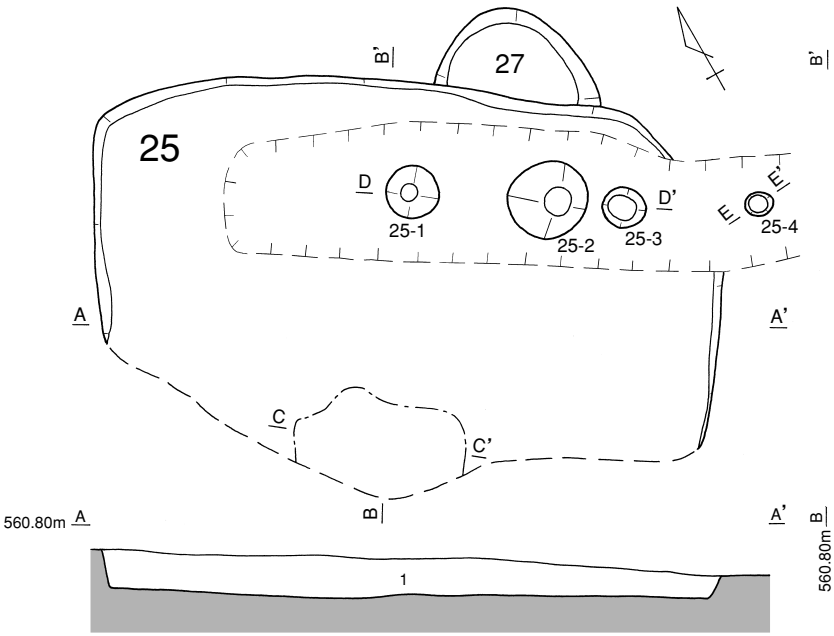
6−5号
1 10YR3/2黒褐色シルト 砂礫を多く含む
2 10YR2/3黒褐色シルト 砂礫を含む　炭を含む

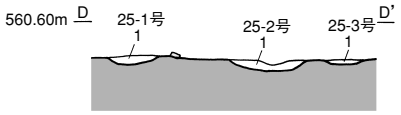
6号遺構
1　10YR3/2黒褐色シルト　径1㎝程度までの砂礫を含む　炭を含む
1-2　7.5YR4/4褐色被熱シルト　しまり非常に強い

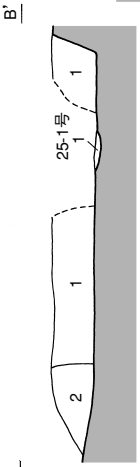
炉
1 7.5YR5/3にぶい褐色被熱シルト
2 10YR3/3暗褐色被熱シルト　砂礫を多く含む

0　1：40　2m

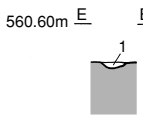
25号遺構



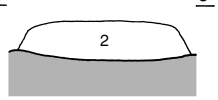




25−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む
25−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む
25−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む



25−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む

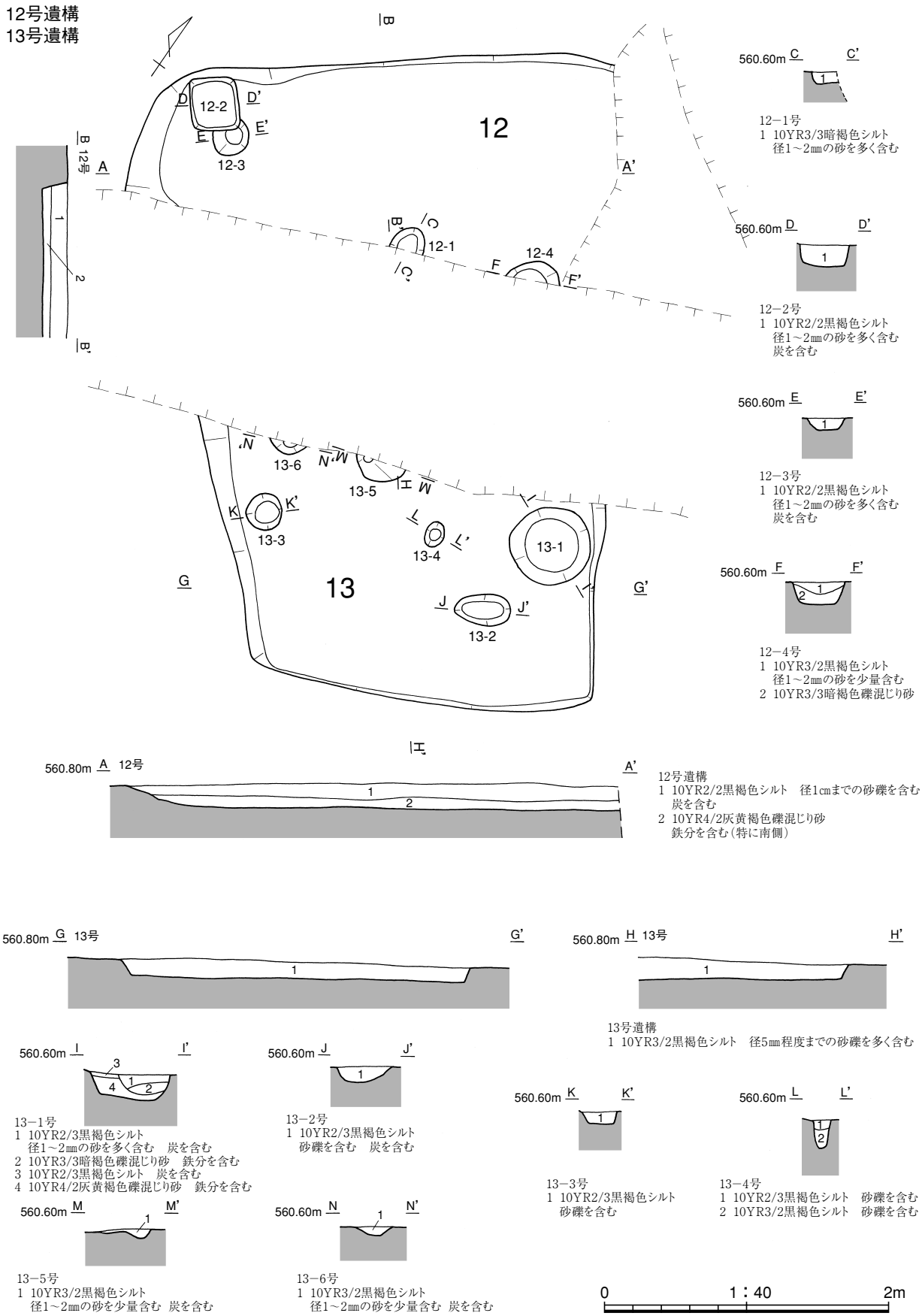


25号遺構
1 10YR4/2灰黄褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫を含む
2 10YR2/3黒褐色シルトと7.5YR4/4褐色被熱シルトの混合
径2～3㎜の砂礫を多く含む

0　1：40　2m

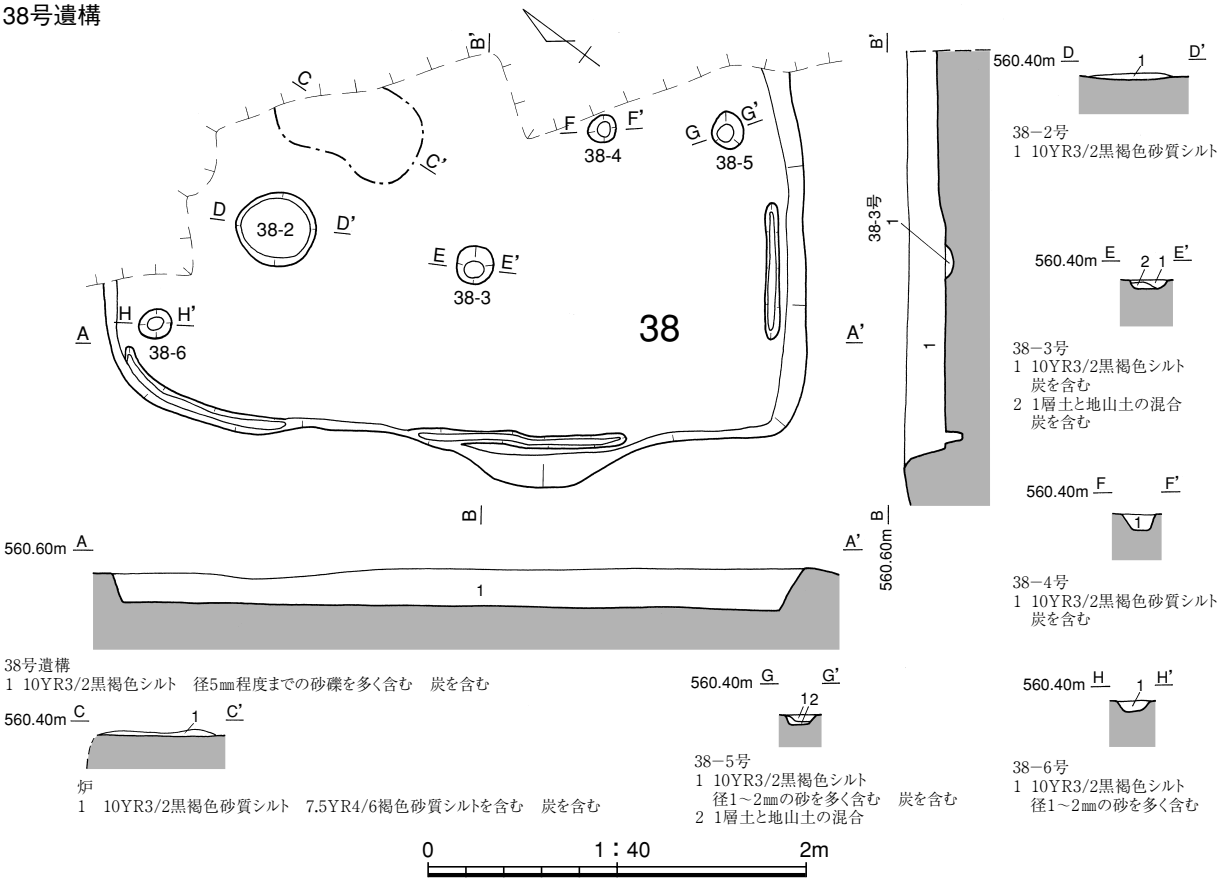
第24図　竪穴建物跡（6・25号遺構）

12号遺構
13号遺構

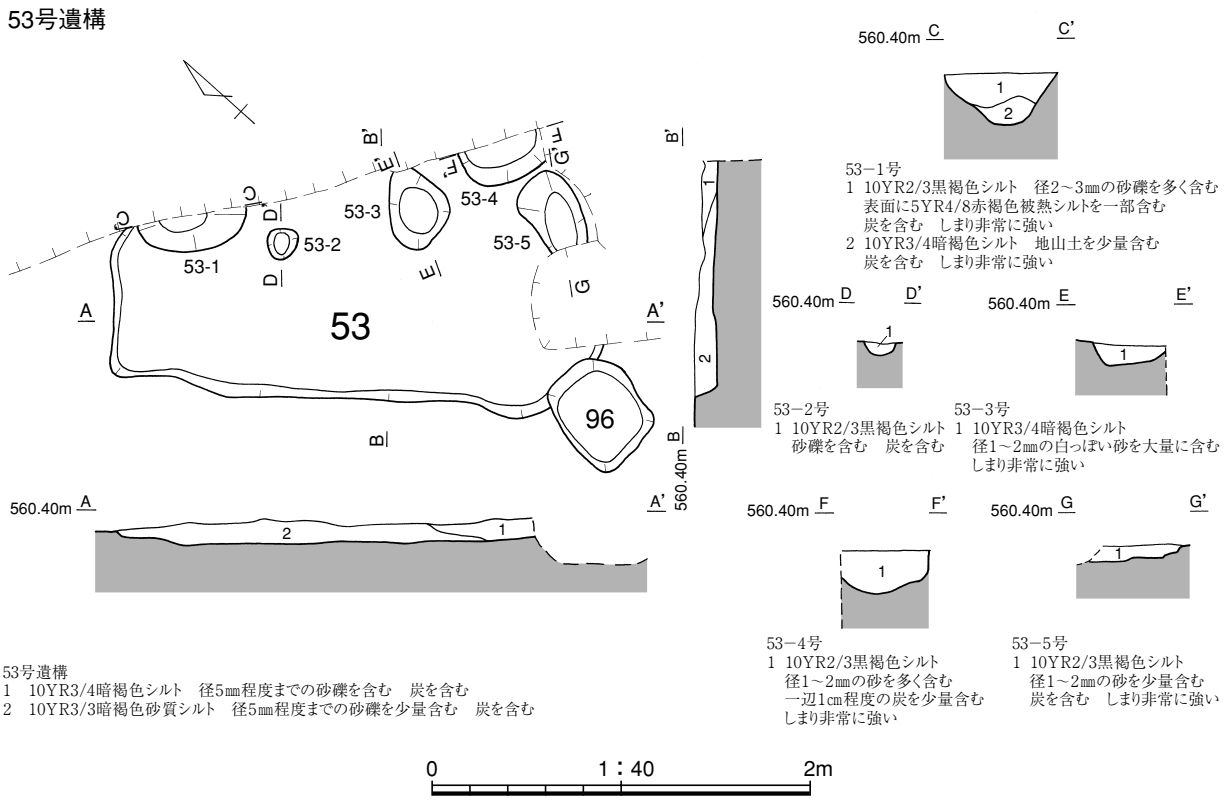


第25図　竪穴建物跡（12・13号遺構）

38号遺構

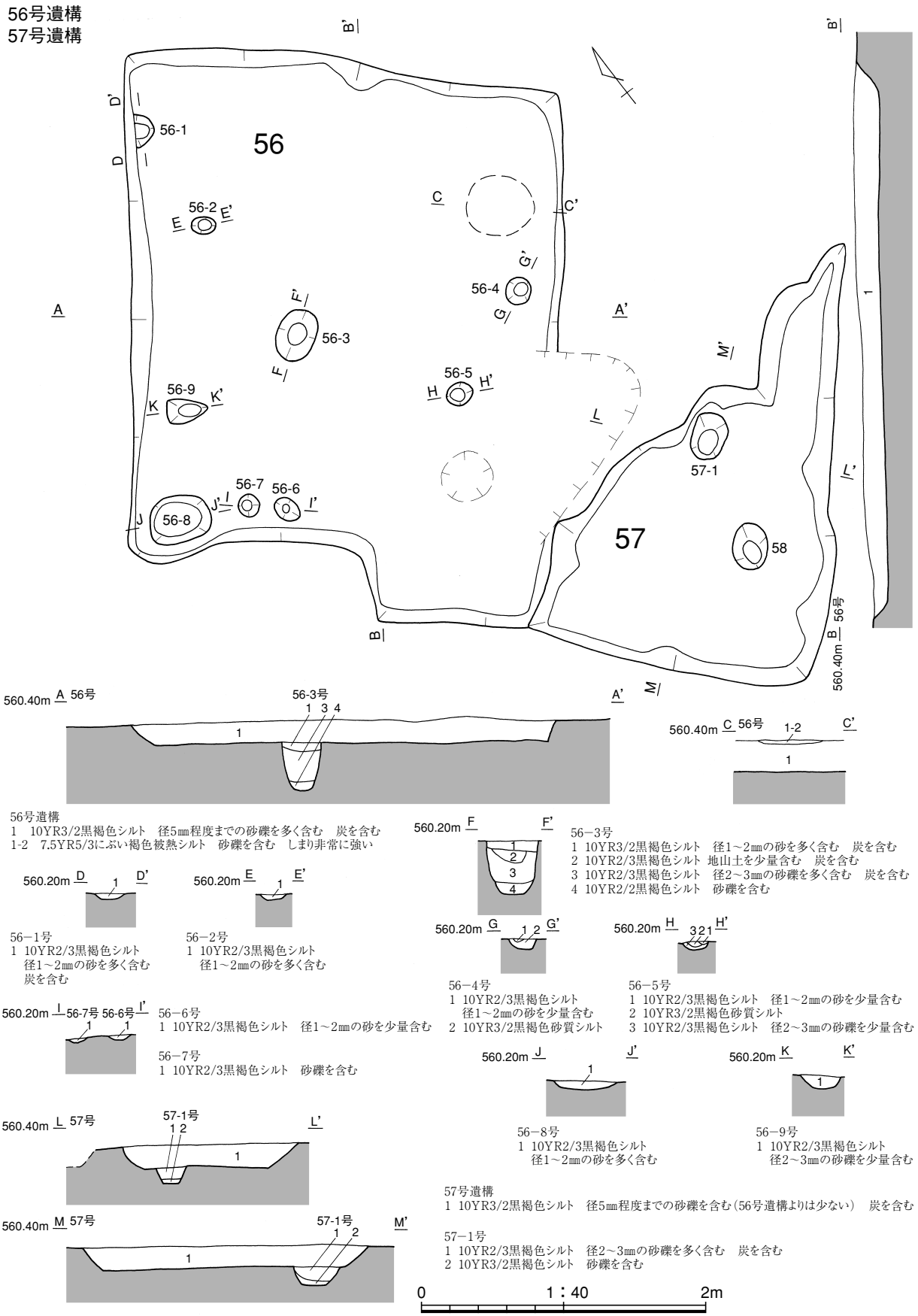


53号遺構



第26図　竪穴建物跡（38・53号遺構）

56号遺構
57号遺構



56号遺構
1　10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
1-2　7.5YR5/3にぶい褐色被熱シルト　砂礫を含む　しまり非常に強い

56−1号
1　10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む
炭を含む

56−2号
1　10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む

56−6号
1　10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を少量含む

56−7号
1　10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む

56−3号
1　10YR3/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2　10YR2/3黒褐色シルト　地山土を少量含む　炭を含む
3　10YR2/3黒褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を多く含む　炭を含む
4　10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む

56−4号
1　10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト

56−5号
1　10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を少量含む
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト
3　10YR2/3黒褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を少量含む

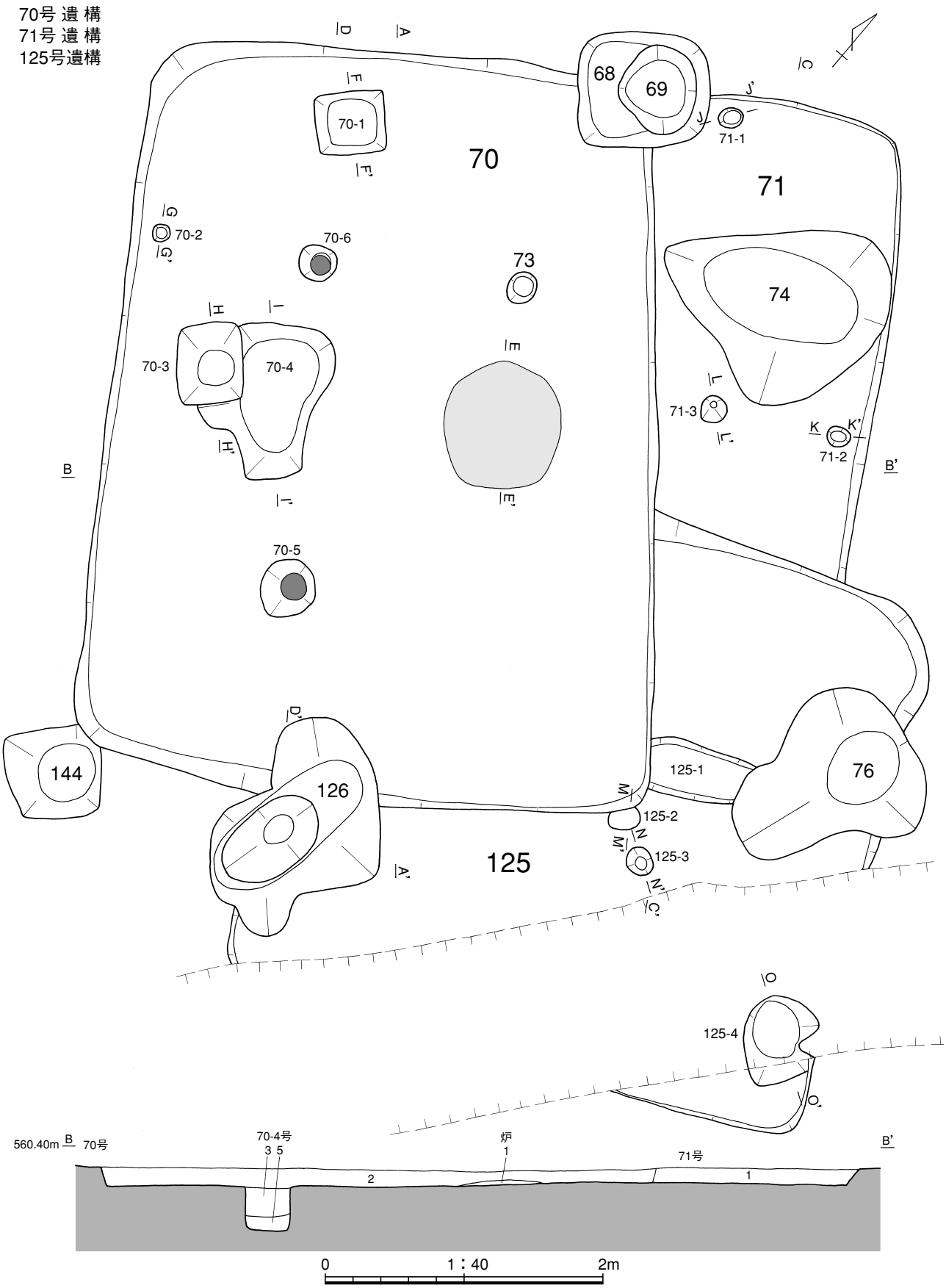
56−8号
1　10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む

56−9号
1　10YR2/3黒褐色シルト
径2～3㎜の砂礫を少量含む

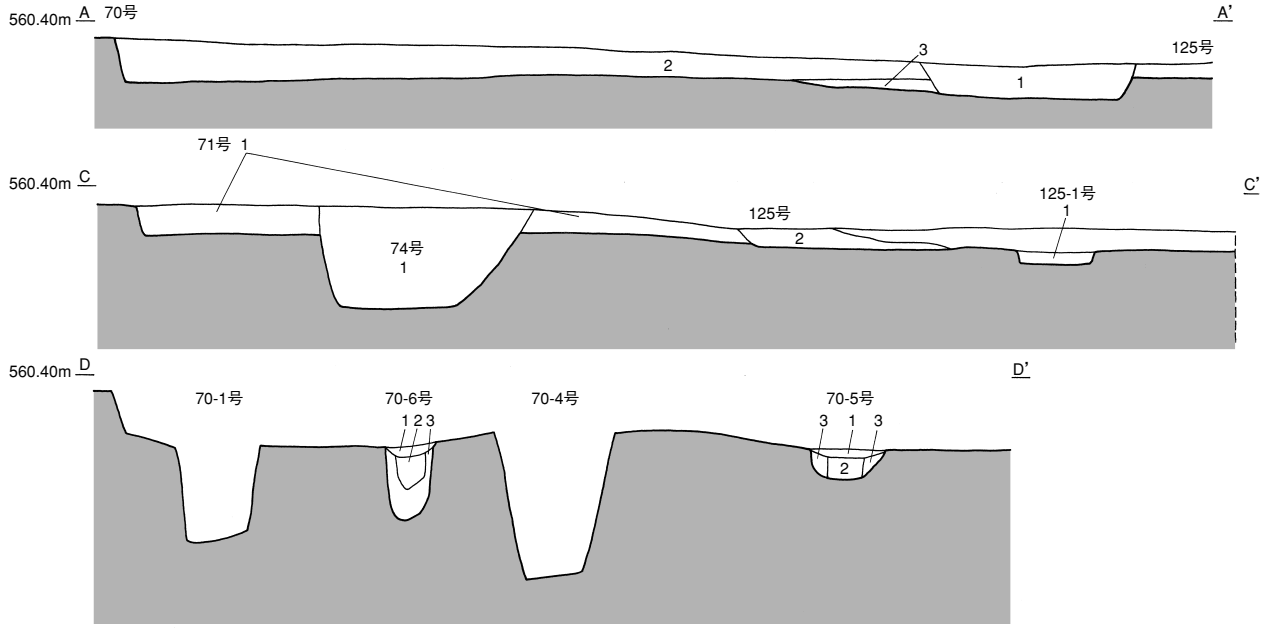
57号遺構
1　10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫を含む（56号遺構よりは少ない）　炭を含む

57−1号
1　10YR2/3黒褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を多く含む　炭を含む
2　10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む

第27図　竪穴建物跡（56・57号遺構）



第28図　竪穴建物跡（70・71・125号遺構）（1）



70号遺構
1 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
2 10YR3/3暗褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
3 10YR3/3暗褐色シルト　砂礫を含む　地山土を含む　炭を含む

70−5号
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
2 10YR3/4暗褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を少量含む　炭を含む
3 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む

70−6号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む
3 10YR3/2黒褐色砂質シルト

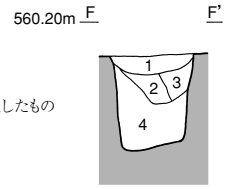
71号遺構
1 10YR3/3暗褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む

74号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫を多く含む　径4～5㎝程度の礫を少量含む

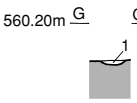
125号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を少量含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む

125−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む　径1～2㎜の砂を多く含む

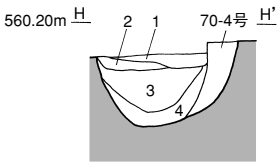
炉
1 7.5YR4/6褐色被熱シルト　地山が被熱変色したもの



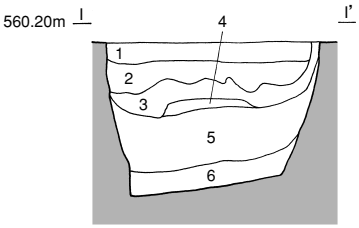
70−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト
径2～3㎜の砂礫を含む　炭を含む
3 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む
4 10YR2/3黒褐色粘質シルト
砂礫を含む　炭を含む



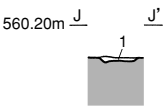
70−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



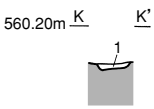
70−3号
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
径2～3㎜の砂礫を多く含む
2 10YR3/3暗褐色シルト　砂礫を含む
径1㎝程度の礫を少量含む
3 10YR3/3暗褐色シルト
径2～3㎜の砂礫を少量含む　炭を含む
4 10YR2/3黒褐色砂質シルト
径2～3㎜の砂礫を少量含む　炭を含む



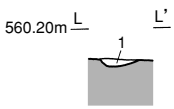
70−4号
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を含む
2　10YR3/3暗褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を多く含む
径2～3㎝の礫を少量含む
3　10YR2/3黒褐色砂質シルト
4　10YR2/3黒褐色砂質シルト　径1～2㎜の砂を少量含む
5　10YR3/2黒褐色砂質シルト 径1～2㎜の砂を少量含む
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト　炭を含む



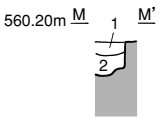
71−1号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む



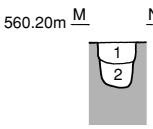
71−2号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む



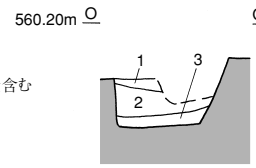
71−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



125−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む
大きめ(一辺1㎝)の炭を多く含む
2 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む
炭を含む



125−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　大きめの炭を少量含む
2 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む

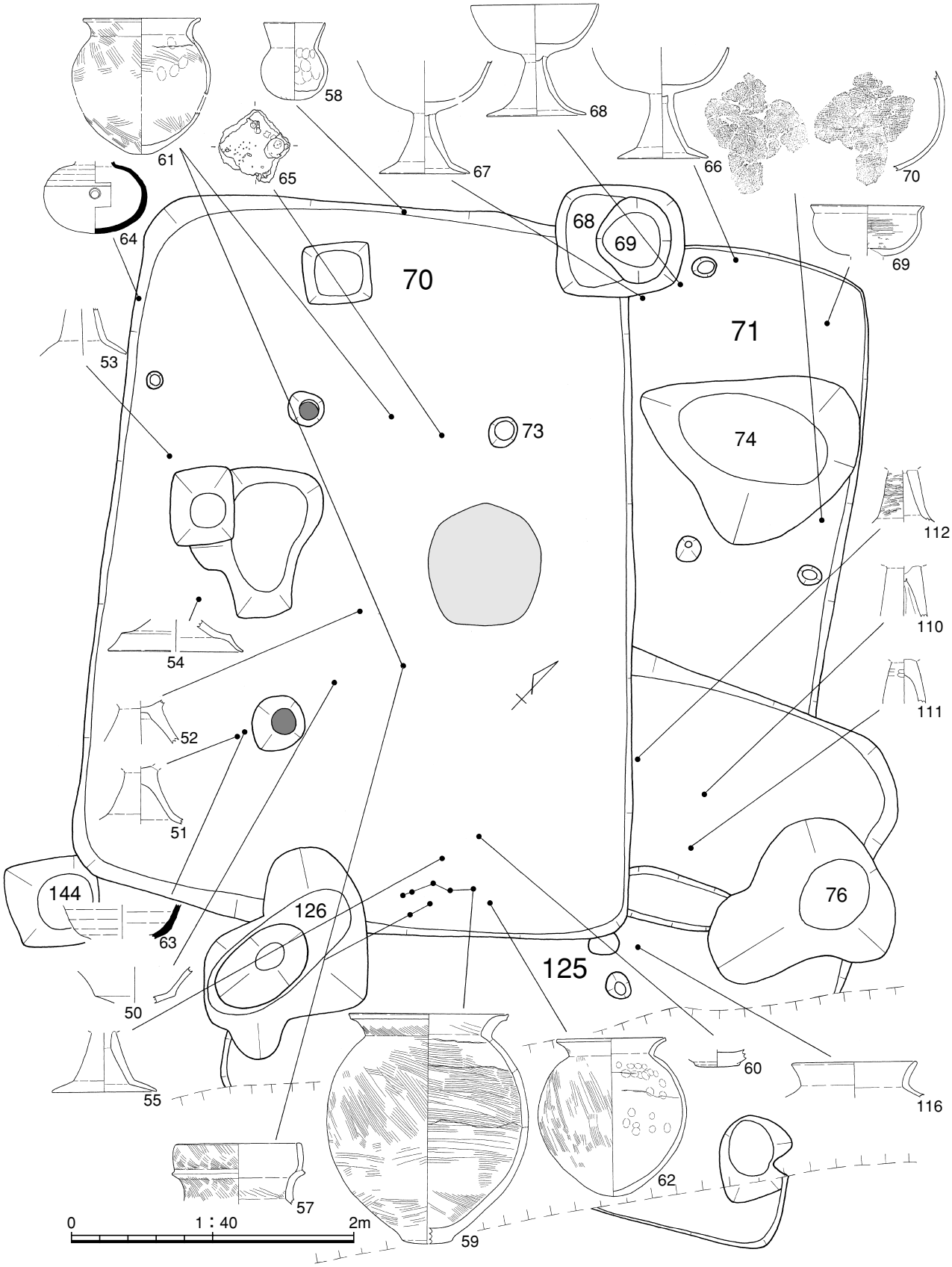


125−4号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
3 10YR3/3暗褐色砂質シルト　炭を含む

0　1：40　2m

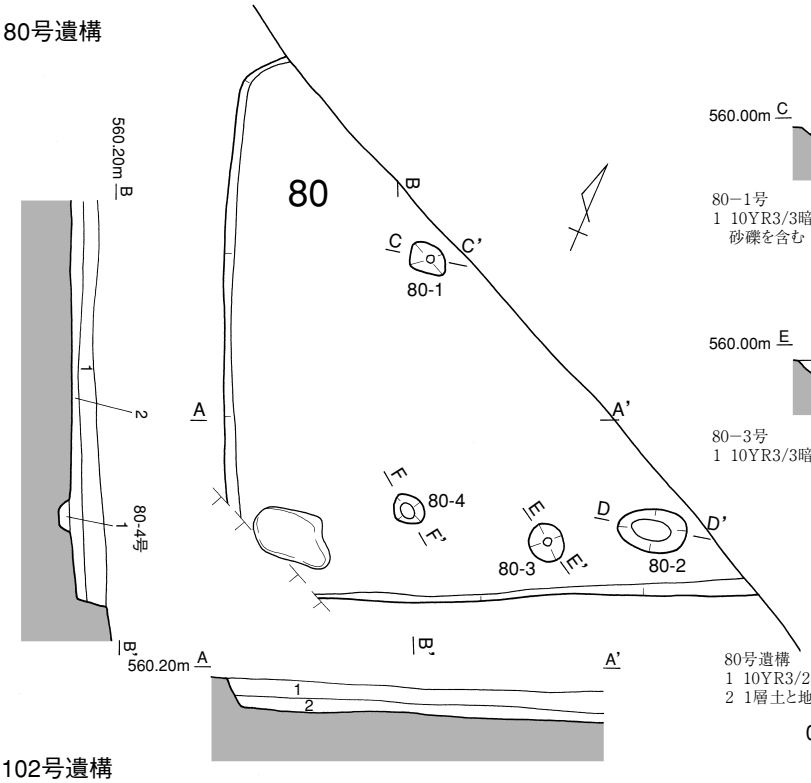
第29図　竪穴建物跡（70・71・125号遺構）（2）

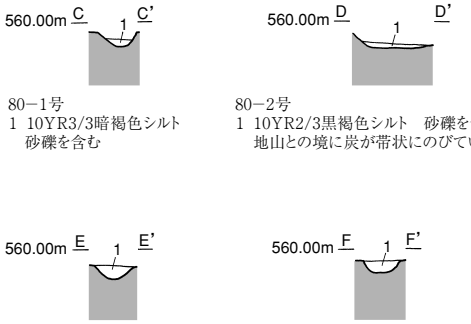
遺物出土状況（70号・71号・125号遺構）



第30図　竪穴建物跡（70・71・125号遺構）（3）

80号遺構





80−1号
1 10YR3/3暗褐色シルト
砂礫を含む

80−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む
地山との境に炭が帯状にのびている

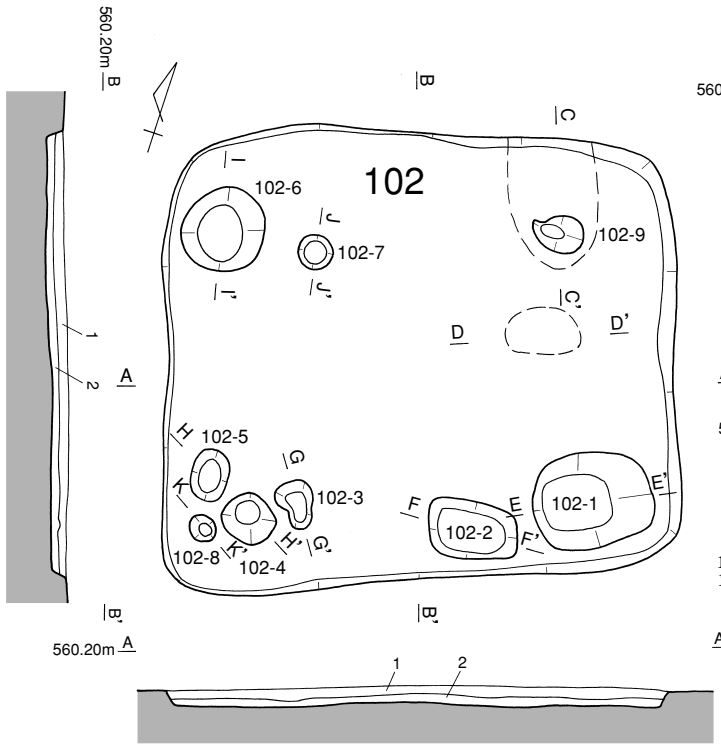
80−3号
1 10YR3/3暗褐色シルト礫混じり砂

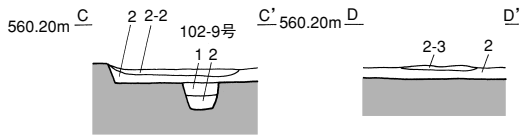
80−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む

80号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
2 1層土と地山土（Ⅵ層）の混合

0　1：40　2m

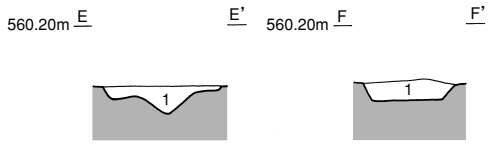
102号遺構





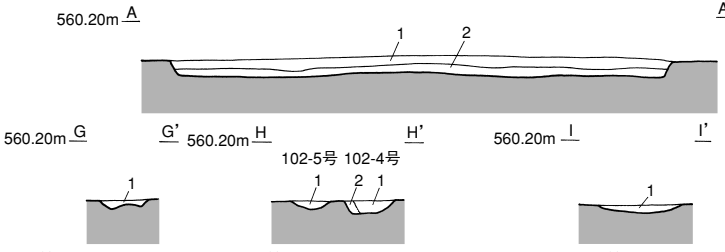
102号遺構
1 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を含む　炭を含む
2 10YR3/2黒褐色砂質シルト　鉄分を含む
2-2 10YR3/2黒褐色砂質シルト
7.5YR5/4にぶい褐色被熱シルトを含む　しまり非常に強い
2-3 10YR3/2黒褐色シルト　7.5YR6/4にぶい橙色被熱シルトを含む
炭を含む　しまり非常に強い

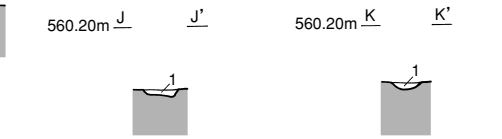
102−9号
1 10YR2/3黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色礫混じり砂の混合
2 10YR3/3暗褐色礫混じり砂



102−1号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂の混合
炭を含む

102−2号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR2/3黒褐色礫混じり砂の混合
炭を含む





102−3号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂
の混合　炭を含む

102−4号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂の混合　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　炭を含む

102−5号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂の混合　炭を含む

102−6号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂の
混合　炭を含む

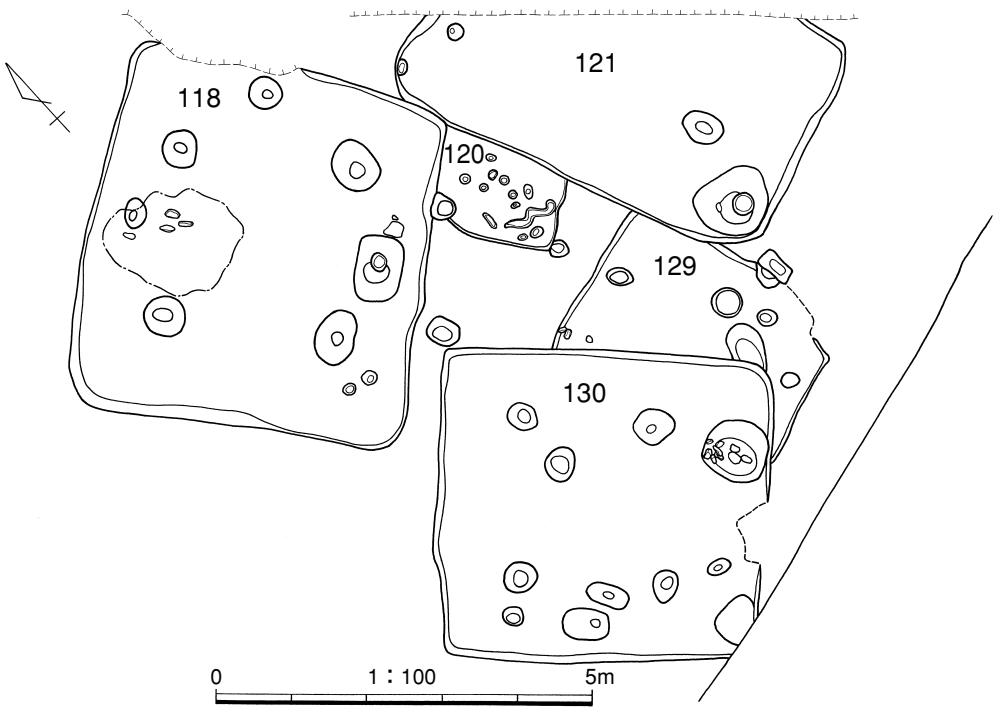
102−7号
1 10YR2/3黒褐色シルトと
10YR3/3暗褐色礫混じり砂の混合

102−8号
1 10YR3/3暗褐色礫混じり砂

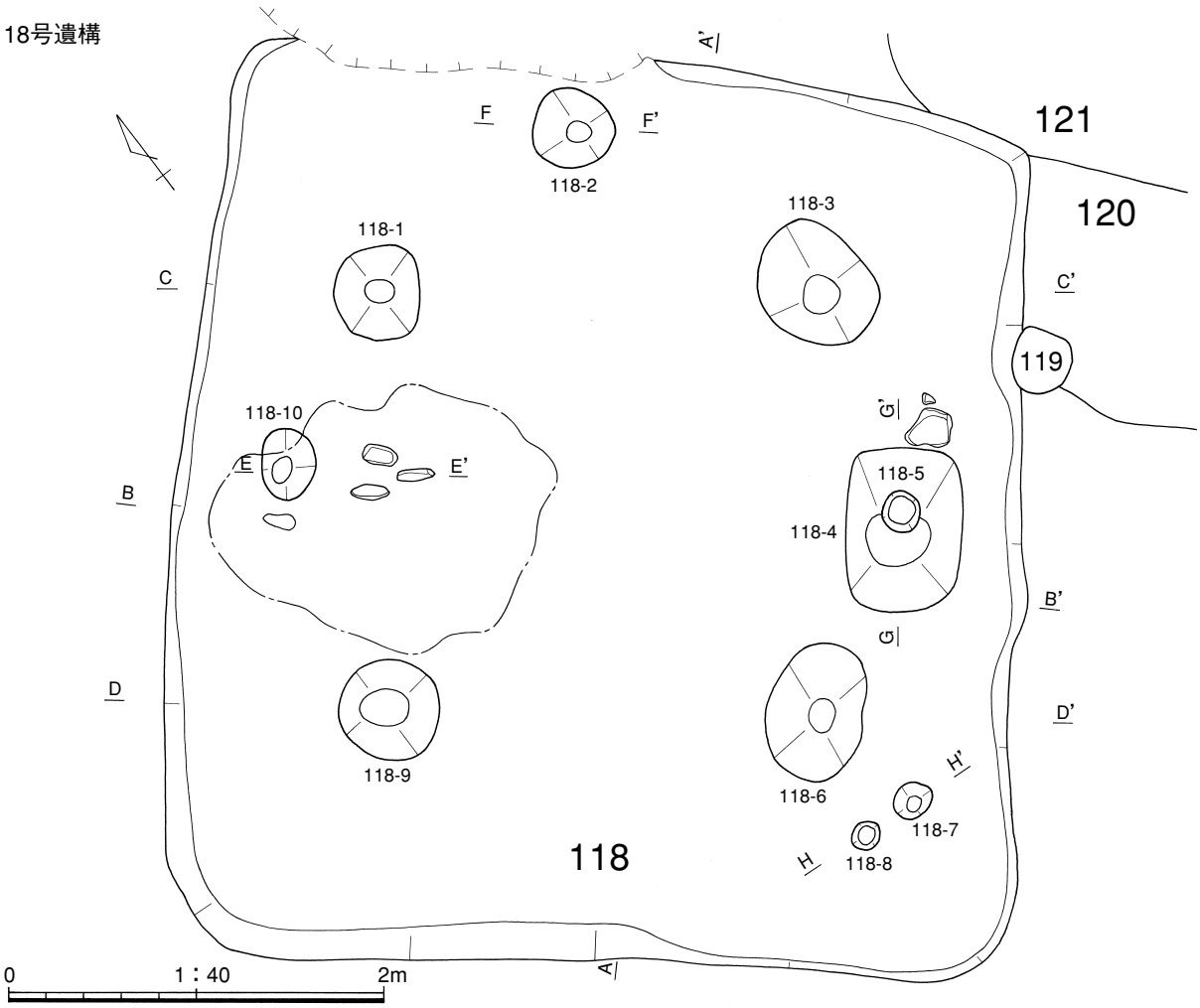
0　1：40　2m

第31図　竪穴建物跡（80・102号遺構）

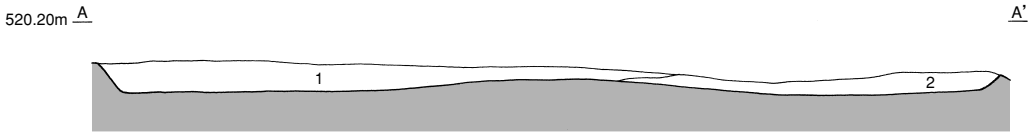
118号遺構
120号遺構
121号遺構
129号遺構
130号遺構

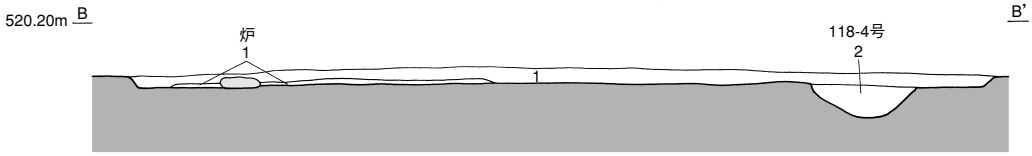


118号遺構

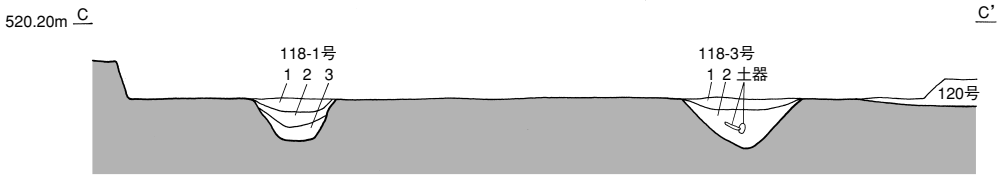


第32図　竪穴建物跡（118・120・121・129・130号遺構）、竪穴建物跡（118号遺構）（1）





118号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を含む　炭を含む
2 10YR3/4暗褐色砂質シルト　径3㎜程度までの砂礫を含む　炭を含む

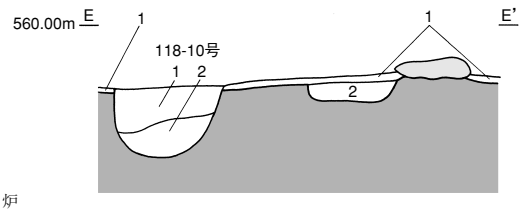


118−1号
1 10YR2/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を多く含む　炭を含む　鉄分を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む　炭を含む
3 10YR3/2黒褐色シルト･礫混じり砂　鉄分を含む

118−3号
1 10YR2/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を多く含む　鉄分を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む

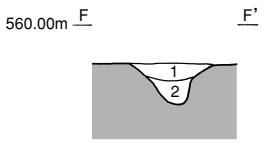
118−9号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を多く含む　鉄分を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む　地山土を含む　鉄分を含む

118−6号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を多く含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む



炉
1 炭　焼土を含む
2 7.5YR6/8橙色被熱シルト　地山が被熱変色したもの

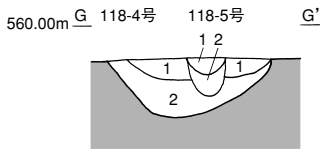
118−10号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　しまり非常に強い
2 10YR3/2黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を少量含む　地山土を少量含む



118−2号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む　炭を含む　鉄分を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む　鉄分を含む

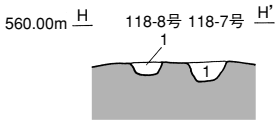
0　1：20　1m

（炉・118-10号）



118−4号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を多く含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　径3㎜程度の礫を含む　炭を含む

118−5号
1 10YR4/2灰黄褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む
2 10YR3/1黒褐色シルトと1層土の混合　炭を含む



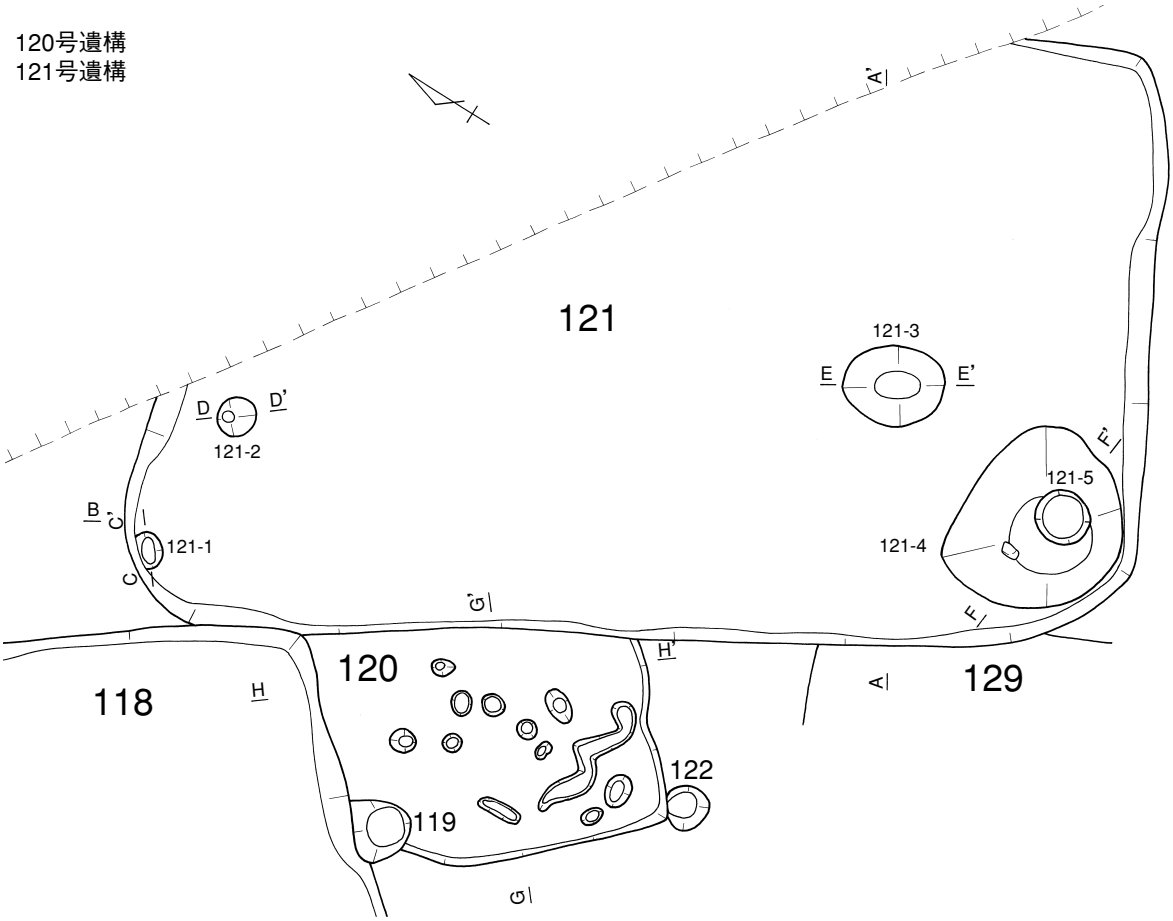
118−7号
1 10YR4/2灰黄褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む

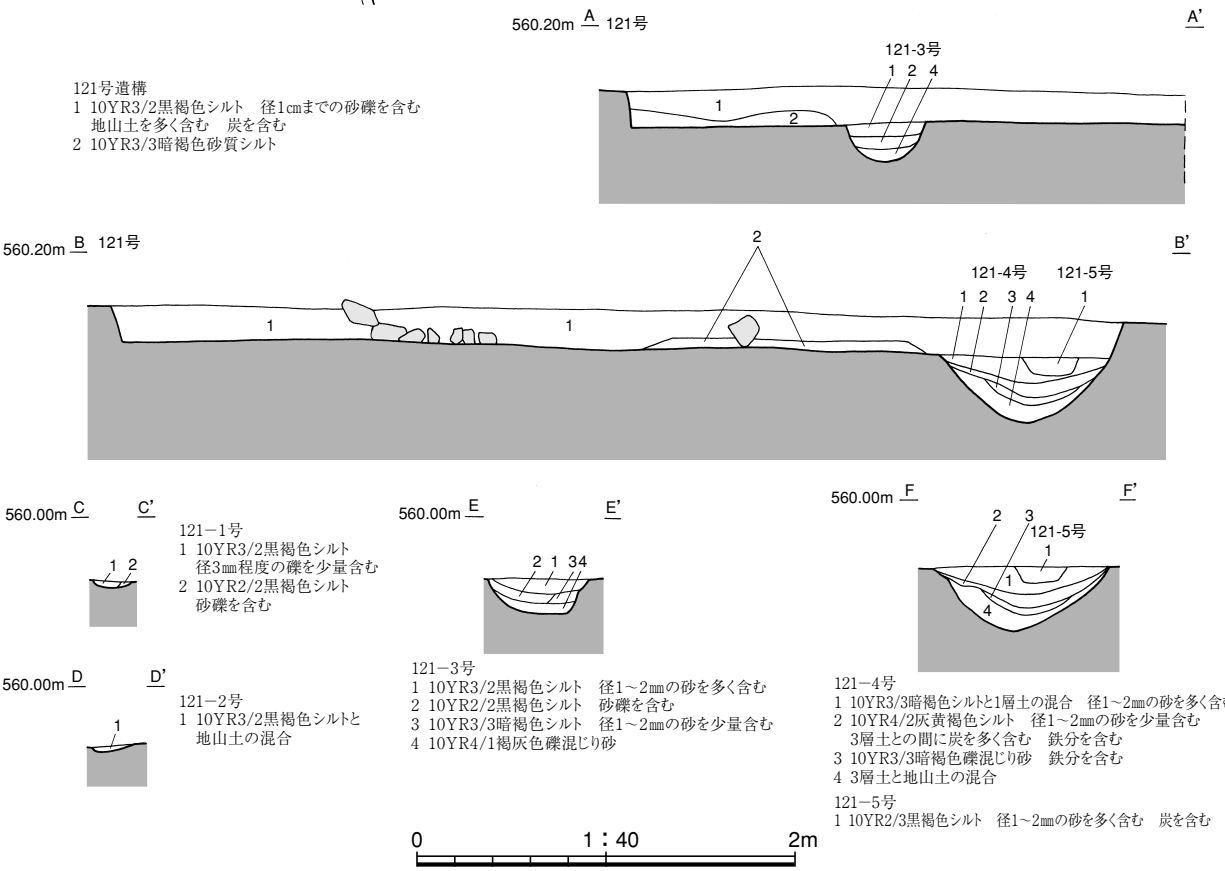
118−8号
1 10YR4/2灰黄褐色シルト　砂礫を含む

0　1：40　2m

第33図　竪穴建物跡（118号遺構）（2）

120号遺構
121号遺構





121号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径1cmまでの砂礫を含む
　地山土を多く含む　炭を含む
2 10YR3/3暗褐色砂質シルト

121−1号
1 10YR3/2黒褐色シルト
　径3mm程度の礫を少量含む
2 10YR2/2黒褐色シルト
　砂礫を含む

121−2号
1 10YR3/2黒褐色シルトと
　地山土の混合

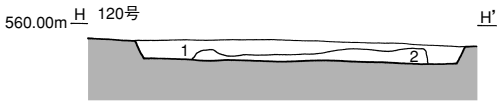
121−3号
1 10YR3/2黒褐色シルト　径1～2mmの砂を多く含む
2 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む
3 10YR3/3暗褐色シルト　径1～2mmの砂を少量含む
4 10YR4/1褐灰色礫混じり砂

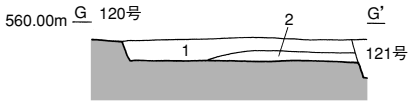
121−4号
1 10YR3/3暗褐色シルトと1層土の混合　径1～2mmの砂を多く含む
2 10YR4/2灰黄褐色シルト　径1～2mmの砂を少量含む
　3層土との間に炭を多く含む　鉄分を含む
3 10YR3/3暗褐色礫混じり砂　鉄分を含む
4 3層土と地山土の混合

121−5号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2mmの砂を多く含む　炭を含む

0　1：40　2m

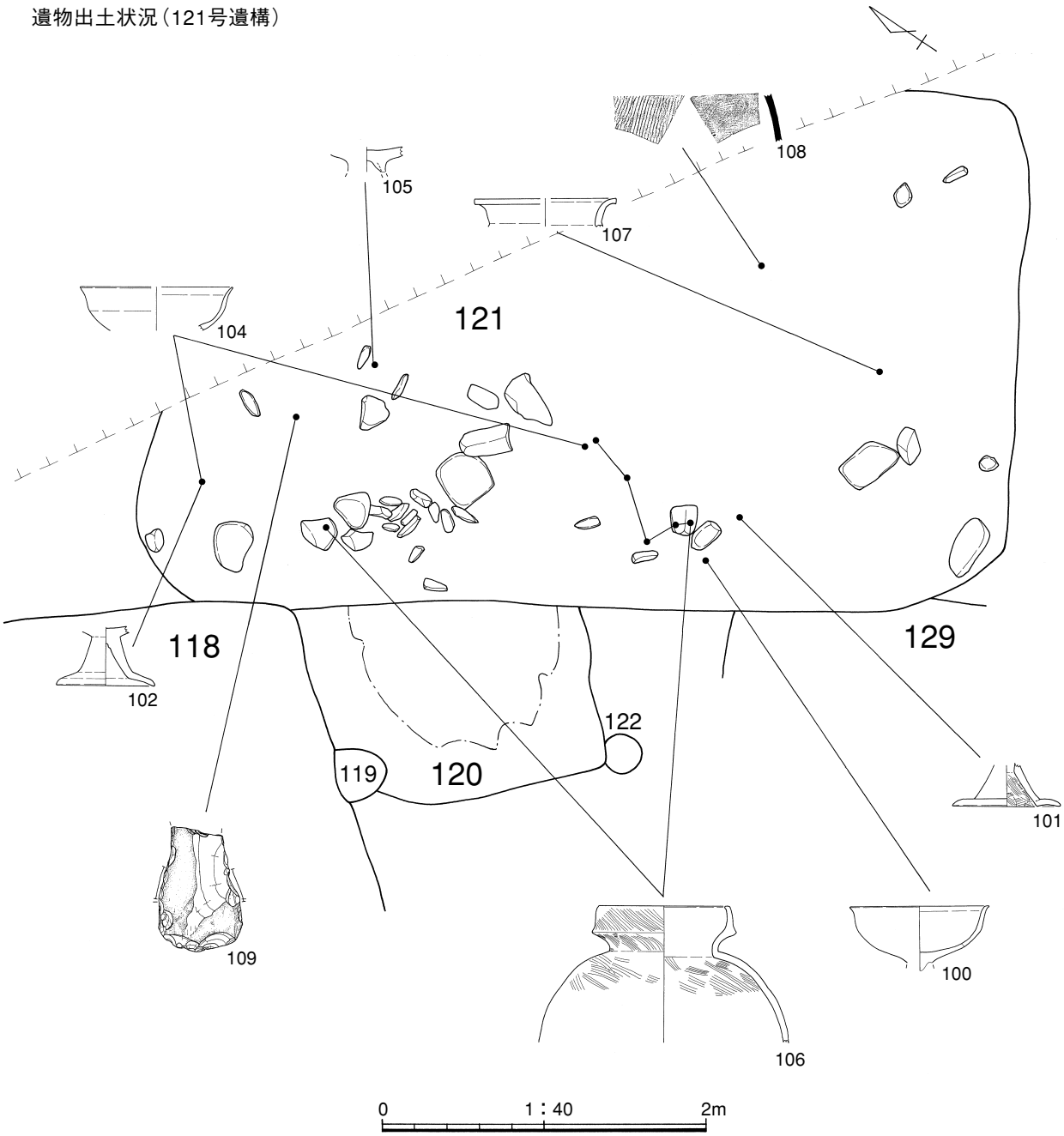
第34図　竪穴建物跡（120・121号遺構）（1）





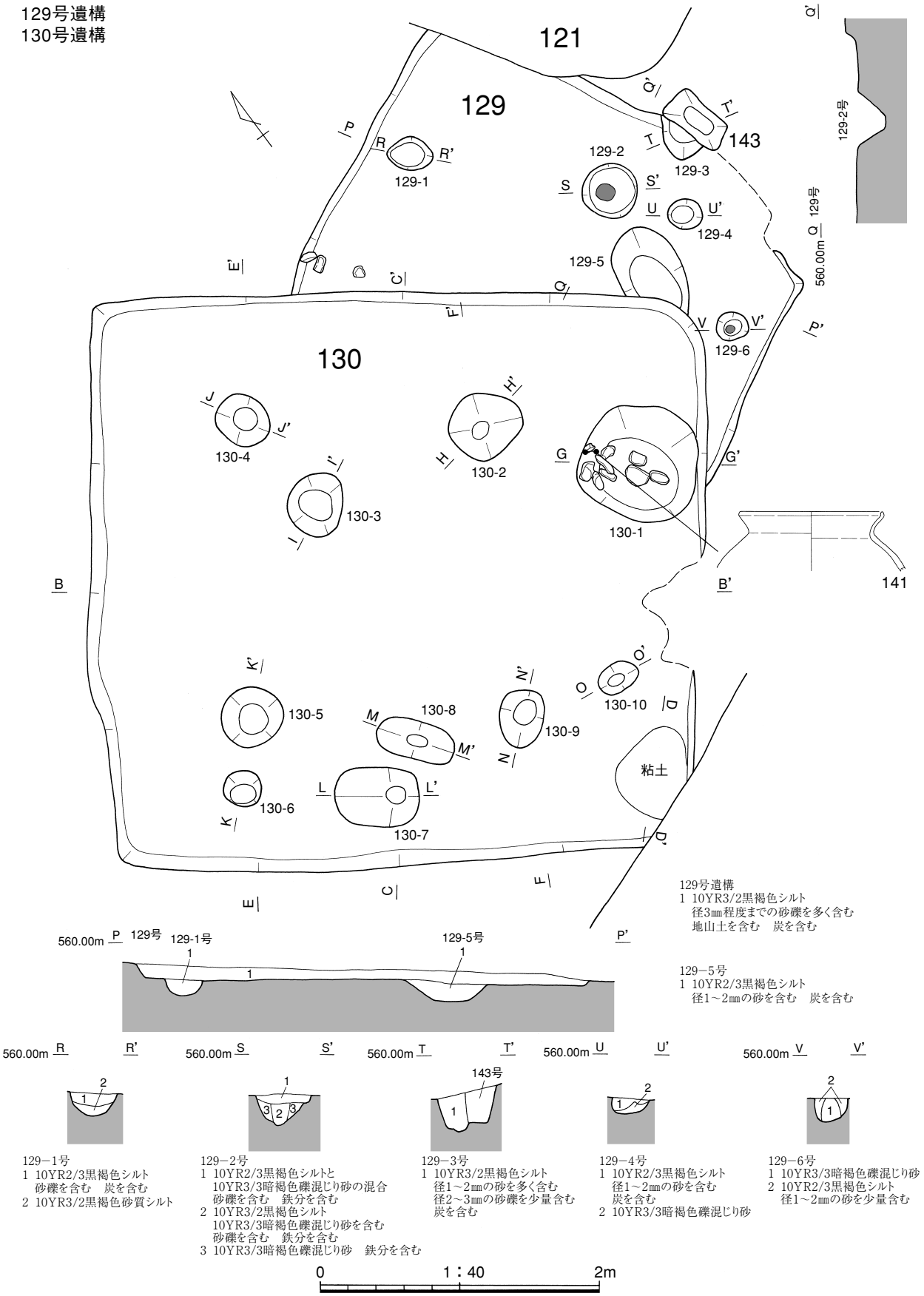
120号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径3㎜程度までの砂礫を多く含む　炭を含む
2 炭

遺物出土状況（121号遺構）

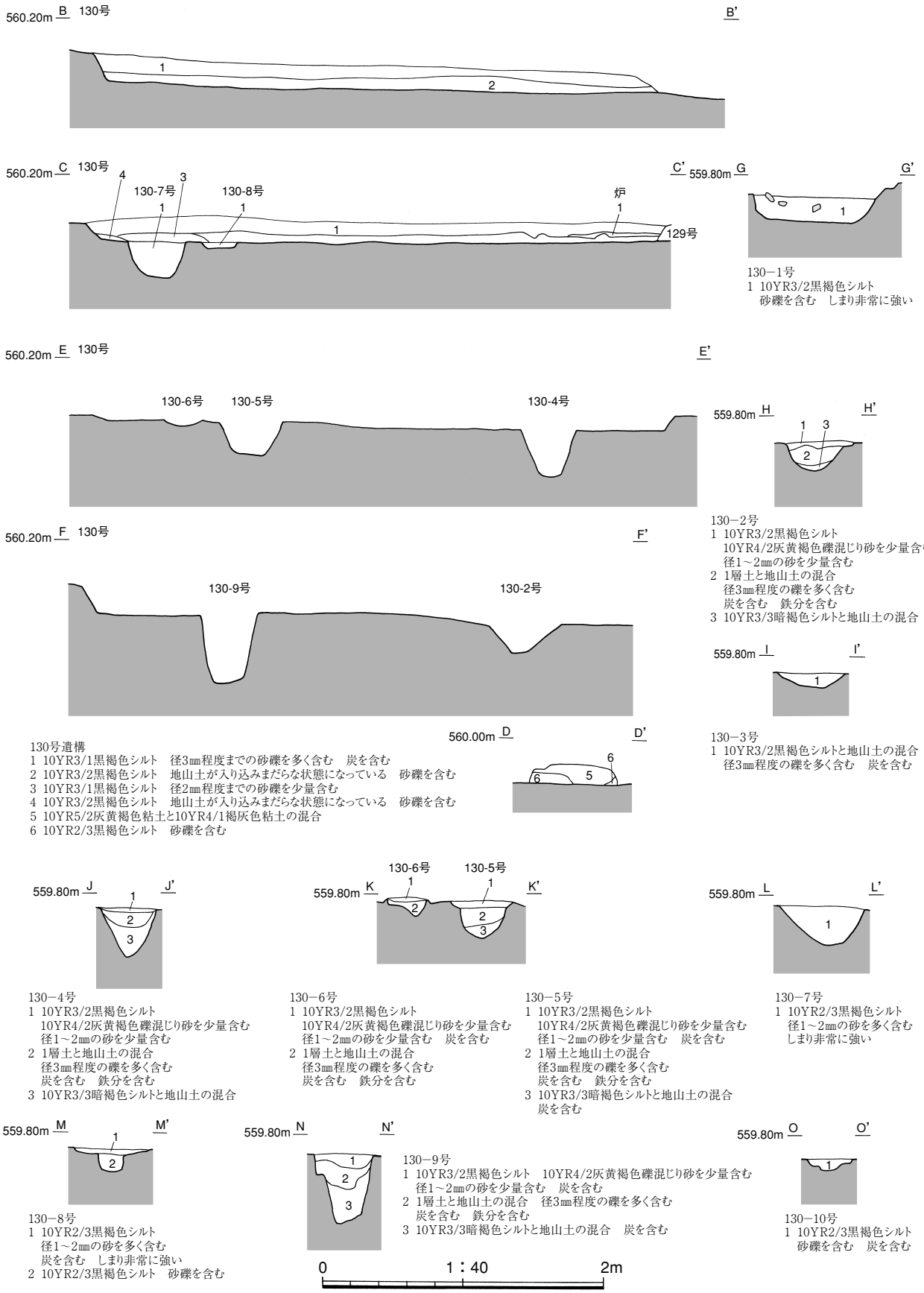


第35図　竪穴建物跡（120・121号遺構）（2）

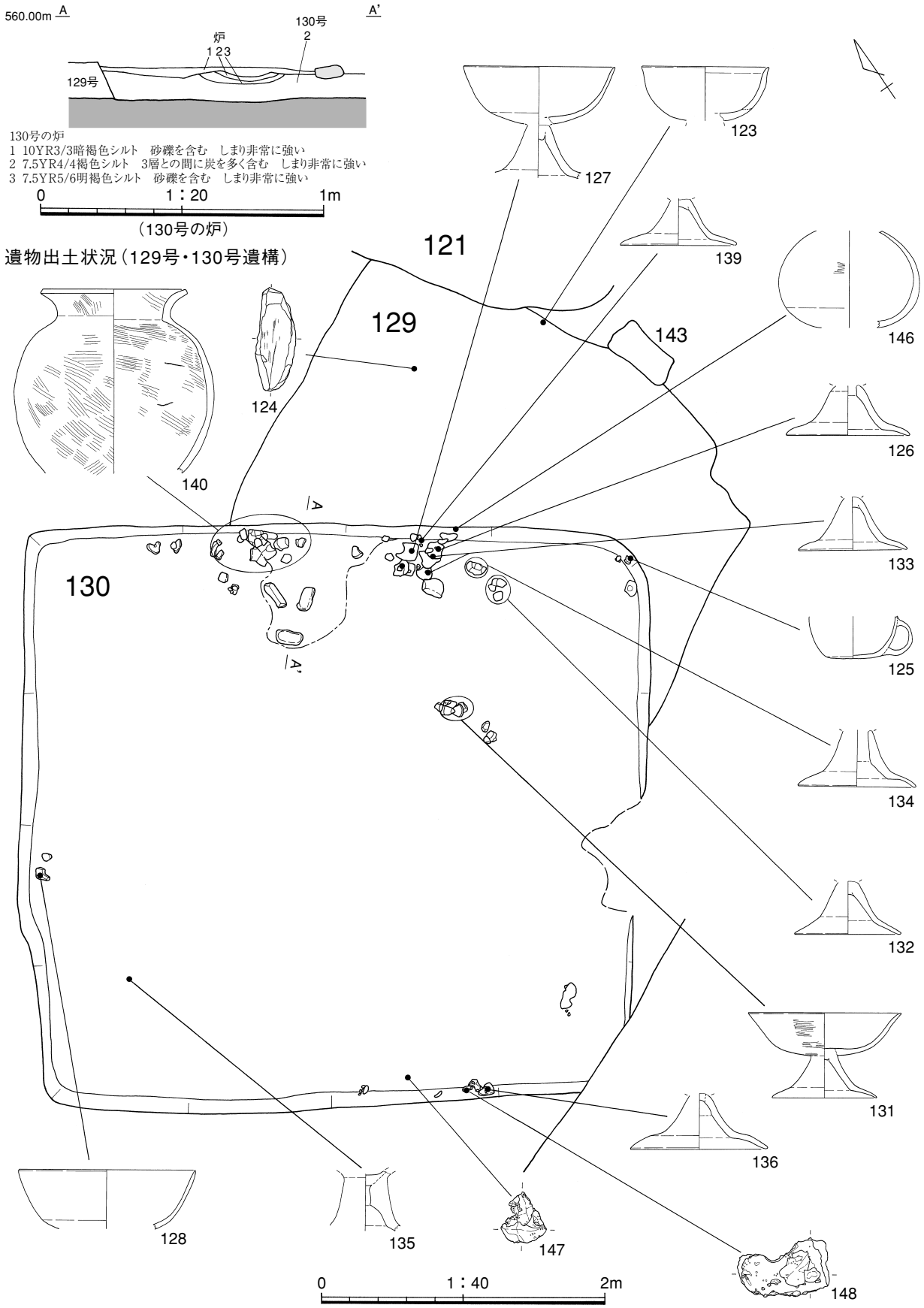
129号遺構
130号遺構



第36図　竪穴建物跡（129・130号遺構）（1）

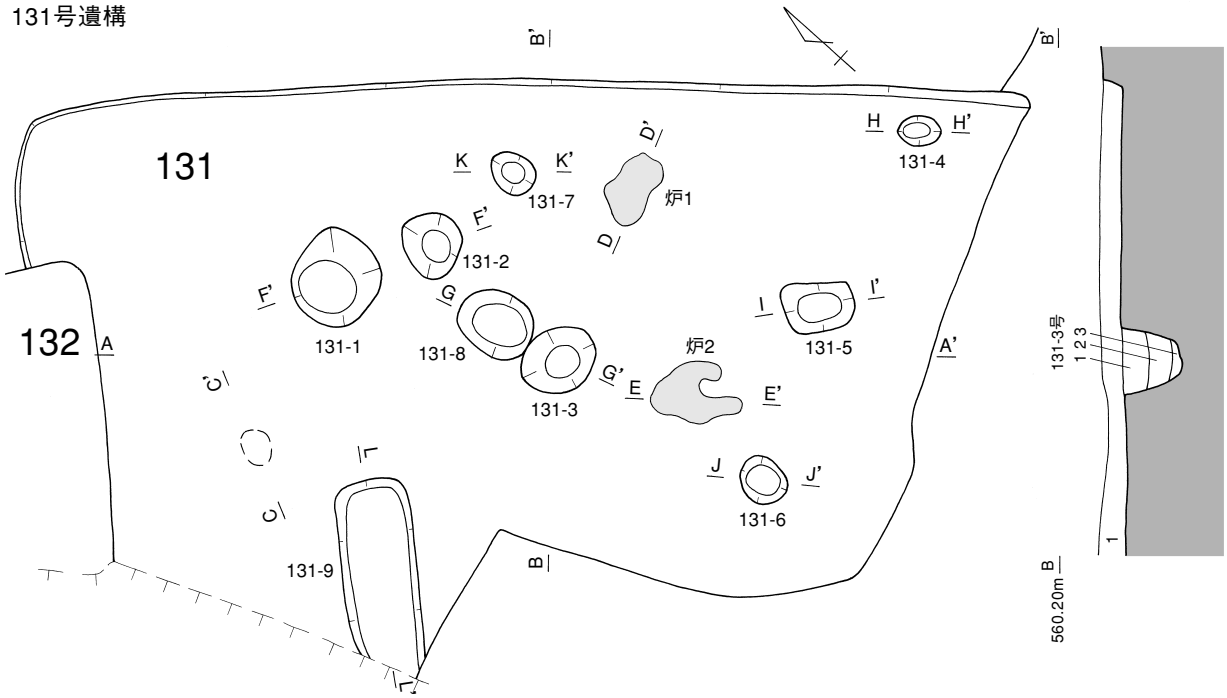


第37図　竪穴建物跡（129・130号遺構）（2）

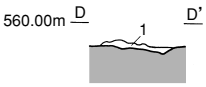


第38図　竪穴建物跡（129・130号遺構）（3）

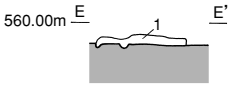
131号遺構



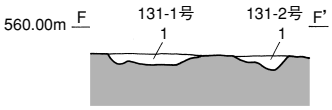
131号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む　地山土を含む　炭を含む
1-2 7.5YR6/6橙色シルト　しまり非常に強い



炉1
1 7.5YR6/6橙色シルト　しまり非常に強い

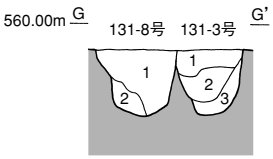


炉2
1 7.5YR5/6明褐色粘質シルト



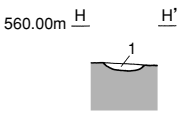
131−1号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　地山土を含む

131−2号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　地山土を含む

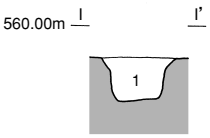


131−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　地山土を含む
3 10YR4/2灰黄褐色礫混じり砂に2層土を少量含む

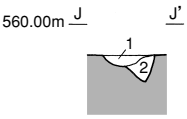
131−8号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　地山土を含む



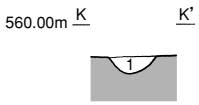
131−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む



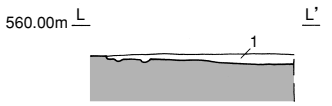
131−5号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む



131−6号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む
2 1層土に地山土を含む



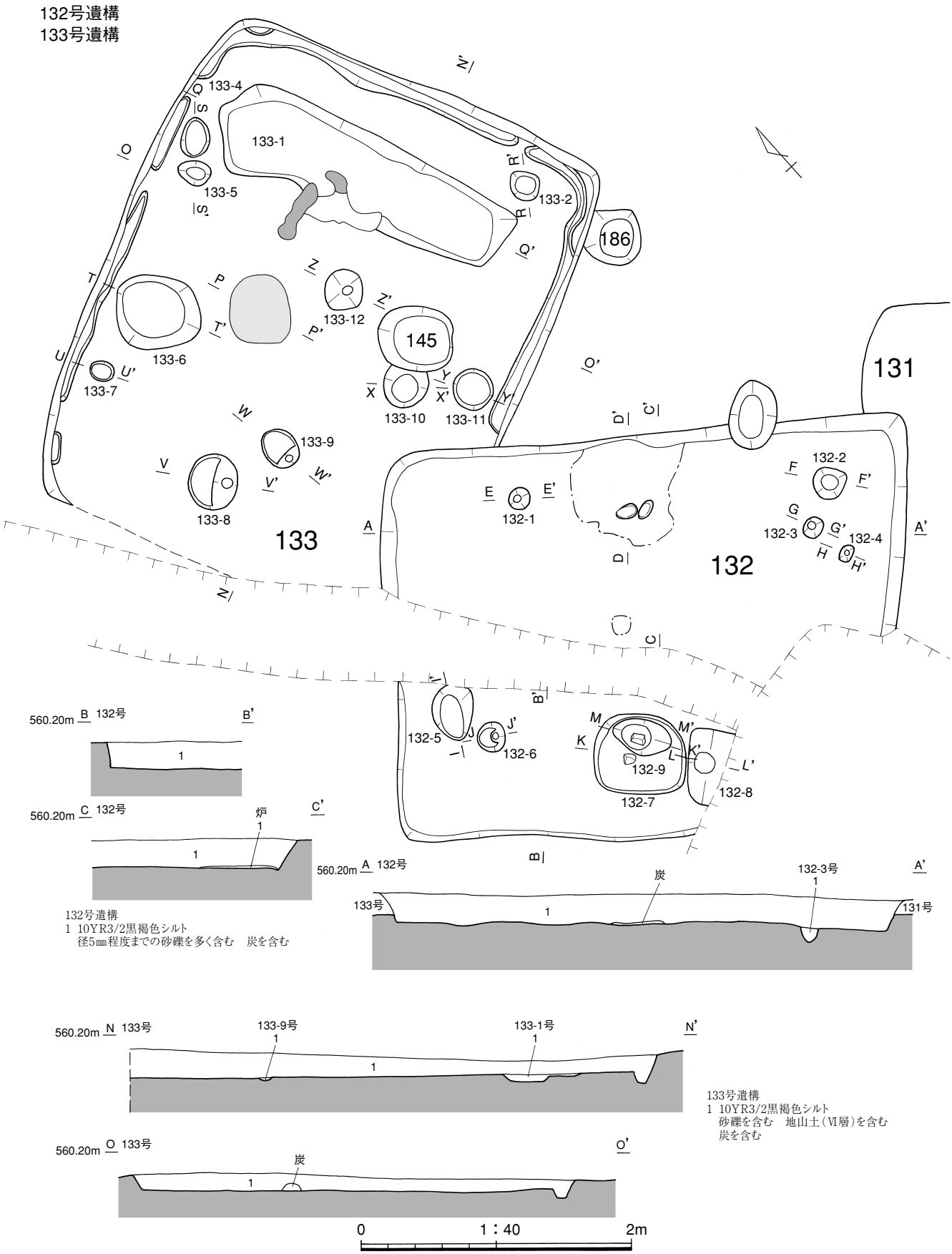
131−7号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　地山土を含む



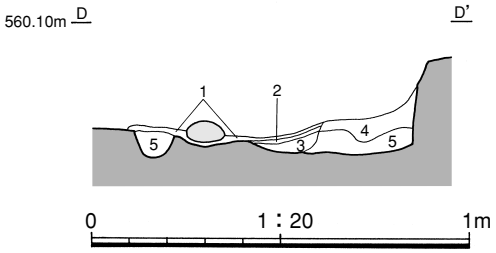
131−9号
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む
地山土を含む

0　1：40　2m

第39図　竪穴建物跡（131号遺構）

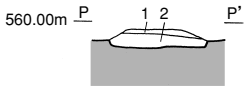


第40図　竪穴建物跡（132・133号遺構）（1）

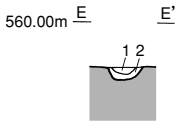


（132号の炉・133号の炉）

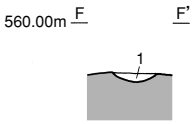
132号の炉
1 炭　焼土を含む
2 7.5YR4/4褐色被熱シルト
3 10YR3/2黒褐色シルト　やや被熱
4 10YR3/1黒褐色シルト　炭を多く含む
5 10YR4/2灰黄褐色礫混じり砂　炭を含む



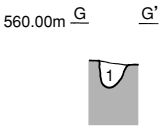
133号の炉
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む
2 7.5YR6/6橙色シルト
被熱し変色した砂礫を含む
炭を含む　しまり非常に強い



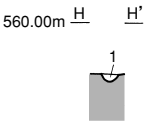
132−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む
地山土を一部含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を含む



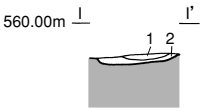
132−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む



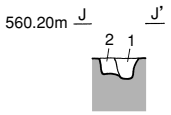
132−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　地山土を含む



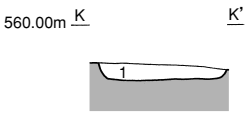
132−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　地山土を含む



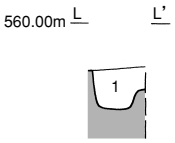
132−5号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
地山土を少量含む
2 10YR3/4暗褐色シルト
砂礫を含む　地山土を少量含む



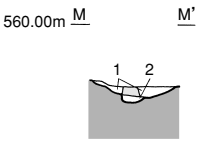
132−6号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
地山土を少量含む
2 10YR3/4暗褐色シルト
砂礫を含む　地山土を少量含む



132−7号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む　炭を含む

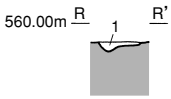


132−8号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む

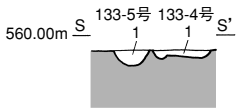


132−9号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む
2 10YR3/3暗褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む

133−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

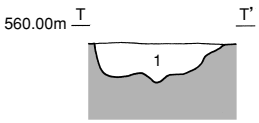


133−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　地山土を含む

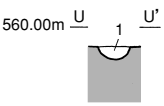


133−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む

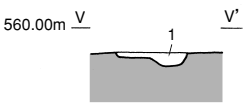
133−5号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



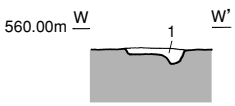
133−6号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む



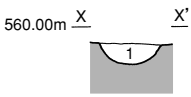
133−7号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



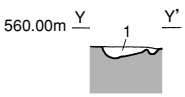
133−8号
1 10YR3/2黒褐色シルトと地山土の混合
砂礫を含む　炭を含む



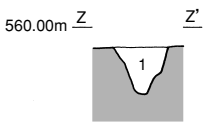
133−9号
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む
地山土を少量含む　炭を含む



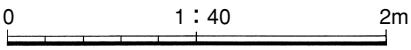
133−10号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



133−11号
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む
地山土を少量含む　炭を含む



133−12号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む　炭を含む



第41図　竪穴建物跡（132・133号遺構）（2）

128号遺構

128号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜程度までの砂礫を含む　炭を含む

128−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

128−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

128−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

128−4号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

128−5号
1 10YR2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

128−6号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む

128−7号
1 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を多く含む　炭を含む
2 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を含む

128−8号
1 10YR2/3黒褐色シルト
砂礫を多く含む

162号遺構

162号遺構
1 10YR2/3黒褐色シルト 径1～2㎜の砂を多く含む 炭を含む
1-2 10YR4/4褐色被熱シルト　しまり非常に強い
2 炭

162−1号
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 1層土と10YR3/2黒褐色粘質シルトの混合
3 10YR2/2黒褐色粘質シルト　径1～2㎜の砂を多く含む
径5～6㎜の礫を少量含む

炉
1 5YR5/8明赤褐色被熱シルト　しまり非常に強い
2 7.5YR3/4暗赤褐色被熱粘質シルト　しまり弱い

162−2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
2 10YR3/2黒褐色シルト
砂礫を含む

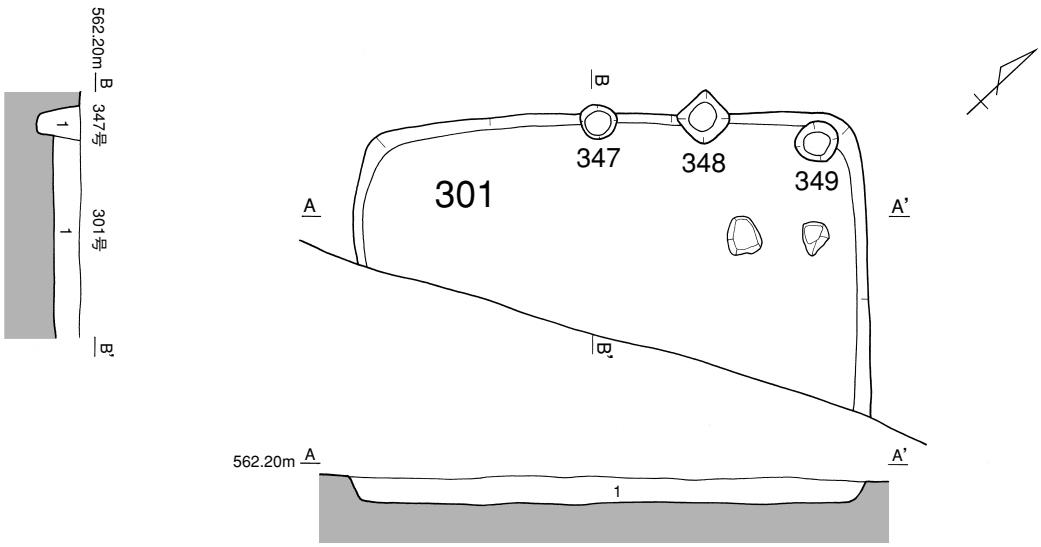
162−3号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
2 10YR2/3黒褐色シルト
白っぽい砂礫を多く含む

162−4号
1 10YR2/3黒褐色粘質シルト
径1～2㎜の砂を多く含む
2 10YR2/3黒褐色粘質シルト
（1層土よりも粘りがある）

162−5号
1 10YR2/3黒褐色粘質シルト
径1～2㎜の砂を少量含む
2 10YR2/2 黒褐色粘質シルト
砂礫を含む

第42図　竪穴建物跡（128・162号遺構）

301号遺構

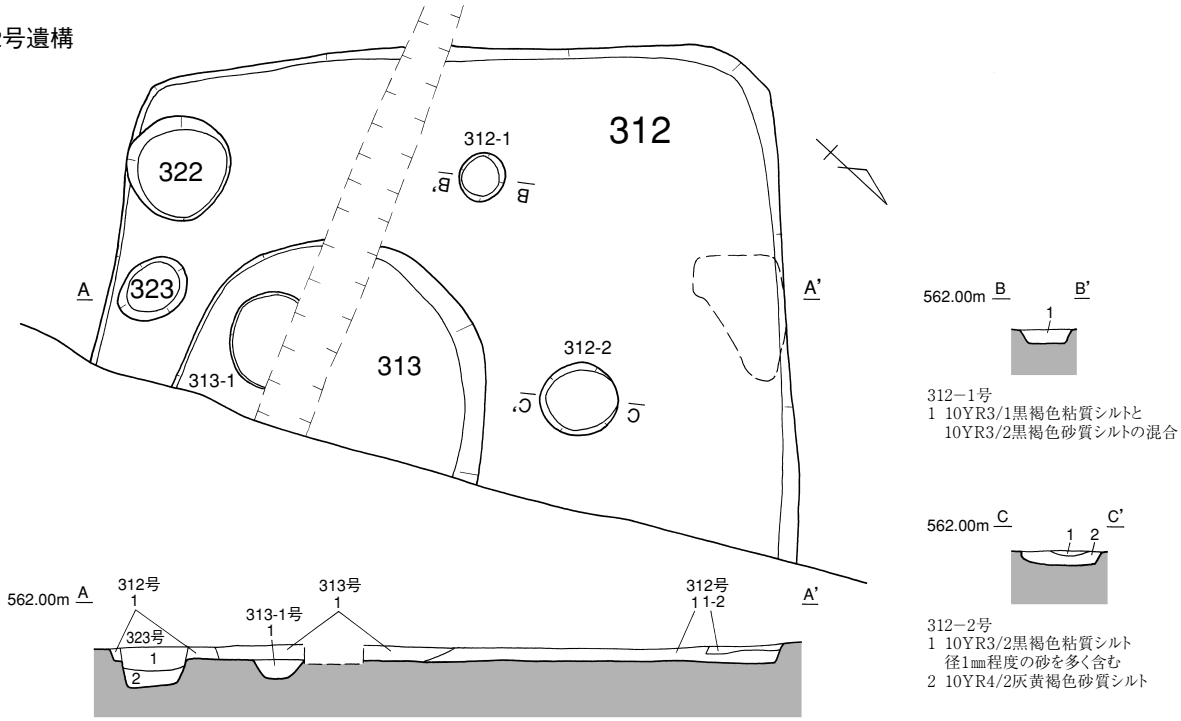


347号遺構
1 10YR2/2黒褐色シルト　砂礫を含む

301号遺構
1 10YR3/1黒褐色砂質シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

0　1：40　2m

312号遺構



312号遺構
1 10YR2/2～10YR2/3黒褐色シルト　径1㎜程度の砂を多く含む
　砂礫を含む　炭を含む　鉄分を含む
1-2 7.5YR5/6明褐色被熱シルト　砂礫を含む

313号遺構
1 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト

313－1号
1 10YR3/1黒褐色粘質シルト
　径1～2㎜の砂を少量含む

323号遺構
1 10YR2/3黒褐色粘質シルト
　径1～2㎜の砂を多く含む
2 10YR3/2黒褐色砂質シルト

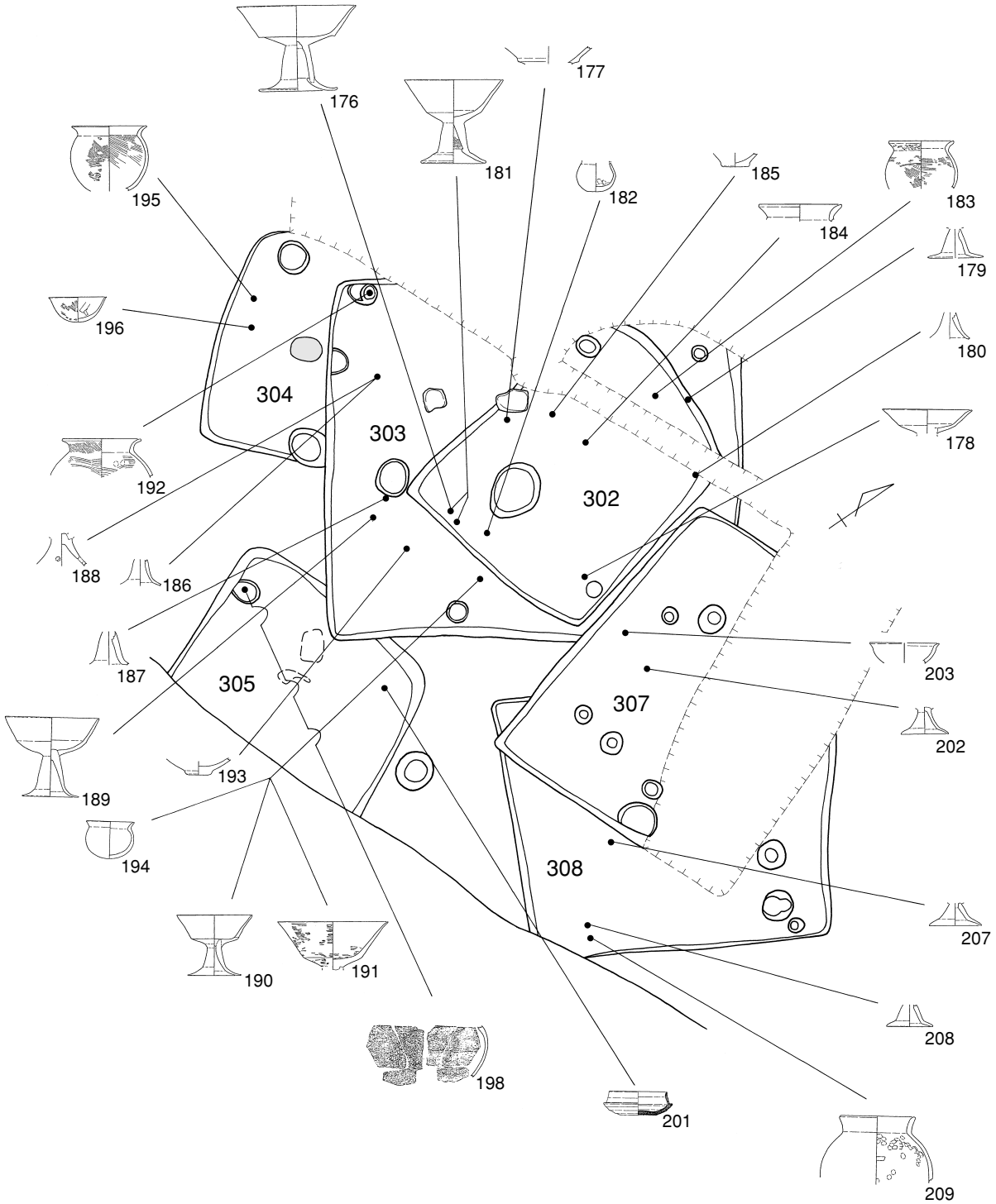
312－1号
1 10YR3/1黒褐色粘質シルトと
　10YR3/2黒褐色砂質シルトの混合

312－2号
1 10YR3/2黒褐色粘質シルト
　径1㎜程度の砂を多く含む
2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト

0　1：40　2m

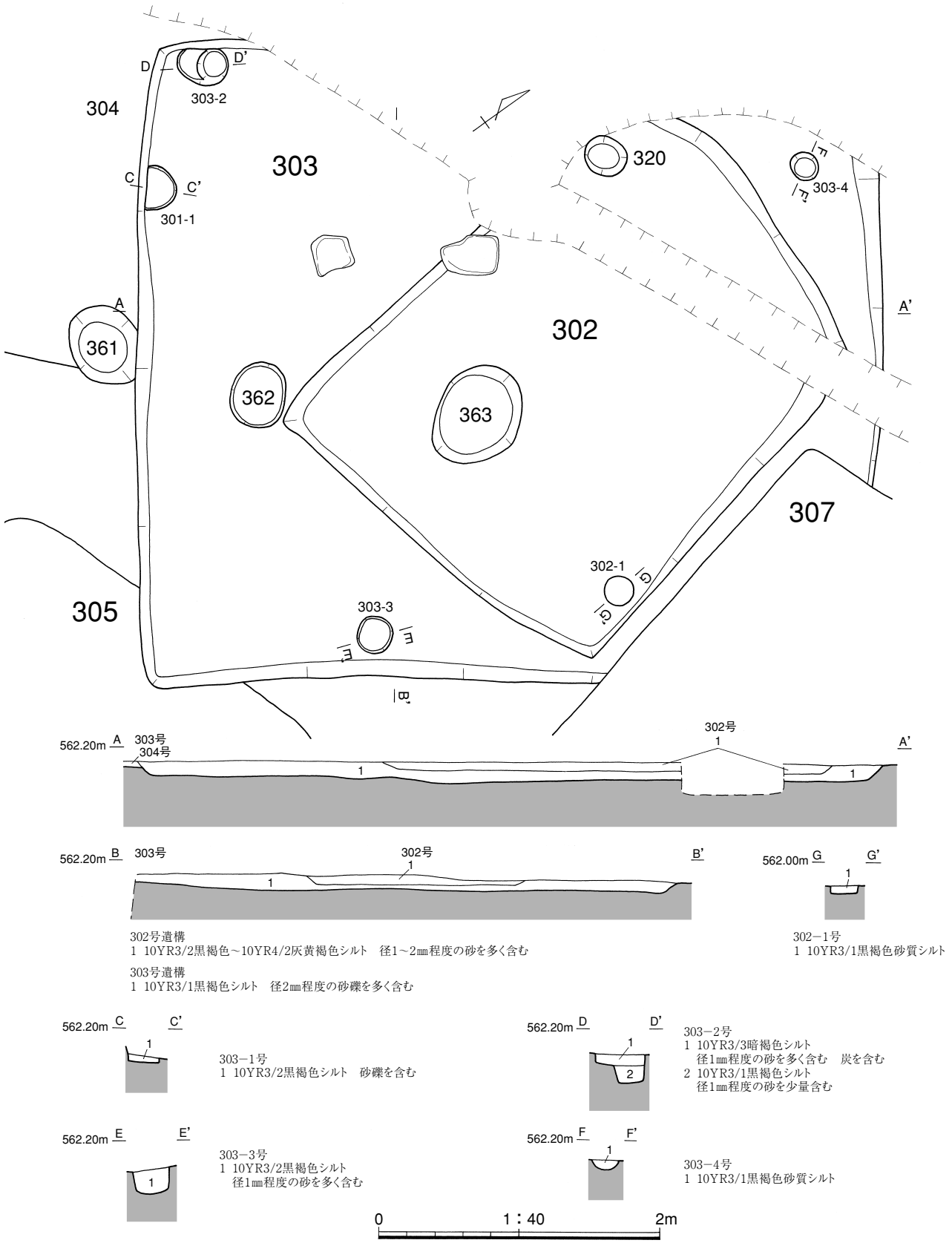
第43図　竪穴建物跡（301・312号遺構）

遺物出土状況（302～305・307・308号遺構）



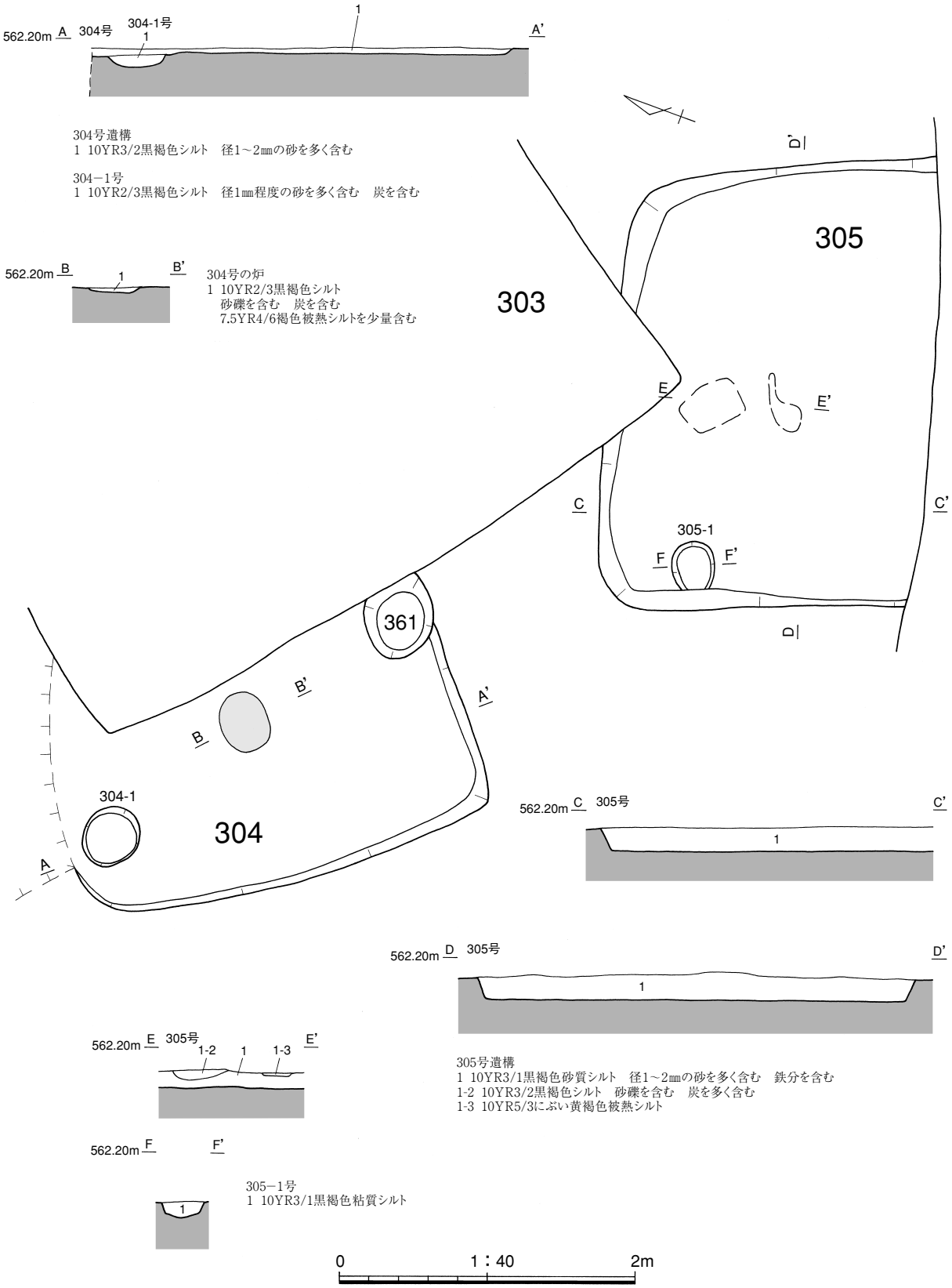
第44図　遺物出土状況（302～305・307・308号遺構）

302号遺構
303号遺構

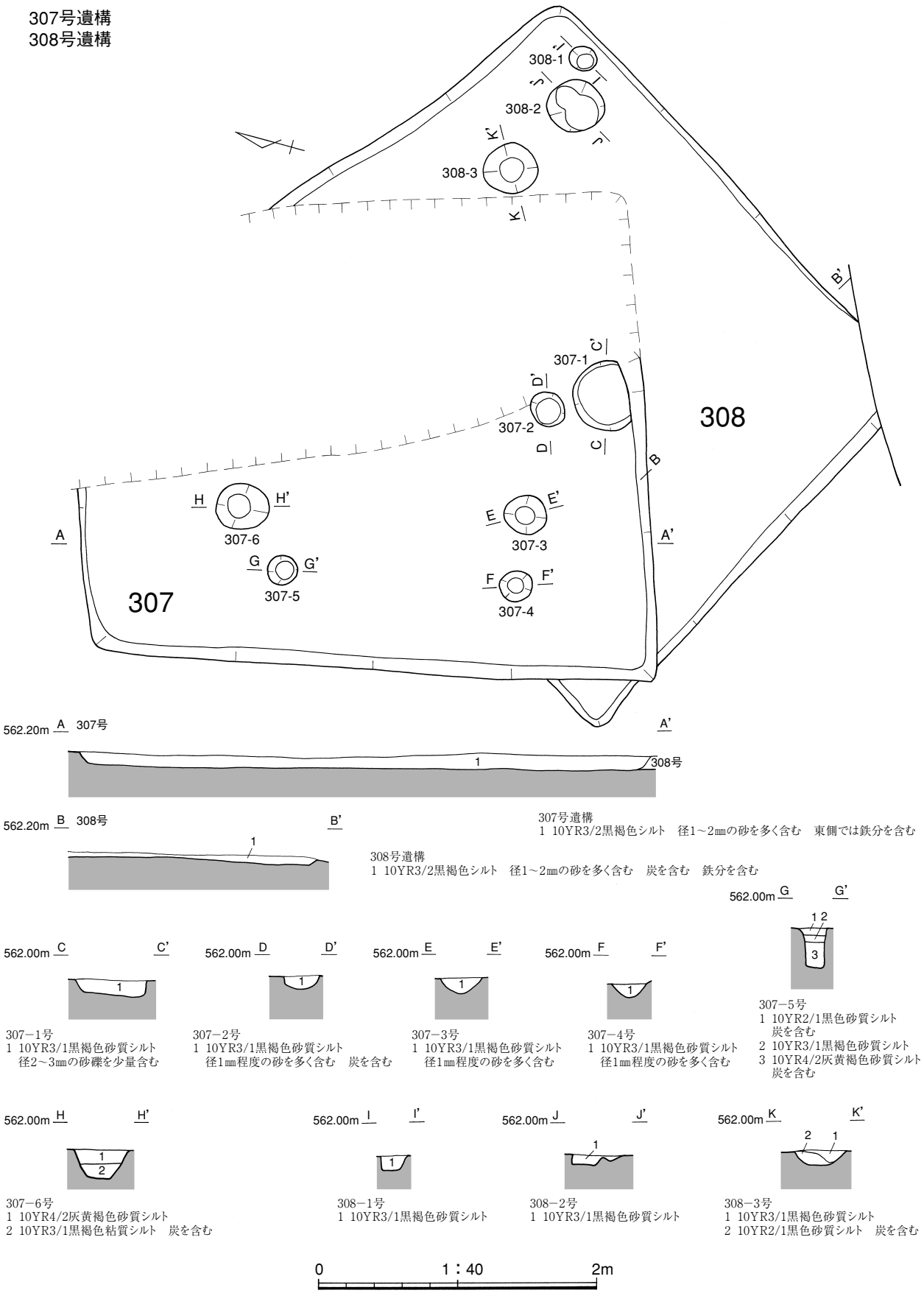


第45図　竪穴建物跡（302・303号遺構）

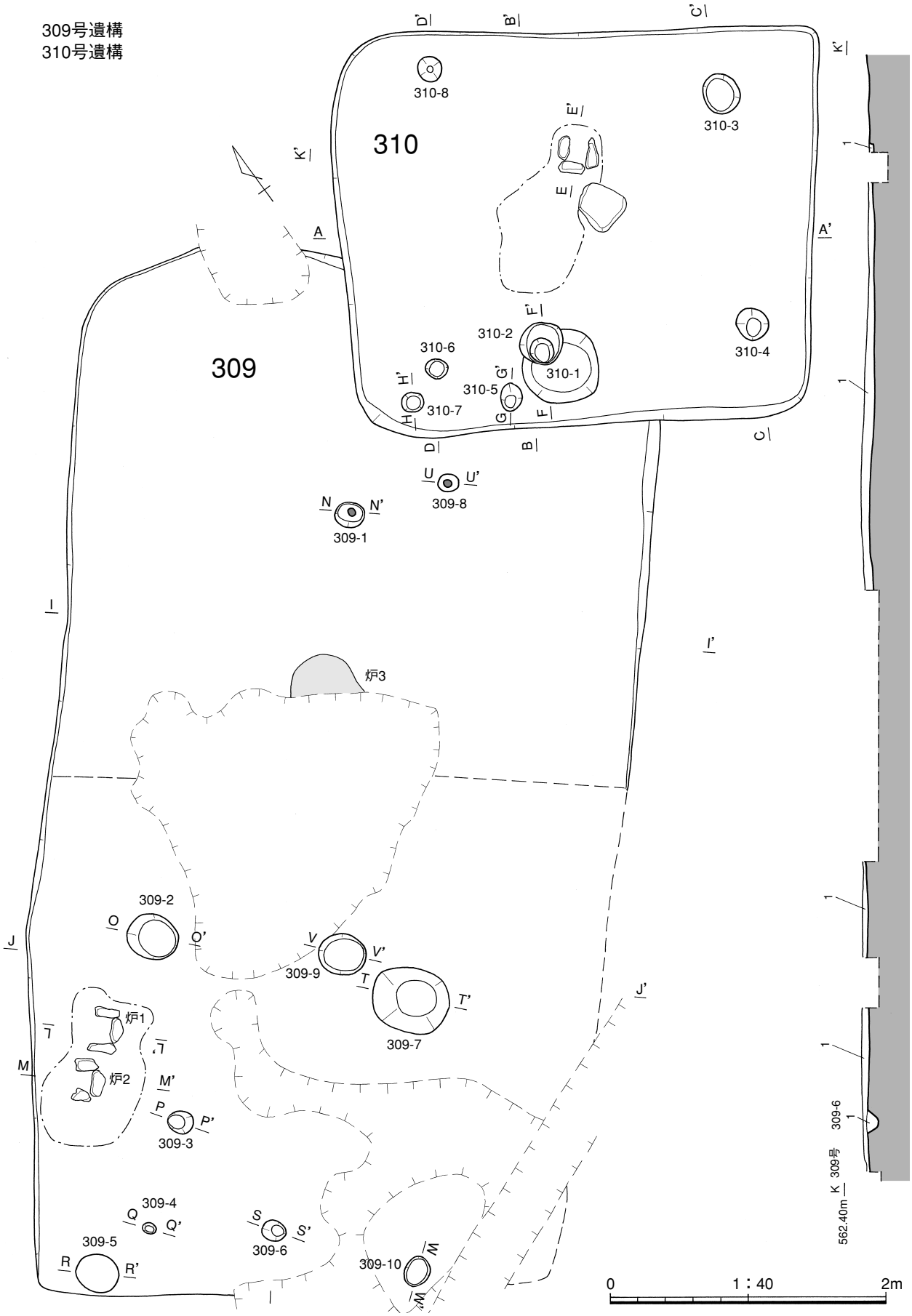
304号遺構
305号遺構



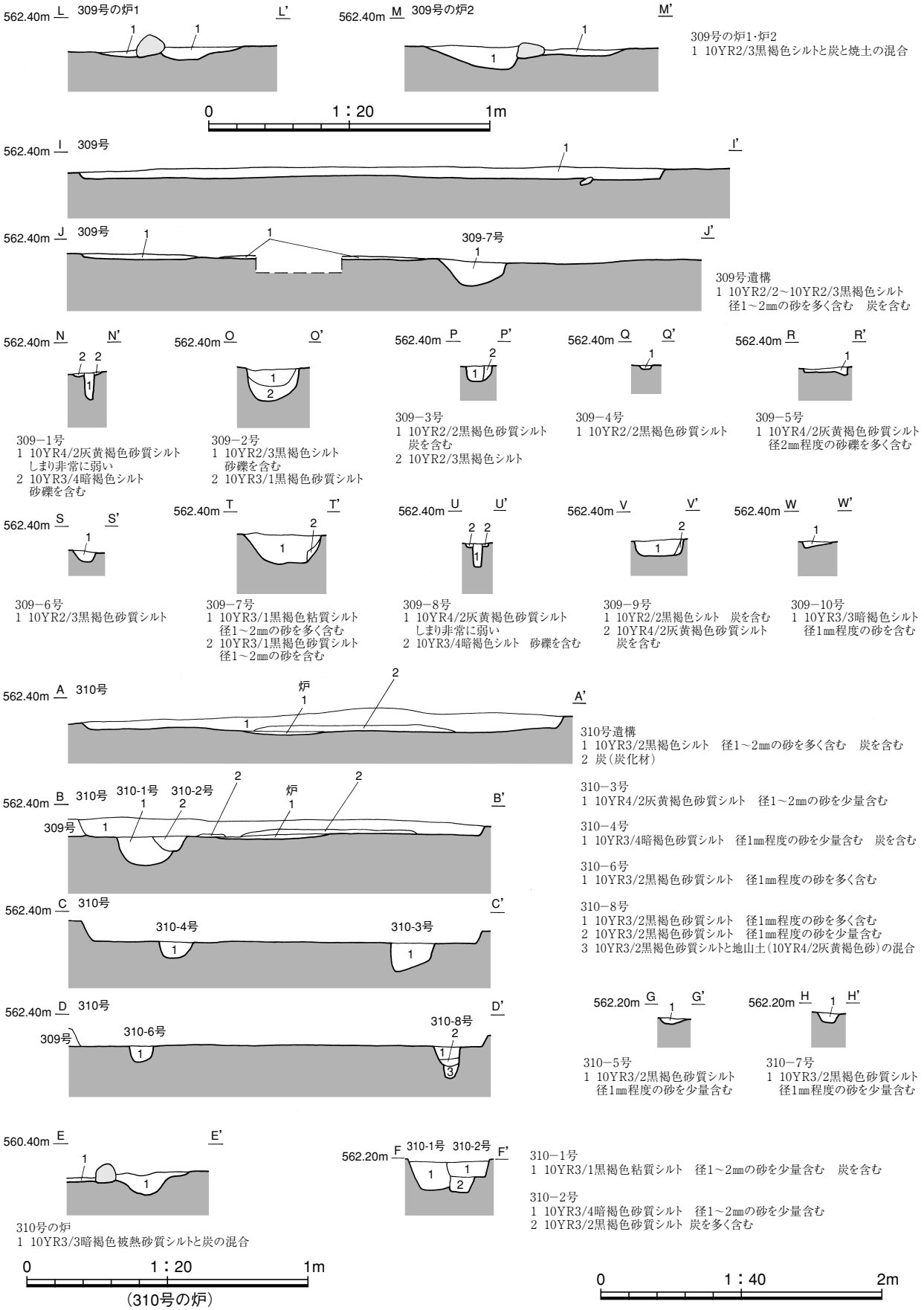
第46図　竪穴建物跡（304・305号遺構）



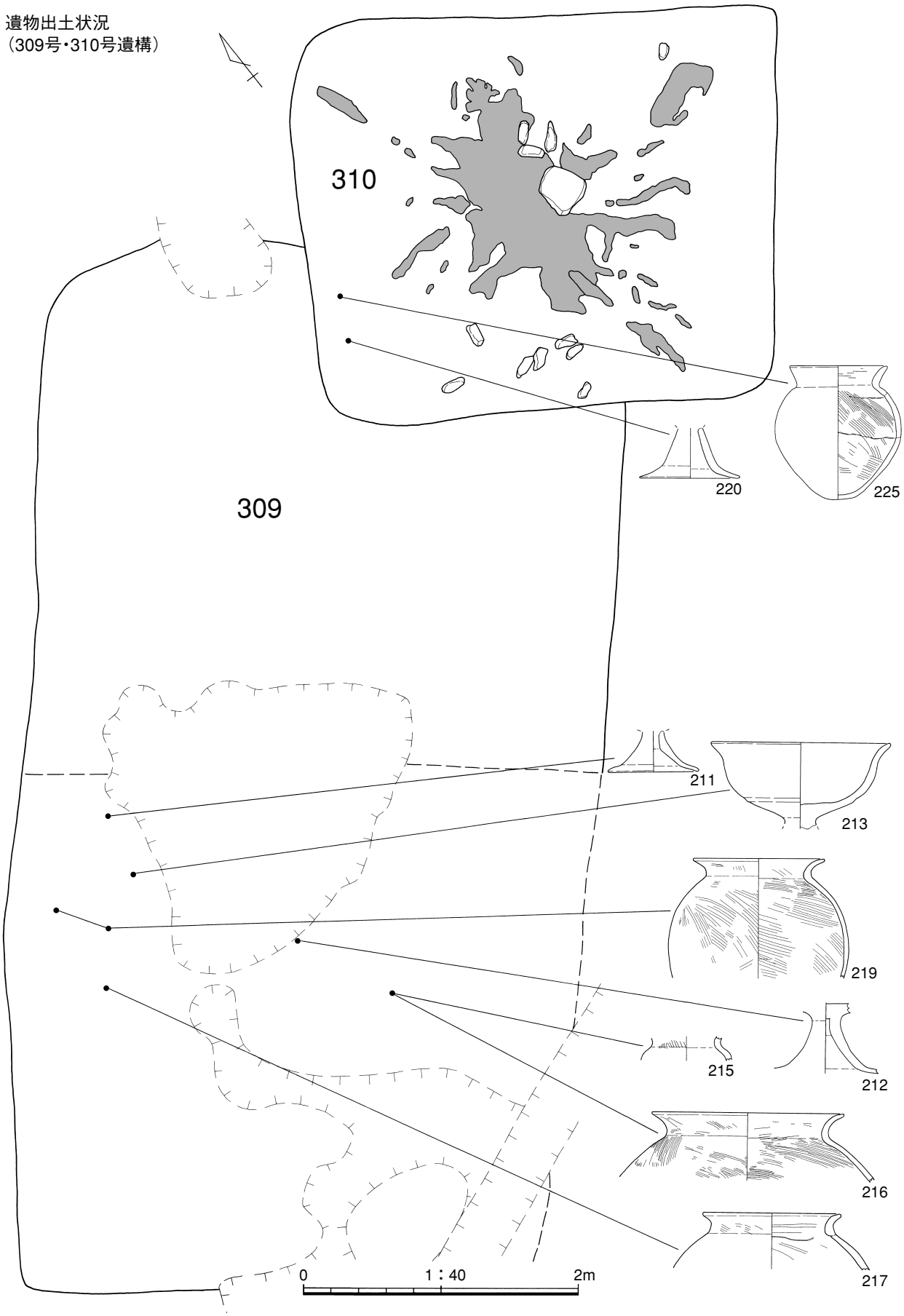
第47図　竪穴建物跡（307・308号遺構）



第48図　竪穴建物跡（309・310号遺構）（1）

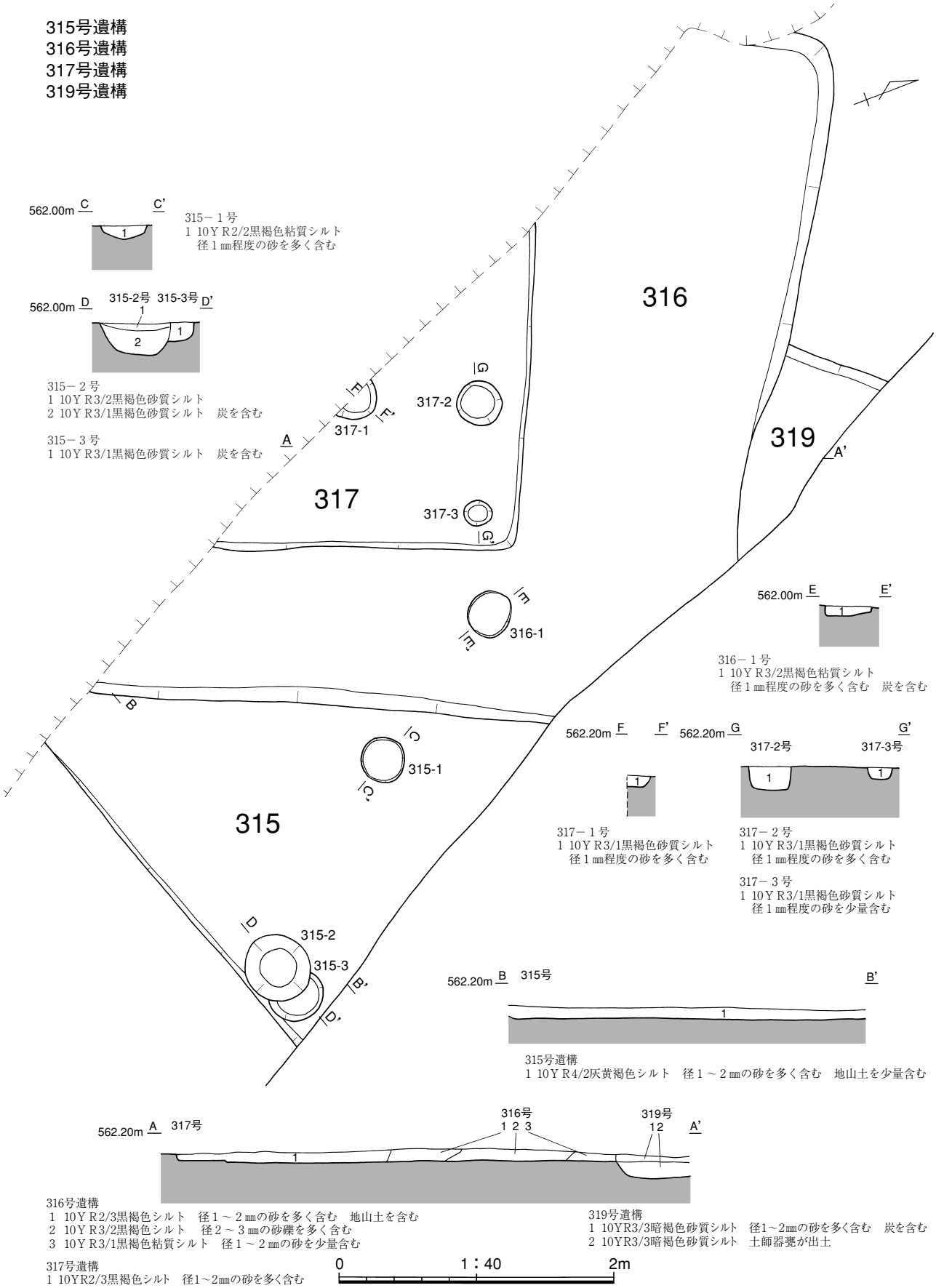


第49図　竪穴建物跡（309・310号遺構）（2）



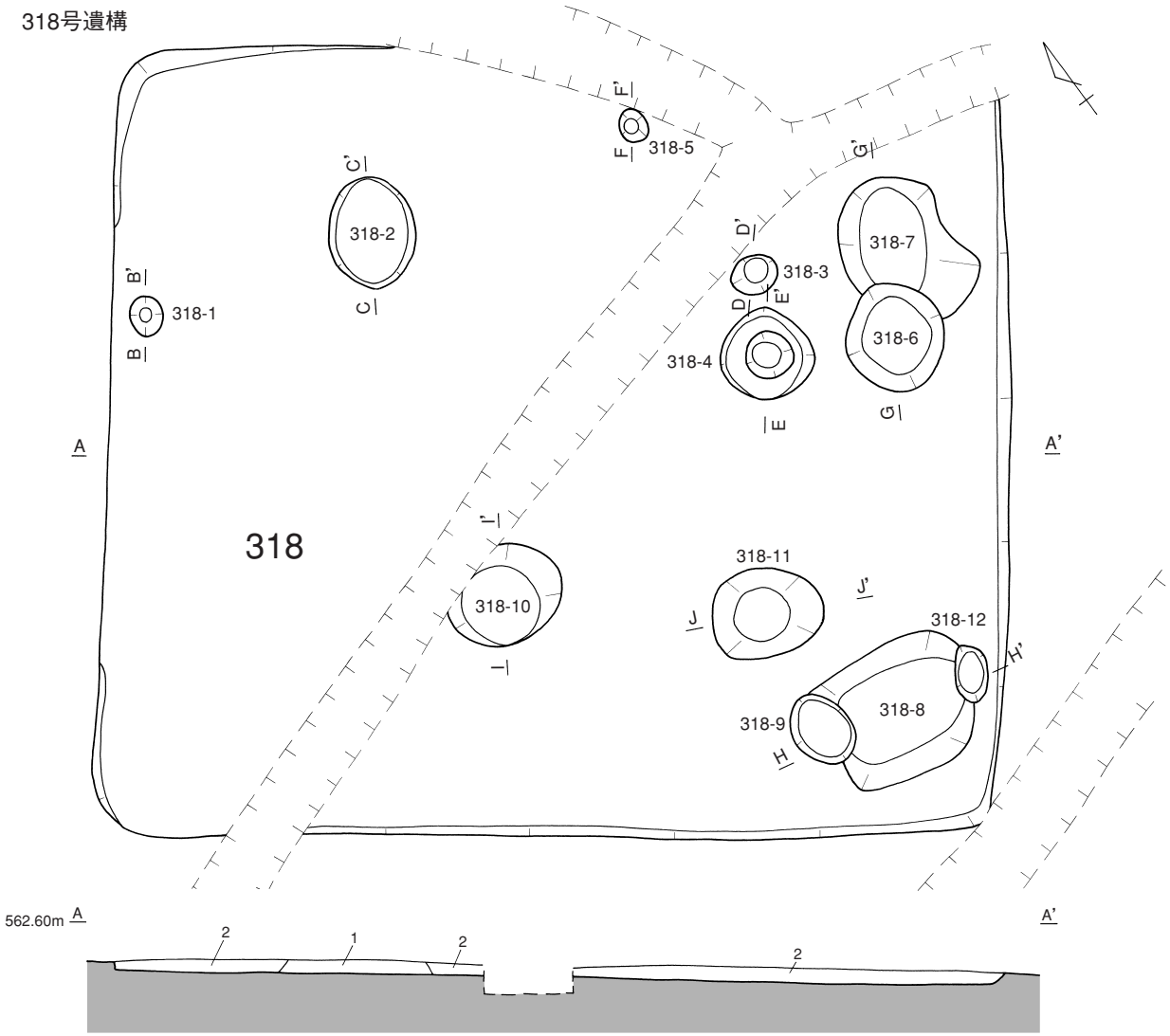
第50図　竪穴建物跡（309・310号遺構）（3）

315号遺構
316号遺構
317号遺構
319号遺構

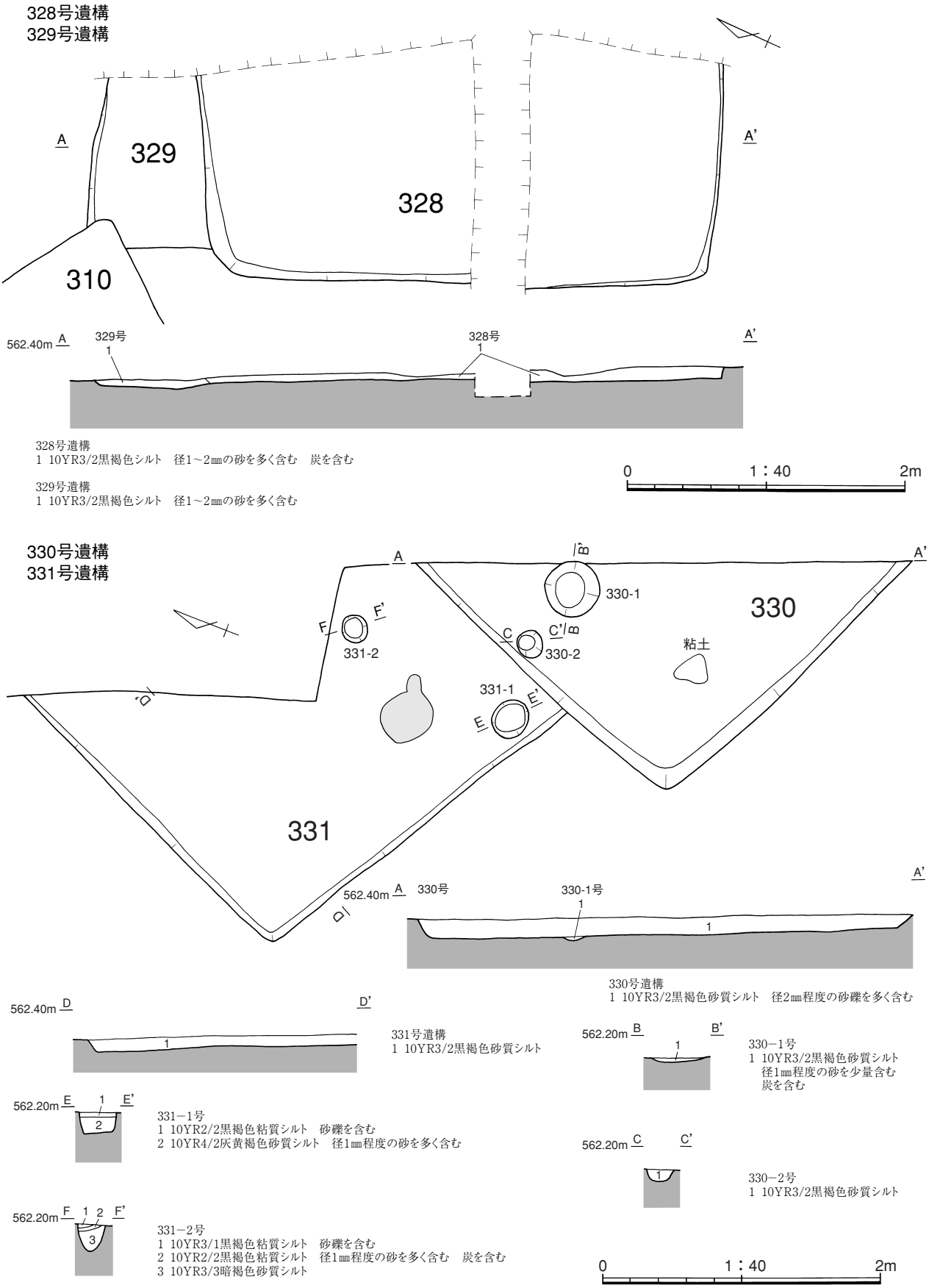


第51図　竪穴建物跡（315～317・319号遺構）（1）

318号遺構

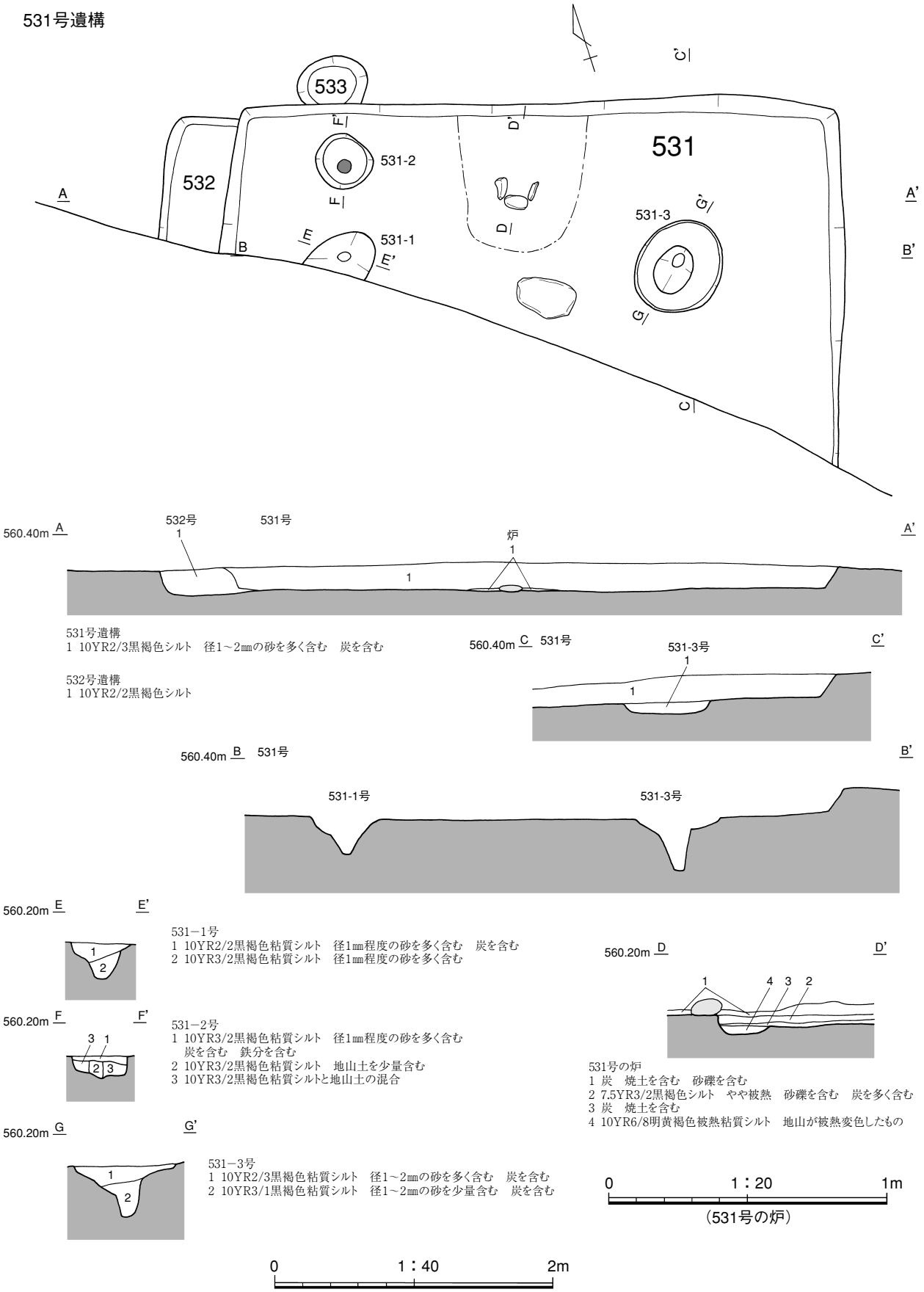


第52図　竪穴建物跡（318号遺構）



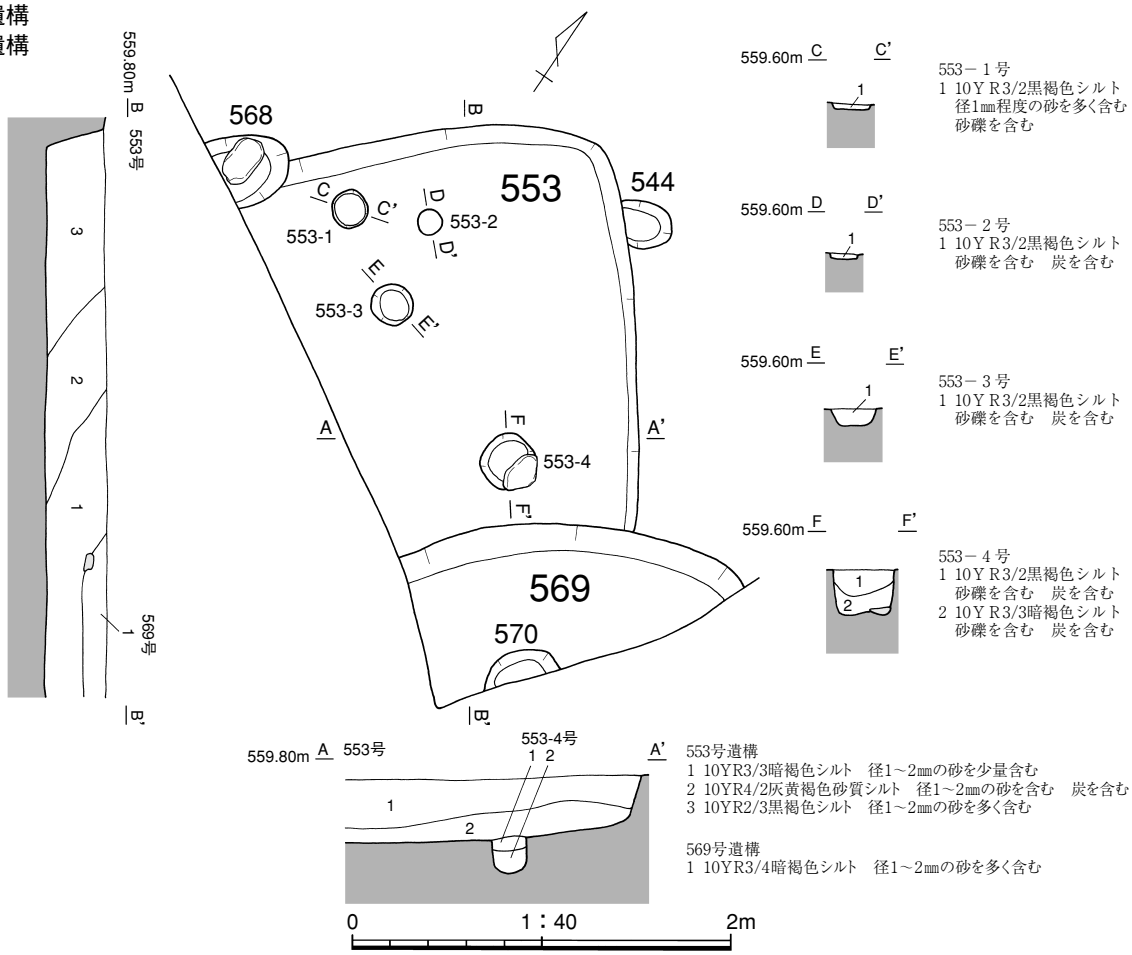
第53図　竪穴建物跡（328～331号遺構）

531号遺構

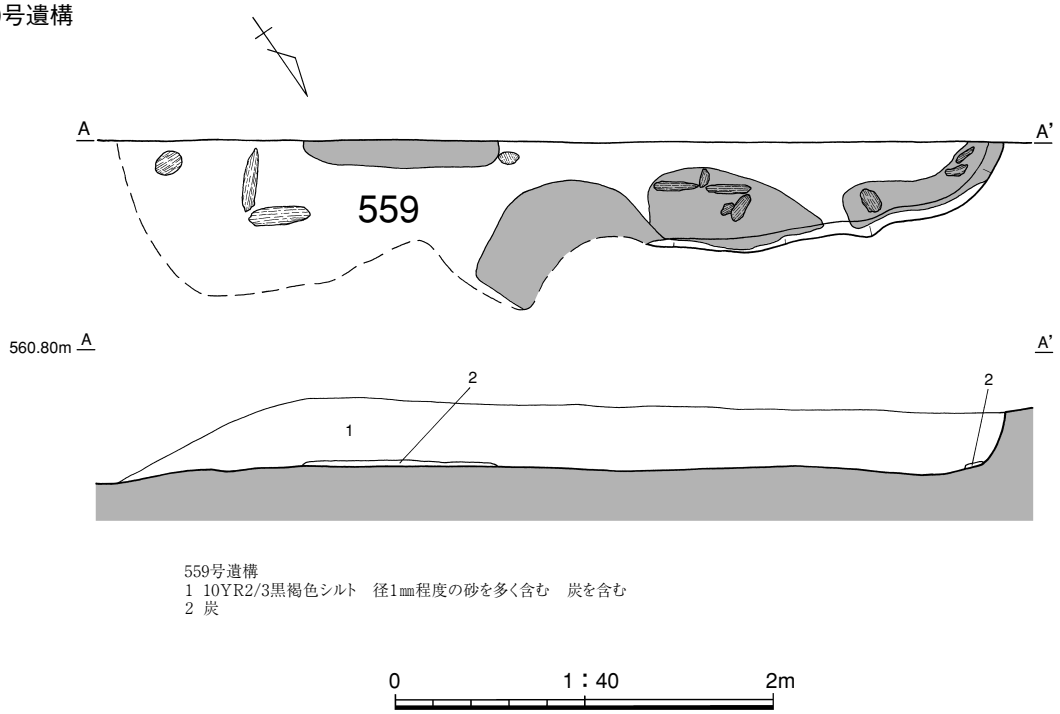


第54図　竪穴建物跡（531号遺構）

553号遺構
569号遺構

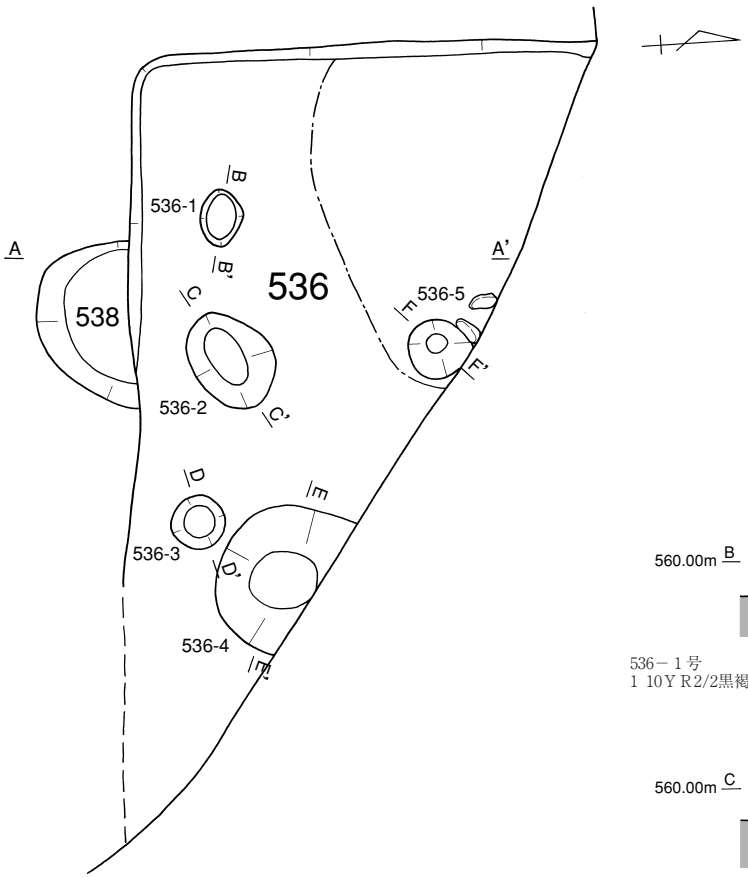


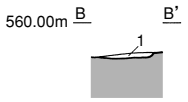
559号遺構



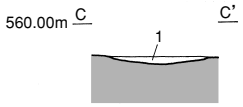
第55図　竪穴建物跡（553・569・559号遺構）

536号遺構

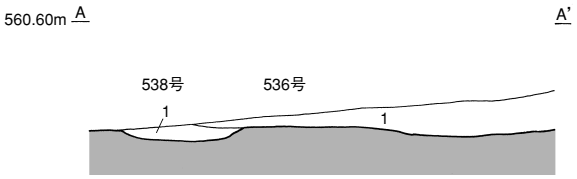




536－１号
1 10Ｙ R2/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む

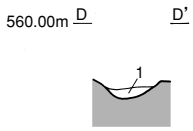


536－２号
1 10Ｙ R2/2黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を多く含む

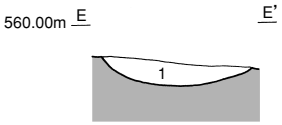


536号遺構
1 10Ｙ R3/2黒褐色シルト　径１～２㎜の砂を多く含む　炭を含む

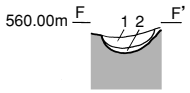
538号遺構
1 10Ｙ R2/3黒褐色シルト　砂礫を含む



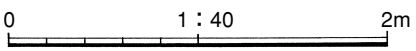
536－３号
1 10Ｙ R2/2黒褐色砂質シルト　径１㎜程度の砂を少量含む



536－４号
1 10Ｙ R2/2黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を多く含む　炭を含む

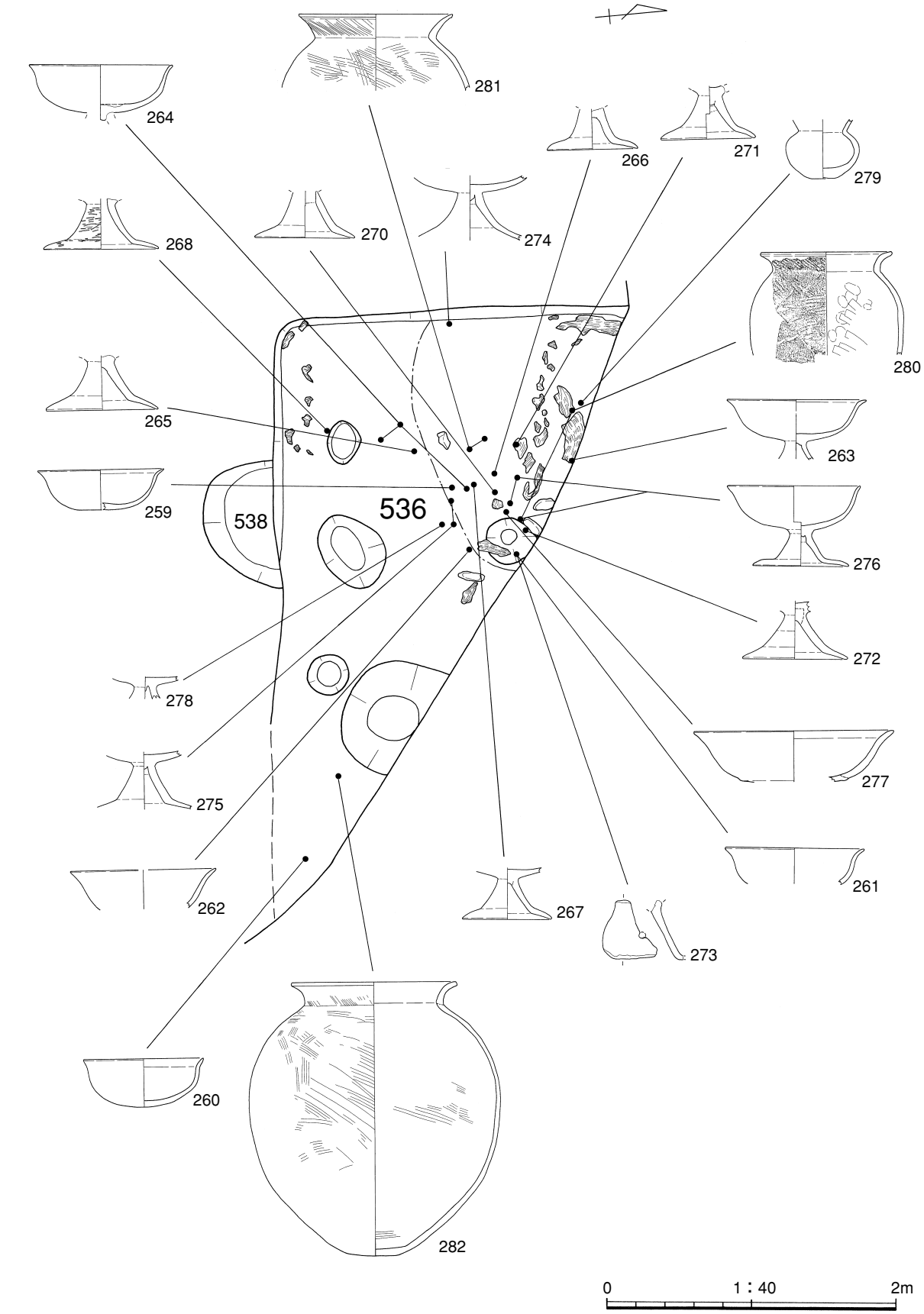


536－５号
1 10Ｙ R2/3黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を多く含む　炭を含む
2 10Ｙ R3/2黒褐色シルト　砂礫を含む

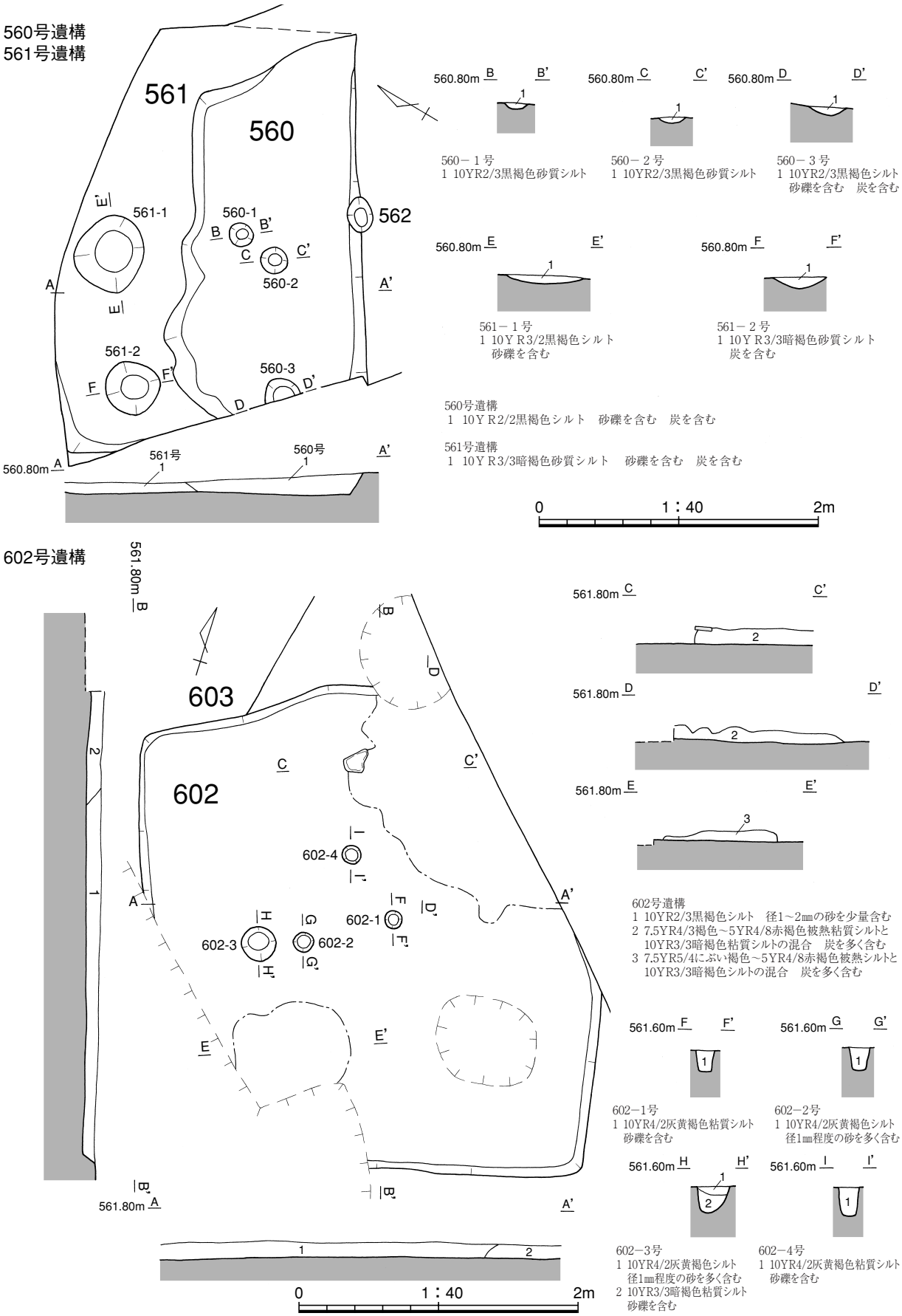


第56図　竪穴建物跡（536号遺構）（1）

遺物出土状況（536号遺構）

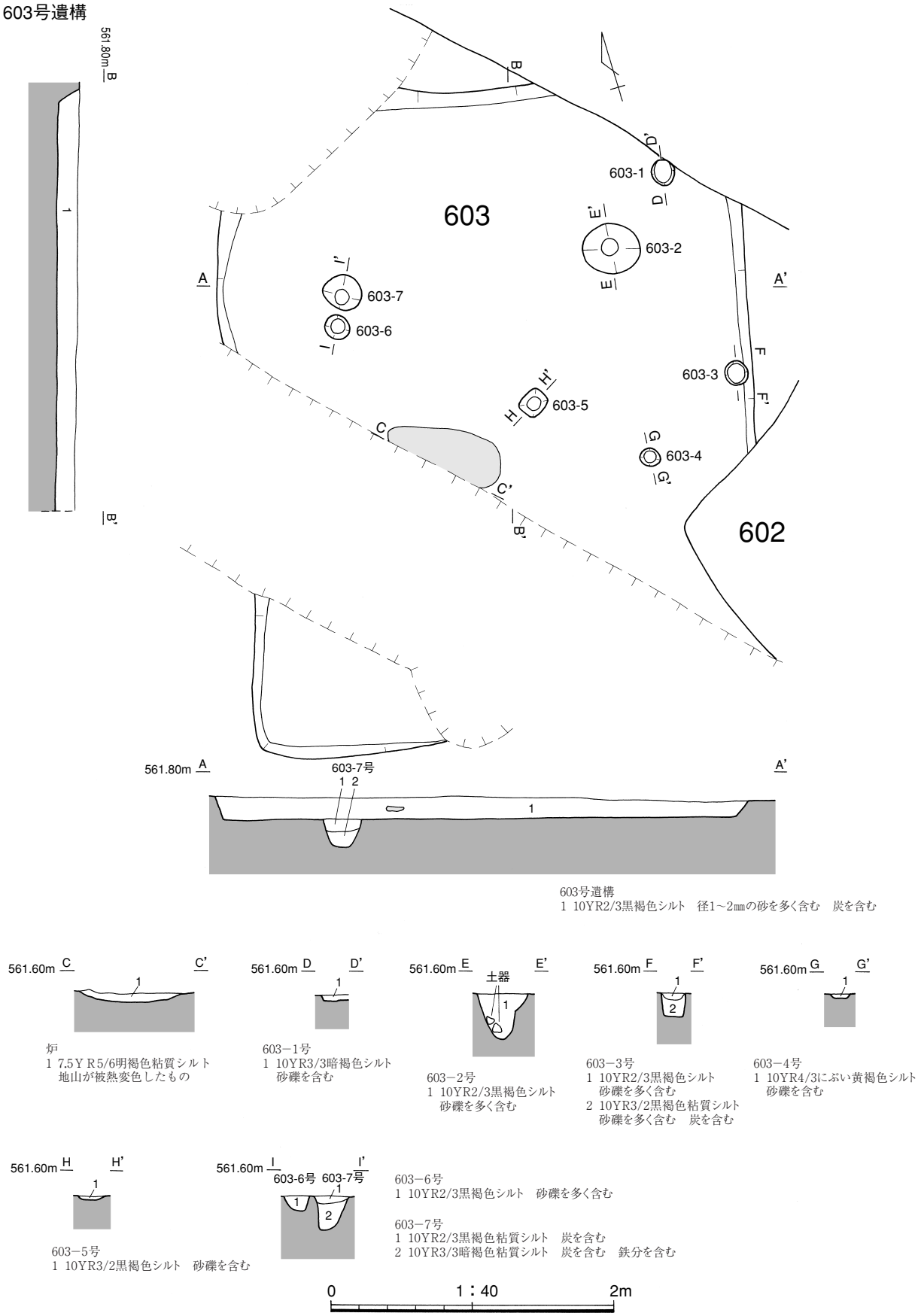


第57図　竪穴建物跡（536号遺構）（2）

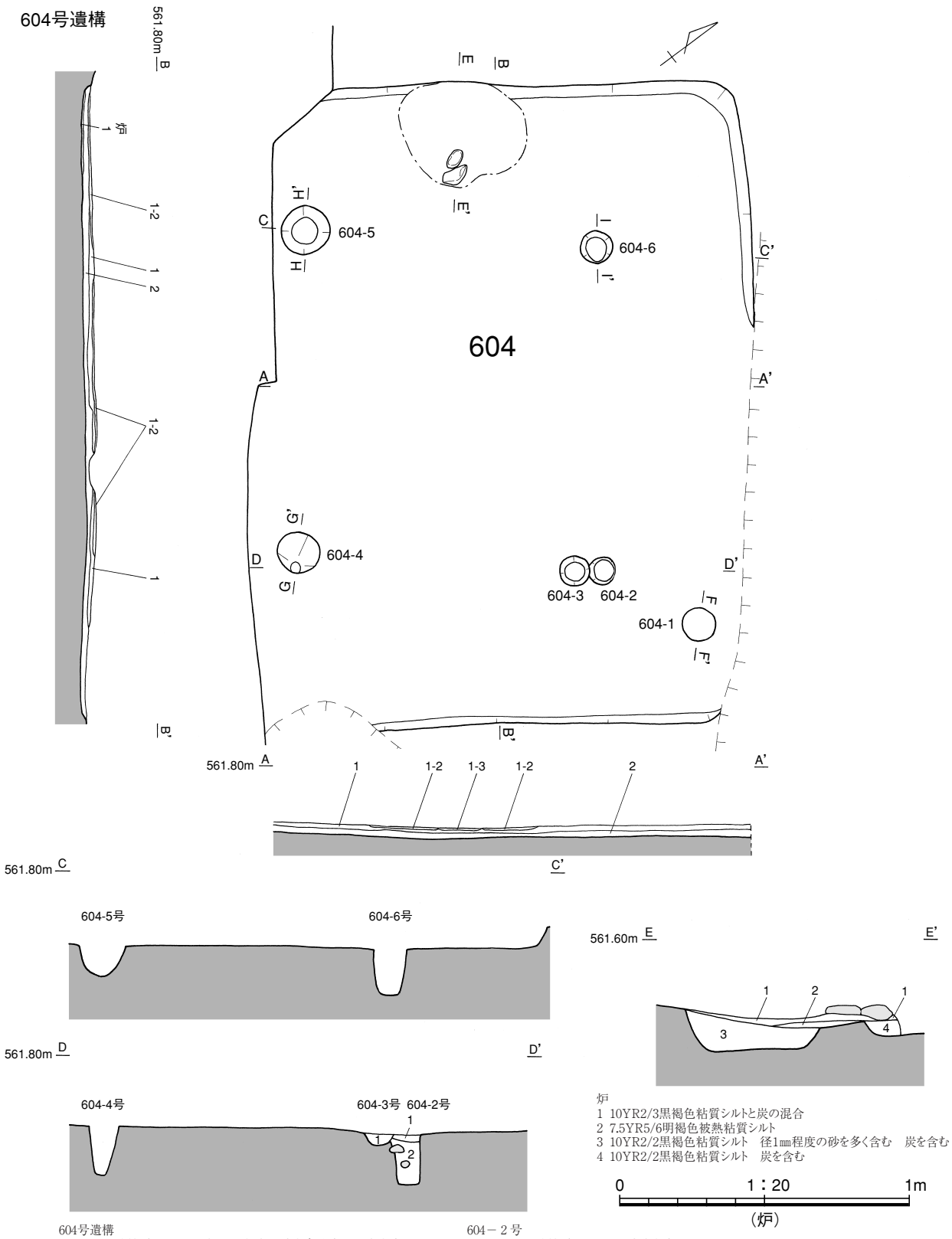


第58図　竪穴建物跡（560・561・602号遺構）

603号遺構



第59図　竪穴建物跡（603号遺構）



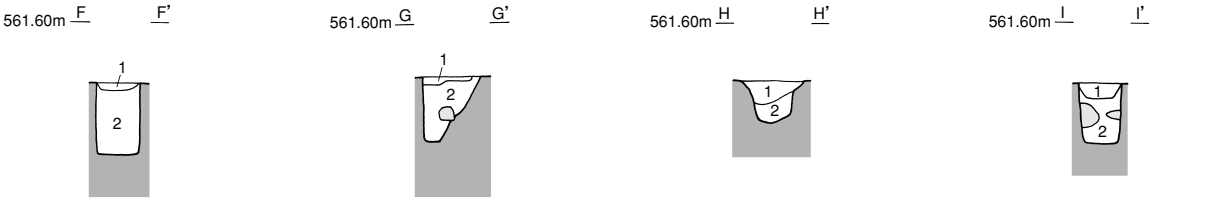
炉
1 10YR2/3黒褐色粘質シルトと炭の混合
2 7.5YR5/6明褐色被熱粘質シルト
3 10YR2/2黒褐色粘質シルト　径1㎜程度の砂を多く含む　炭を含む
4 10YR2/2黒褐色粘質シルト　炭を含む

604号遺構
1 10ＹＲ2/2黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を多く含む　炭を含む
1-2 炭
1-3 7.5ＹＲ5/6明褐色粘質シルト
2 10ＹＲ3/1黒褐色シルト　径１～２㎜の砂を多く含む　炭を含む

604－２号
1 10ＹＲ2/2黒褐色シルト　砂礫を含む
2 10ＹＲ2/1黒色粘質シルト

604－３号
1 10ＹＲ2/3黒褐色シルト　砂礫を多く含む

第60図　竪穴建物跡（604号遺構）（1）



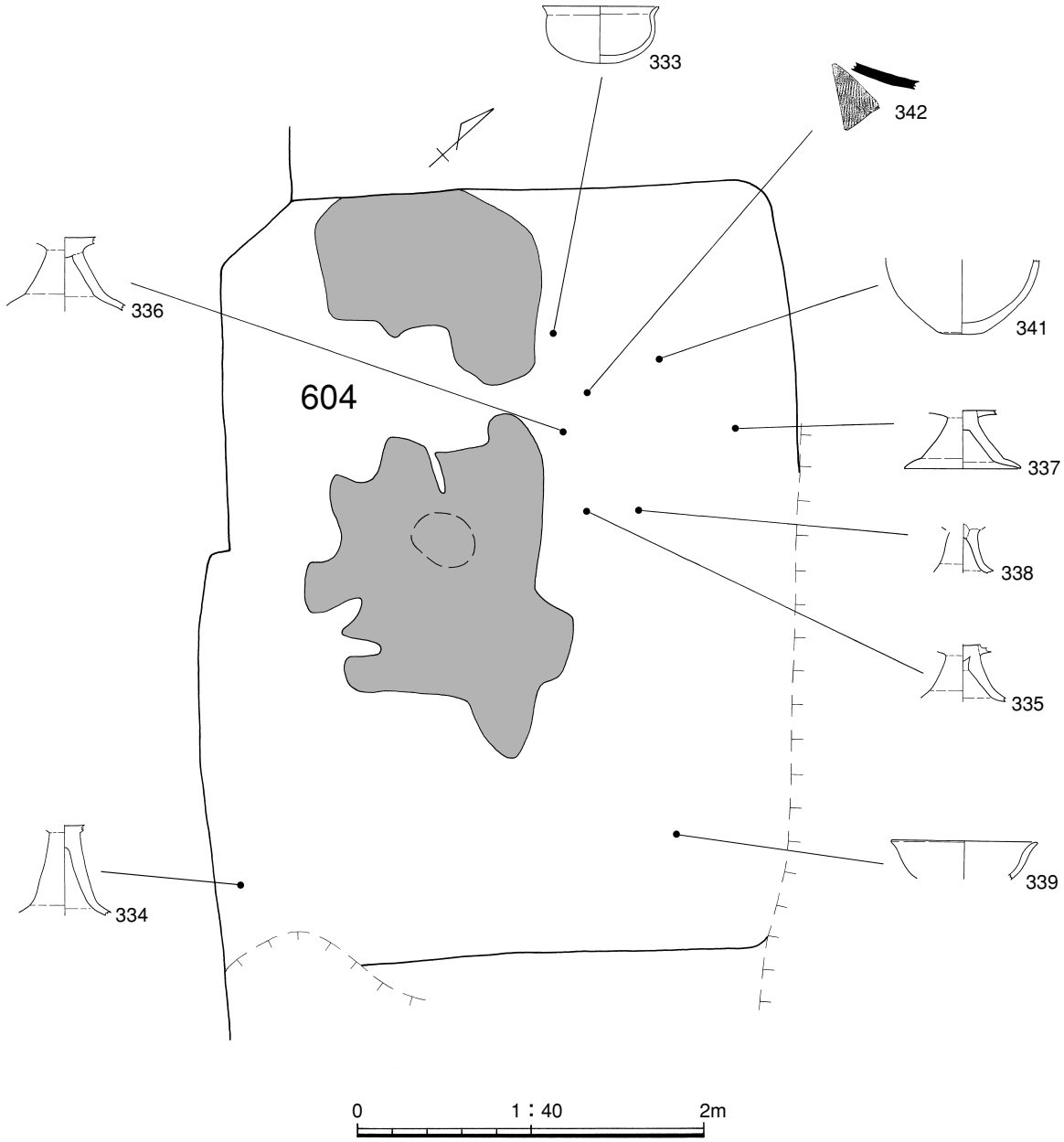
604－１号
1 10Ｙ R2/2黒褐色シルト　砂礫を含む
2 10Ｙ R3/4暗褐色粘質シルト
　地山土を含む

604－４号
1 10Ｙ R2/3黒褐色シルト
　径１㎜程度の砂を多く含む
2 10Ｙ R2/2黒褐色シルト　砂礫を含む

604－５号
1 10Ｙ R2/2黒褐色シルト 砂礫を含む
2 10Ｙ R3/1黒褐色粘質シルト

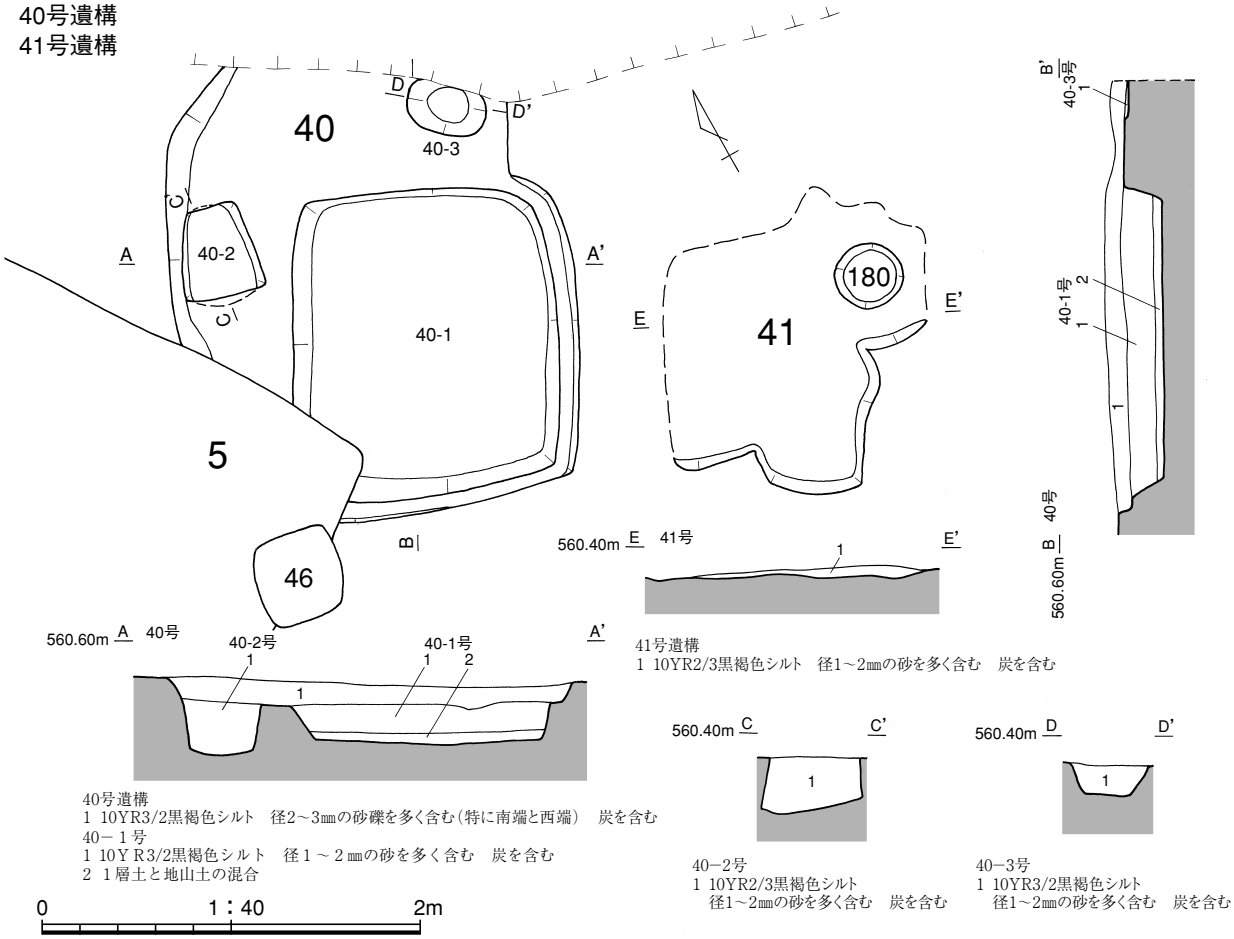
604－６号
1 10Ｙ R3/1黒褐色粘質シルト
　砂礫を多く含む
2 10Ｙ R2/1黒色粘質シルト
　砂礫を少量含む

遺物出土状況（604号遺構）



第61図　竪穴建物跡（604号遺構）（2）

40号遺構
41号遺構



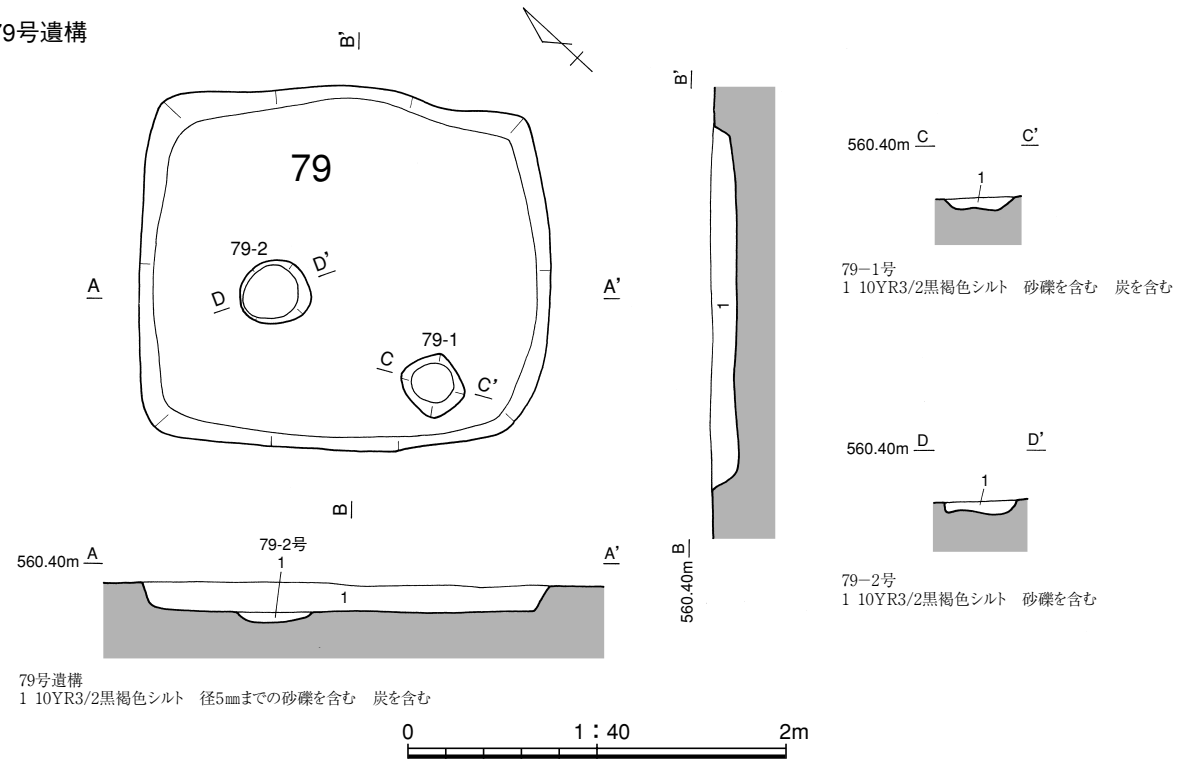
40号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径2～3㎜の砂礫を多く含む(特に南端と西端)　炭を含む
40－１号
1 10ＹＲ3/2黒褐色シルト　径１～２㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 １層土と地山土の混合

41号遺構
1 10YR2/3黒褐色シルト　径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

40－2号
1 10YR2/3黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

40－3号
1 10YR3/2黒褐色シルト
径1～2㎜の砂を多く含む　炭を含む

79号遺構



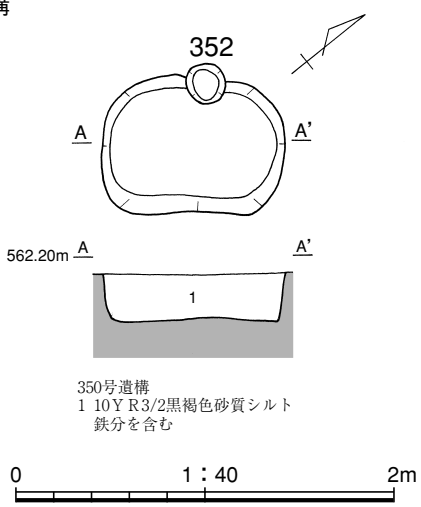
79号遺構
1 10YR3/2黒褐色シルト　径5㎜までの砂礫を含む　炭を含む

79－1号
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む　炭を含む

79－2号
1 10YR3/2黒褐色シルト　砂礫を含む

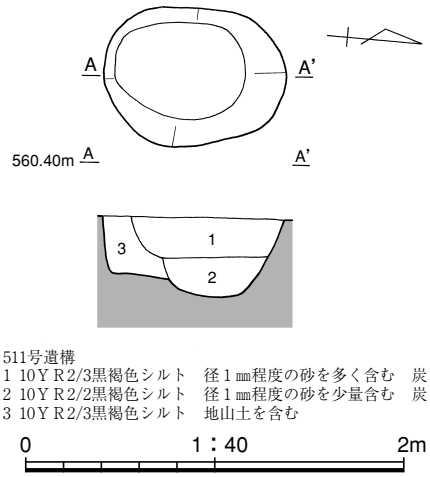
第62図　土坑（40・41・79号遺構）

350号遺構



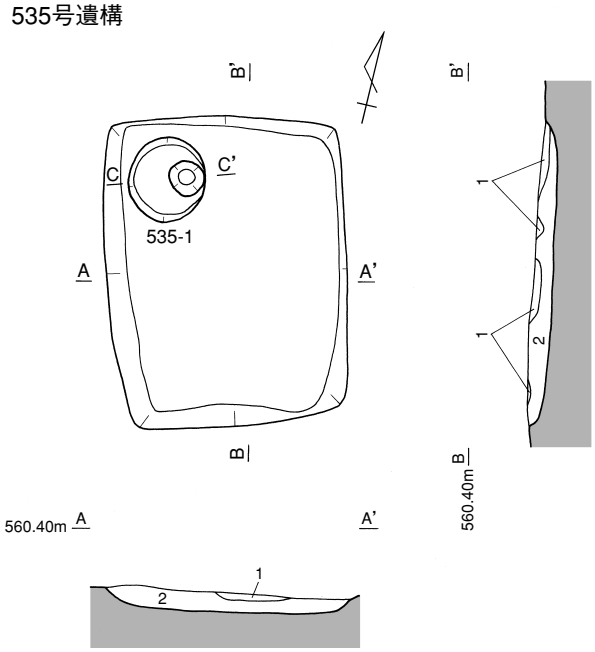
350号遺構
1 10Y R3/2黒褐色砂質シルト
鉄分を含む

511号遺構

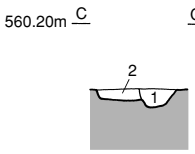


511号遺構
1 10Y R2/3黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を多く含む　炭を含む
2 10Y R2/2黒褐色シルト　径１㎜程度の砂を少量含む　炭を含む
3 10Y R2/3黒褐色シルト　地山土を含む

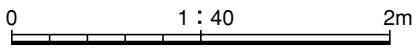
535号遺構



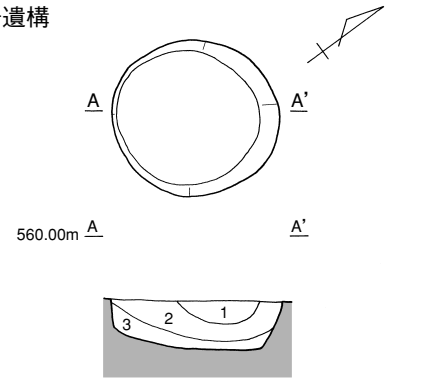
535号遺構
1 10Y R3/4暗褐色シルト　（１層と２層との間に鉄分）
2 10Y R2/3黒褐色シルト　径１～２㎜の砂を多く含む



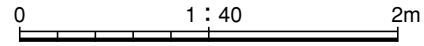
535－１号
1 10Y R2/2黒褐色粘質シルト 径１～２㎜の砂を少量含む　炭を含む
2 径１㎜程度の砂を少量含む　１層土と地山土の混合



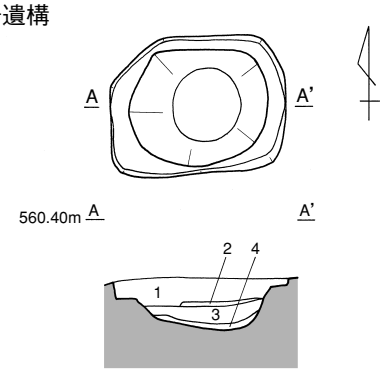
539号遺構



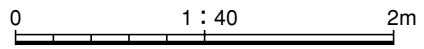
539号遺構
1 10Y R2/3黒褐色粘質シルト　径１～２㎜の砂を少量含む　炭を含む
2 10Y R2/2黒褐色シルト　径２～３㎜の砂礫を少量含む　地山土を多く含む
3 10Y R2/2黒褐色粘質シルト　径２～３㎜の砂礫を少量含む　炭を含む



554号遺構

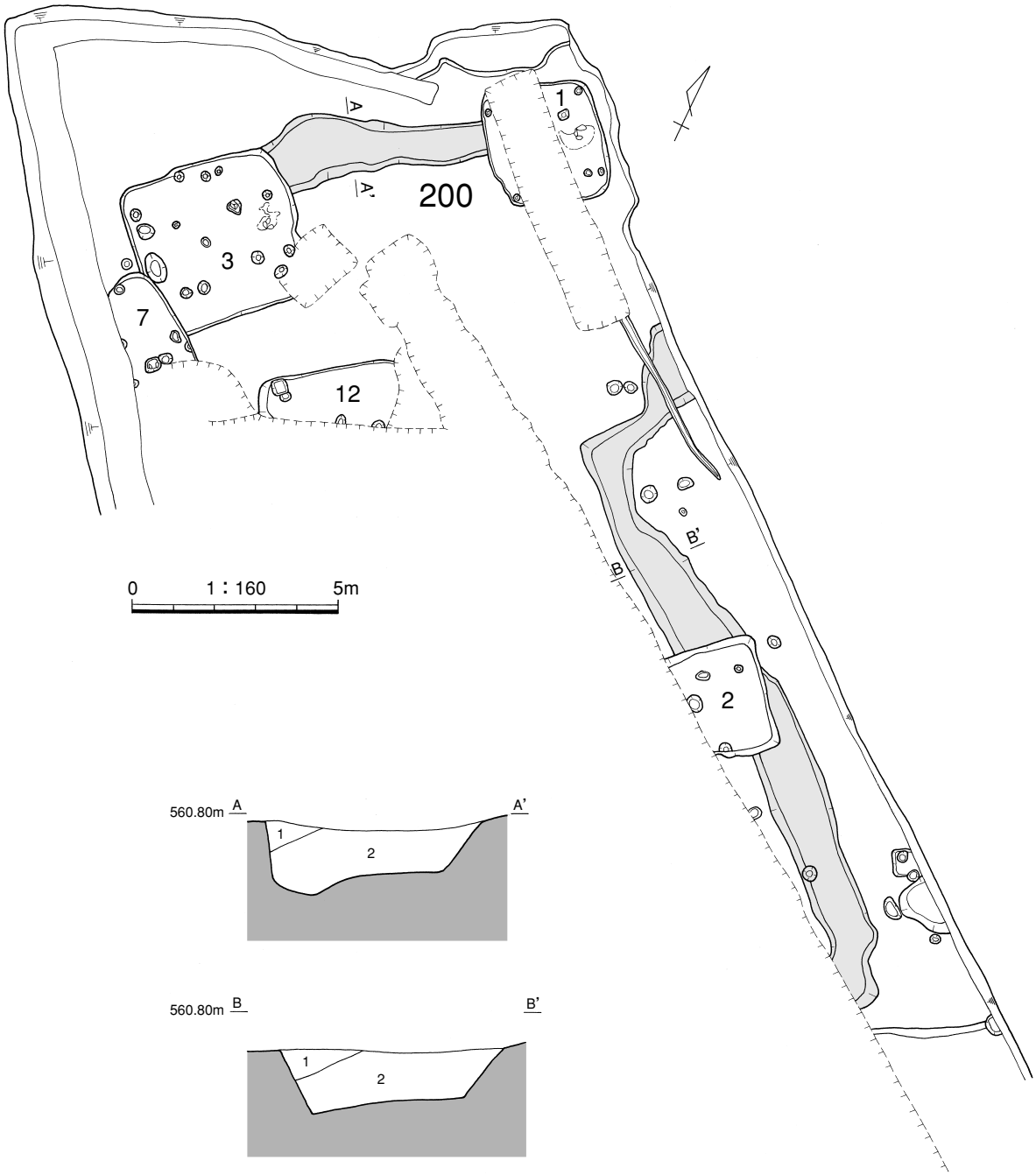


554号遺構
1 10Y R2/3黒褐色シルト
径１～２㎜の砂を多く含む　炭を含む
2 炭
3 10Y R2/3黒褐色粘質シルト
径１～２㎜の砂を多く含む　炭を含む
4 10Y R3/2黒褐色粘質シルト　炭を含む



第63図　土坑（350・511・535・539・554号遺構）

200号遺構



200号遺構
1　10Y R5/4にぶい黄褐色礫混じり砂　径５㎜程度の礫を非常に多く含む
2　10Y R4/4褐色礫混じり砂　径５㎜程度の礫を多く含む

0　1：40　2m

第64図　溝（200号遺構）

第４章 遺物

第１節 遺物の概要

野内遺跡Ａ地点で出土した遺物の総点数は、接合前破片数で24,857点である[1)]。出土層位では、遺物包含層[2)]から出土した遺物が11,144点（44.83％）、遺構内出土物が13,713点（55.17％）となり、遺構内出土遺物が過半数を占めている。ただし、ａ区では遺物はすべて包含層から出土し、ｂ西区でも包含層出土遺物が遺構内出土遺物を上回ることから、Ａ地点全体では西半部の遺構の残存状態がよくなかったことが窺える。

出土した遺物の種別は、土器・陶磁器類に属するものには、縄文土器（55点、0.22％）、弥生土器（５点、0.02％）、土師器（21,959点、88.34％）、須恵器（2,017点、8.11％）、灰釉陶器（316点、1.27％）、輸入磁器（６点、0.02％）、山茶碗（11点、0.04％）、珠洲焼（６点、0.02％）、中近世施釉陶器（372点、1.50％）、近世磁器（19点、0.08％）、時代不明の土師質・瓦質土器（18点、0.07％）があり、土器・陶磁器類以外には、金属製品（７点、0.03％）、鍛冶関連遺物（48点、0.19％）、石器・石製品（18点、0.07％）がある。土師器・須恵器・灰釉陶器の３種別で出土遺物全体の98％近くを占めることから、当遺跡が古墳時代と古代を主要な時代とする遺跡であることは明らかである。

点数が特に多い土師器については、胎土の精良なもの（主に小型器種）と砂粒を多く含む粗いもの（主に大型器種）に二分し、それぞれの破片数を求めた。結果は、胎土精良な破片8,757点（39.88％）に対し、粗い破片13,202点（60.12％）となった。須恵器は用途により食膳具（蓋・杯・碗・盤・高杯）、貯蔵具（瑠・壺・鉢・甕）、その他特殊器種（陶錘）に大別し、それぞれの破片数を求めた。結果は、食膳具1,070点（53.05％）、貯蔵具946点（46.90％）、その他１点（0.05％）である。なお、須恵器については、ほぼ４分の３に当たる1,499点がａ区で出土しており、遺構内から出土したものは全地区を合わせて１割に満たない199点にとどまることに注意を払う必要がある。土師器の遺構内出土破片数は13,441点であるので、土師器と須恵器の遺構内での出土比は68：１となる。このような数量面での土師器の圧倒的優位は、遺構の大半が須恵器の本格的普及期より前のものであることを示唆している。

第47表　出土遺物集計表

地区	出土区分	土器・陶磁器類														その他			計
		縄文土器	弥生土器	土師器		須恵器			灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品	
				胎土精	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）											
a区	包含層		2	8	47	785	714		266	5	11	4	60	3	11	1	7	5	1929
b東区	包含層	9		1868	2917	34	33		8				15		1	1	1	6	4893
	遺構内	3	1	3591	5619	11	18		5				6	3		2	7	3	9269
b北東区	包含層	8		330	281	6	17		3				11	2		2	4	1	665
	遺構内			712	620	5	11		1				9				12		1370
b西区	包含層	22	2	811	1359	73	86		27			2	230	11	6	1	17	3	2650
	遺構内	12		707	1446	1	3						2						2171
b北西区	包含層			24	26	19	7						20						96
	遺構内			357	389	118	31	1	2				5						903
b区（地区不明）	包含層	1		349	498	18	26		4	1			14						911
計		55	5	8757	13202	1070	946	1	316	6	11	6	372	19	18	7	48	18	24857

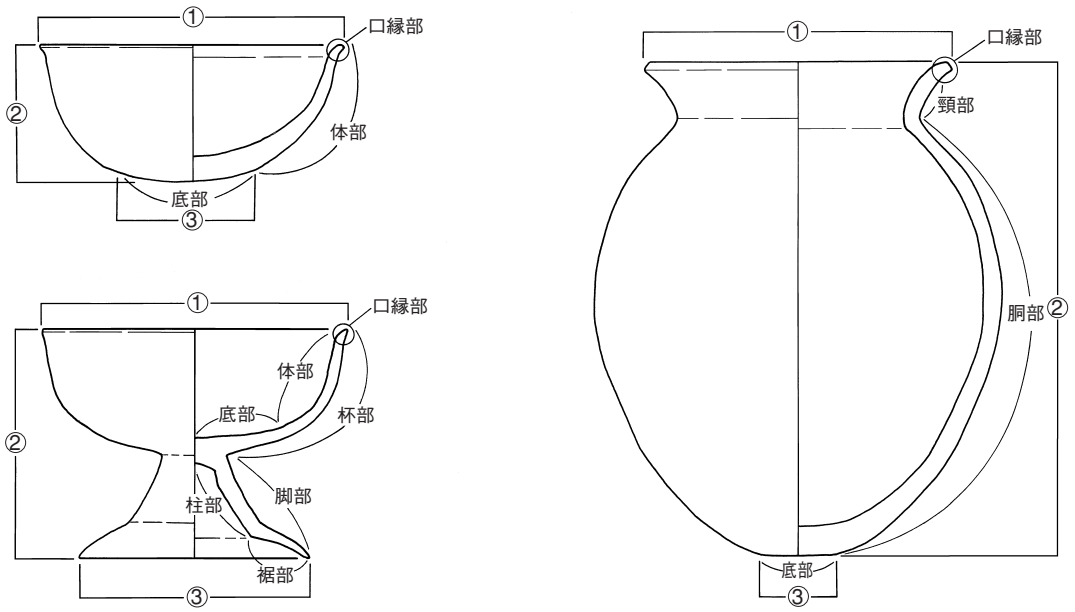
本章では、遺物実測図を出土した遺構毎にまとめて掲載した。掲載順は遺構番号順とし、包含層出土遺物は遺構内出土遺物のあとにまとめて掲載した。以下、第２節で土器・陶磁器類、第３節でそれ以外の遺物について、遺物種別毎にまとめた。遺物個々の法量や調整技法などについては別表「遺物観察表」（153～160頁）に記した。遺構毎の遺物組成については、別表「遺構一覧表」（144～151頁)を、グリッド毎の遺物組成については別表「包含層出土遺物一覧表」（152頁）を、それぞれ参照されたい。また、遺物間の先後関係や推定年代については第５章を参照されたい。

次節以降で遺物に関して用いる用語や記号、それに計測値の基準は、次の通りである。

（１）部位名称と計測基準

最も点数の多い土師器の主要器種を例にとり、部位名称と計測基準について図示する（第65図)。甕・壺など口縁部下にくびれを持つ器種については、原則として部位を口頸部（口縁部と頸部）・胴部・底部に分けている。頸部を持たない碗などの器種については、胴部という部位名称は用いず、体部と底部に分けた。高杯については、杯部と脚部に分け、さらに杯部を体部と底部に、脚部を柱部と裾部に分けた。土師器以外の土器・陶磁器類についても、器形に応じて上記の区分に準じている。

計測については、土器・陶磁器類では口径・器高・底径を計測するのを原則とし、高台を有する個体については、さらに台径を計測した。高杯では脚部の径を底径としている。石器・金属製品など、その他の遺物については、長さ・幅・厚さを計測した。金属製品では錆の部分は計測から除外した。土器・陶磁器類でも陶錘などは石器・金属製品等と同様に計測した。計測値はすべて巻末の「遺物観察表」に記してある。



①口径　②器高　③底径

第65図 土師器の部位名称と計測位置

（2）調整技法や使用痕の観察と呼称

本書で用いる調整技法等の呼称について、まとめておく。

ナデ

指や布・革などで器面をなでる調整技法。原則として、回転を利用せず不定方向・不連続になでるものを指す。ナデの方向が観察可能な場合には「横方向ナデ」のように、その物に対する方向を明記した。指で直になでる場合と布や革を使用する場合があるとみられるが、明確に識別できるケースを除いて両者を区別はしていない。なお、木の板等の固形の工具を使用したものは、ここに含んでいない。

回転ナデ

回転台の回転を利用してナデを行うものを回転ナデとした。

板ナデ

木の板を使用したナデ。中には胎土中の砂粒が動き、一見「削り」と見えるものも含む。なお、「板ナデ」と「ヘラナデ」の区別はしていない。

オサエ

指や布・革などで器面を押さえる調整技法。指で直に押さえた場合と布や革を使用する場合があるとみられ、明らかに前者であることが分かる場合には「指オサエ」とした。圧痕が窪みとして残らない程度の軽いオサエの場合にはナデに含めて考えられる場合が多いようであるが、本書では動きの幅の大小で両者を区別した。

ヘラ削り

側縁が薄く鋭利なヘラ状工具を使用し、器面の余分な粘土を削り取る調整技法。胎土中の砂粒がヘラの動いた方向に移動することで、ナデやミガキと判別できる。原則として、回転を利用せず不定方向・不連続に削るものを指す。なお、次に挙げる「回転ヘラ削り」との混同を避ける必要がある場合には「手持ちヘラ削り」と表現している。

回転ヘラ削り

回転台の回転を利用してヘラ削りを行うもの。須恵器の蓋類では天井部外面にこの調整を施すことが多く、掲載図ではその下限を実線で示してある。また、須恵器の杯類で底部外面に施しているものについては、その上限を実線で示してある。

ヘラミガキ

器面をヘラ状工具で研磨する調整技法。光沢のある磨き痕が残る。土師器の高杯などに多くみられる。

ハケ目

土師器の甕などにみられる、刷毛で撫でたような細かい平行線状の調整痕。板の木口で器面をなで、その結果、年輪の跡が刻まれたものと考えられている。

カキ目（掻き目）

須恵器の高杯などにみられる、刷毛でなでたような連続する細かい平行線状の調整痕。回転を利用して櫛歯状工具などを押し当ててできた調整痕と考えられている。

第２節 土器・陶磁器類

（１）土師器

土師器は当遺跡では最も出土数の多い遺物である。破片数で21,959点確認した。このうち６割強に当たる13,441点は遺構内から出土ている。遺構内出土遺物総数は13,713点であるので、このうち土師器の占める割合は実に98％近くに達することとなる。

確認した器種は、碗・高杯・大型高杯・壺・直口壺・小型壺・甕である。古墳時代の土師器に一般的にみられる器種では、器台・甑が出土していない[3)]。また、手捏ね土器や製塩土器も確認されなかった。

用途を基準に分類するならば、碗・高杯・大型高杯が食膳具、甕が煮炊具、壺類が貯蔵具となる。先に記した通り、胎土の精良なもの（主に小型器種）と砂粒を多く含む粗いもの（主に大型器種）に二分できる。前者には、碗・高杯・大型高杯・小型壺・直口壺の大部分、後者には、甕・大型壺のすべてと碗・高杯・小型壺・直口壺の一部が含まれる。前者には、土師器に一般的な淡黄色を呈するもののほかに、橙色を呈するものがみられる。

碗　１・２・33・125・196・227・231・259・260・297・301・333・384・385

半球状の小型の器を碗とする。14個体図示する。

緻密な胎土のものと、甕などと同様の砂粒を含んだ粗い胎土のものとに大別できる。図示したものでは、前者に該当するのが33・125・227・259・260・297・301・333・384・385の10個体、後者に該当するのが１・２・196・231の４個体である。両者とも口縁部が外側に屈曲し外反する器形を基本とする。これは当遺跡の代表的な土師器高杯である碗状杯部低脚高杯（後掲の高杯Ｃ）の杯部の形状に類似する。

緻密な胎土の10個体のうち33・227・301を除く７個体は、橙色を呈する。調整技法については、緻密な胎土の個体では調整痕の残る例が少ないが、体部は横方向ナデ（384）、横方向ヘラミガキ（260）、底部内面はナデ（384）、底部外面はナデ（384）、手持ちヘラ削り（260）である。ただし、227では外面の調整はハケ目調整である。粗い胎土の個体では、ハケ目調整を基本とする。

125は把手付の碗である。土師器には通常みられない特異な器形であるが、同様の器形は古墳時代中期の須恵器にみられるので、その影響を受けた器形と考えたい。大型の碗である385は、口縁部が内彎する器形が他の個体に比べ異質である。同様の器形の碗は、図示していない小破片も含め、当遺跡の出土遺物中にほとんど見かけない。

高杯

碗・杯・皿・鉢の底部に高い台脚が付くものを高杯とする。全出土遺物中で最も確認個体数の多い器種である。

大型の個体は通常の高杯とは別器種と捉え、「大型高杯」とした。当遺跡で出土した双方の完形個体の法量値分布から、口径16.0㎝、器高12.0㎝辺りに境界を設定できると考えたため、本書では、原則として口径値16.0㎝、器高値12.0㎝のいずれかを超える個体を大型高杯として扱っている[4)]。

標準サイズの土師器高杯は133個体図示した。ただし、この中には脚部の有無が確認されず、その結果、碗との判別が困難なものなどを含んでいる。色調については、橙色を呈する個体がほぼ半数に

達している。

全形を窺える個体と特徴的な部位の残る個体について、器形や調整技法等に着目して分類すると、概ね以下の６類を提示することができる。このうちの高杯Ａ、高杯Ｂ、高杯Ｃは残存状態良好な個体に恵まれている。

高杯Ａ　47・50・157・190・226

有段杯部長脚高杯である。杯部は体部・底部ともに直線的で、両者の境が屈曲して段状となる。体部は広く開く。脚部は柱部が直立気味で長く、裾部との間に明瞭な境を持たない。全形を窺うことのできる良好な個体は303号遺構（竪穴建物跡）から出土した190のみであるが、同様の器形の杯部は大型高杯に多数見出すことができる。

高杯Ｂ　66・67・68・127

碗状杯部長脚高杯である。杯部は体部・底部ともに丸みを帯び、両者の間に明瞭な境を持たず、体部がわずかに内彎して碗状を呈する。脚部は高杯Ａ同様の長脚である。

このタイプの高杯は、71号遺構（竪穴建物跡）からまとまって出土した３個体（66・67・68）以外には、ほとんど見出せない。わずかに130号遺構（竪穴建物跡）から出土した127に同タイプとなる可能性があるものの、この個体は残存状態が良好でないため確実ではない。すべて橙色を呈する。

高杯Ｃ　３・４・６・28・100・123・131・161・248・263・264・276・386・387・388

碗状杯部低脚高杯である。杯部は丸みを帯びた碗状であるが、口縁部が外側に屈曲して外反する点に特徴がある。脚部は、柱部が斜め下方に開き、内彎気味に開く裾部との間に明瞭な境を持つ。脚部は高杯Ａ・Ｂに比べ格段に短く、器高は低い。全形を窺うことのできる残存状態良好な個体として、１号遺構から出土した４・６、５号遺構（竪穴建物跡）から出土した28、536号遺構（竪穴建物跡）から出土した276などを挙げることができる。調整技法については摩滅のため読み取れない個体が多いが、４・６などでは横方向のヘラミガキ調整が認められる。なお、縦方向のヘラミガキが認められる個体は皆無である。

碗との判別が困難な杯部破片や杯部を伴わない脚部破片にも、このタイプと特徴が一致するものが圧倒的に多いことから、当遺跡で主体を占める高杯であることは疑いない。

高杯Ｄ　46・89

体部・底部境が不明瞭な浅い杯部を持つ高杯である。脚部を伴う状態で出土した個体がないため、全体形状は不明である。

高杯Ｅ　69・295

深い半球状の杯部を持つ高杯である。口縁部は外側に屈曲して外反する。脚部を伴う状態で出土した個体がないため、全体形状は不明である。

高杯Ｆ　118・120・138・188・273

脚部に透かし孔を持つ有孔脚高杯を一括する。杯部を伴う状態で出土した個体がないため、全体形状は不明である。図示した５個体はすべて遺構内から出土しているので、当地域では古墳時代中期にも有孔脚高杯が残存したと捉えることができる。

大型高杯

大型高杯は61個体図示する。ただし、この中には杯部が確認されず、その結果、台杯甕など別器種

となる可能性のある脚部破片を含む（52など）。

高杯と同様に橙色を呈する個体がみられるが、その占める割合は標準サイズ高杯に比べ明らかに高く、大型高杯全体のおよそ４分の３に達している。高杯とは相似形をなす傾向が強い。高杯Ａ～Ｄに対応する形状の個体を確認している。

大型高杯Ａ　14・16・88・149・176・177・178・181・189・191

高杯Ａと相似形をなす大型の有段杯部長脚高杯である。高杯Ａとともに出土する傾向が強い。全形を窺うことできる個体として、302号遺構（竪穴建物跡）から出土した176・181、303号遺構（竪穴建物跡）から出土した189を挙げることができる。

大型高杯Ｂ　128・403

高杯Ｂと相似形をなす大型の碗状杯部を持つ。残存状態良好な個体は出土していない。

大型高杯Ｃ　152・160・205・213・250・277・283・299・402

高杯Ｃと相似形をなす大型の碗状杯部を持つ。高杯Ｃとともに出土する傾向が認められる。脚部を伴う個体は確認していない。比較的良好な個体として、309号遺構（竪穴建物跡）から出土した213を挙げることができる。

なお、脚部の形状については、ある程度推測可能である。当遺跡では、脚柱部と裾部の境で屈曲する有段脚の破片が多数出土している（54・103・113・130・284・285・404）。大きさから判断して、大型高杯の脚部とみられる。杯部を伴う状態で出土した個体はない。近隣の調査例に類例を求めると、高山市国府町三日町の半田垣内遺跡の出土遺物中に、同様の有段脚部大型高杯の比較的良好な個体が認められる[5)]。半田垣内遺跡の出土個体は杯部上半を欠いているものの、同遺跡では大型高杯は当遺跡の大型高杯Ｃに類似するものに限られることから、この形状の脚部が大型高杯Ｃの脚部となる可能性が高いと考える。

壺　29・57・82・106・114・121・214・230・234・253・254・296・300・405～407

土師器では、主に貯蔵具として用いられた器を壺に分類した。法量と器形を基準に、大型品を「壺」、口頸部が直立するのを通例とする中型品を「直口壺」、小型品を「小型壺」に大別した。

大型の壺は17個体図示する。甕などと同様の粗雑な胎土で作られるのが一般的であり、当遺跡で確認された個体も、ほとんどが胎土に砂粒を多く含む。全形を窺える個体はないものの、有段口縁を持つことの確認できるものが大半を占める。多くは遺構内から出土していることから、古墳時代中期に至るまで当地域では有段口縁壺が広く普及していたと捉えることができる。

壺状の形状となるかは定かではないものの、特異な個体として80号遺構（竪穴建物跡）から出土した82を挙げておく。胎土精良で底部は平底である。

直口壺　10・11・37・117・146・156・166・215・255・409

中型の壺である直口壺は10個体図示する。緻密な胎土で作られるのが一般的であり、当遺跡でも37が砂粒を含んだやや粗雑な胎土で作られているほかは、すべて胎土精良である。個体差が大きく、定型というものを見出すのは難しい。橙色を呈するのは１個体（255）にとどまる。残存状態の良い個体では、横方向のヘラミガキ調整が認められる（146・156・166・255）。

小型壺　17・18・42・58・122・165・182・194・239・279・327・328・408

小型壺は13個体図示する。緻密な胎土で作られるのが一般的であり、当遺跡でも194が砂粒を含ん

だやや粗雑な胎土で作られているほかは、すべて胎土精良である。形状からは、丸底で長い口頸部が直立気味に立ち上がるもの（58・165）、平底のもの（182・279・408）、丸底で短い口頸部が広く開くもの（17・194・328）の３類に分けることができる。橙色を呈するのは４個体（17・58・182・279）である。調整技法については、17・18ではハケ目が認められるが、それら以外の調整痕を読み取れる個体ではナデ・オサエ調整を主としている。

甕

主に煮炊具として用いられた器を甕に分類した。91個体図示する。総じて大型の個体が少なく、小振りな個体が多くを占めている。古墳時代中期から後期にかけて炊事形態の変化に連動して顕在化するとされる胴部の長胴化は、ほとんど目立たない。調整技法面では内外面にハケ目を残すのを通例とするが、例外も少なくない。器形は極めて多様である。全形を窺える個体と特徴的な部位の残る個体について、器形や調整技法等に着目して分類すると、概ね以下の15類を提示することができる。主体を占めるのは、このうちの甕Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄである。

甕Ａ　140・282

口頸部は比較的短めで、口縁部外面に面を持つ。胴部の上半部は球形であるが、下半部は丸みを減じて緩やかな円錐形となる。径が最大となる位置は胴部中央よりやや上である。底部は小さな平底である。

全形を窺うことのできる個体は、536号遺構（竪穴建物跡）から出土した282のみである。282は内面下半部に炭化物の付着が認められることから、湯沸かし用ではなく炊飯具としての使用が想定される。130号遺構（竪穴建物跡）から出土した140も近い形状となる可能性がある。当遺跡の甕では最も大型のタイプであり、282では器高28.1㎝を測る。

甕Ｂ　21・61・62・144・225

甕Ａをそのまま小型化したような形状の甕である。当遺跡ではこのタイプの甕が最も多く、甕Ａ・Ｂの形状を標準形と捉えてよいと考える。70号遺構（竪穴建物跡）から出土した62や310号遺構から出土した225のように器高15㎝前後を測るものが多いが、３号遺構（竪穴建物跡）から出土した21のような器高10㎝未満の小型品も出土している。

甕Ｃ　59

底部に低い柱状の高台を持つのを特徴とする大型の甕である。70号遺構（竪穴建物跡）から全形を窺うことのできる個体（59）が出土している。口縁部外面に明瞭な面を持ち、胴部の形状は甕Ａ・Ｂに類似する。内面下半部に炭化物の付着が認められることから、湯沸かし用ではなく炊飯具としての使用が想定される。59のほかにも同様の形状の底部破片が多数出土している（60・158・168・185・193・229）。

甕Ｄ　13・22・235・410

甕Ａ・Ｂがやや長胴化したような形状の甕である。口縁部外面に明瞭な面は持たない。底部は尖底かごく小さな平底である。319号遺構（竪穴建物跡）から出土した235のような器高27㎝を超える大型のものから、１号遺構から出土した13のような器高20㎝未満のものまでみられる。

甕Ｅ　30

30は甕Ｄに類似する形状の甕であるが、より丁寧な作りの精製品である。口縁部外面には明瞭な面

を持ち、胴部内外面の調整に板ナデを多用し平滑に仕上げている。5号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

甕F　77

口頸部は長く、胴部は丸みを帯びた長胴で、底部は丸底となる大型の甕である。80号遺構（竪穴建物跡）から出土した77が唯一の確認個体である。内面下半部に炭化物の付着が認められることから、湯沸かし用ではなく炊飯具としての使用が想定される。

甕G　76・209

76と209は下半部が残存しないものの、ともに直立気味の短い口頸部をもち、胴部以下は甕Fに類似する形状となるとみられる大型の甕である。76は77と同じく80号遺構（竪穴建物跡）から、209は308号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

甕H　411

長胴甕である。包含層出土遺物の中に1個体だけみられる。411は口頸部は短く直立気味で、口縁部外面に明瞭な面を持つ。胴部は肩が張らず、下半部が円錐形となる長胴である。底部は残存しないが、小さな平底か丸底になるとみられる。内面の炭化物の付着は希薄であるので、甑とセットとなる湯沸かし用具としての使用が想定される。

なお、今回の調査では、遺構内からはこれほど長胴化の明瞭な甕は出土していない。

甕I　81・83

長胴気味の胴部を持つ小型甕である。81と83は下半部が残存しないものの、ともに直立気味の長い口頸部を持ち、胴部との境のくびれが不明瞭な器形を特徴とする。81は76・77と同じく80号遺構（竪穴建物跡）から、83は102号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

甕J　175

175は同じく小型甕であるが、より厚手の作りである。口頸部は甕Iに比べ短く、外反する。胴部は減り張りのない寸胴形で、丸底状の底部との間に明瞭な境を持たない。301号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

甕K　75

75は小さな胴部に対して長く外反する口頸部をもち、口径が胴部最大径を上回る小型甕である。胴部は球径で、丸底状の底部との間に明瞭な境を持たない。80号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

甕L　20・280・413

共通する特異な調整の認められる3個体を一括する。20の内面と280・413の外面には、谷部分が幅広の平行線状となる特異な調整痕が認められる。これらは通常のハケ目調整とは異なり、板の小口以外の特殊な原体を使用して器面をなでたか、あるいは平行線を刻んだ叩き板で叩いたものと思われる。

出土地点は、20が3号遺構（竪穴建物跡）、280が536号遺構（竪穴建物跡）、413が536号遺構の属する「4サ」グリッド包含層である。

甕M　141

端部が上方に立ち上がる口縁部を持つ。130－1号遺構（竪穴建物跡内土坑）から出土した141が唯一確認した個体である。

甕N　172

Ｓ字状口縁台付甕である。飛騨地域ではわずかしか出土しないことが知られている。当遺跡で確認できたのは、182号遺構（ピット）から出土した頸部破片（172）のみである。

甕Ｏ　198

198は全形を窺うことのできる個体ではないものの、調整技法や胎土に他の個体にはない特徴が認められる。胴部内面には横方向のヘラ削り調整、胴部外面下半部には丁寧なナデ調整を施す。胴部外面上半部には、当遺跡では他に例を見ない細かな縦方向のハケ目が認められる。胎土も土師器甕としては例外的に緻密である。他の甕に比べて異質であることから、搬入品である可能性が高い。出土地点は305－１号遺構（竪穴建物跡内ピット）である。305号遺構からは大阪府・陶邑窯産とみられる須恵器杯身（201）も出土しており、関連性が考えられる。

（２）須恵器

須恵器は当遺跡では土師器に次いで出土数の多い遺物である。破片数で2,017点確認した。ただし、先にも記した通り、このうちのほぼ４分の３に当たる1,499点はａ区包含層から出土したものである。ａ区の西方に近接する野内遺跡Ｂ地点では古代を中心とする集落跡を確認しているので、それらの大部分はＢ地点からの流入遺物と考えられる。遺構内から出土した須恵器は、混入品とみなすべきものを含めても全地区合わせて199点にとどまり、遺構内出土遺物の1.45％を占めるにすぎない。

確認した器種は、食膳具に属するものとして、杯蓋（つきふた）・杯身（つきみ）・摘み蓋・無台杯・返り蓋・有台杯・無台碗・有台碗・有台盤・高杯、貯蔵具に属するものとして、瑳・壺・鉢・瓶・甕、その他特殊器種として陶錘がある[6)]。

杯蓋　419

丸みを帯びた天井部から垂直気味に体部が下りる器形をなす蓋を杯蓋とする。古墳時代に盛行する器種で、次に掲げる杯身とセットになる。

当遺跡での出土破片数はごく少数にとどまり、遺構内出土遺物中には見当たらない。図示できるのはｂ東区の「５セ」グリッド包含層から出土した１個体のみである。419は小破片であるため型式的特徴を十分に読みとることができないが、体部が直線的でほぼ直立することや天井部と体部の境に沈線を伴う稜を持つことから、古墳時代中期にまで遡る遺物の可能性がある。

杯身　201・343・344・420

底部と体部の境が明瞭でなく、体部の先端部に蓋を受ける立ち上がり部を持つ器形の杯を杯身とする。杯Ｈとも通称される古墳時代の器種である。４個体図示する。

305号遺構（竪穴建物跡）から出土した201は全形を窺うことができ、特に注目すべき遺物である。読み取れる特徴を列挙する。

①口縁部の形状を初めとして、全体にあまり鋭い作りとの印象を受けない。

②立ち上がり部はあまり内側に傾かず直立気味で、高さは器高のほぼ半分を測る。

③底部はあまり丸くならず平らである。

④外面の回転ヘラ削り調整の範囲は、底部全面にとどまらず立ち上がり部を除いた体部の過半に及んでいる

以上から、古墳時代中期に属する初期の須恵器であることは疑う余地はない。こうした特徴を備えた須恵器を焼成した窯の存在は、飛騨地域はもちろん県内では知られていない。北陸、長野といった

周辺地域でも同様に確認されていない。したがって、古墳時代中期の段階ですでに東北地域から九州地域まで流通したとされる大阪府・陶邑窯跡群の製品である可能性が高いと考える。上記の特徴を陶邑窯編年に照らしてみると、中村浩氏による編年のⅠ型式２段階、田辺昭三氏による編年のＴＫ216型式に当てはまる[7]。

343・344・420の３個体は包含層出土遺物である。蓋を受ける立ち上がり部の長さが短く、立ち上がり方向も斜めであるなど、より新しい時期の遺物にみられる特徴を示している。古墳時代後期の遺物とみてよいであろう。

摘み蓋 302

天井部に摘みが付き、口縁部が折り返され、内面に返りを持たない蓋を摘み蓋とする。律令時代に広く普及した器種である。

図示できるのは１個体のみである。302は天井部中央を欠くものの、当遺跡では摘みが省略されたタイプの蓋、すなわち平頂蓋は確認されていないため、摘みがつく個体と判断した。今回の調査区では例外的に新しい時期の竪穴建物跡である602号遺構（竪穴建物跡）から出土した。

返り蓋

天井部に摘みが付き、口縁部内面に返りを持つ蓋を返り蓋とする。ａ区とｂ東区の包含層から出土しているが、遺構内からの出土例は確認されていない。図示できる個体はない。

無台杯 345

高台を持たない平らな底部から直線的に斜め上方へ体部が延びる器形の杯を無台杯とする。杯Ａとも通称される律令時代の器種である。

図示できるのは１個体のみである。345は底部から体部上半部にかけての破片で、底部の切り離しはヘラ切りによる。切り離しののち、底部外面にはナデ・オサエ調整を施している。ａ区の包含層から出土した。

有台杯 303・331・346・421・422

無台杯に高台がついた器形の杯を有台杯とする。律令時代に広く普及した器種であり、杯Ｂとも呼ばれる。５個体図示する。

底部外面の調整技法は、303・422では回転ナデ、421では回転ヘラ削りである。303は古代の竪穴建物跡である602号遺構（竪穴建物跡）から出土した。331は古墳時代の竪穴建物跡である603号遺構から出土したが、重なり合う602号遺構からの流入品である可能性が高い。346・421・422は包含層出土遺物である。

無台碗　304～307・347・348・423・424

杯にくらべ底径が小さく体部が外反する器形のものを碗とする。そのうち高台を持たないものを無台碗とする。律令時代後期に現れる器種とされる。８個体図示する。

底部の切り離しを回転糸切りによって行うもの（305・347）と、ヘラ切りによるもの（304・306・307・423・424）とが混在する。602号遺構（竪穴建物跡）から伴出した４個体中にも両者が混在することから、製作技法の異なる複数の窯の製品が同時期に流通した可能性が考えられる。なお、高山市の北隣に位置する飛騨市古川町域では、無台碗の底部外面には回転糸切り痕が残るのを通例とすることが知られているが[8]、今回の調査結果から、同じ飛騨地域内でも当遺跡の属する高山市域では様相

を異にすると予想される。

有台碗　308・349

高台を持つ碗を有台碗とする。律令時代後期の器種である。全形を窺うことのできる個体は出土していない。308は底部の破片である。349は体部の破片であるが、有台碗である可能性が高い。

有台盤 309～312

扁平な皿状の体部を持ち、口縁部が明瞭に屈曲する器形のものを盤とする。そのうち高台を持つものを有台盤とする。律令時代後期の器種である。図示できるのは602号遺構（竪穴建物跡）からまとまって出土した４個体のみである。

高杯 63・72・169・350～352

碗・杯・皿・鉢の底部に高い台脚が付くものを高杯とする。不確実なものも含め６個体図示するが、全形を窺うことのできる個体はない。

瑞　64・425～428

球形の胴部の中央に円孔を穿つ壺を瑞とする。不確実なものも含め５個体図示する。

70号遺構（竪穴建物跡）から出土した64は、胴部以下が完全な形で残っており、今回の調査で出土した須恵器全器種の中で最も残存状態の良い個体である。胴部下半と底部の外面には手持ちヘラ削りを施したのち、丁寧なナデ調整を加えて平滑に仕上げている。比較の対象となる類例がほとんど見当たらない特異な個体であり、さらに口頸部を欠くため型式的特徴を十分に読み取れないことから、帰属時代の位置付けが難しい。しかし、今回の調査区では、先に記した通り、陶邑窯中村編年Ⅰ型式２段階（田辺編年のＴＫ216型式）の遺物とみられる須恵器杯身（201）が出土し、さらに今回の調査区に隣接する高山市調査地点では、同じく陶邑窯編年Ⅰ型式２段階（ＴＫ216型式）の典型例に近いとみられる瑞１個体が出土している[9)]。この瑞についても、それらと同時期の遺物と捉えることに違和感はないと考える。ただし、70号遺構の他の出土遺物に目を向けると、土師器高杯は高杯Ａ（有段杯部長脚高杯）とみられる個体（50）と高杯Ｃ（碗状杯部低脚高杯）とみられる個体（56）が混在しており、須恵器杯身（201）の出土遺構である５号遺構が碗状杯部低脚高杯で占められるのに比べ古い様相を示すと捉えられる。したがって、64については、さらに１段階遡る可能性も排除せずにおく。

包含層から出土した４個体（425～428）は、胴部の円孔が確認できる428は別として、小型の壺となる可能性もある。

壺・鉢 291・313・314・353・354

口の狭まった器形の器を壺とする。また、より口の開いた器形の大型の器を鉢とする。鉢については、食べ物を盛ったり調理したりする機能も想定されるため厳密には貯蔵具とは言い切れないが、小破片で出土した場合には壺との判別が困難であるので、まとめて扱う。全形を窺うことのできる個体は出土していない。

図示した５個体のうち、小型壺の胴部破片とみられる291のみ帰属時代が古墳時代中期にまで遡ると考えるが、瑞となる可能性もある。

甕 31・45・108・151・170・237・246・257・292・342・355

須恵器では、壺・鉢より大型で口が大きく開き、頸の短い器形の貯蔵具を甕とする。今回の調査で出土した須恵器貯蔵具破片の大半は甕の破片とみられる。多くは小破片の状態で出土したが、古墳時

代中期の遺構内での確認例も多い器種である。全形を窺える個体はない。11個体図示する。

５号遺構（竪穴建物跡）から出土した31は比較的残存状態の良い口頸部の破片である。胴部が残存せず全形を窺うことはできないものの、口縁部や頸部稜の鋭い作りや堅緻な焼成具合から、古墳時代中期の須恵器との印象を受ける。この破片単体の型式的特徴のみから帰属時代を特定するのは確実性を欠くと判断するので、同じ遺構内の出土遺物に目を向けてみると、全形を窺えるものとして土師器高杯（28）がある。28は当遺跡では主体を占める高杯Ｃ（碗状杯部低脚高杯）である。しかし、５号遺構からは縄文時代の打製石斧（32）も出土しているので遺構埋土の堆積状態が安定したものでなかった可能性があり、28と31の関係を伴出と捉えてよいかはやや疑問が残る。そこで念のため近隣の遺跡に類例を求めてみると、類似する口頸部を持つ完形個体が高山市国府町の半田垣内遺跡で出土しているのが注目され[10]、肩の張るやや扁平な胴部を持ち、陶邑窯編年のＩ型式２段階に属すると報告されている。また、この個体は当遺跡の高杯Ｃ（碗状杯部低脚高杯）に極めて近い土師器高杯と共に出土しており、この点も31と共通する。以上から31については、碗状杯部低脚高杯と概ね同時期、陶邑窯編年のＩ型式２段階（ＴＫ216型式）並行期かそれに近い遺物と考えてよいと判断する。

その他、遺構内から出土した破片には同様に堅緻な破片が多く、それらの中には帰属時代が古墳時代中期にまで遡るものがかなりあるとみられる。

陶錘 315

漁撈用の焼物のおもりを陶錘とする。平安時代の竪穴建物跡である602号遺構から出土した315が、今回の調査における唯一の確認個体である。紡錘形で貫通孔を持つ。なお、当遺跡では灰釉陶器と同じ胎土、同じ焼成の陶錘も出土しており、それらは次頁で扱う。

（３）灰釉陶器

灰釉陶器は破片数で316点確認した。内訳は、食膳具（碗・皿）257点、貯蔵具（瓶類）57点、その他特殊器種（陶錘）２点である。大部分はａ区包含層から出土している。混入品でないとみなし得る遺構内出土品は、602号遺構（竪穴建物跡）から律令時代の須恵器と共に出土した碗１個体（316）のみである。

胎土は美濃地方の製品に比べてやや粗いという印象を受けるものが大半を占めており、それらの多くは在地の製品とみられる。色調は須恵器に近い灰色、あるいは灰黄色を呈するものが多い。

碗　316・356～365

口縁部が外に開く碗形の体部と高台を持つ底部を器形の基本とする器種である。11個体図示する。

断面形が三日月形を呈する三日月高台を持つのを基本とするが、器形面ではバラエティに富んでおり、定型と言えるものを見出すのは難しい。図示した11個体中、人為的な施釉の認められるのは、大型の個体である358・360・361のみである。底部外面に回転糸切り痕を残す個体は認められない。

皿　332・366・367・429

碗をそのまま扁平にした器形の器種である。すべて高台を持つ。４個体図示するが、この中には碗との判別が難しい個体も含む。

図示した４個体中に施釉が認められるものはない。367と429では底部外面中央部に回転糸切り痕を残している。366は他の個体に比べて目立って胎土が緻密で調整も丁寧であり、色調も白っぽく灰白

色を呈することから、東濃（美濃東部）地域からの搬入品の可能性がある。

なお、段皿や耳皿は出土していない。

瓶　370・371・430

壺形の器を瓶とする。3個体図示する。

370が全形を窺うことができる唯一の個体である。灰白色を呈するが胎土は緻密ではなく、調整は粗い。人為的な施釉は認められない。371には外面に灰釉が認められるが、人為的な施釉か否かは判然としない。371はとりあえず灰釉陶器の水注と判断したが、中世の古瀬戸系施釉陶器の可能性もある。

陶錘 368・369

灰釉陶器では陶錘という器種は一般的ではないが、当遺跡の出土遺物の中には灰釉陶器の碗・皿と同質の胎土で作られ色調も共通する陶錘がみられるので、それらは須恵器の陶錘とは区別して扱った。図示した2個体（368・369）は紡錘形で貫通孔を持つタイプで、須恵器の陶錘として報告した315に比べ大型である。

（4） その他の土器・陶磁器類

縄文土器　236・431

縄文土器は破片数で55点確認した。今回の調査では縄文時代の遺構は確認されず、それらはすべて後世の遺構に混入した遺物である。全形を窺える個体はない。2個体図示する。431は今回の調査で出土した最も残りのよい破片で、深鉢の口縁部から胴部にかけての部位にあたる。縄文時代晩期の遺物である可能性が高い。236は胴部の小破片であるため器種は判然としないが、同様に深鉢である可能性が高い。

弥生土器 372・432

弥生土器は破片数で5点確認した。ただし、小破片では古墳時代の土師器との判別が難しいケースがあり、それらの多くは土師器として数えているので、実数はやや多い可能性がある。全形を窺える個体はない。すべて包含層出土遺物か後世の遺構に混入した遺物である。372は櫛描文のある胴部破片、432は櫛歯状原体による列点文のある胴部破片である。

輸入磁器 373～375

破片数で6点（6個体分）確認した。青磁と白磁が3点ずつである。遺構内から出土したものはない。青磁はいずれも龍泉窯系とみられる。図示した373は碗の体部破片で、外面に連弁文が認められる。374と375は白磁碗の口縁部破片とみられる。

山茶碗 376・377

山茶碗と総称される無釉の陶器は、東海地方の広い範囲で中世における主要な日常雑器としての地位を占めるが、飛騨地域ではあまり出土せず、当調査区でも破片数で11点確認できたにすぎない。確認した器種は碗と鉢のみであり、中世後期にみられる無高台の小皿は全く出土していない。いずれもａ区の出土遺物で、遺構内から出土したものはない。2個体図示する。376は碗の底部で、高台端部に籾殻痕が認められる。胎土が均質で緻密であり、灰白色を呈することから、美濃から尾張瀬戸窯（北部）にかけての地域で生産された「北部系（均質手）山茶碗」であるとみられる。377は大型器種

の口縁部破片で、山茶碗窯で併焼された無釉の鉢とみられる。砂粒を多く含む粗い胎土から、瀬戸窯（南部）から猿投窯にかけての地域で生産された「南部系（荒肌手）山茶碗」とみられる。美濃及び尾張地域で生産され、搬入された可能性が高いであろう。

珠洲焼 378・379

平安時代後期から中世かけて能登国珠洲地域で生産された須恵器系陶器である珠洲焼は、破片数で６点確認した。ただし、小破片では古代の須恵器との判別が難しいケースがあり、それらの多くは須恵器として数えているので、実数はやや多い可能性がある。全形を窺える個体はない。確認できた器種は、擂鉢と甕である。すべて包含層出土遺物で、地区別ではｂ西区２点、ａ区４点であり、調査区西半に偏っている。図示した２個体はいずれも擂鉢の口縁部から体部にかけての破片で、体部内面に擂り目が認められる。

中近世施釉陶器 380～382・433・434

中世から近世にかけての施釉陶器は、破片数で372点確認した。それらの多くはａ区とｂ西区の包含層から出土しており、調査区西半に偏る傾向が認められる。小破片では帰属時代を明らかにできない場合が多いため、破片数を数えるに当たっては、中世の遺物と近世の遺物とを分けることは行わなかった。ただし、傾向としては、近世、それも後期の遺物が大部分を占める傾向が顕著である。厳密に産地を特定することは事実上不可能と判断したため産地で分けることも行っていないが、瀬戸・美濃の製品が大部分を占めるとみられる。それ以外では、小破片のみで図示できる個体はないものの、越前ないし常滑の製品が少数ながら認められる。ただし、常滑の「赤物」と呼ばれる近世の軟質陶器の有無については、遺物の残存状態が全般に良好ではないことから判然としない。

380・381・382は近世の碗である。434は体部外面に回転施文を施した鎧（よろい）湯呑で、近世後期の美濃地方の製品である。433は小型の天目茶碗で、今回の調査で出土した施釉陶器の中では比較的古く、藤澤良祐氏による古瀬戸編年[11]に照らせば古瀬戸後Ⅳ期（15世紀半ば～後期）に属するとみられる。

近世磁器

破片数で19点確認した。ただし、帰属時代が近代にまで降るものを小破片に至るまで厳密に分別することは困難であるので、ある程度、近世初頭の遺物を含んだ数量の可能性が高いことをお断りしておく。肥前産の磁器が含まれるか否かは判然としない。全形を窺える遺物がないため図示した個体はないが、大部分は近世末期の染め付けの碗と湯呑である。

その他

器種不明の土師質・瓦質土器の小破片が18点出土している。いずれも小破片であるため、近世の瓦質土器の可能性のある破片がａ区の撹乱層から１点出土しているほかは、帰属時代や器種を特定できるものはない。

第３節　土器・陶磁器類以外の遺物

（１）金属製品

金属製品の出土数は７点と極めて少ない。近代以降の製品である可能性の高いものと近代の銭を除外すると、器種を推定できる程度に残っていたのは、次の１個体のみである。

鉄釘　39

39は鉄製の釘である。頭部は残っていない。６－２号遺構（竪穴建物跡内ピット）から出土した。

（２）鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物に属するものとしては、鉄滓（てっさい）38点と炉壁10点を確認した。ただし、出土状況から判断して、この中には古墳時代より新しい時代に属する遺物を相当数含む可能性が高いことをお断りしておく。鉄滓７点と炉壁１点を図示する。

鉄滓　40・65・147・148・293・294・435

鉄滓のうち遺構内から出土したのは19点である。それらの出土した４基の竪穴建物跡、７号遺構、70号遺構、130号遺構、553号遺構では、鉄製品を加工する鍛冶作業が行われた可能性がある。図示した７点のうち、40・65・148は碗形滓である。553号遺構から出土した293・294は密度が高く、鉄塊状である。

なお、「14カ」グリッドにおいて、包含層から炉壁とともに鉄滓が出土した。その中で最も大型のものを図示しておく（435）。極めて大型であることから鉄の製錬に伴う鉄滓とみられる。ただし、両グリッドでは遺構は検出されず、包含層からは古墳時代から近世に至る広い時代幅の遺物が出土したため、帰属時代は明らかでない。

炉壁　436

「14カ」から「14キ」グリッドでは、鉄滓とともに炉壁とみられる被熱粘土塊が10点出土した。最も大型のものを図示する（436）。稲藁を切断した「スサ」を混ぜた粘土（スサ混じり粘土）で作られている。強く熱を受けており、表面には鉄滓が付着している。鉄の製錬に伴う遺物であろうが、前述の通り遺構が検出されなかったグリッドで出土しているため、帰属時代は不明である。

（３）石器・石製品

石器・石製品は18点確認した。帰属時代を特定できないものも多いが、縄文時代から古墳時代に至る時代幅の遺物が混在する。確認できた製品は、砥石３点、打製石斧８点、石鏃１点である。このほか石核・剥片が６点出土している。製品のうち、比較的残りの良い10点を図示する。なお、石材の判別は肉眼観察による。

砥石　124・437

出土した石器・石製品のうち、古墳時代の遺物の可能性が高いのは砥石のみである。２点図示する。124は表面と裏面の２面を砥面として使用している。両面とも細かい線条が認められるほか、表面には金属製品によるとみられる筋状の傷が残る。石材は砂岩とみられる。129号遺構から出土した。437は表面・裏面・左側面・右側面の４面を砥面として使用したことが確認できる。石材は粘板岩である。

打製石斧　32・109・438～442

打製石斧は７個体図示する。石材は、439と441が砂岩であるほかは、いずれも凝灰岩とみられる。32が５号遺構（竪穴建物跡）から、109が121号遺構（竪穴建物跡）から出土しているが、いずれも混入品であろう。

石鏃　383

出土した石鏃は、図示した１点のみである。383は無茎鏃で、石材は下呂石である。

第４章　注

１）近代以降の遺物であることが明らかなものは遺物として数えていない。土器・陶磁器類では、原則として１㎝四方以下の小破片については除外した。対象外とした微細な破片まで含むならば、今回の調査における出土遺物総点数は約２万８千点である。

　出土遺物の計量的分析を行うに当たり種別レベルでの接合前破片数を数える方法を選び、器種毎の破片数を求めなかったのは、第一に、小破片の多い当遺跡の土師器について破片から器種識別を行った場合、再現性の保証される計量にならないと判断したためである。また、種別によっては出土数の限られるものもみられることから、遺物の分布や遺物組成の全体傾向を捉えるには母数を大きくとれる方法を採用するのが有利とも考えた。とは言え、出土傾向を反映するように掲載個体を選ぶことにより、掲載個体数比をもとに比例配分して器種毎の破片数を求めることも可能なように配慮してある。

　なお、本書では破片数と個体数を厳密に区別して表記しているが、個体数と破片数を区別することにあまり意味がないと判断される鉄滓、炉壁、石器・石製品については破片数のみを記している。

２）「包含層出土遺物」には、近代以降の攪乱層から出土したものや地表面で採集されたものなど、遺構外出土遺物全般を含むものとする。

３）甑の可能性のある小破片１点が３号遺構から出土しているが、断定するには至らなかった。なお、牛丸岳彦氏のご教示によれば、隣接する高山市調査地点では確実に甑と判断される個体が出土しているとのことである。

４）当遺跡の実情に即して大型高杯と高杯を分別したため、大型高杯には一般的に大型高杯とされるものよりやや小さな個体を含む結果となっている。

５）国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡　１次・２次発掘調査報告書』所載の第２図遺物番号６番。

６）須恵器の分類と名称については、原則として第１回東海土器研究会で提示されたものに従った。次の文献を参照されたい。
東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』。

７）陶邑窯跡群についての編年を引用する場合には、全国的に準用される中村浩氏によるものを記し、田辺昭三氏によるものも適宜併記することとする。出典は次の通りである。
中村浩1981『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房。
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店。

８）太江遺跡・寿楽寺廃寺跡（飛騨市古川町太江）や西ヶ洞廃寺跡（飛騨市古川町寺地）で出土した無台碗について、底部が残存する個体では底部の切り離しはすべて回転糸切りによることを確認している。財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡Ⅱ』及び、同2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平５号古墳』を参照。

９）高山市教育委員会の牛丸岳彦氏からご教示を得た。詳細は未報告であるが、次の文献に記載がある。
高山市教育委員会2005「野内遺跡」『岐阜県新発見考古速報　2005』（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター。

10）国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡　１次・２次発掘調査報告書』所載の第９図遺物番号１番。

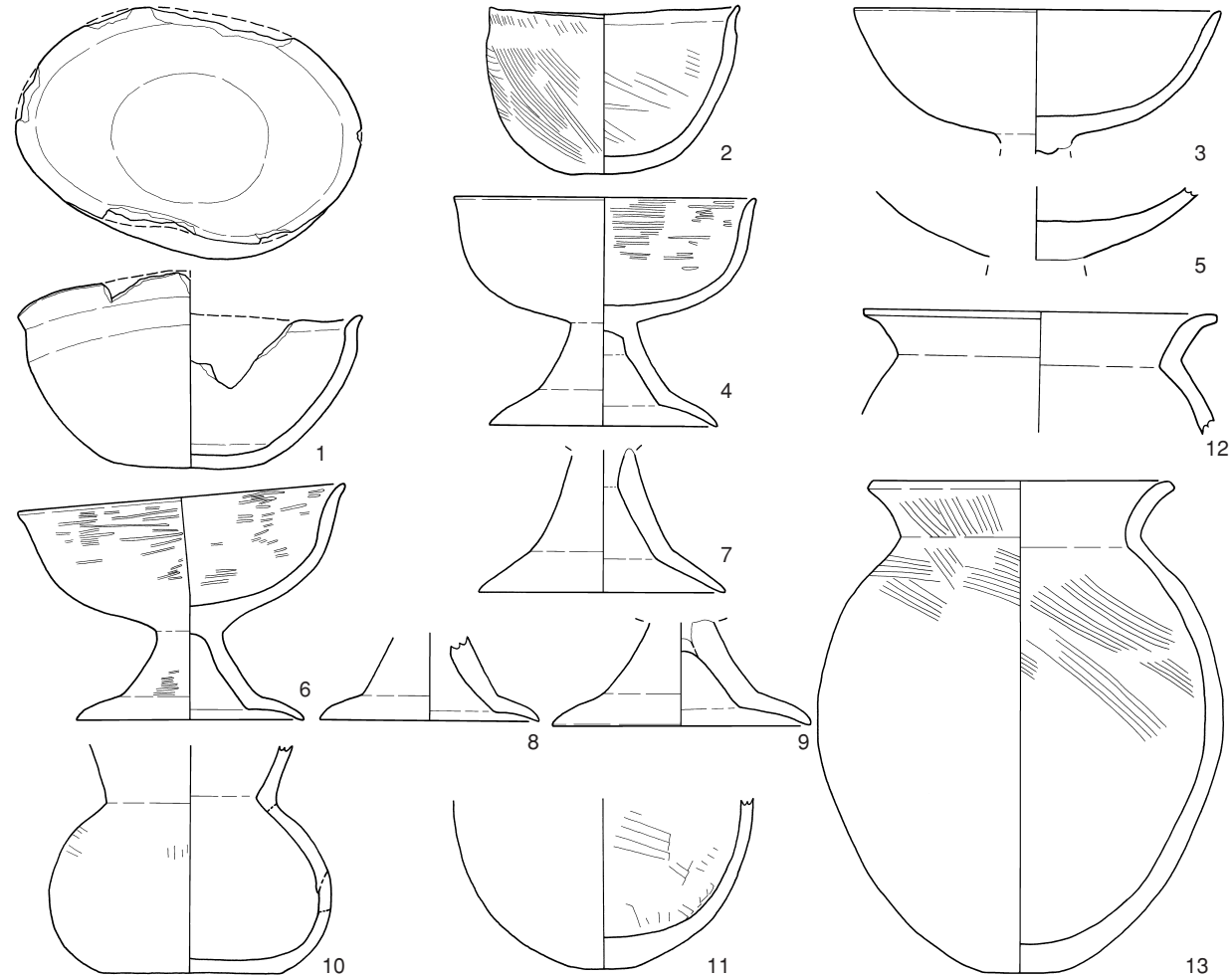
11）藤澤良祐1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター。

遺物実測図

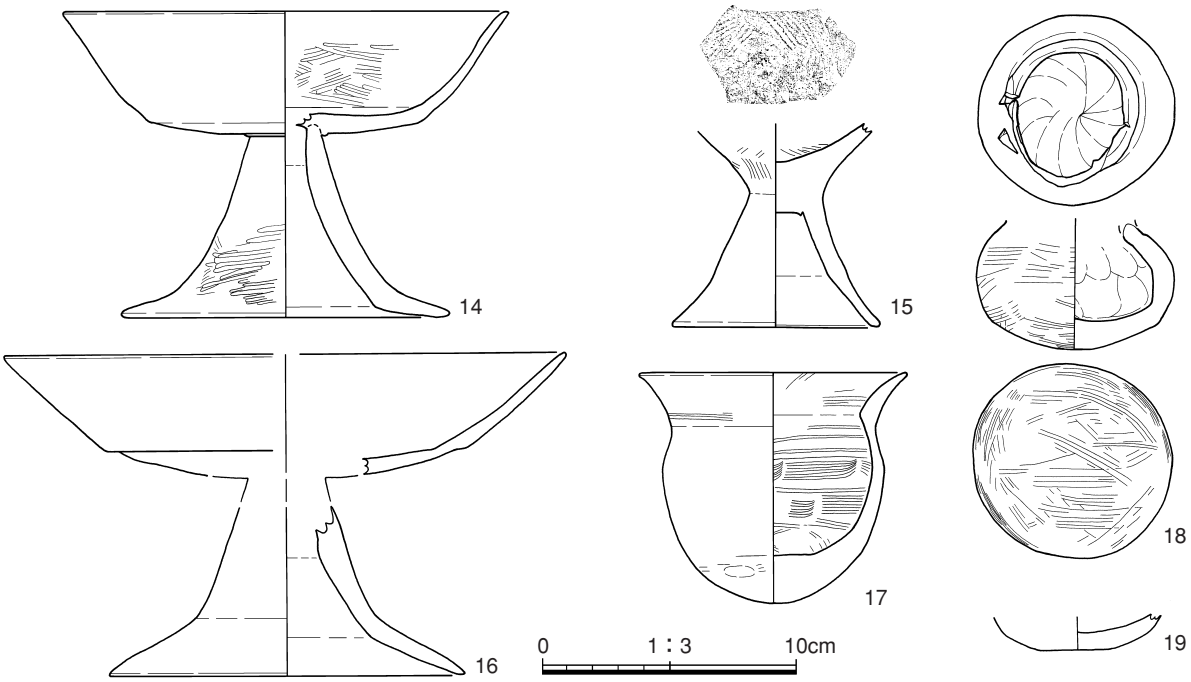
凡例

1　断面を黒色で塗りつぶした個体は須恵器である。
2　図の中心線の左右を空白としたものは、径や傾きの推定が困難な個体である。
3　一点鎖線は施釉範囲を示す。
4　掲載縮尺
　①土器・陶磁器類：1/3
　②金属製品：1/2
　③鍛冶関連遺物：1/2
　④石器・石製品：石鏃2/3、石斧・砥石1/3

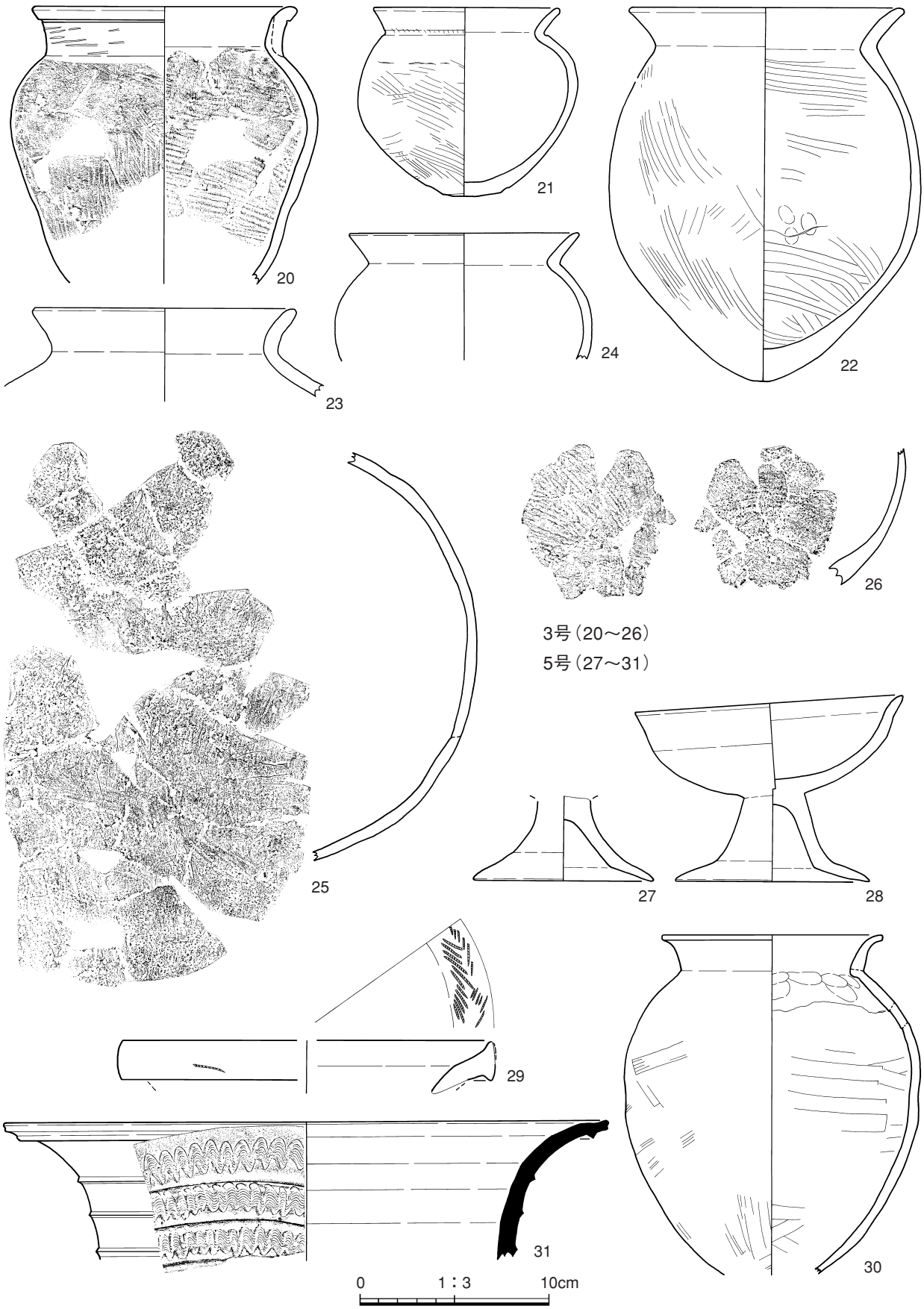
1号（1～13）



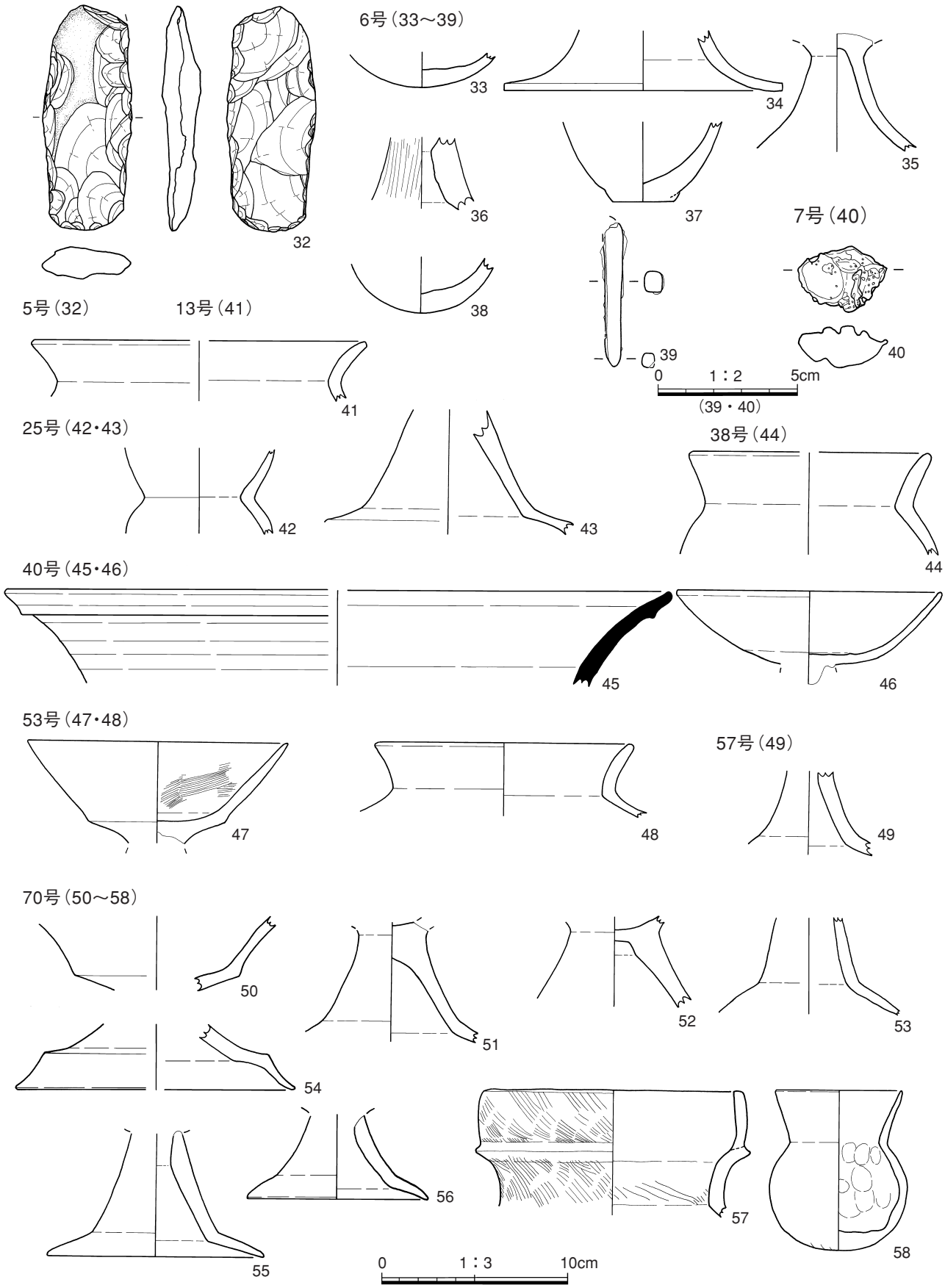
3号（14～19）



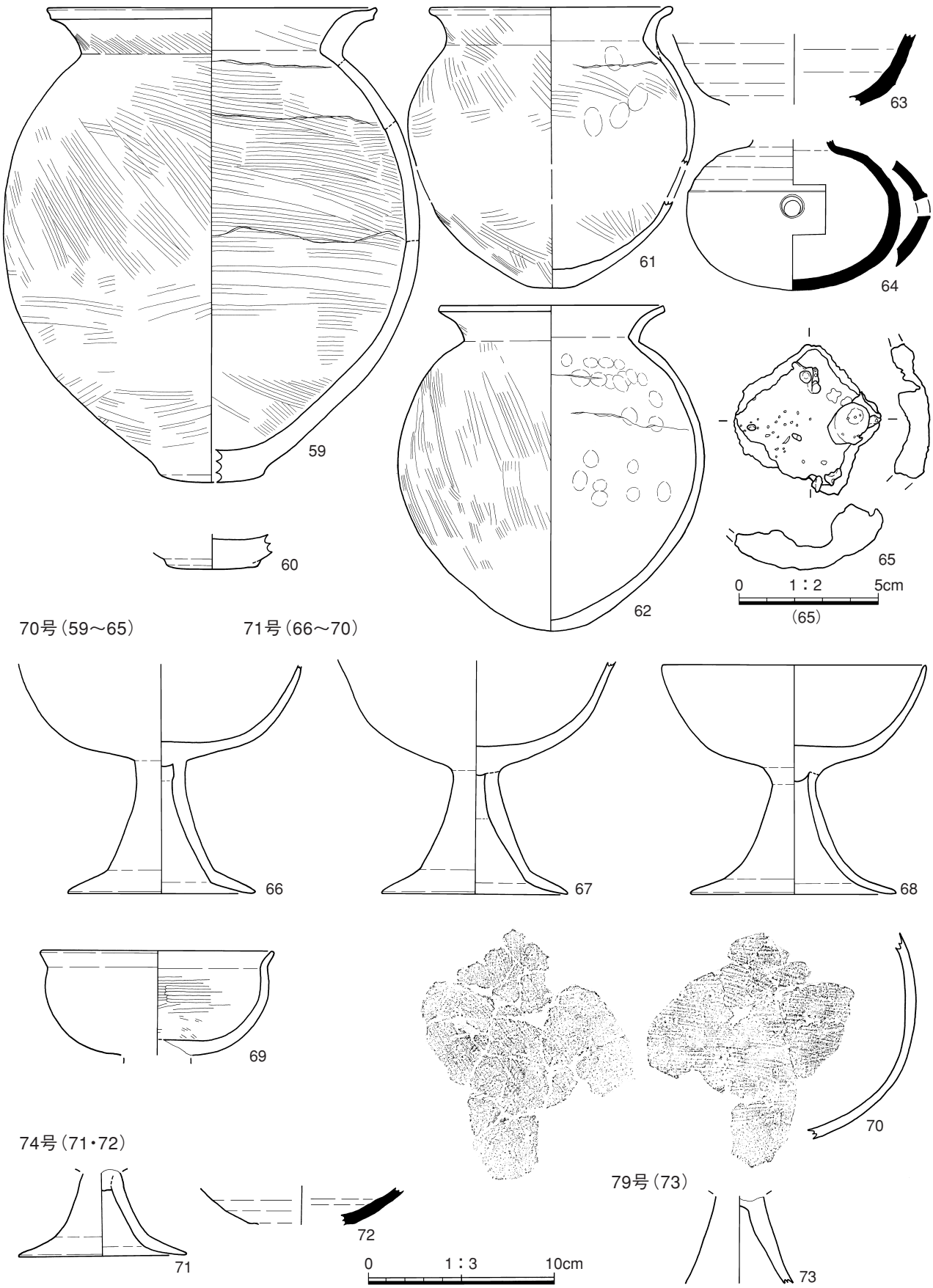
第66図 竪穴建物跡（1・3号遺構）出土遺物



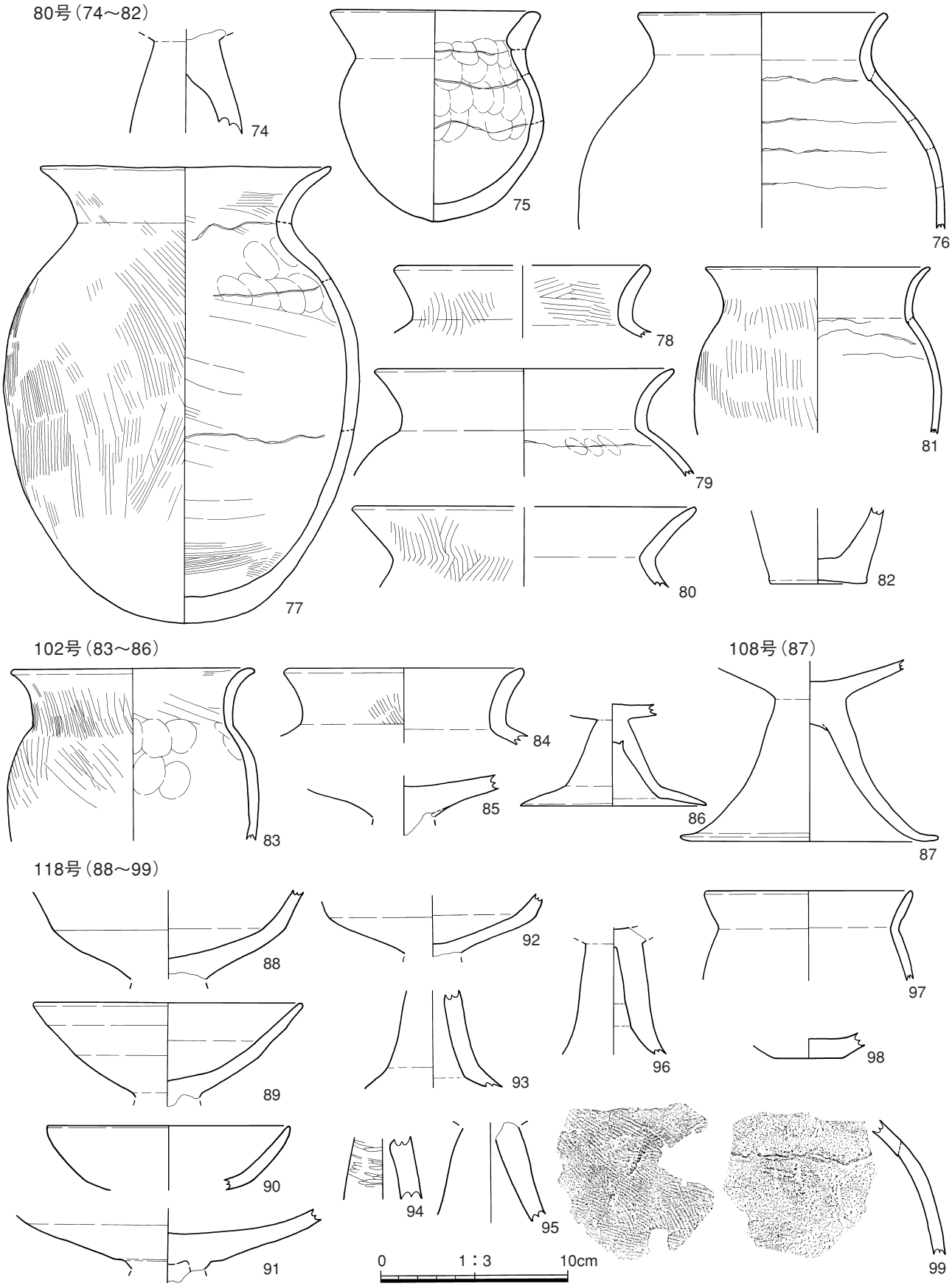
第67図　竪穴建物跡（3・5号遺構）出土遺物



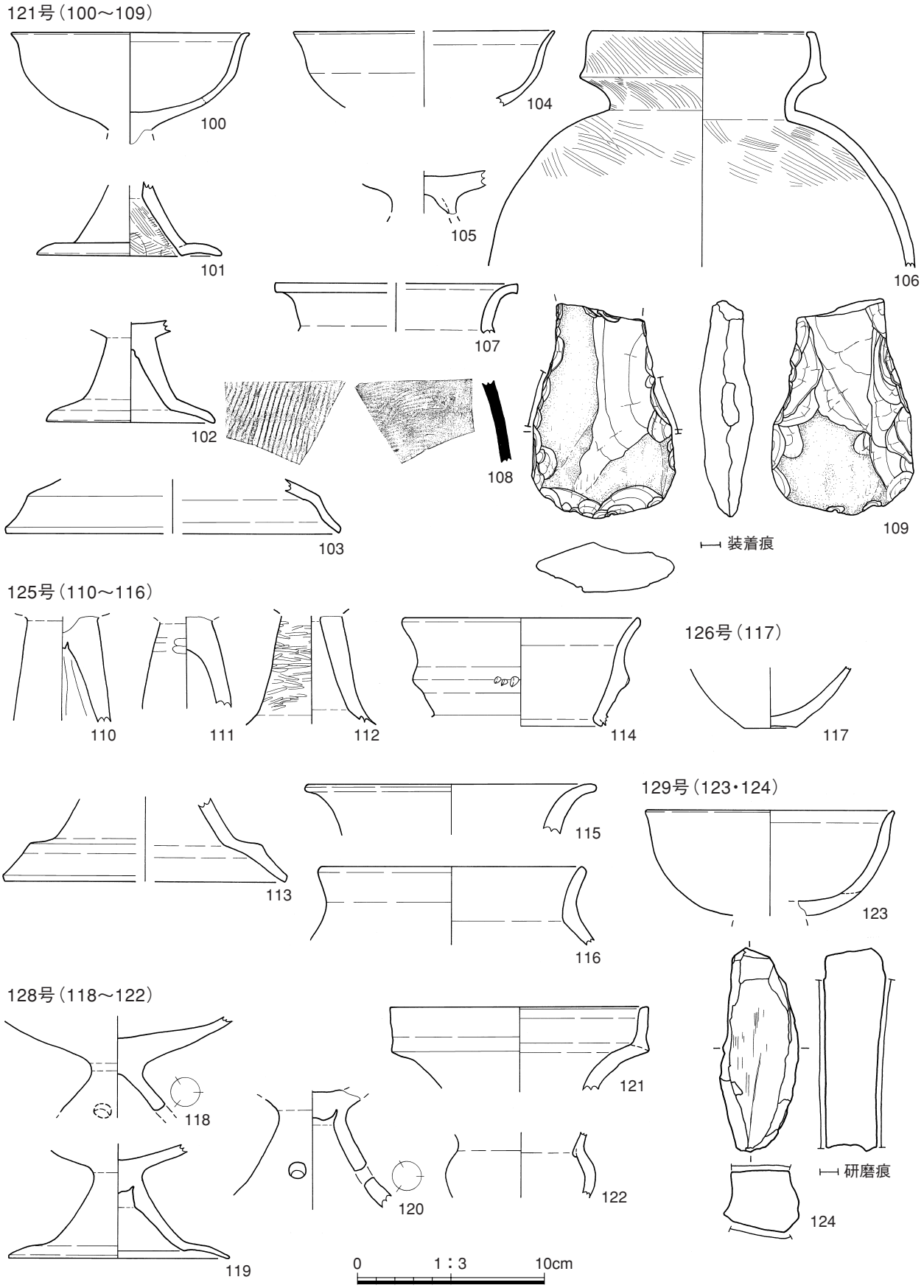
第68図 竪穴建物跡（5・6・7・13・25・38・53・57・70号遺構）・土坑（40号遺構）出土遺物



第69図　竪穴建物跡（70・71号遺構）・土坑（74・79号遺構）出土遺物

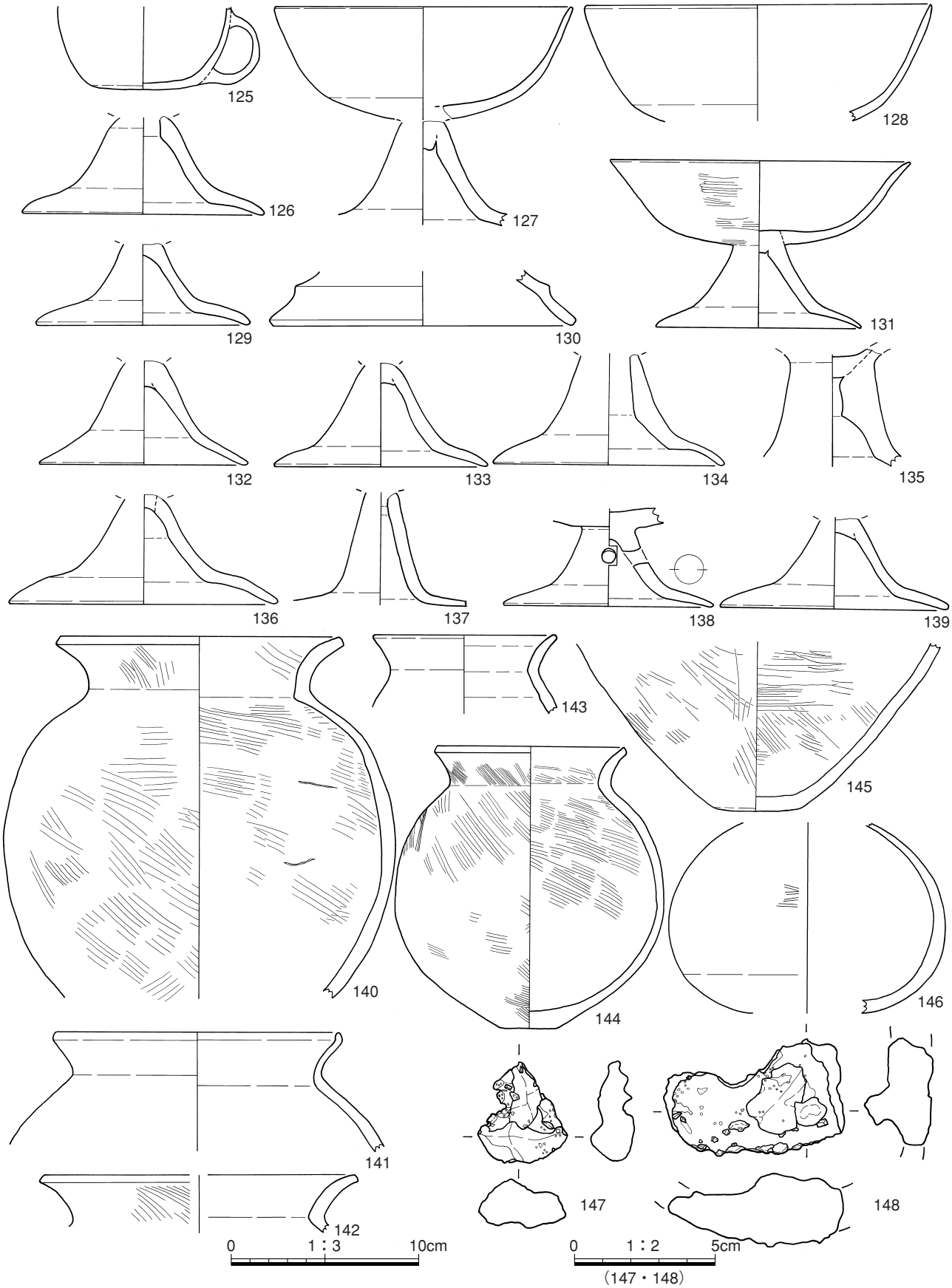


第70図 竪穴建物跡（80・102・118号遺構）・ピット（108号遺構）出土遺物

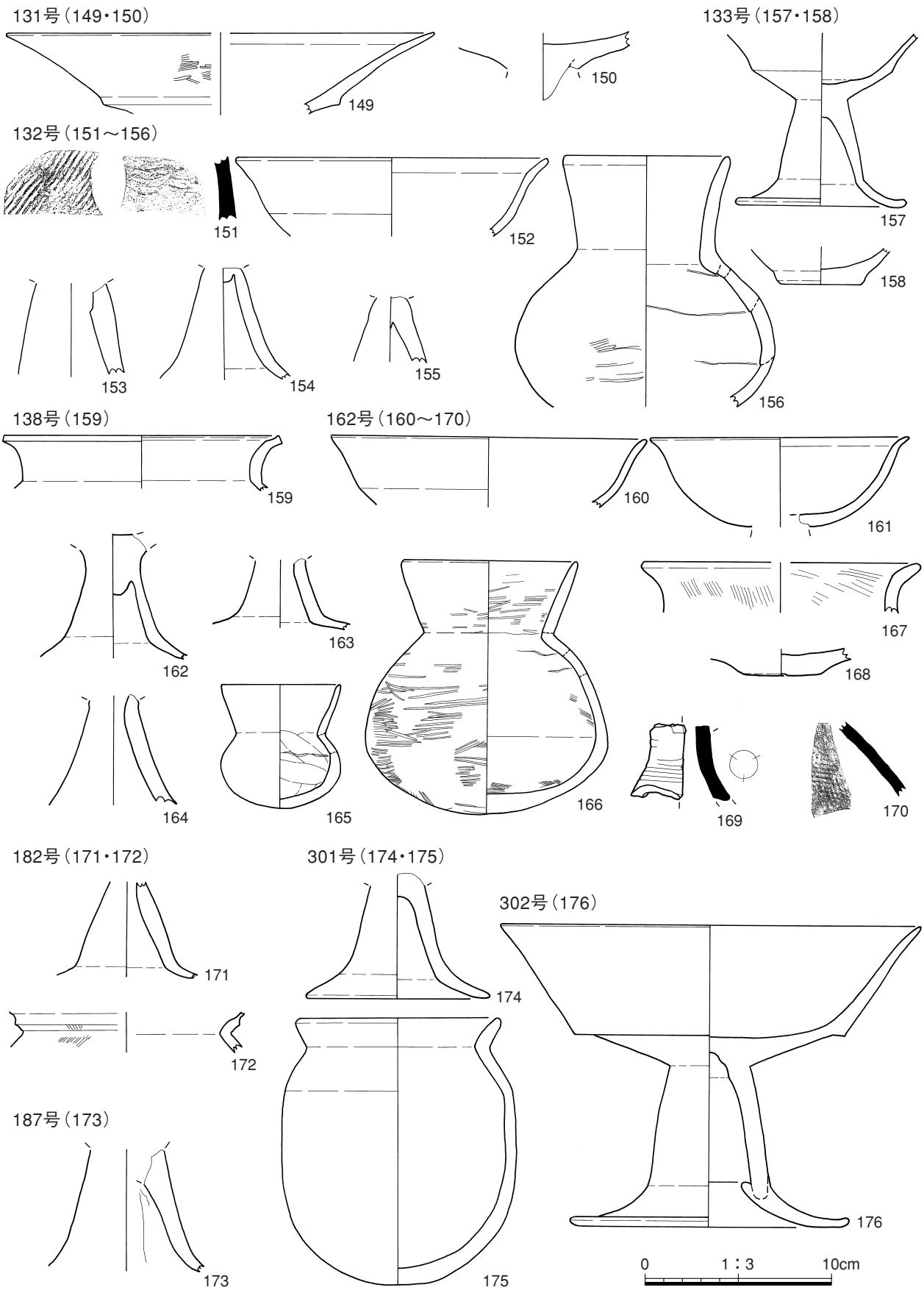


第71図 竪穴建物跡（121・125・128・129号遺構）・土坑（126号遺構）出土遺物

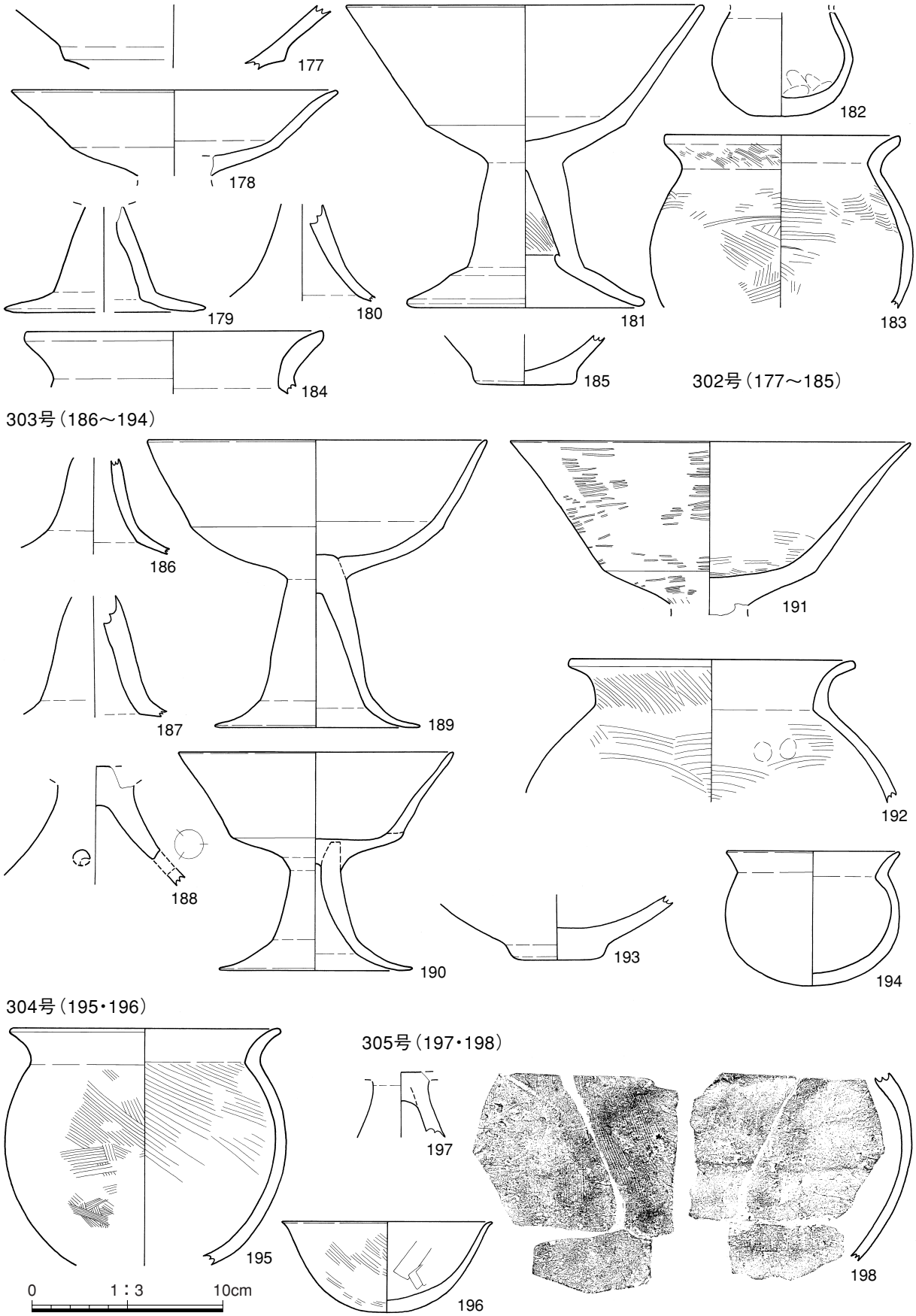
130号（125～148）



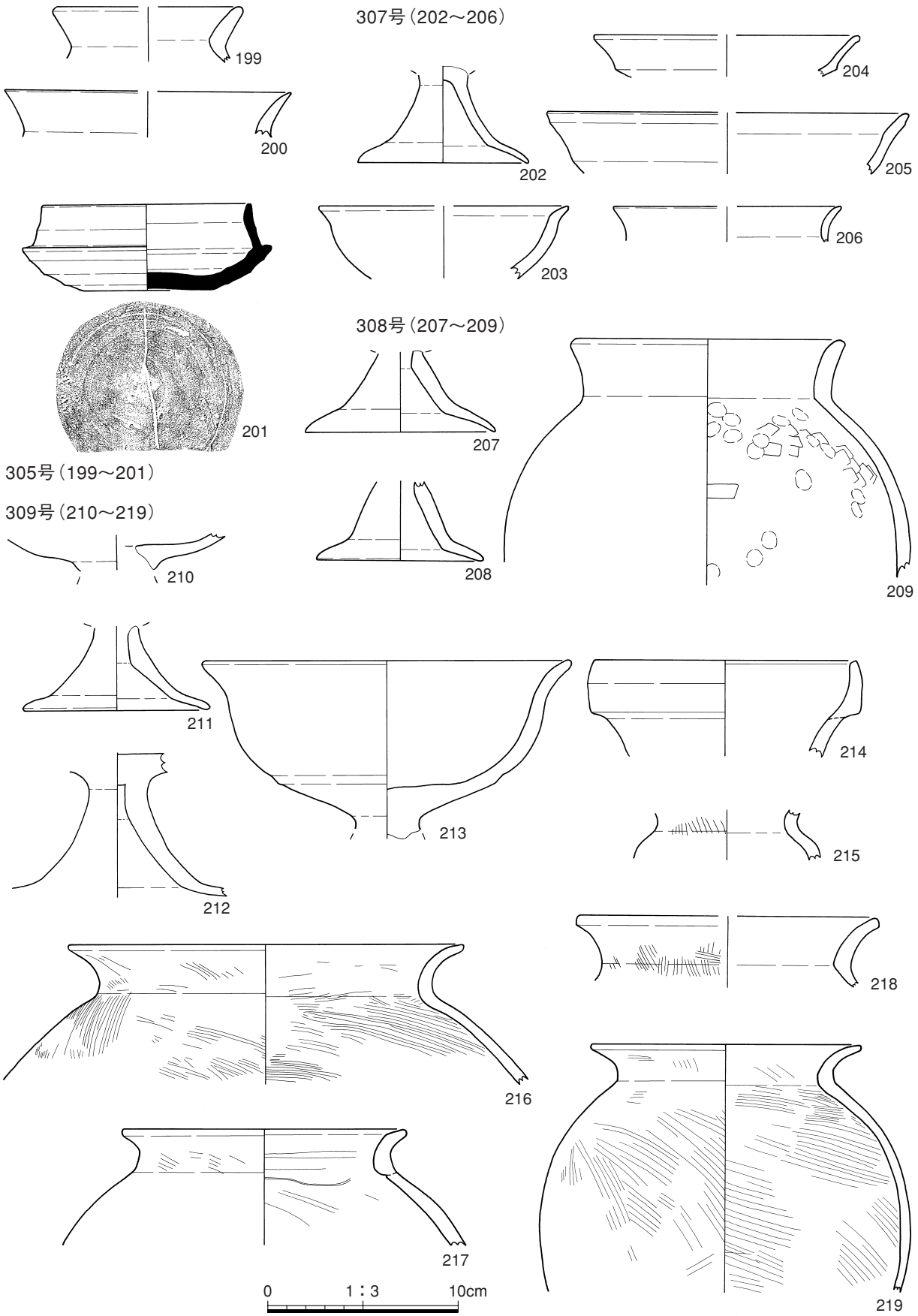
第72図　竪穴建物跡（130号遺構）出土遺物



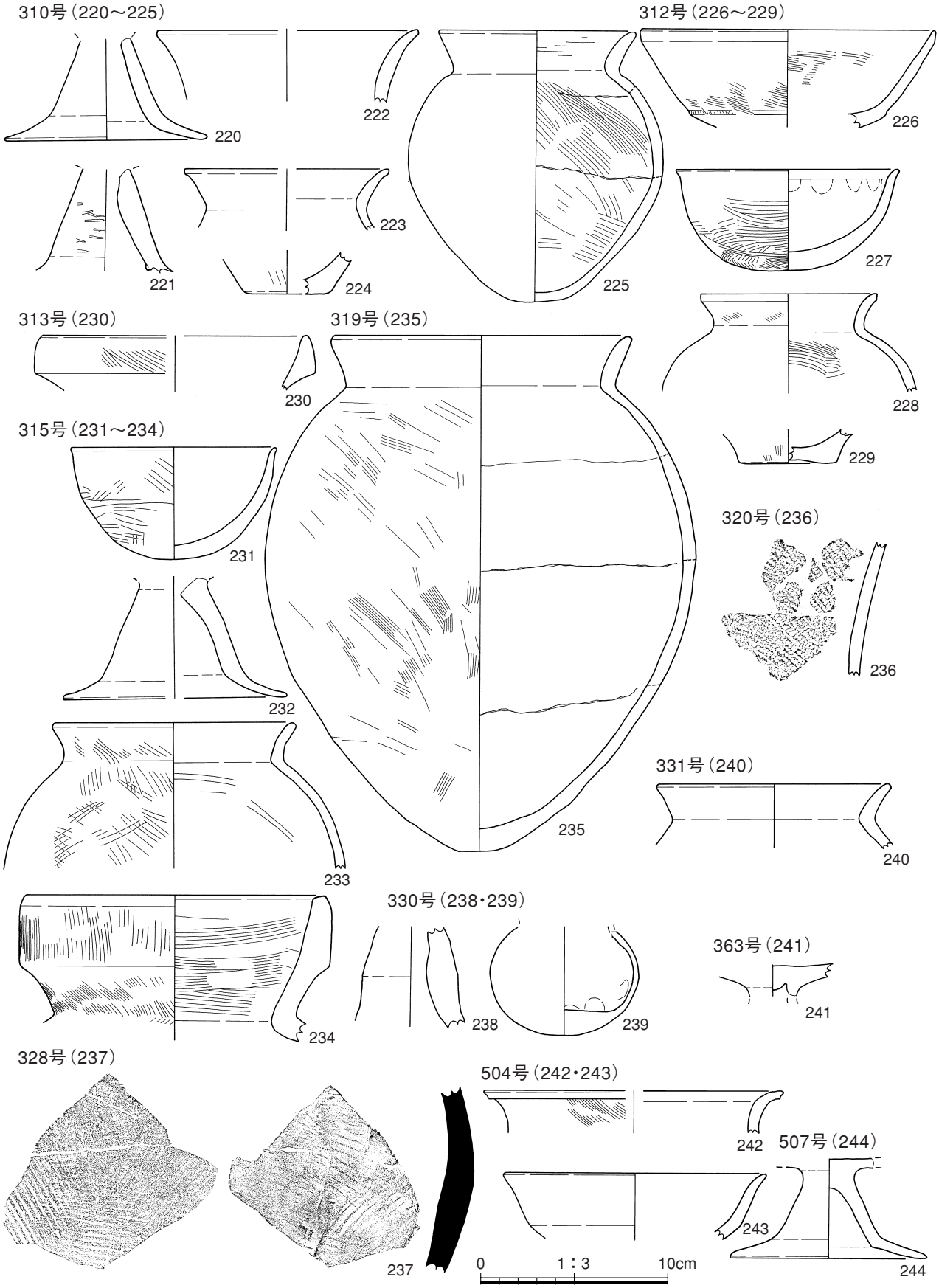
第73図　竪穴建物跡（131～133・162・301・302号遺構）・ピット（138・182・187号遺構）出土遺物



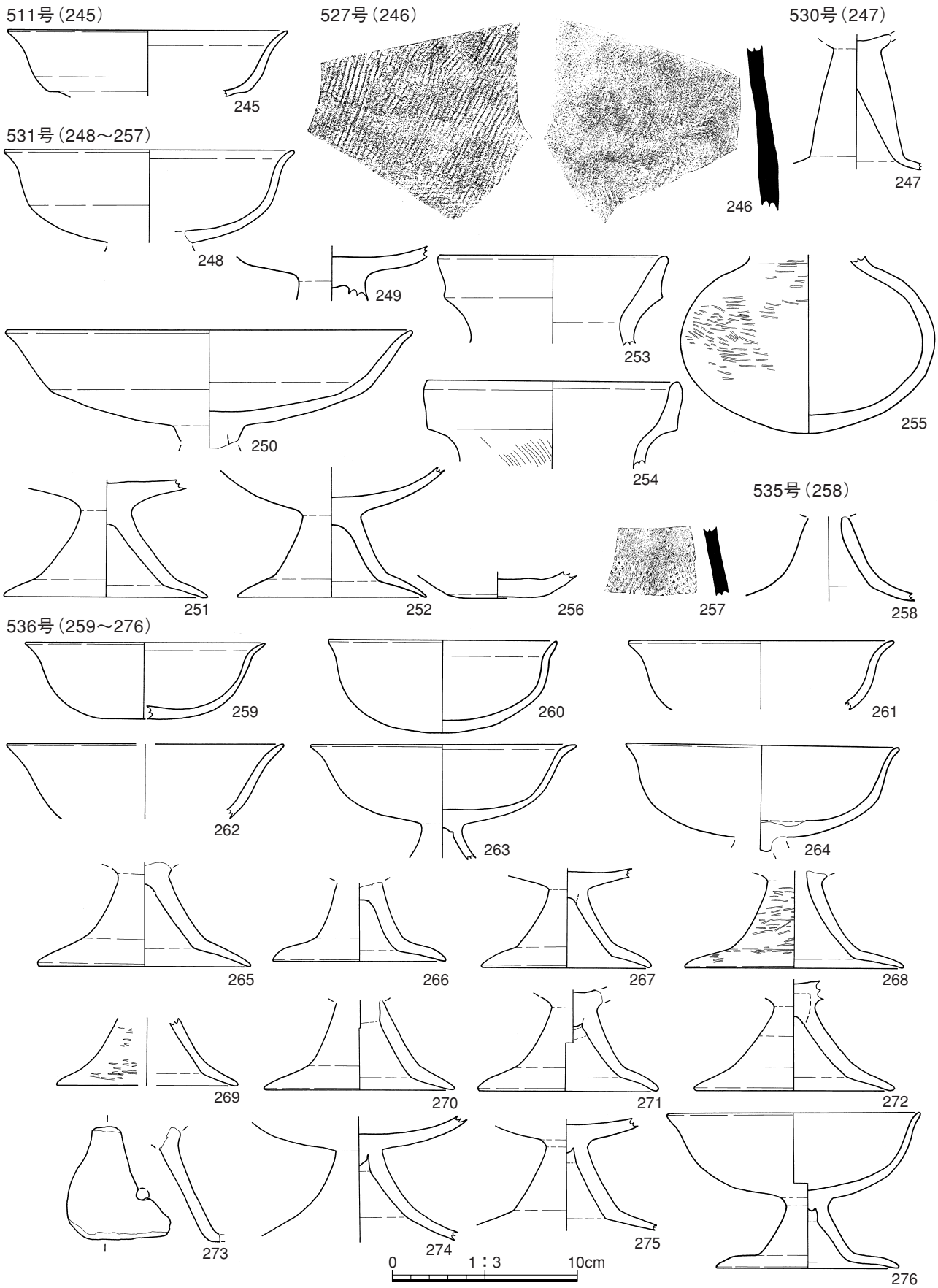
第74図 竪穴建物跡（302～305号遺構）出土遺物



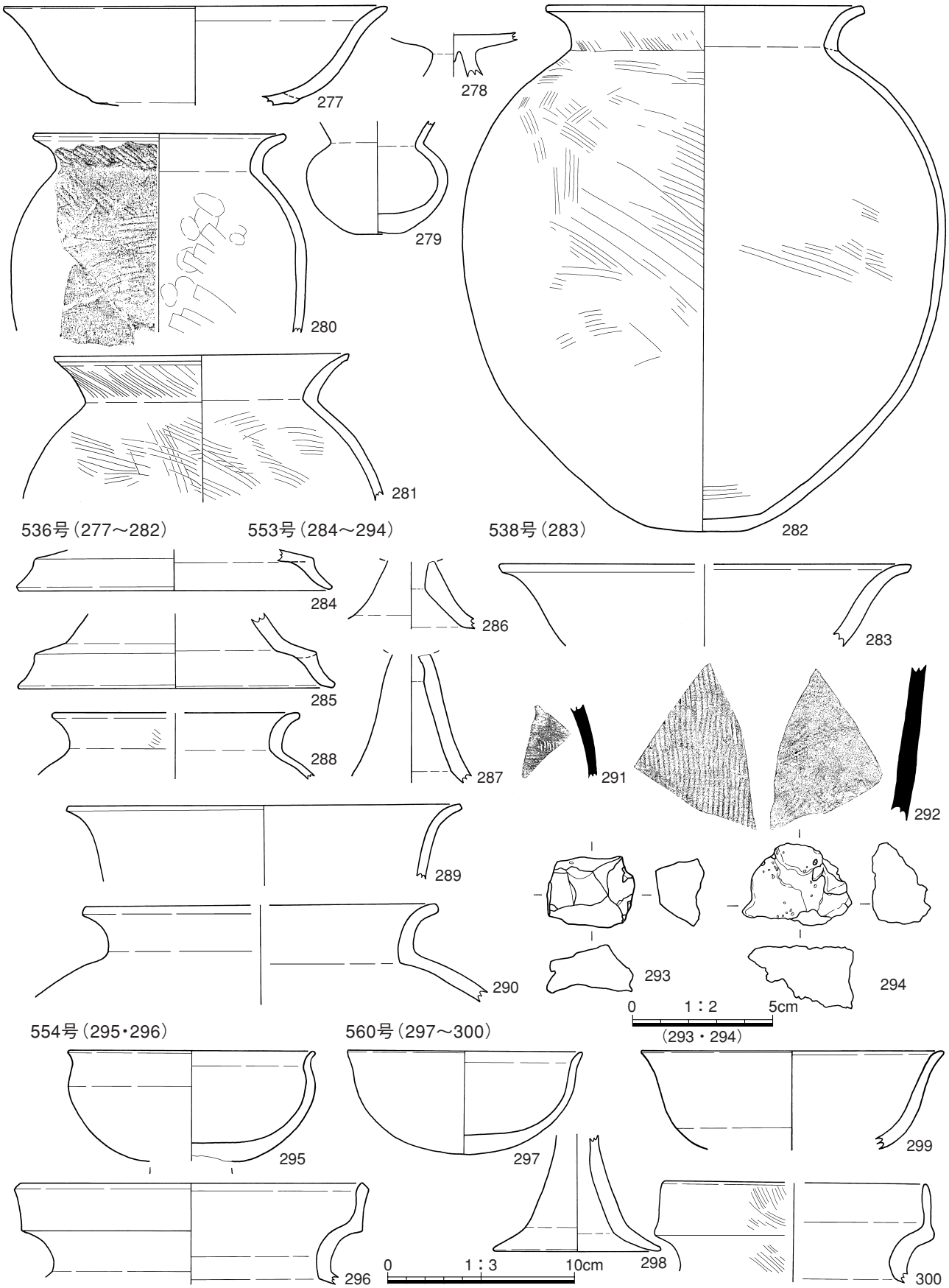
第75図　竪穴建物跡（305・307～309号遺構）出土遺物



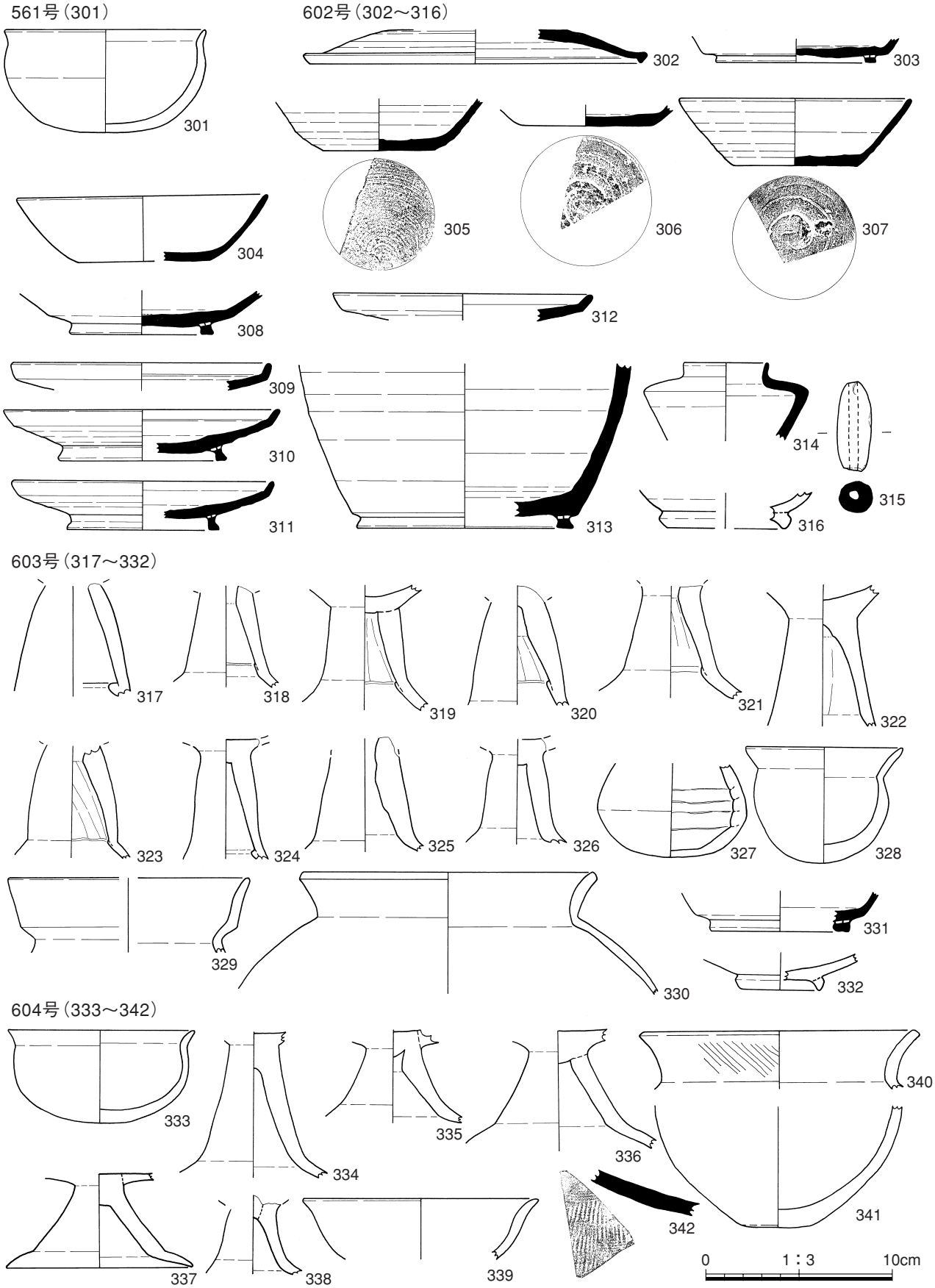
第76図　竪穴建物跡（310・312・315・319・328・330・331号遺構）・土坑（313・507号遺構）・ピット（320・363・504号遺構）出土遺物



第77図　竪穴建物跡（531・536号遺構）・土坑（511・535号遺構）・ピット（527・530号遺構）出土遺物

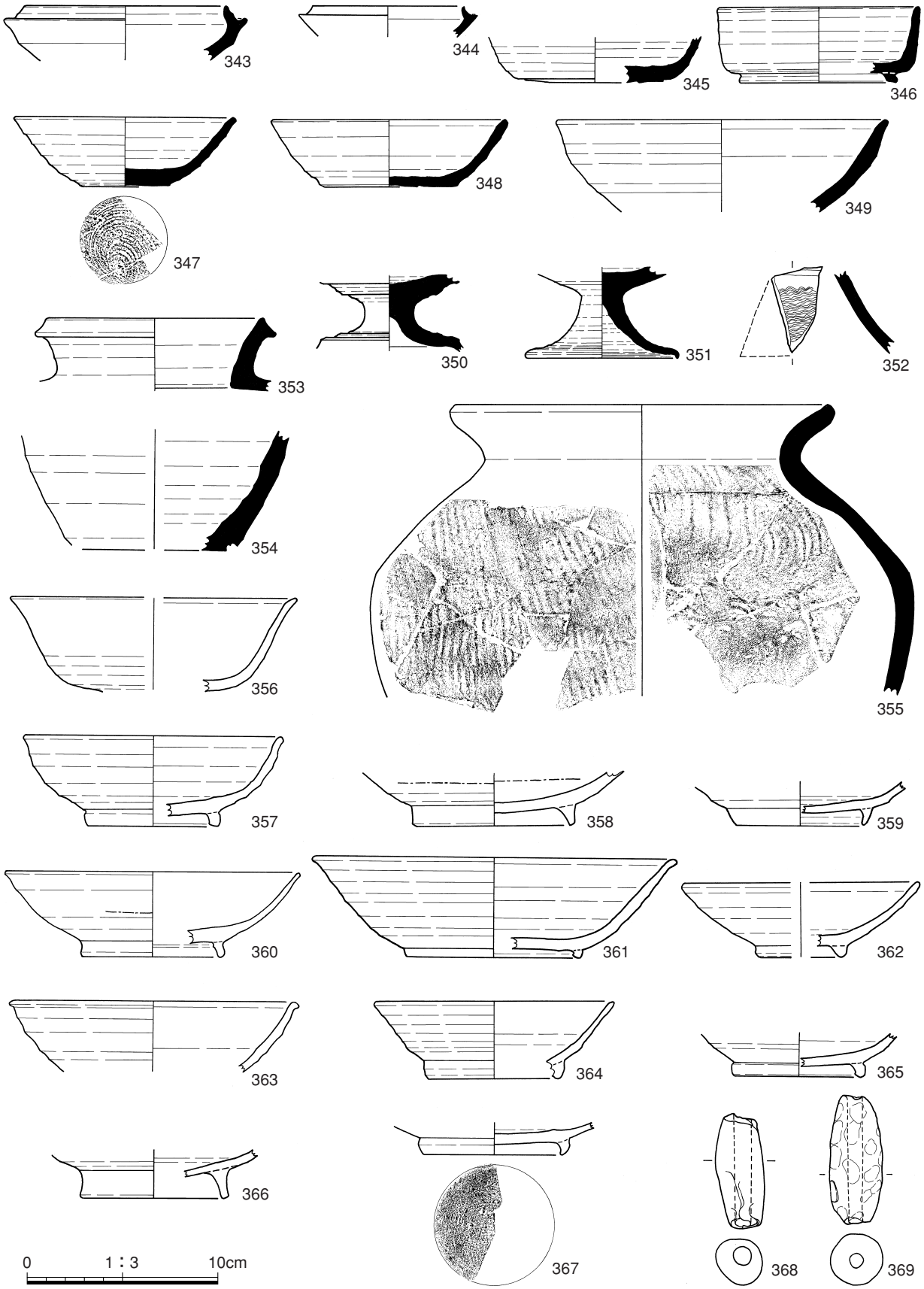


第78図　竪穴建物跡（536・553・560号遺構）・土坑（554号遺構）・ピット（538号遺構）出土遺物

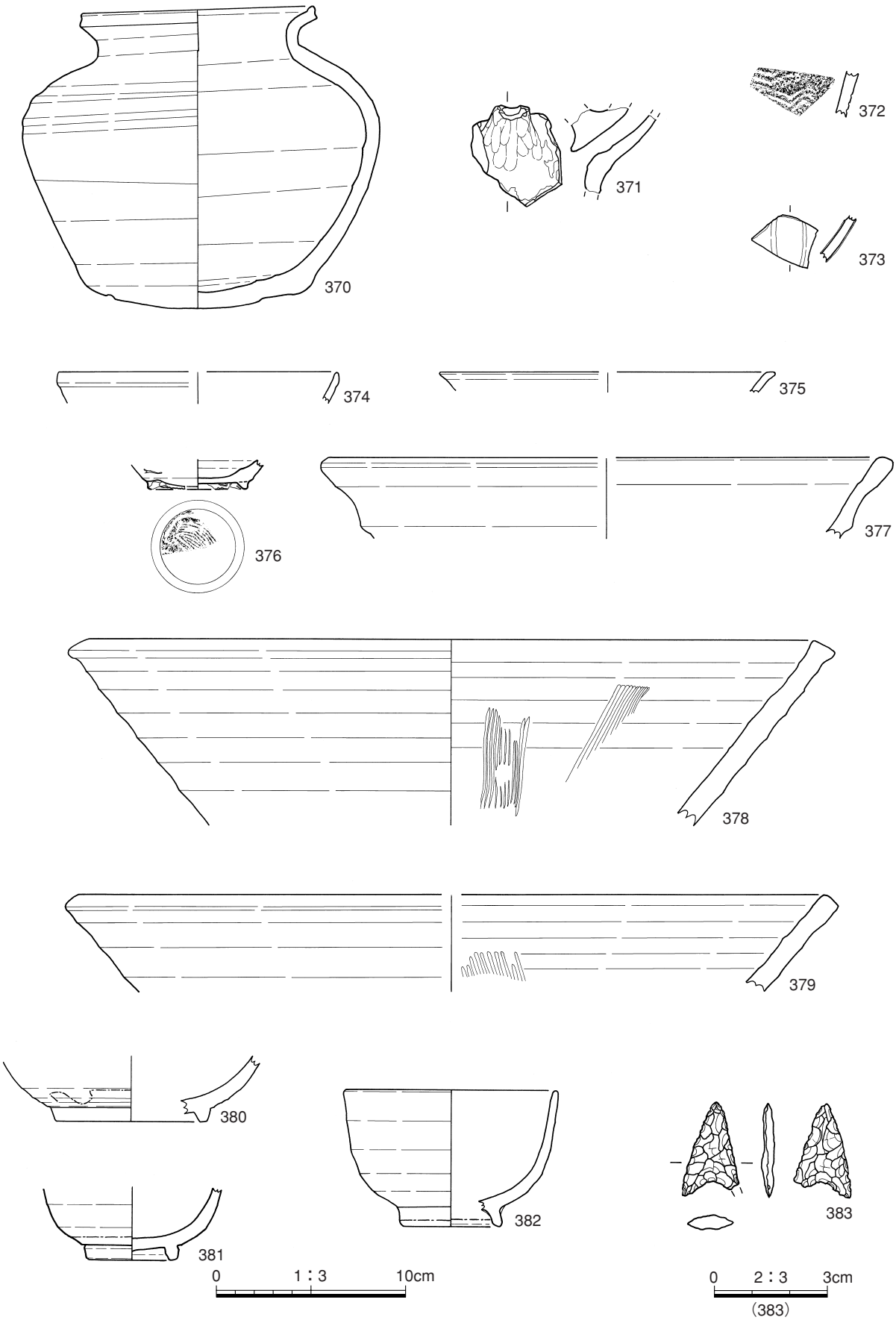


第79図　竪穴建物跡（561・602～604号遺構）出土遺物

a区包含層（343～383）

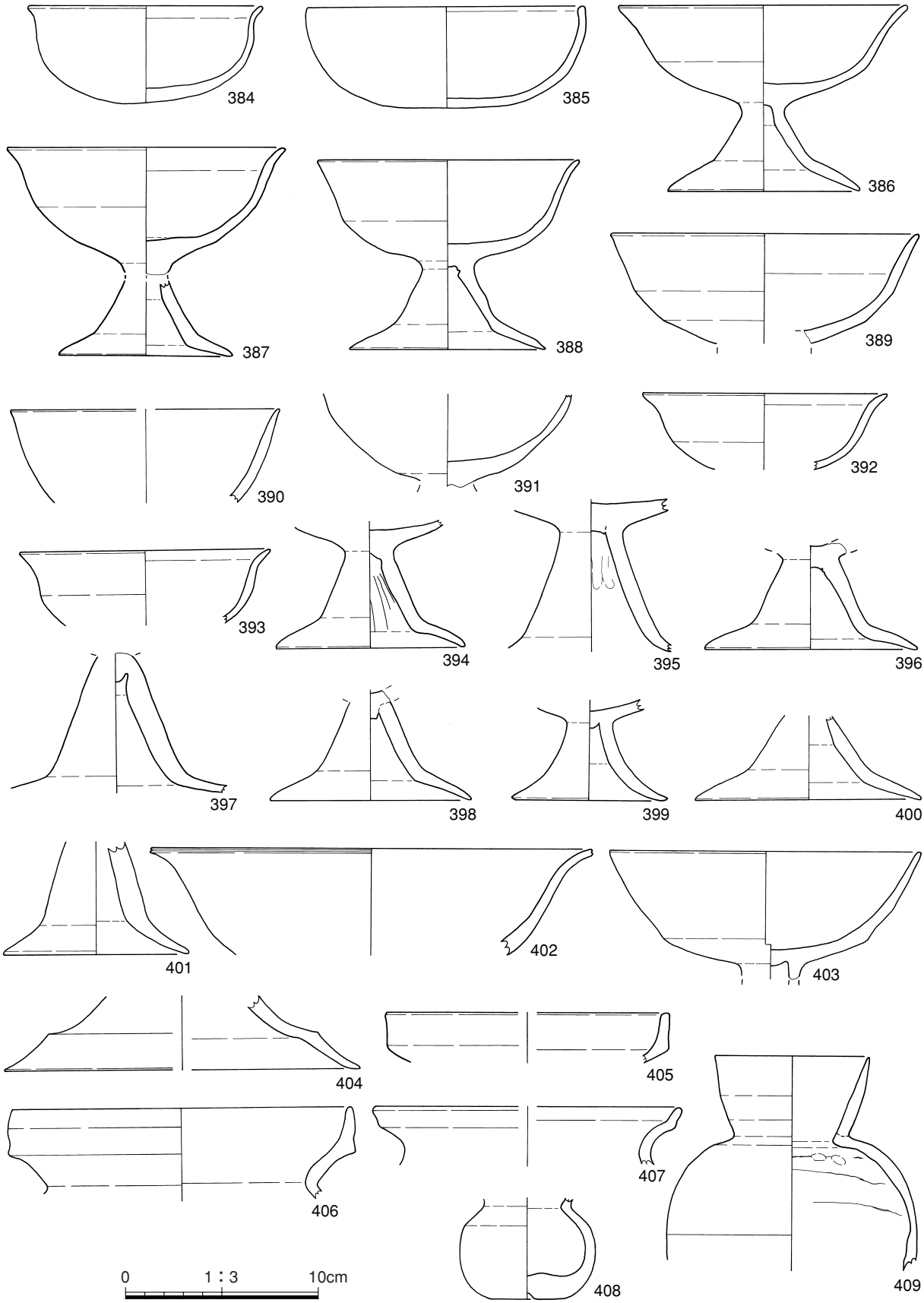


第80図 a区包含層出土遺物（1）

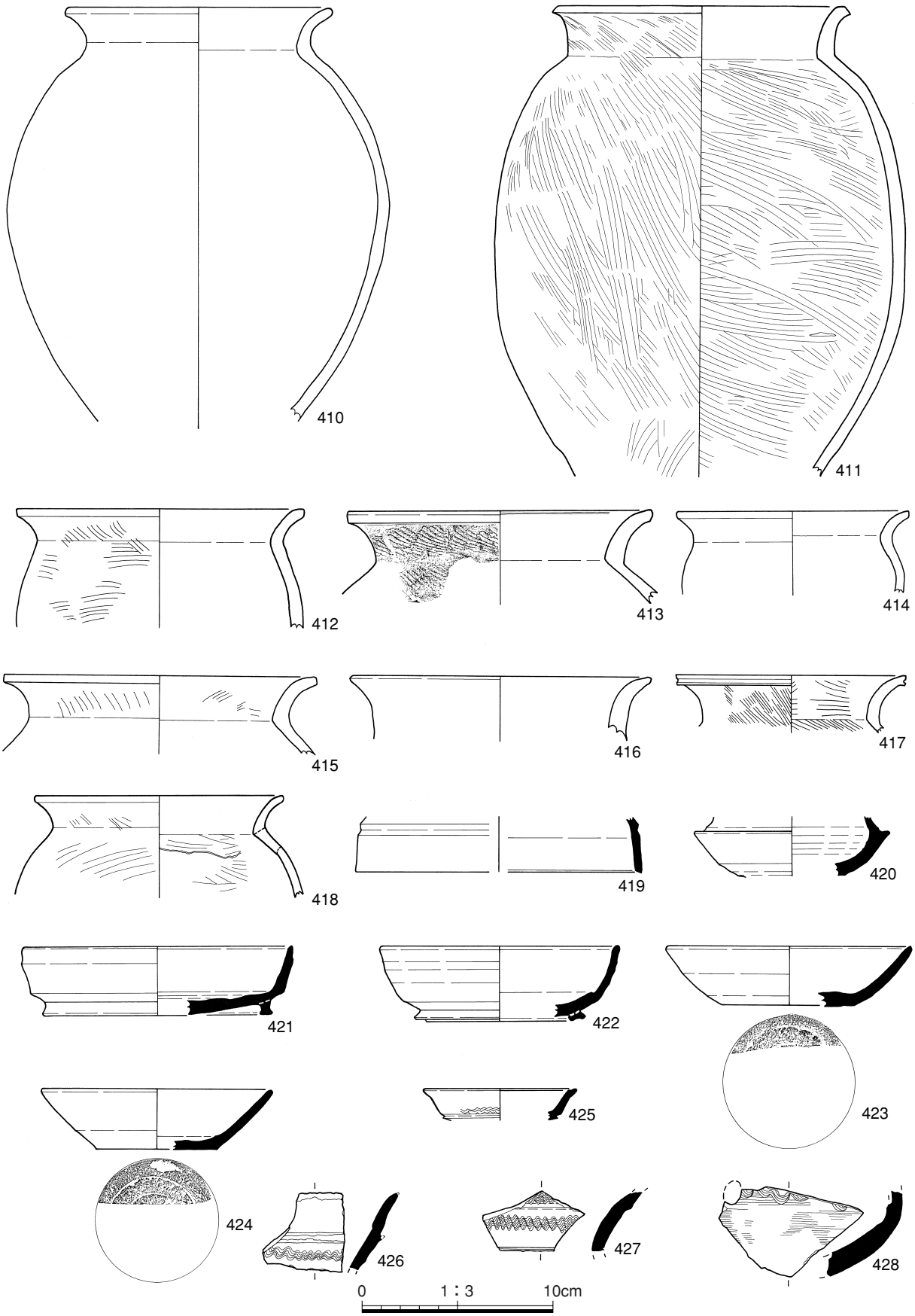


第81図 a区包含層出土遺物（2）

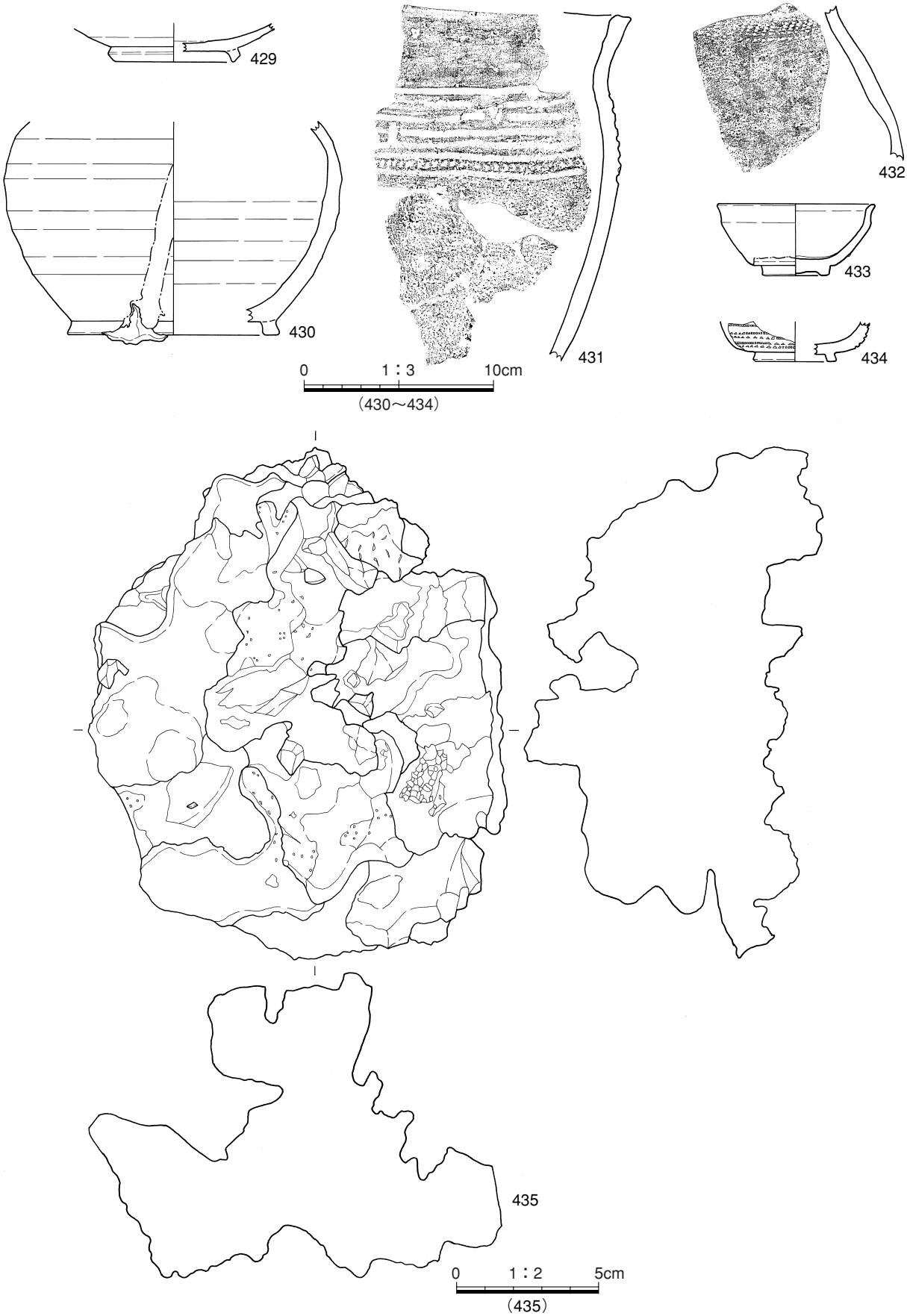
b区包含層（384～442）



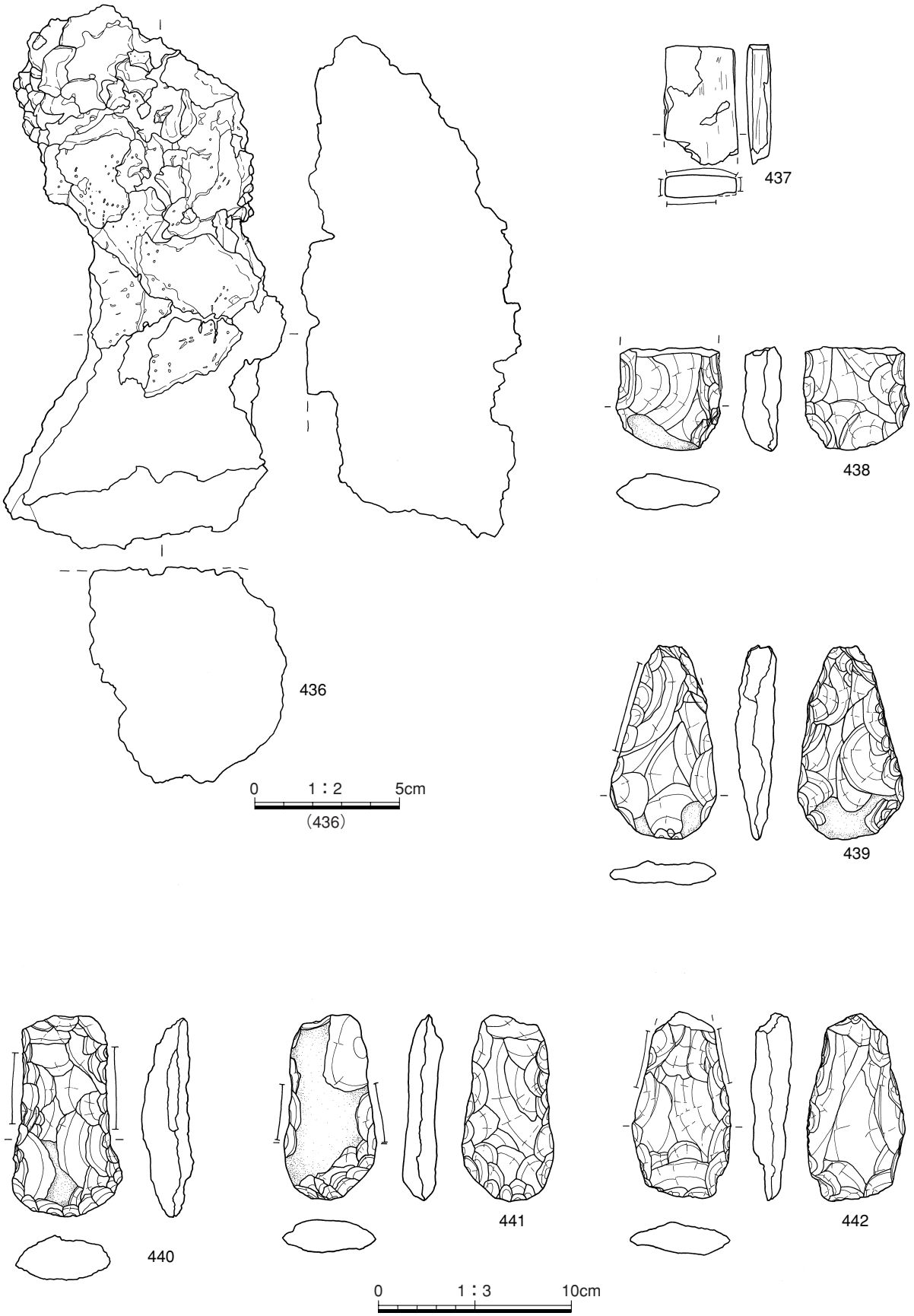
第82図 b区包含層出土遺物（1）



第83図 b区包含層出土遺物（2）



第84図 b区包含層出土遺物（3）



第85図 b区包含層出土遺物（4）

第５章 総括

第１節 「コの字状石囲炉」について

飛騨地域の古墳時代集落の様相については、報告例が少ないため未解明部分が多く残されている。なかでも、建物内炊事施設の変遷の解明は、朝鮮半島から須恵器とともに伝来したカマドの導入による生活様式の変革という大きな問題に絡むだけに、最重要課題と言うことができる。今回の調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡についてまとまった資料を得ているので、周辺の類例にも目を向けつつ、それらを分析し考察を加えたい。

当遺跡の古墳時代中期の竪穴建物跡には、カマドを持つものはみられない。したがって、カマドは未だ導入されておらず、建物内の炊事施設としては炉が主流であった段階にとどまっていると捉えてよい。炉石を持つ炉跡が確認された建物跡は10基ある（第48表）。第３章において報告した通り、それらの多くには３個の川原石をコの字状に配置するという構造が認められる。以下、このような構造の炉を「コの字状石囲炉」と呼ぶこととする。それらが主に炊事の場であったことは、１号遺構で炉の検出位置から土師器甕（112）が出土していることや（第18図）、130号遺構で炉の開口部のすぐ隣りで土師器甕（140）が出土していること（第38図）から明らかである。当遺跡の事例の観察からは、

第48表　野内遺跡A地点の「コの字状石囲炉」

遺構番号	形　　状	炉石の大きさ cm	平行する炉石の間隔 cm	検出位置	開口方向	焼土散布方向	図版番号
1号遺構	3個の石をコの字状に配置。	17×9 20×10 21×8	16	中央から1m北東壁側	北東壁側	炉の東方・南方	第18図
3号遺構	3個の石をコの字状に配置。	18×8 17×7 16×10	8	中央から1.5m北東壁側	北東壁側	炉の北方・西方・南方	第20図
5号遺構	3個の石をコの字状に配置。	19×8 20×9 16×8	13	中央から1.2m北壁側	北壁側	炉の北方	第23図
118号遺構	3個の石を置くが、中央の石は他の2個と平行方向。	19×10 20×7 21×7	11	中央から1m北西壁側	北西壁側	全方向	第32図
130号遺構	3個の石をコの字状に配置するが、石は接触していない。	17×9 18×10 21×7	7	中央から1.2m北壁側	北壁側	炉の北方	第38図
132号遺構	石は2個のみで原形をとどめていない。	15×7 16×10	－	中央から1.2m北東壁側	不明	炉の北方・東方	第40図
309号遺構	3個の石をコの字状に配置（2基並列）。	18×7 19×8 21×8	18	中央から1.5m北西壁側	北西壁側	全方向	第48図
		16×9 19×10 14×9	12				
310号遺構	3個の石をコの字状に配置。	22×9 19×8 17×8	13	中央から0.5m北東壁側	北東壁側	炉の南西方	第48図
531号遺構	3個の石をコの字状に配置。	13×4 17×10 15×9	16	中央から1.5m北壁側	北壁側	炉の北方	第54図
604号遺構	石は2個のみで原形をとどめていない。	14×8 20×11	－	中央から1.8m北西壁側	不明	炉の北西方	第60図

コの字状石囲炉の特徴として、以下の６点がとらえられる。

①炉の平面形は３個の川原石からなるコの字状を基本とし、縄文時代の石囲炉によくみられるようなロの字状になるものはない。

②炉は総じて小型で、大きさにばらつきはあまりみられない。炉石の大きさは、長さ20㎝前後、幅10㎝弱を測るものが大半を占める。平行する２つの炉石の間隔は10㎝台を測るものが多い。

③炉の向きは、開口部（炉石で閉じられていない部位）を近接する壁側に向けるのを基本とする。

④例外はあるものの、焼土の散布方向には概ね炉の開口部から外へ広がるという傾向が認められる。

⑤建物内における炉の位置は、建物の中央ではなく、いずれかの壁側に寄るのを基本とする。

⑥炉石はあまり強く被熱していない。また、深い掘り形を伴うものはみられず、床面に置かれただけの状態のものが多い。

炉の形状は、一見、側壁と奥壁を持つカマドに類似してはいるものの、開口方向は逆であり、カマドを基準に捉えると違和感を感じる。しかし、炉の設置位置をよく見るならば、壁と炉との間に十分な作業スペースが確保されないケースがあることから（第23図、第38図、第48図など）、使用者が開口部に向って座り使用する状況は想定できないことがわかる。したがって、コの字状石囲炉とカマドの形状の類似は表面的なものにすぎないと判断され、その使用方法についてはカマド使用状況から類推するのではなく、改めて考えてみなくてはならない。

そこで、上記の観察結果に手掛かりを求め、こうした特徴的な形状の持つ意味や炉の使用方法について考えてみたい。特に重要視すべきなのは、特徴の①、すなわち炉石が３個であり、一方が開くことであると考える。

３個の炉石が果たした機能については、特徴②に示した炉石の大きさや間隔が土師器の甕を据えるのに適当な値であることから、第一義的には甕を支えることにあったと考えることができる。また、薪をその上にもたせかけてなるべく地面から浮かせ、酸素供給を良くして火力を強める役目を果たしたことも考えられよう。しかし、考慮すべき機能が以上だけならば、炉石は３個ではなく４個であった方が目的にかなうはずなので、さらに別の機能を併せ持ったと考えなくてはならない。

そこで注目したいのが、特徴③として挙げた開口方向の規則性と特徴④の焼土散布方向である。炉周辺の焼土の広がり方から使用者の炉に対する位置を推定することができる。概ね炉の開口部から外へ向かって焼土が広がるとする特徴④は、使用者が主に開口部とは反対側、すなわち建物の中央側に位置したことを示唆している。使用者が、炉石に面して、それもできる限り建物中央側の炉石に面して座り、団扇のようなものや呼気で送風したと考えれば、そのような焼土の散布状況を無理なく説明することができる。

ここで特徴⑤として挙げた、建物内における炉の位置にも注目したい。炉の位置は建物の中央ではなく、やや壁側に寄っている。これには炉を建物中央に設置することをできる限り避けようという意志が働いていると捉えられる。炉は生活空間を大幅に圧迫する施設であることから、これは当然の発想と言えるが、炉石が３個であるのも、同様の発想に基づくと考えることはできないだろうか。使用者が壁側に座り、建物中央側に向かって炉を使用する状況を想像してみると、建物中央方向に焼土が散乱することとなり、居住空間を圧迫することとなる。生活空間の確保という観点からは、そうした事態は是非とも避けたいはずである。そこで、炉は原則として壁側に向かって使用するのが望ましい

とされ、中央側に向かって使用することは規制されたのではないだろうか。そもそも、全方向が対等ではない形状は、焚く方向に一定の決まりのある使用方法を前提としている可能性が高いと考える。コの字状石囲炉に３個しか炉石を置いていないのは、建物壁側から中央側に向かう方向での使用を初めから想定せず、建物壁に一番近い側の石を省いた結果と捉えることができるのである。

なお、特徴⑥として挙げたように、炉石には長期にわたり繰り返し被熱した痕跡が認めがたく、さらにしっかり固定されてもいないことから、常設の施設とは限らなかった可能性を指摘できる。使用する土師器甕のサイズや形状に合う炉石を選び、間隔も調整し直すような使い方が想定されよう。

近隣の事例にも目を向けておきたい。このような構造の炉は、当該期には全国的にみられるというわけではない。しかし、飛騨地域においては、かなり普遍的に用いられた可能性が高い[1)]。第49表に明らかな通り、飛騨南部の下呂市域から北部の飛騨市古川町域にわたる広範囲において、同様の構造の炉が見つかっている。既知の初現は弥生時代後期であり、下限は古墳時代中期である。炉に代わりカマドが導入されるまで、長きにわたり当地域の一般的な炊事施設であったと捉えることができる[2)]。

近隣の事例でも「コの字」の開口部を建物中央側ではなく壁側に向けるのが一般的であることから、形状の類似は偶然ではなく、使用方法について共通理解があったとみることができる。また、弥生時代の事例では、建物の全く中央ということはないにせよ、中央に比較的近い位置に設けるのに対し、古墳時代中期の事例ではより壁に近い位置に設ける傾向が強まるようである。報告例の蓄積が十分ではないため予察にとどまらざるを得ないものの、時代が降るにつれて炉の設置位置が中央付近から壁際に移ってゆくと捉えることができよう[3)]。古墳時代中期に属する当集落で壁際に設置する事例が多いのも、そうした飛騨地域での全体傾向と軌を一にするものと言える。

炉の位置が移動するのは、炊事施設をできる限り壁際に追い遣ることにより、できる限り居住空間を広げることをねらってのことであったと考えられる。とはいえ、炉を完全に建物壁面まで後退させることは、壁や屋根を燃やしてしまう結果となるため不可能であった。それは、屋外への排煙機能と

第49表　「コの字状石囲い炉」検出例

遺跡名	所在地	検出遺構	時代	検出位置	開口方向	出典
野内遺跡（Ｄ地区）	高山市上切町	580号遺構（竪穴住居跡）	弥生時代後期	中央やや北寄り	北壁側	32
中野大洞平遺跡	飛騨市古川町中野	5号住居跡	弥生時代末	中央やや北寄り	北壁側	33
赤保木遺跡（16年度調査）	高山市赤保木町	23号住居跡	弥生時代末	中央やや西寄り	西壁側	31
赤保木遺跡（16年度調査）	高山市赤保木町	26号住居跡	弥生時代末	中央やや北西寄り	西壁側	31
野内遺跡（Ｂ地区）	高山市上切町	865号遺構（竪穴住居跡）	古墳時代？	中央やや北寄り	北壁側	29
蓑輪石橋遺跡	高山市国府町蓑輪	竪穴住居跡（番号不明）	古墳時代前期？	壁際（詳細未報告）	不明	15
藤ノ木遺跡	高山市国府町木曽垣内	15号住居跡ほか（約20基）	古墳時代前期～～中期	壁際ほか（詳細未報告）	不明	14
直道遺跡	高山市国府町三日町	住居跡（33基）	古墳時代中期	詳細未報告	不明	16
半田垣内遺跡（Ⅲ次）	高山市国府町三日町	3号住居跡	古墳時代中期	北西壁際	北西壁側	未報告[5)]
野内遺跡高山市調査地点）	高山市上切町	SB3（竪穴住居跡）	古墳時代中期	北壁際	西壁側	42
野内遺跡（Ｂ地区）	高山市上切町	624号遺構（竪穴住居跡）	古墳時代中期	東壁際	東壁側	未報告
ウバガ平遺跡	高山市上切町	1号竪穴住居跡	古墳時代中期	西壁際	西壁側	28
上ヶ平遺跡（Ⅱ次）	下呂市森	第40号住居跡	古墳時代中期	東壁際	東壁側	26
上ヶ平遺跡（Ⅱ次）	下呂市森	第42号住居跡	古墳時代中期	北壁際	北壁側	26

出典欄の番号は140～142頁の「引用･参考文献」番号に対応する。

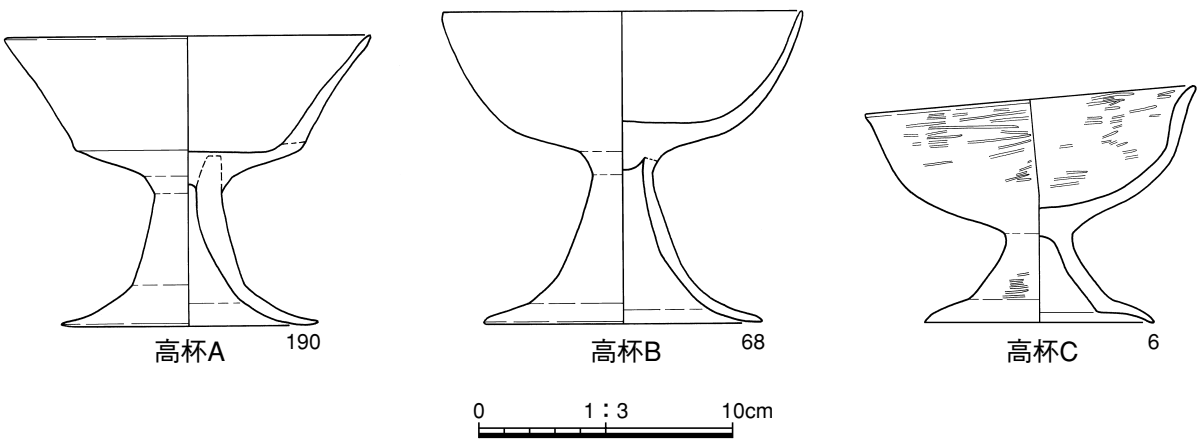
周囲への熱の漏洩防止機能とを備えた新式の炊事施設であるカマドの導入により、初めて実現することとなるのである。

古墳時代後期には飛騨地域でも、カマドが急速に普及する[4)]。炊事施設をできる限り建物の壁際へ追いやろうという長きにわたる前史を視野に入れるならば、それは必然であったと捉えることができる。

第２節 古墳時代中期の土師器・須恵器について

検出した遺構の主要な帰属時代が古墳時代中期（５世紀代）であることは、土師器を主とし須恵器を微量に含む遺物組成や、高杯偏重傾向が顕著な土師器の器種構成に示されている。本節ではさらに踏み込んで、遺構間に時期差があるか否か、あるとすればそれらの先後関係をどう捉えてよいのか、また、いつ頃の暦年代を与えてよいのか、以上のような事柄について検討を行う。本来ならば遺構の先後関係の判断に当たっては遺構切り合い関係を最優先の判断基準とすべきであるが、現場での遺構埋土間の判別が必ずしも容易ではなく、重複面積が狭い場合には確実に先後関係を判断できる状況になかったことを考慮し[6)]、今回は遺構内出土遺物の組成分析に基づく判断の方を優先させることとした。質・量ともに豊富な竪穴建物跡内の出土遺物に手掛かりを求め、検討を行うこととする。

出土遺物の中で確認個体数が最も多く、普遍的に存在する器種である土師器高杯に着目するのが適切と考える。第３章で報告したように、６類に分類可能な当遺跡の高杯のうち、全体形状のわかる良好な個体に恵まれているのは高杯Ａ（有段杯部長脚高杯）、高杯Ｂ（碗状杯部長脚高杯）、高杯Ｃ（口縁部が外側に短く屈曲して外反する碗状杯部低脚高杯）の３類である。各建物跡について、どの高杯が主体を占めるか判別することによりグループ分けができるはずである。ただし、高杯に大型高杯も含めて考えてよいか、あらかじめ検討しておかなくてならない。第３章で述べたように、両者の遺構内での出土状況には、相似形のもの同士が伴出するという傾向が認められる。念のため個別に見ていくと、高杯Ａが主体を占める302号遺構と303号遺構では大型高杯Ａが出土しており、高杯Ｃが主体を占める遺構のうち307号遺構、309号遺構、531号遺構、536号遺構では、いずれも大型高杯Ｃが出土していることが確認される[7)]。その一方で、高杯と大型高杯のタイプが食い違うのは例外的なケースに限られる[8)]。よって、以下の検討においては、高杯に大型高杯を含めて扱ってよいと判断する。



第86図　野内遺跡A地区の土師器高杯

第50表は、検出した58基の竪穴建物跡のうち後世の遺構であることが明らかな602号遺構を除く57基を対象とし、上記の観点から分類したものである。遺物数の多い建物跡については、かなり明瞭にグループ分けが可能であった。結果は、高杯Ａを主体とするＡ群遺構７基（３号、53号、118号、131号、133号、302号、303号）、高杯Ｂを主体とするＢ群遺構１基（71号）、高杯Ｃを主体とするＣ

第50表　竪穴建物跡内出土遺物の組成

主体となる高杯	遺構	地区	土師器の確認器種									須恵器の確認器種														古墳時代中期の須恵器片の有無	備考
			高杯A（大型含む）	高杯B（大型含む）	高杯C（大型含む）	高杯（その他、判別不能など）	椀	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台椀	有台椀	有台盤	高杯	遮	壺・鉢	甕	陶錘		
高杯A	3号遺構	b東区	○			○				○	○			○			○										須恵器は混入品。「コの字状石囲炉」あり。
	53号遺構	b東区	○								○																
	118号遺構	b東区	○			○					○																「コの字状石囲炉」あり。
	131号遺構	b東区	○			○				○	○																
	133号遺構	b東区	○					○		○	○																
	302号遺構	b西区	○			○				○	○																
	303号遺構	b西区	○			○		○		○	○																
高杯B	71号遺構	b東区		○		○					○																
高杯C	1号遺構	b東区			○	○	○		○		○																「コの字状石囲炉」あり。
	5号遺構	b東区			○			○			○													○		○	「コの字状石囲炉」あり。
	121号遺構	b東区			○	○		○			○													○		○	
	128号遺構	b東区			○	○		○		○	○																
	129号遺構	b東区			○						○																
	130号遺構	b東区		○	○	○	○	○	○		○													○		○	高杯Cの脚部が多数出土。「コの字状石囲炉」あり。
	162号遺構	b東区			○	○			○	○	○										○			○		○	
	307号遺構	b西区			○	○					○																
	308号遺構	b西区			○						○																
	309号遺構	b西区			○	○		○			○																「コの字状石囲炉」あり。
	531号遺構	b北東区			○	○		○	○		○													○		○	「コの字状石囲炉」あり。
	536号遺構	b北東区			○	○	○			○	○													○		○	
	604号遺構	b北西区			○	○	○				○													○		○	「コの字状石囲炉」あり。
不明	2号遺構	b東区				○					○													○		○	
	4号遺構	b東区				○					○																
	6号遺構	b東区				○				○	○																
	7号遺構	b東区									○													○		○	
	12号遺構	b東区				○					○																
	13号遺構	b東区				○					○																
	25号遺構	b東区				○				○	○																
	38号遺構	b東区				○					○																
	56号遺構	b東区				○					○																
	57号遺構	b東区				○					○																
	70号遺構	b東区	○		○	○		○		○	○											○				○	高杯Aと高杯Cが混在する。
	80号遺構	b東区				○					○																
	102号遺構	b東区				○					○													○		○	
	120号遺構	b東区																									
	125号遺構	b東区				○		○		○	○																
	132号遺構	b東区			○	○			○		○													○		○	大型高杯Cがあるが、主体を占めるとは言えない。「コの字状石囲炉」あり。
	301号遺構	b西区				○					○																
	304号遺構	b西区				○	○				○																
	305号遺構	b西区				○					○		○													○	
	310号遺構	b西区				○					○																「コの字状石囲炉」あり。
	312号遺構	b西区				○	○				○																
	315号遺構	b西区				○	○	○			○																
	316号遺構	b西区																									
	317号遺構	b西区									○																
	318号遺構	b西区				○					○																
	319号遺構	b西区									○																
	328号遺構	b西区																						○			須恵器は混入品。
	329号遺構	b西区																									
	330号遺構	b西区				○				○	○																
	331号遺構	b西区									○																
	553号遺構	b北東区				○					○													○		○	
	559号遺構	b北東区																									
	560号遺構	b北東区				○	○	○			○																
	561号遺構	b北東区				○	○				○																
	569号遺構	b北東区																					○	○			須恵器は混入品。
	603号遺構	b北西区				○		○		○	○			○		○	○	○									須恵器は混入品。

群遺構13基（１号、５号、121号、128号、129号、130号、162号、307号、308号、309号、531号、536号、604号）、以上のようになる。

次に、これらが時期差を示すものであるのか検討する。そのためにはグループ間の遺物組成の比較を行うのが有効と考えた。第50表には、各遺構内で出土した土師器と須恵器それぞれの器種構成と、古墳時代中期に遡る可能性のある須恵器片出土の有無についても記載した。検討の可能な程度に事例数の揃っているＡ群とＣ群を比較してみると、以下の５点を読み取ることができる。

①土師器碗はＡ群では全く出土していないが、Ｃ群では３割に当たる４基の遺構で出土している。

②土師器の大型の壺はＡ群・Ｃ群いずれの遺構でも出土しており、差は認められない。

③土師器直口壺はＡ群の遺構では全く出土していないが、Ｃ群では３割に当たる４基の遺構で出土している。

④土師器小型壺はＡ群では７割強に当たる５基の遺構で出土しているのに対し、Ｃ群では２割強に当たる３基の遺構でしか出土していない。

⑤明らかな混入品[9]を除き、Ａ群では須恵器が出土した遺構はみられないのに対し、Ｃ群では５割強に当たる７基の遺構で須恵器が出土している。

これらのうち、第一に重要と思われるのは⑤の須恵器の有無である。須恵器導入期である古墳時代中期にあっては、須恵器出土の有無は遺構の新旧を把握する決定的要因となり得ると考える。両群でこれほど明確に差が認められる以上、Ｃ群がＡ群より時期的に新しいとみなすことには、ほとんど疑問の余地がないと言える。

次いで、①の土師器碗の有無と④の土師器小型壺の有無も時期差を示す現象と捉えることができる。北陸、信州、東海など周辺地域では、概ね陶邑窯編年Ｉ型式１～２段階（ＴＫ73～216型式）並行期頃に土師器碗が新出器種として加わり、対照的に土師器小型壺は急減するとされている[10]。飛騨地域では土師器器種構成の時期的変遷について検証した前例はないため、周辺地域の研究成果を無批判に受け入れるわけにはいかない。とはいえ、⑤と合わせ考えるならば、①④はＣ群がＡ群より時期的に新しいことの傍証と評価することは可能である。

ところで、高杯Ｂが主体を占めるＢ群遺構の時期的位置付けについては、型式変化の観点から、高杯Ａが丸みを帯びて高杯Ｃに変化する過程で現れる過渡的形態として高杯Ｂを捉えることができるので、Ａ群とＣ群の間に位置付けられると考える。しかし、事例数が１例にとどまり十分な検証が不可能と判断するので、今後の調査の進展により良好な事例が蓄積するまで結論は保留としておきたい。

以上の検討から、当遺跡の古墳時代中期の遺構群は、先行する高杯Ａ主体段階と後発の高杯Ｃ主体段階の、少なくとも２時期に分かれることを確認できた。この結果は、有段杯部高杯に遅れて碗状杯部高杯が現れるとする北陸、信州、東海など周辺地域での動向[11]に整合する。さらに、土師器碗や小型壺の盛衰等、土師器の器種構成の時期的変遷についても、周辺地域と大差ないものと判断する。

第３節　集落の存続年代と変遷について

前節での検討結果を周辺地域での研究成果に照合して編年上の対応関係を示し、現研究段階での集落の推定存続年代を示しておきたい。

集落存続の上限については、古墳時代前期に盛行する器種である土師器器台が全く出土していないなど、土師器の器種構成に古墳時代前期にまで遡ることを思わせる要素が見出せないことから、４世紀代に遡ることはないと考えられる。一方、下限についても、同様に土師器の器種構成に手掛かりを求めることができる。東海、信州、北陸など周辺地域においては、陶邑窯編年Ⅰ型式４段階（ＴＫ23型式）並行期頃には土師器高杯が減少し、代わって碗が土師器食膳具の主流として定着することが知られている[12)]。ところが、当遺跡では土師器高杯の減少傾向は認めがたく、土師器碗は確認されるものの、目立つほどの数量が出土してはいない。この事実は、当遺跡の古墳時代集落がⅠ型式４段階（ＴＫ23型式）並行期に入るより前に廃絶したことを示すと捉えることができる。

前節での検討の結果、当遺跡の古墳時代中期の遺構は、高杯Ａを主体とするＡ群と高杯Ｃを主体とするＣ群に大別でき、その先後関係は須恵器を伴わないＡ群が先で須恵器を含むことがあるＣ群が後であることが明らかとなった。また、当遺跡で出土した須恵器には陶邑窯編年Ⅰ型式２段階（ＴＫ216型式）に遡るものがみられ（64・201）、これがＣ群遺構の帰属時代を示す可能性が高いと考えることができる。さらに、高山市教育委員会が平成16年度に当調査区の隣接地点で行った調査において、溝内からまとめて廃棄されたと考えられる須恵器の甕・瑳、土師器の甕・高杯・壺・甑などが一括出土していることも参考となる[13)]。この遺物群は土師器高杯が碗状杯部低脚高杯で占められ、当調査区のＣ群に相当する様相を呈しており、しかも出土した須恵器は瑳をはじめとして当調査区のものより明確に陶邑窯Ⅰ型式２段階（ＴＫ216型式）の特徴を示す。このことからも、Ｃ群を主として陶邑窯Ⅰ型式２段階（ＴＫ216型式）に並行すると考えるのは妥当であると判断する。ただし、当調査区では、Ｃ群と一括りにした群内でも高杯Ｃに形態差がみられることと、出土した須恵器が１段階内に収まるか否か判然としないことから、下限がⅠ型式３段階にまで降る可能性を排除しないでおく。

Ａ群＝Ⅰ期、Ｃ群＝Ⅱ期と捉え直した上で、上記の集落存続年代の上限と下限や検討結果を念頭に置き、それぞれの編年上の位置付けを与えると次のようになる。

Ⅰ期

土師器高杯が高杯Ａ（有段杯部長脚高杯）で占められる時期である。須恵器は導入されていない。東海地方土師器編年の宇田Ⅰ式１段階[14)]に概ね並行する。

Ⅱ期

土師器の高杯Ｃ（碗状杯部低脚高杯）が導入され、盛行する時期である。古相では高杯Ａ（有段杯部長脚高杯）が残る[15)]。土師器の碗が現れるが未だ本格的な普及段階に至ってはいない。土師器の小型壺が減少する。また、本格的な普及段階には至っていないものの、須恵器が導入される。東海地方土師器編年の宇田Ⅰ式２段階、陶邑窯編年のⅠ型式２～３段階（ＴＫ216型式～ＴＫ208型式）に概ね並行する。

第50表に明らかな通り、Ⅰ期とⅡ期とで炉をはじめとする建物構造に変化は認められない。Ⅱ期でもカマドは全く導入されておらず、集落はカマド導入前の段階で廃絶したとみられる。

Ⅰ期とⅡ期の暦年代については、主に陶邑窯の須恵器編年研究に依拠することとなる。陶邑窯中村編年のⅠ型式２段階（田辺編年ＴＫ216型式）は須恵器の定型化が完成する前の段階であり、全国的視野に立っても須恵器の使用が広く定着するには至っていないと理解されている。現研究段階での一般的理解では、その暦年代は、５世紀初頭まで遡りはしないが５世紀前半期に収まる可能性が高いと

され、５世紀第２四半期頃とされることが多い。そのような陶邑窯編年の須恵器各型式についての一般的年代観[16]に照らせば、当遺跡のⅠ期は５世紀第１四半期頃、Ⅱ期は５世紀第２～３四半期頃に位置付けられることとなる。

ただし、須恵器各型式の暦年代比定については、暦年代の定点となし得る資料が極めて限られることから、今日なお流動的である。本書に直接関係の深い初期段階の須恵器も例外ではない。陶邑窯中村編年のⅠ型式２段階（田辺編年ＴＫ216型式）を５世紀第２四半期頃とする上記の一般的理解は、主として埼玉県稲荷山古墳で出土したⅠ型式４～５段階（≒ＴＫ23～ＴＫ47型式）に並行する須恵器について、同古墳で出土した鉄剣銘「辛亥年」を西暦471年と解釈し、５世紀後半～末の年代を当てはめる説に依拠している。しかし、この「辛亥年」は、近年、尾野善裕氏が論じたように531年説も同様に有力視されるべきであり、471年説で決着しているわけではない[17]。「辛亥年」＝531年説を採用した場合には、陶邑窯中村編年のⅠ型式２段階（田辺編年ＴＫ216型式）の暦年代は半世紀ほど下降することとなる。この場合には、当遺跡のⅠ期は５世紀第３四半期頃、Ⅱ期は５世紀第４四半期～６世紀初頭頃となるであろう。

本節の最後に、集落の平面的な広がりや位置の変遷について、現時点での所見を記しておきたい。ｂ西区の北西部でほとんど遺構が検出されなくなることと、第２章で述べたように調査区の南東側には段丘崖が迫っていることから、集落は検出区域の周辺にさほど大きく拡がりはしないと予想される。従って、今回の調査では古墳時代中期の集落のほぼ中央部を検出したものと判断する。野内遺跡Ｂ地区でも年代が近いとみられる遺構を検出しているものの、Ｂ地区の東隣に位置するＡ地区ａ区の出土遺物に古墳時代のものがあまりみられないことから、平面的に連続すると捉えることはできないと判断する。Ａ地区内ではⅠ期とⅡ期とで遺構の平面分布に目立った相違は認めがたく、時期による集落の位置の移動は想定しがたい。

なお、今回の調査区内では唯一、帰属時代が平安時代に降る602号遺構については、遺跡内における当該期の遺構分布の東限を示すものと捉えることができる。Ａ地区の西側に位置するＢ地区において同時代の遺構を多数検出しているので、古代の遺構の分布範囲や集落の変遷の詳細については、今後の調査の進展により解明されることが期待される。

第４節　県内の主要調査例との比較検討

今回の調査成果を県内各地の主要調査例と比較検討する。比較対象は、古墳時代中期の遺物がまとまって出土し、遺物組成を把握できる遺跡に限定する。また、比較検討の主眼を、当遺跡で最も確認個体数が多く、かつ特徴的な遺物である土師器高杯Ｃ（碗状杯部低脚高杯）に類似する高杯の有無におきたい。高杯Ｃは当該期に普遍的にみられる器形ではないので、類似する高杯の有無を調べることにより、土器様相面での当遺跡との親近の度合いを知ることができる。さらに、土器様相の共通する地域範囲の概略を把握することもできると考える。

半田垣内遺跡は野内遺跡の北方約６㎞に位置する。土器廃棄遺構から２群の土器群が出土している。付近では「コの字状石囲炉」を持つ竪穴住居跡のほか、カマドを持つ竪穴住居跡も確認されている。土師器高杯は当遺跡の高杯Ｃに相当する碗状杯部低脚タイプを主体とし、高杯Ｂに相当する長脚タイ

プも認められる。須恵器は杯身、杯蓋、甕が出土しており、全形を窺える個体が多い。出土した須恵器の型式にやや幅がみられることから、野内遺跡A地区Ⅱ期に並行する時期からやや新しい時期にかけての遺物群と捉えることができる。碗状杯部低脚高杯は当遺跡の高杯Ｃに極めて近い[18]。

向洞遺跡は飛騨南部の下呂市内の遺跡である。高山市から南下する飛騨川の流域に立地する。カマドを持つ竪穴住居跡から土師器44個体と須恵器２個体が出土した。野内遺跡の高杯Ａに類似する有段杯部の土師器高杯、胴部球形の土師器甕、大型壺、丸底壺など古い要素を残す個体が少数みられるものの、高杯Ｃに相当する碗状杯部低脚タイプの土師器高杯、長胴の土師器甕、須恵器杯蓋からなる新グループが主体を占める。野内遺跡との比較では、須恵器に陶邑窯中村編年Ⅰ型式後半の要素が認められるとともに土師器甕の長胴化の傾向が顕著であることと、カマドを備えることから、やや新しい段階に属すると捉えることができる。碗状杯部低脚高杯は当遺跡の高杯Ｃに類似する[19]。

牧野小山遺跡は美濃中部の美濃加茂市内の遺跡である。飛騨川と木曽川の合流点に立地する。連続する２時期にわたる土器群が８基の竪穴住居跡から出土している。「第１期」は有段杯部高杯主体の時期で、野内遺跡Ⅰ期に当たる。「第２期」は須恵器が導入され、土師器は碗状杯部高杯が主体となる時期で、野内遺跡Ⅱ期に当たる。野内遺跡との比較では、①第１期に１例のみながら器台がある、②第１期に手捏ね土器がある、③第２期に現れる須恵器の型式が野内遺跡よりやや新しい陶邑編年Ⅰ型式後半の特徴を示す、④両期を通じて脚に透孔のある高杯はみられない、⑤カマドを持つ住居がある、以上５点の相違点はあるが、全体として当遺跡によく似た様相を呈する例として興味深い。「高杯Ｅ」とされる第２期の碗状杯部低脚高杯は当遺跡の高杯Ｃに類似する[20]。

榿ノ木洞遺跡は美濃中部の関市内の遺跡である。長良川流域に位置する。88号住居跡などから土師器の有段杯部高杯、碗状杯部高杯、宇田型甕、古式の須恵器が出土している。須恵器の型式からは、野内遺跡よりやや新しい時期の遺物群と捉えられる。出土した碗状杯部高杯は、杯部の形状は当遺跡の高杯Ｃに似るが、脚がより長い点が異なる[21]。

第87図　土師器高杯Cの類例の分布

柿田遺跡は美濃中部の可児市内の遺跡である。土師器高杯のうち「Ｆ４類」が野内遺跡の高杯Ｃに類似する。ただし、柿田遺跡においては、400個体を超える高杯の確認個体中11個体を数えるにすぎず、主体を占めるタイプとは言えない[22]。

阿曽田遺跡は美濃東部の中津川市内の遺跡である。「Ⅰ期１段階」は有段杯部高杯主体の段階で野内遺跡Ⅰ期に相当する。続く「Ⅰ期２段階」は有段杯部高杯が消滅し碗状杯部高杯が主体となる段階で、カマドがすでに普及し、陶邑窯編年Ⅰ型式４段階並行の須恵器を伴う。ただし、やや古い特徴を示す個体も含

む。土師器の半数以上が内黒土師器であることは大きな相違点であり、信州地域からの強い影響を示す現象と捉えることができる。土師器高杯には口縁部形状が当遺跡の高杯Ｃに似る個体があるが、脚部の形状は一致しない[23]。

取り上げた６遺跡のうち、土師器高杯Ｃの類例が認められるのは、半田垣内遺跡、向洞遺跡、牧野小山遺跡である。現状では調査事例が限られるため詳細は不明であるが、この結果から、飛騨地域から飛騨川流域の美濃中部地域にかけて、当遺跡と土器様相面での共通性の高い地域が広がると予想される。木曽川流域と長良川流域では、飛騨川流域とはかなり様相を異にする可能性が高い。

第５節 まとめ

今回の調査では縄文時代から近世にかけての多岐にわたる遺物が出土したとはいえ、特筆されるのは、飛騨地域における古墳時代中期の集落の様相の一端を明らかにできたことである。当時の土師器の器種構成やその時期的変遷、須恵器の導入状況、建物構造など、提示できた研究上の基礎資料は豊富である。従来、飛騨地域では当該期の遺跡の報告例が極めて少なかっただけに、資料の空白期を埋めるという大きな寄与をなし得たと考える。

出土遺物の大部分を占める土師器については、器種構成やその時期的変遷の点で、東海、北陸、信州など周辺地域に比べ大きな隔たりは認められないことが明らかとなった。ただし、意識的に黒色処理を施す個体がないことから、５世紀中葉段階から土師器の黒色化が始まるとされる信州地域との関連性は強くないと捉えることができる。当時の主力器種である土師器高杯の形状に、飛騨地域から飛騨川沿いに美濃中部地域まで広く共通性が認められることから、周辺地域の中では東海地域との関連性が強いと考えられる。さらに、遺構内出土遺物には飛騨地域で最古級に位置づけられる須恵器が含まれており、飛騨地域への須恵器導入の初期段階の様相を提示することともなった。飛騨地域では操業時期が古墳時代中期に遡る須恵器窯は知られていないため、出土した須恵器は在地窯稼働前の段階で中央からもたらされた搬入品とみられる。出土数は土師器とは比較にならぬほど微量にとどまっており、集落内での大量消費の段階には至っていないと捉えることができる。一般に北陸地域でも信州地域でも散発的に搬入須恵器が確認されるようになるのは陶邑窯編年のＩ型式２段階（ＴＫ216型式）並行期からとされているので[24]、今回の発見により、飛騨地域への須恵器の導入が周辺地域と同時期であったことを明確にできたと言える。

建物構造に関しては、須恵器導入後も建物内にカマドが導入されず、弥生時代以来、飛騨地域で使われた「コの字状石囲炉」が主流を占める段階にとどまっているという明確な事例を提示できた。当遺跡の状況を飛騨地域全域についても言えるのかは明確でないものの、今後、当地域へのカマドの導入状況を追求する上で参考にすべき基礎事例を示すことができたと考える。

最後に遺跡の性格について所見を記しておきたい。今回の調査で検出したのは竪穴建物を主体とする集落跡であり、これは古墳時代中期の集落としてはごく一般的な居住形態に属する。しかし、微量ながら導入初期段階の須恵器が出土したことは、遺跡の性格を把握する上で軽視すべきではない。飛騨地域では当遺跡のものと同程度に古いとみなし得る須恵器の確認例は半田垣内遺跡の１例のみであり、当時にあっては須恵器は一般庶民のための実用品というより特別な階層のための貴重品の域にと

どまっていたと判断される。したがって、遺跡の性格については、須恵器を持つことのできた富裕層の集落跡と捉えることができるであろう。さらに、周辺の古墳群、特に調査地点の南西約300mの至近距離に位置する赤保木古墳群との関連性にも着目すべきである。赤保木古墳群の築造時期は、発掘調査の行われた５号古墳において竪穴式石室が確認されていることから古墳時代中期とみられる。須恵器や土師器が出土していないため直接比較が難しいものの、古墳群の築造時期が当集落の存続時期と重なる可能性は十分考えられる[25)]。最終的な検証は今後の調査の進展を待って行わなくてはならないが、今回検出した古墳時代中期の集落が、中央との交流を保ちつつ、飛騨地域で最古級の古墳の造営主体となった人々の居住地であった可能性を指摘しておく。

第５章　注

１）飛騨地域外での「コの字状石囲炉」検出例として可児市の柿田遺跡ＳＢ52（弥生時代中期の竪穴住居跡）を挙げることができるものの、炉が原形を保っているか疑わしいため確実な事例とは言えないと判断する。財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』を参照されたい。

２）高山市国府町域には、詳細は未報告ではあるが古墳時代集落の調査例が多数あり、本文に挙げた以外にもコの字状石囲炉の検出例も相当数あることが知られている。このほか当地域では、ハの字状に２つの石を組む炉跡の検出例がある。高山市江名子町の薬師野遺跡では、弥生時代後期頃と推定される第２号住居跡のほぼ中央部において、焼土を伴った状態で検出されている（高山市教育委員会1981『薬師野遺跡発掘調査報告書』）。また、詳細は未報告ながら、高山市国府町上広瀬のワラン洞遺跡において古墳時代前期の住居跡の中央部にそのような炉跡が確認されたほか、高山市国府町蓑輪の蓑輪石橋遺跡で検出された古墳時代の20基余りの竪穴住居跡の中に、壁際にそのような炉を持つものがみられるとのことである（国府町教育委員会1993『蓑輪石橋遺跡　現地説明会資料』）。

３）対象とする時代と地域は異なるものの、愛知県内における縄文時代から弥生時代にかけての炉の使用方法と住居内での位置の変遷について、岩瀬彰利氏が考察されている。炉の使用方法には多方向からの煮炊きから一定方向からの煮炊きへという方向性が想定されること、炉の位置の変遷には住居中央付近から端付近へという方向性が認められることなどを論証されている。次の文献を参照されたい。岩瀬彰利1996「縄文・弥生時代の煮炊き方法－大西貝塚・橋良遺跡例より推測した一例－」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会。

４）飛騨地域におけるカマドの導入から普及に至る過程については明らかとなってはいないが、初期の事例のうち出土遺物から年代を推定可能なものとして、以下の７例を挙げることができる（出典は140～142頁の「引用・参考文献」を参照）。

①上町遺跡Ｃ地点（飛騨市古川町）　６号住居址・17号住居址・20号住居址

②上町遺跡Ｄ地点（飛騨市古川町）　４号住居址・８号住居址

③桜本遺跡（高山市国府町）　１号住居跡

④赤保木遺跡（高山市赤保木町）　第１号住居跡

⑤向洞遺跡（下呂市萩原町桜洞）　竪穴住居址

⑥上ヶ平遺跡Ⅰ次調査（下呂市森）　４号住居跡

⑦上ヶ平遺跡Ⅱ次調査（下呂市森）　第１号住居跡ほか（34基）

⑤を除けばいずれも出土須恵器が陶邑窯中村編年Ⅱ型式２～３段階（田辺編年TK10型式）並行期かそれ以降に位置づけられることから、飛騨地域ではカマドが広く普及するのは６世紀に入ってからと捉えることができる。導入時期については、⑤の事例が陶邑窯跡群中村編年Ⅰ型式後半に遡ることから５世紀代にまで遡るとみられるが（萩原町教育委員会1974『飛騨

桜洞・沖田』)、これを高山・飛騨市域にまで拡げて考えてよいか否かは定かでない。ただ、須恵器が散発的ながら出土する当遺跡の集落でカマドが皆無であることから、当地域ではカマドの導入は須恵器の導入より遅れると考えておきたい。

5）半田垣内遺跡の石囲炉については、藤本健三氏からご教示を賜った。

6）重複面積が狭いために先後関係を正確に判断しがたい例として、303号遺構と305号遺構の切り合い関係などを挙げることができる。また、主体となる土師器高杯を異にする遺構間で切り合い関係が認められるケースが極めて限られることも、遺構切り合い関係を先後関係の判断基準としなかった理由の一つである。

7）高杯Ｂと大型高杯Ｂとの間に同様の共伴関係が認められるか否かについては、事例数が少なすぎるため検証不能である。

8）70号遺構では、高杯Ａ（50）が出土した一方で、大型高杯Ｃの脚部の可能性のある個体（54）も出土している。しかし、この遺構は、高杯自体がＡ類とＣ類とが混在しており、当遺跡では稀な過渡期の様相を呈することから、特例と判断した。

9）律令時代の器種は無条件に混入品とみなした。それ以外については、陶邑窯産の古墳時代中期の須恵器に特徴的な青灰色を呈する堅緻な破片であることと摩耗していないことを混入品でないことの条件とし、判別した。厳密に精度が保証される方法ではないものの、大体の傾向を把握するには有効な便法と考える。

10）望月精司2003「北陸・信越地域の土器」、早野浩二2003「東海・中部地方の土器」、いずれも亀田修一編2003『考古資料大観　第３巻　弥生・古墳時代　土器Ⅲ』小学館。

11）注10）に同じ。なお、北陸、信州、東海など周辺地域の研究動向については、望月精司氏からご教示を賜った。

12）注10）に同じ。

13）高山市教育委員会2005「野内遺跡」『岐阜県新発見考古速報　2005』（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター。

14）周辺地域の代表的な土師器編年として引用したのは、主に尾張地域を対象とした「松河戸・宇田・儀長式編年」である。出典は、赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要　第２号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。

15）須恵器の瑳（64）が出土した70号遺構をⅡ期古相段階の代表と捉える。70号遺構の土師器高杯は、有段杯部の個体（50）、長脚の個体（55）、低脚の個体（56）が混在する。そのため第50表では主体となる高杯は不明としたが、高杯Ｃが高杯Ａに遅れて現れるとする立場に立つなら、高杯Ｃが現れているものの古い高杯Ａも残るという過渡的状況を示すと捉えられる。

16）例えば、大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣など。

17）尾野善裕1998「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『第６回東海考古学フォーラム　土器・墓が語る　美濃の独自性　～弥生から古墳へ～』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会、尾野善裕2000「猿投（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』東海土器研究会。

18）国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡　１次・２次発掘調査報告書』。また、藤本健三氏からご教示を賜った。

19）萩原町教育委員会1974『飛驒　桜洞・沖田』。

20）美濃加茂市教育委員会1973『牧野小山遺跡』。

21）関市教育委員会1994『新修関市史　考古・文化財編』。

22）財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』。

23）中津川市教育委員会1985『阿曽田遺跡発掘調査報告書』。

24）大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣など。

25）第２章に記したように、赤保木古墳群は９基中の５基が現存し、このうちの５号古墳は高山市教育委員会による発掘調査が行われた。検出された竪穴式石室２基のうちの１基から鉄槍１、鉄剣２が出土したが、須恵器や土師器は出土していない。

引用・参考文献

1　赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要　第２号』　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
2　岩瀬彰利1996「縄文・弥生時代の煮炊き方法－大西貝塚・橋良遺跡例より推測した一例－」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
3　宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告　第40集』　国立歴史民俗博物館
4　宇野隆夫1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学　第７号』　日本考古学協会
5　内堀信雄2001「土師器煮炊具の様相－地域色と使用痕－」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』　同成社
6　大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』　雄山閣
7　大阪府立近つ飛鳥博物館2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』
8　尾野善裕1998「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『第６回東海考古学フォーラム　土器・墓が語る　美濃の独自性　～弥生から古墳へ～』　東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
9　尾野善裕2000「猿投（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』　東海土器研究会
10　亀田修一2003「総説　古墳時代中・後期の土器」亀田修一編『考古資料大観　第３巻　弥生・古墳時代　土器Ⅲ』　小学館
11　岐阜県教育委員会1998『岐阜県文化財図録　記念物』
12　国府町教育委員会1993『半田垣内遺跡　１次・２次発掘調査報告書』
13　国府町教育委員会1993『蓑輪石橋遺跡　現地説明会資料』
14　国府町教育委員会1996『藤ノ木遺跡発掘調査概要（現地説明会資料）』
15　国府町教育委員会1996『飛騨の国府　歴史編』
16　国府町教育委員会1997『三日町・直道遺跡発掘調査概要（現地説明会資料）』
17　国府町教育委員会1998『桜本遺跡』
18　財団法人愛知県埋蔵文化財センター1994『松河戸遺跡』
19　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2001『志賀公園遺跡』
20　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2003『本川遺跡』
21　財団法人岐阜県文化財保護センター1998『牧野小山遺跡　Ｃ地点』
22　財団法人岐阜県文化財保護センター2000『上ヶ平遺跡Ⅰ』
23　財団法人岐阜県文化財保護センター2000『顔戸南遺跡』
24　財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎１号古墳・冬頭山崎２号古墳・冬頭山崎１号横穴』
25　財団法人岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』
26　財団法人岐阜県文化財保護センター2002『上ヶ平遺跡Ⅱ』

27　財団法人岐阜県文化財保護センター2002『保別戸古墳群』
28　財団法人岐阜県文化財保護センター2002「ウバガ平遺跡」『岐阜県新発見考古速報2002』
29 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2004『野内遺跡（B･D地点）現地説明会資料』
30　財団法人岐阜県文化財保護センター2005『柿田遺跡』
31　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡Ⅱ』
32　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005「赤保木遺跡　発掘調査概要」『岐阜県新発見考古速報2005』
33　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『野内遺跡（B･C･D地点）現地説明会資料』
34　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平５号古墳』
35　齊藤孝正・後藤健一編1995『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』　雄山閣
36　上嶋善治2001「飛騨地方の古墳研究の歩み」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』　同成社
37　上嶋善治2004「古代の飛騨における古墳と集落に関する一考察」八賀晋先生古稀記念論文集刊行会編『かにかくに　八賀晋先生古稀記念論文集』　三星出版
38　関市教育委員会1994『新修関市史　考古・文化財編』
39　高山市教育委員会1971『冬頭王塚発掘調査報告』
40　高山市教育委員会1981『薬師野遺跡発掘調査報告書』
41　高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書（高山市埋蔵文化財調査報告書第21号）』
42　高山市教育委員会1995『高山市内遺跡発掘調査報告書（高山市教育委員会調査報告書第22号）』
43　高山市教育委員会2005「野内遺跡」『岐阜県新発見考古速報2005』　（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター
44　高山市教育委員会2005『高山市内遺跡発掘調査報告書（高山市埋蔵文化財調査報告書第28号）』
45　田中彰2001「飛騨地域の古墳」八賀晋編『美濃・飛騨の古墳とその社会』　同成社
46　田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ
47　田辺昭三1981『須恵器大成』　角川書店
48　東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅　猿投窯・湖西窯編年の再構築』
49　中津川市教育委員会1985『阿曽田遺跡発掘調査報告書』
50　中村浩1981『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的考察－』　柏書房
51　中村浩編1995『須恵器集成図録　第１巻　近畿編Ⅰ』　雄山閣
52　萩原町教育委員会1974『飛騨　桜洞・沖田』
53　早野浩二2003「東海・中部地方の土器」亀田修一編『考古資料大観　第３巻　弥生・古墳時代土器Ⅲ』　小学館
54　藤澤良祐1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
55　藤本健三1990「半田垣内遺跡第Ⅲ次発掘について」『どっこいし　第33号』　高山考古学研究会
56　古川町教育委員会1989『上町遺跡Ｃ地点』

57　古川町教育委員会1991『上町遺跡Ｄ地点』
58　北陸古代手工業生産史研究会1989『北陸の古代手工業生産』
59　上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』
60　埋蔵文化財研究会1992『第32回埋蔵文化財研究集会　古墳時代の竈を考える』
61　美濃加茂市教育委員会1973『牧野小山遺跡』
62　町田勝則1996「石器の研究法－報告文作成に伴う観察・記録法①－」『長野県の考古学』　（財）長野県埋蔵文化財センター
63　望月精司2003「北陸・信越地域の土器」亀田修一編『考古資料大観　第３巻　弥生・古墳時代土器Ⅲ』　小学館

別　表

1　遺構一覧表　144 ～ 151 頁

①「寸法」欄において「－」は計測不能を意味する。
②「種別」欄において使用した略称は次の通りである。
　Ｐ＝ピット、竪穴＝竪穴建物跡

2　包含層出土遺物一覧表　152 頁

①「主要器種の有無確認」欄において、「○」は存在を確認したことを意味する。

3　遺物観察表　153 ～ 160 頁

①「残存率」欄には土器・陶磁器類のうち口縁部の平面形が円形である個体について、完形を12.0とした場合の口縁部残存率の値を小数第一位まで四捨五入して表示した。ただし、残存率0.1未満の個体については「0.1」とした。
②土器・陶磁器類については、「胎土」欄に胎土の粒子の粗密を表示した。土師器については「密」「粗」の二者択一とし、その他については、各種別における標準的な個体を「標準」、特に密な個体を「密」、特に粗い個体を「粗」とした。

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法 長軸cm	寸法 短軸cm	寸法 深さcm	遺物破片数 土器・陶磁器類 縄文土器	弥生土器	土師器 胎土精良	土師器 胎土粗	須恵器 食膳具	須恵器 貯蔵具	須恵器 その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	その他 金属製品	その他 鍛冶関連遺物	その他 石器・石製品	計	土師器・須恵器の確認器種 土師器 碗	土師器 高杯	土師器 大型高杯	土師器 壺	土師器 直口壺	土師器 小型壺	土師器 甕	須恵器 杯蓋	須恵器 杯身	須恵器 摘み蓋	須恵器 返り蓋	須恵器 無台杯	須恵器 有台杯	須恵器 無台碗	須恵器 有台碗	須恵器 有台盤	須恵器 高杯	須恵器 瓶	須恵器 壺・鉢	須恵器 甕	陶錘
1	竪穴	300	281	26																																							
1-1	竪穴内P	16	13	2																																							
1-2	竪穴内P	26	22	4																																							
1-3	竪穴内P	12	10	4			189	158														347	○	○	○		○		○														
1-4	竪穴内P	16	12	3																																							
1-5	竪穴内P	14	14	4																																							
1-6	竪穴内P	13	12	3																																							
2	竪穴	281	-	23																																							
2-1	竪穴内P	20	16	5																																							
2-2	竪穴内P	34	20	18			18	44		2						1						65		○					○													○	
2-3	竪穴内P	43	-	8																																							
2-4	竪穴内P	-	-	15																																							
3	竪穴	406	383	19																																							
3-1	竪穴内P	23	20	13																																							
3-2	竪穴内P	23	23	8																																							
3-3	竪穴内P	18	18	5																																							
3-4	竪穴内P	22	20	10																																							
3-5	竪穴内P	36	28	19																																							
3-6	竪穴内P	26	22	21																																							
3-7	竪穴内P	30	30	31		1	255	518	5	1		3										783		○	○			○	○			○			○								
3-8	竪穴内P	36	27	11																																							
3-9	竪穴内P	18	18	13																																							
3-10	竪穴内P	34	30	17																																							
3-11	竪穴内P	28	26	31																																							
3-12	竪穴内P	74	46	14																																							
3-13	竪穴内P	40	40	9																																							
3-14	竪穴内P	30	25	9																																							
3-15	竪穴内P	18	18	23																																							
4	竪穴	247	-	19																																							
4-1	竪穴内P	30	30	12			31	58														89		○					○														
4-2	竪穴内P	16	12	2																																							
4-3	竪穴内P	16	16	2																																							
5	竪穴	371	330	20																																							
5-1	竪穴内土坑	105	-	31																																							
5-2	竪穴内土坑	80	60	37																																							
5-3	竪穴内P	28	20	22																																							
5-4	竪穴内P	20	16	7																																							
5-5	竪穴内P	26	22	5																																							
5-6	竪穴内P	54	40	25			261	171		3											1	436		○	○	○			○													○	
5-7	竪穴内P	60	-	21																																							
5-8	竪穴内P	-	28	14																																							
5-9	竪穴内P	26	22	7																																							
5-10	竪穴内P	16	12	8																																							
5-11	竪穴内P	20	18	5																																							
5-12	竪穴内P	30	-	38																																							
5-13	竪穴内P	18	12	6																																							
6	竪穴	338	295	9																																							
6-1	竪穴内土坑	102	56	31																																							
6-2	竪穴内P	40	40	15			91	129											1			221		○	○			○	○														
6-3	竪穴内P	50	30	15																																							
6-5	竪穴内P	-	-	10																																							
7	竪穴	-	-	19																																							
7-1	竪穴内P	24	-	10																																							
7-2	竪穴内P	32	24	23																																							
7-3	竪穴内P	30	26	6			5	29		1						1				1		37							○													○	
7-4	竪穴内P	33	33	35																																							
7-5	竪穴内P	20	20	21																																							
7-6	竪穴内P	-	-	11																																							
7-7	竪穴内P	-	-	21																																							
9	P	29	28	23				1														1																					
12	竪穴	-	-	20																																							
12-1	竪穴内P	-	-	9																																							
12-2	竪穴内P	36	34	15			18	45											1			64		○					○														
12-3	竪穴内P	26	-	9																																							
12-4	竪穴内P	-	-	15																																							
13	竪穴	287	-	16																																							
13-1	竪穴内P	-	-	18																																							
13-2	竪穴内P	40	22	11																																							
13-3	竪穴内P	26	24	8			4	11														15		○					○														
13-4	竪穴内P	18	12	20																																							
13-5	竪穴内P	-	-	8																																							
13-6	竪穴内P	-	-	6																																							
14	P	-	60	-				2														2																					
18	P	32	27	15																		0																					

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法			遺物破片数																	土師器・須恵器の確認器種																		
					土器・陶磁器類														その他																					
							土師器		須恵器													土師器					須恵器												
		長軸cm	短軸cm	深さcm	縄文土器	弥生土器	胎土精良	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品	計	碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	鼎	壺・鉢	甕	陶錘
19	P	20	19	9																		0																				
20	P	23	22	7																		0																				
21	P	41	34	17				2														2																				
22	P	26	25	23																		0																				
25	竪穴	330	-	23																																						
25-1	竪穴内P	26	26	4																																						
25-2	竪穴内P	42	40	5			23	41														64			○		○	○														
25-3	竪穴内P	22	20	3																																						
25-4	竪穴内P	14	14	4																																						
27	P	100	-	11			1	2														3						○														
31	P	30	-	7			1															1																				
32	P	23	20	13																		0																				
33	P	28	27	19																		0																				
34	P	36	34	5																		0																				
35	P	40	40	23																		0																				
36	P	35	28	9																		0																				
37	P	21	18	4																		0																				
38	竪穴	370	-	20																																						
38-2	竪穴内P	42	40	3																																						
38-3	竪穴内P	20	20	4	2		25	86														113		○	○			○														
38-4	竪穴内P	16	16	8																																						
38-5	竪穴内P	20	17	5																																						
38-6	竪穴内P	18	16	6																																						
40	土坑	-	216	14																																						
40-1	土坑内土坑	160	140	22			64	70		1												135		○		○		○													○	
40-2	土坑内P	47	-	30																																						
40-3	土坑内P	40	-	21																																						
41	土坑	-	-	6																		0																				
42	P	40	39	19			3	1														4																				
43	P	52	49	23			3															3		○																		
44	P	39	29	23			2	3														5																				
45	P	26	25	6																		0																				
46	P	48	44	27				3														3																				
47	P	-	33	32			1															1																				
48	P	35	33	16																		0																				
51	P	28	21	9																		0																				
52	P	37	35	7																		0																				
53	竪穴	-	-	11																																						
53-1	竪穴内P	-	-	28																																						
53-2	竪穴内P	16	16	7			51	81														132		○	○			○														
53-3	竪穴内P	-	32	10																																						
53-4	竪穴内P	-	-	22																																						
53-5	竪穴内P	-	30	8																																						
54	P	29	26	20				1														1																				
55	土坑	-	140	21			40	47														87		○				○														
56	竪穴	405	310	17																																						
56-1	竪穴内P	-	23	4																																						
56-2	竪穴内P	17	12	4																																						
56-3	竪穴内P	38	28	38																																						
56-4	竪穴内P	20	18	7			65	78														143		○	○			○														
56-5	竪穴内P	18	16	6																																						
56-6	竪穴内P	20	16	3																																						
56-7	竪穴内P	16	16	2																																						
56-8	竪穴内P	40	32	7																																						
56-9	竪穴内P	30	18	10																																						
57	竪穴	316	204	17			10	12														22		○	○			○														
57-1	竪穴内P	33	24	12																																						
58	P	35	25	26			4	2														6																				
59	溝	-	20	10																		0																				
62	P	14	13	14																		0																				
63	P	22	18	15																		0																				
64	P	39	39	21			1	5														6																				
65	P	38	32	14			2	1														3																				
66	P	57	55	26			1	3														4																				
67	P	61	60	30			4	4														8																				
68	土坑	95	85	23			1															1																				
69	P	65	56	64			4	7														11		○			○	○														
70	竪穴	540	413	19																																						
70-1	竪穴内P	50	45	51																																						
70-2	竪穴内P	12	12	2																																						
70-3	竪穴内P	58	48	38			320	794	1	1										2		1118		○	○	○		○											○			
70-4	竪穴内土坑	112	-	81																																						
70-5	竪穴内P	42	40	16																																						
70-6	竪穴内P	28	26	39																																						

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法 長軸cm	寸法 短軸cm	寸法 深さcm	遺物破片数 土器・陶磁器類 縄文土器	弥生土器	土師器 胎土精良	土師器 胎土粗	須恵器 食膳具	須恵器 貯蔵具	須恵器 その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	その他 金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品	計	土師器・須恵器の確認器種 土師器 碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	須恵器 杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	甕	壺・鉢	甕	陶錘
71	竪穴	-	-	16																																							
71-1	竪穴内P	18	12	3			87	40														127		○				○														
71-2	竪穴内P	18	15	3																																							
71-3	竪穴内P	20	20	4																																							
72	土坑	120	120	4																		0																					
73	P	25	20	15																		0																					
74	土坑	160	130	53			27	18	1													46		○				○														
75	土坑	88	80	80																		0																					
76	土坑	140	118	54			37	61														98		○				○														
77	P	26	25	15			1															1			○																	
78	土坑	110	82	89			18	14														32		○																		
79	土坑	220	197	15																																							
79-1	土坑内P	30	30	12			57	94														151		○				○														
79-2	土坑内P	37	35	11																																							
80	竪穴	290	-	18																																							
80-1	竪穴内P	20	16	8																																							
80-2	竪穴内P	34	23	3			40	503														543			○			○														
80-3	竪穴内P	20	20	7																																							
80-4	竪穴内P	16	16	6																																							
81	P	29	27	29				2														2																					
82	P	70	65	59			3	2														5					○															
83	P	46	-	42			6	2														8						○														
84	P	43	43	35																		0																					
85	P	53	52	29			1	1														2																					
86	P	24	22	33				2														2																					
88	P	45	36	28			1															1		○																			
89	P	38	34	21				2														2																					
90	P	60	43	10			1															1																					
91	P	19	15	14																		0																					
92	P	49	45	34			2															2			○																		
93	P	46	46	49			3	3														6		○																			
94	P	29	27	35				1														1																					
95	P	31	29	23																		0																					
96	P	55	46	16			2	1														3																					
97	P	49	37	19			2	4														6						○															
98	P	15	15	9																		0																					
99	P	25	25	14																		0																					
100	P	29	27	3																		0																					
101	P	23	22	15																		0																					
102	竪穴	274	247	12																																							
102-1	竪穴内P	62	50	15																																							
102-2	竪穴内P	48	30	12																																							
102-3	竪穴内P	26	20	5																																							
102-4	竪穴内P	26	26	7			89	195	1	4												289		○	○			○													○		
102-5	竪穴内P	28	18	5																																							
102-6	竪穴内P	44	44	5																																							
102-7	竪穴内P	18	18	5																																							
102-8	竪穴内P	16	12	4																																							
102-9	竪穴内P	28	20	8																																							
103	P	18	16	14			12	13														25						○															
104	P	25	19	8			1															1																					
105	P	27	23	7				1														1																					
107	P	27	26	15				1														1																					
108	P	50	41	44			27	6														33			○																		
109	P	21	18	9																		0																					
110	P	27	23	12																		0																					
112	P	20	17	7																		0																					
113	P	38	33	10			1															1																					
114	P	37	29	22	1		7	5														13																					
115	P	19	16	9																		0																					
116	P	16	16	8																		0																					
117	P	25	24	6																		0																					
118	竪穴	495	467	17																																							
118-1	竪穴内P	50	45	23																																							
118-2	竪穴内P	44	44	22																																							
118-3	竪穴内P	70	56	26																																							
118-4	竪穴内P	86	60	30																																							
118-5	竪穴内P	20	20	20			230	266														496		○	○			○															
118-6	竪穴内P	72	50	25																																							
118-7	竪穴内P	22	18	10																																							
118-8	竪穴内P	20	14	8																																							
118-9	竪穴内P	54	52	22																																							
118-10	竪穴内P	40	28	18																																							
119	P	31	30	13																		0																					

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法			遺物破片数																計	土師器・須恵器の確認器種																			
					土器・陶磁器類													その他				土師器						須恵器														
							土師器		須恵器																																	
		長軸cm	短軸cm	深さcm	縄文土器	弥生土器	胎土精良	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品		碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	甑	壺・鉢	甕	陶錘
120	竪穴	-	-	13			9	15														24																				
121	竪穴	549	320	20																																						
121-1	竪穴内P	20	-	4																																						
121-2	竪穴内P	21	20	3			176	122		1											1	300		○	○	○		○													○	
121-3	竪穴内P	54	44	18																																						
121-4	竪穴内土坑	92	85	35																																						
121-5	竪穴内P	40	37	8																																						
122	P	30	26	13																		0																				
123	P	39	27	15				10														10																				
124	P	43	34	19				2														2																				
125	竪穴	432	407	11																																						
125-1	竪穴内土坑	-	42	7																																						
125-2	竪穴内P	23	-	18			66	107														173		○	○	○		○	○													
125-3	竪穴内P	20	20	23																																						
125-4	竪穴内P	56	54	27																																						
126	土坑	146	113	100			13	29														42		○					○													
128	竪穴	372	-	12																																						
128-1	竪穴内P	38	32	6																																						
128-2	竪穴内P	46	30	7																																						
128-3	竪穴内P	18	18	2																																						
128-4	竪穴内P	30	26	4			102	87								1						190		○	○	○		○	○													
128-5	竪穴内P	40	33	7																																						
128-6	竪穴内P	-	28	7																																						
128-7	竪穴内P	-	-	12																																						
128-8	竪穴内P	-	25	5																																						
129	竪穴	335	-	11																																						
129-1	竪穴内P	32	24	16																																						
129-2	竪穴内P	40	40	22																																						
129-3	竪穴内P	-	-	28			30	63													1	94		○					○													
129-4	竪穴内P	24	24	12																																						
129-5	竪穴内P	-	45	15																																						
129-6	竪穴内P	22	22	18																																						
130	竪穴	440	414	20																																						
130-1	竪穴内土坑	82	82	18																																						
130-2	竪穴内P	50	46	22																																						
130-3	竪穴内P	50	40	11																																						
130-4	竪穴内P	40	36	35																																						
130-5	竪穴内P	46	42	26			439	608		1		1				3	3			4		1059	○	○	○	○	○		○													○	
130-6	竪穴内P	26	26	13																																						
130-7	竪穴内P	60	42	28																																						
130-8	竪穴内P	56	30	16																																						
130-9	竪穴内P	40	30	50																																						
130-10	竪穴内P	30	20	8																																						
131	竪穴	-	-	18																																						
131-1	竪穴内P	48	43	6																																						
131-2	竪穴内P	34	30	8																																						
131-3	竪穴内P	42	34	35																																						
131-4	竪穴内P	22	16	4																																						
131-5	竪穴内P	36	26	24			135	224	1													360		○	○			○	○													
131-6	竪穴内P	26	24	16																																						
131-7	竪穴内P	24	20	10																																						
131-8	竪穴内P	40	34	36																																						
131-9	竪穴内土坑	-	40	6																																						
132	竪穴	386	317	24																																						
132-1	竪穴内P	18	16	7																																						
132-2	竪穴内P	26	24	5																																						
132-3	竪穴内P	16	14	14																																						
132-4	竪穴内P	14	8	5																																						
132-5	竪穴内P	42	30	4			142	221		2												365		○	○		○		○													○	
132-6	竪穴内P	22	20	12																																						
132-7	竪穴内土坑	68	60	9																																						
132-8	竪穴内土坑	56	-	22																																						
132-9	竪穴内P	42	26	8																																						

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法			遺物破片数																計	土師器・須恵器の確認器種																	
					土器・陶磁器類														その他																					
							土師器		須恵器													土師器					須恵器													
		長軸cm	短軸cm	深さcm	縄文土器	弥生土器	胎土精良	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品		碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	鍋	壺・鉢	甕	陶錘
133	竪穴	390	325	22																																				
133-1	竪穴内土坑	230	70	7																																				
133-2	竪穴内P	25	22	6																																				
133-4	竪穴内P	30	20	6																																				
133-5	竪穴内P	24	20	9																																				
133-6	竪穴内P	68	53	20			63	250				1									314		○		○		○	○												
133-7	竪穴内P	18	14	6																																				
133-8	竪穴内P	40	35	8																																				
133-9	竪穴内P	32	25	8																																				
133-10	竪穴内P	-	32	11																																				
133-11	竪穴内P	30	30	6																																				
133-12	竪穴内P	30	30	24																																				
134	P	40	34	26			1	6													7						○													
135	P	40	35	27			2	10													12		○				○													
136	P	125	47	38			1		1												2									○										
137	P	34	33	19			2														2																			
138	P	50	36	41			10	15													25		○				○													
139	P	38	30	17			1	1													2																			
141	P	33	23	5			1														1																			
142	P	33	-	6				6													6																			
143	P	40	25	25			1	17													18						○													
144	P	70	67	64																	0																			
145	P	58	58	28			12	32													44		○				○													
147	P	-	23	10																	0																			
148	P	18	18	5																	0																			
149	P	23	22	10																	0																			
150	P	21	20	7																	0																			
151	P	13	13	13																	0																			
152	P	-	32	10																	0																			
153	P	20	20	29																	0																			
154	P	-	37	54			28	24													52		○				○													
155	P	68	61	26				3													3																			
156	P	26	26	7																	0																			
157	P	16	15	20																	0																			
158	P	20	20	18																	0																			
159	P	44	38	9			1														1																			
160	P	22	21	22				1													1																			
161	P	39	37	25			4	1													5																			
162	竪穴	347	-	18																																				
162-1	竪穴内土坑	62	50	32																																				
162-2	竪穴内P	18	12	15			142	39	1	1											183		○	○		○	○	○									○			○
162-3	竪穴内P	28	26	14																																				
162-4	竪穴内P	34	32	14																																				
162-5	竪穴内P	28	28	40																																				
163	P	27	25	12				1													1																			
164	P	29	25	6			3														3		○																	
165	P	15	11	16																	0																			
166	P	19	17	17																	0																			
167	P	28	21	24																	0																			
168	P	14	13	26																	0																			
169	P	24	22	15																	0																			
170	P	-	-	8			1														1																			
171	P	-	-	4																	0																			
172	P	20	20	16				1													1																			
173	P	38	29	32			3	3													6																			
174	P	50	30	18			1	1													2																			
175	土坑	65	45	26			1	9													10																			
175-1	土坑内P	25	24	29																																				
176	P	23	19	27				1													1																			
177	P	47	25	40			7	3													10						○													
178	P	-	-	19			1														1																			
179	P	30	30	32																	0																			
180	P	35	30	11				2													2																			
181	P	18	16	20																	0																			
182	P	60	55	48			20	21													41		○				○													
183	P	22	20	27																	0																			
184	P	31	29	18				3													3																			
185	P	15	14	20																	0																			
186	P	-	42	17			2														2																			
187	P	60	50	13			2														2			○																
188	P	25	24	12																	0																			
189	P	28	22	25																	0																			
190	P	20	18	9																	0																			
191	P	41	40	24			3	4													7																			

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法 長軸cm	寸法 短軸cm	寸法 深さcm	遺物破片数 土器・陶磁器類 縄文土器	弥生土器	土師器 胎土精良	土師器 胎土粗	須恵器 食膳具	須恵器 貯蔵具	須恵器 その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	その他 金属製品	その他 鍛冶関連遺物	その他 石器・石製品	計	土師器・須恵器の確認器種 土師器 碗	土師器 高杯	土師器 大型高杯	土師器 壺	土師器 直口壺	土師器 小型壺	土師器 甕	須恵器 杯蓋	須恵器 杯身	須恵器 摘み蓋	須恵器 返り蓋	須恵器 無台杯	須恵器 有台杯	須恵器 無台碗	須恵器 有台碗	須恵器 有台盤	須恵器 高杯	須恵器 甕	須恵器 壺・鉢	須恵器 甕	陶錘
192	P	36	35	14																		0																					
193	P	72	58	48			10	29														39		○				○															
194	P	-	33	18			1	1														2																					
195	P	19	15	21																		0																					
196	P	25	18	23			2															2																					
197	P	46	32	15				1														1																					
200	溝	-	200	39																		0																					
201	P	30	22	3																		0																					
202	P	23	23	17																		0																					
204	溝	-	23	16																		0																					
301	竪穴	272	-	15			2	37														39		○				○															
302	竪穴	353	280	8			301	64														365		○	○		○	○															
302-1	竪穴内P	20	20	6																																							
303	竪穴	530	460	12																																							
303-1	竪穴内P	-	32	5																																							
303-2	竪穴内P	36	-	11	3		117	291														411		○	○	○	○	○															
303-3	竪穴内P	26	26	18																																							
303-4	竪穴内P	20	20	8																																							
304	竪穴	284	-	5			6	79														85	○	○				○															
304-1	竪穴内P	44	40	9																																							
305	竪穴	300	-	18			14	54	1													69		○				○		○													
305-1	竪穴内P	-	30	12																																							
307	竪穴	410	-	9																																							
307-1	竪穴内P	50	-	12																																							
307-2	竪穴内P	27	24	9																																							
307-3	竪穴内P	30	30	12			49	83														132		○	○			○															
307-4	竪穴内P	24	22	10																																							
307-5	竪穴内P	21	20	28																																							
307-6	竪穴内P	40	32	20																																							
308	竪穴	430	345	6																																							
308-1	竪穴内P	20	20	10			22	72														94		○				○															
308-2	竪穴内P	40	40	7																																							
308-3	竪穴内P	40	38	10																																							
309	竪穴	760	443	9																																							
309-1	竪穴内P	20	18	19																																							
309-2	竪穴内P	38	32	23																																							
309-3	竪穴内P	20	16	11																																							
309-4	竪穴内P	10	8	3																																							
309-5	竪穴内P	30	28	6			37	283														320		○	○	○		○															
309-6	竪穴内P	18	18	8																																							
309-7	竪穴内P	56	46	20																																							
309-8	竪穴内P	16	14	16																																							
309-9	竪穴内P	36	30	12																																							
309-10	竪穴内P	24	20	5																																							
310	竪穴	356	292	14																																							
310-1	竪穴内土坑	56	54	20																																							
310-2	竪穴内P	32	32	22																																							
310-3	竪穴内P	30	28	9																																							
310-4	竪穴内P	24	22	4			48	167														215		○				○															
310-5	竪穴内P	20	16	4																																							
310-6	竪穴内P	18	16	6																																							
310-7	竪穴内P	16	14	8																																							
310-8	竪穴内P	18	18	15																																							
312	竪穴	375	-	8																																							
312-1	竪穴内P	24	24	8			25	50														75	○	○				○															
312-2	竪穴内P	42	40	8																																							
313	土坑	-	166	8			6	15														21				○		○															
313-1	土坑内P	50	-	12																																							
315	竪穴	-	-	9																																							
315-1	竪穴内P	34	34	10			8	71														79	○		○	○		○															
315-2	竪穴内P	50	47	23																																							
315-3	竪穴内P	40	-	14																																							
316	竪穴	502	-	8																																							
316-1	竪穴内P	34	22	8																																							
317	竪穴	-	-	8																																							
317-1	竪穴内P	-	-	8			3	13														16						○															
317-2	竪穴内P	34	34	17																																							
317-3	竪穴内P	20	20	8																																							

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法			遺物破片数															計	土師器・須恵器の確認器種																			
					土器・陶磁器類													その他			土師器					須恵器														
							土師器		須恵器																															
		長軸cm	短軸cm	深さcm	縄文土器	弥生土器	胎土精良	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品		碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	鐙	壺・鉢	甕	陶錘
318	竪穴	510	442	8																	67		○				○													
318-1	竪穴内P	23	20	8																																				
318-2	竪穴内P	64	50	20																																				
318-3	竪穴内P	28	20	24																																				
318-4	竪穴内P	52	52	36																																				
318-5	竪穴内P	18	16	16																																				
318-6	竪穴内P	58	54	26			25	40								2																								
318-7	竪穴内P	-	80	24																																				
318-8	竪穴内土坑	-	74	18																																				
318-9	竪穴内P	40	30	14																																				
318-10	竪穴内P	68	-	14																																				
318-11	竪穴内P	64	50	28																																				
318-12	竪穴内P	30	20	22																																				
319	竪穴	-	-	17			1	53													54						○													
320	P	32	28	13	9																9																			
322	P	56	54	12																	0																			
323	P	40	20	23																	0																			
328	竪穴	378	-	10			9	18		3											30																			○
329	竪穴	-	-	6																	0																			
330	竪穴	-	-	12																	61		○	○		○	○													
330-1	竪穴内P	40	40	3			25	36																																
330-2	竪穴内P	20	20	8																																				
331	竪穴	-	-	8																	10						○													
331-1	竪穴内P	28	28	15			2	8																																
331-2	竪穴内P	20	18	19																																				
347	P	18	18	22																	0																			
348	P	22	22	21			1														1																			
349	P	22	21	24				3													3																			
350	土坑	96	70	26																	0																			
352	P	22	21	16																	0																			
353	P	32	26	22																	0																			
355	P	18	16	20																	0																			
356	P	32	30	16																	0																			
357	P	24	22	18																	0																			
361	P	-	46	10			1	1													2																			
362	P	48	40	8																	0																			
363	P	75	60	24			5	8													13		○																	
364	P	50	48	18																	0																			
368	P	32	32	6																	0																			
369	P	36	36	8																	0																			
501	P	17	17	15																	0																			
502	P	25	25	2																	0																			
504	P	65	60	33			33	32													65		○				○													
505	P	85	67	19			3														3			○																
507	土坑	95	75	10			10	3													13		○																	
508	P	-	25	32																	0																			
509	P	40	40	28			2	1													3																			
510	P	23	18	12																	0																			
511	土坑	98	75	42			4	3													7						○													
512	土坑	91	-	59			4	1													5																			
513	P	15	15	13																	0																			
514	P	40	33	22			1	2													3																			
515	P	30	25	13			2	4				1				1					8		○																	
516	P	55	50	40			3	4													7																			
518	P	40	40	17																	0																			
519	P	60	-	30				2													2																			
520	P	20	20	11																	0																			
521	P	35	35	15																	0																			
522	P	30	30	13			3														3																			
523	P	40	35	27																	0																			
524	P	20	23	12																	0																			
526	P	27	27	25																	0																			
527	P	65	58	47			4	5		1											10																			○
528	P	67	58	20			1	2													3																			
529	P	25	22	21																	0																			
530	P	50	45	27			1														1			○															
531	竪穴	450	-	22																	299		○	○	○	○	○													○
531-1	竪穴内P	-	40	25			187	107		2						3																								
531-2	竪穴内P	40	40	16																																				
531-3	竪穴内P	70	60	36																																				
532	土坑	-	-	20																	0																			
533	P	50	-	20			1														1		○																	
535	土坑	175	128	22			6	12													18		○				○													
535-1	土坑内P	45	41	11																																				

別表1　遺構一覧表

遺構番号	種別	寸法 長軸cm	寸法 短軸cm	寸法 深さcm	遺物破片数 土器・陶磁器類 縄文土器	弥生土器	土師器 胎土精良	土師器 胎土粗	須恵器 食膳具	須恵器 貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	その他 金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品	計	土師器・須恵器の確認器種 土師器 碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	須恵器 杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	瑞	壺・鉢	甕	陶錘
536	竪穴	-	-	19																																							
536-1	竪穴内P	30	22	4																																							
536-2	竪穴内P	54	40	4			302	305	2	1						2						612	○	○	○			○	○													○	
536-3	竪穴内P	30	28	5																																							
536-4	竪穴内P	-	76	13																																							
536-5	竪穴内P	32	30	9																																							
538	P	-	90	7			3															3			○																	
539	土坑	90	80	26			10	5														15		○					○													
540	P	35	30	19																		0																					
541	土坑	100	85	48																		0																					
542	P	30	25	17																		0																					
543	P	47	45	16																		0																					
544	P	-	25	29			1															1		○																			
545	P	32	-	18																		0																					
546	P	23	23	15																		0																					
547	P	30	26	26																		0																					
548	P	30	30	25																		0																					
549	P	25	25	8																		0																					
550	P	20	15	10																		0																					
551	P	30	30	8																		0																					
552	P	25	25	10																		0																					
553	竪穴	-	-	32																																							
553-1	竪穴内P	20	20	3																																							
553-2	竪穴内P	13	13	2			51	63		4						1				12		131		○	○				○													○	
553-3	竪穴内P	22	20	9																																							
553-4	竪穴内P	-	28	24																																							
554	土坑	93	73	28			27	6														33		○		○																	
556	溝	-	25	15																		0																					
557	P	13	13	39																		0																					
558	P	40	33	32																		0																					
559	竪穴	-	-	34																		0																					
560	竪穴	146	-	14																																							
560-1	竪穴内P	18	18	5			9	7														16	○	○	○	○			○														
560-2	竪穴内P	20	20	5																																							
560-3	竪穴内P	-	-	7																																							
561	竪穴	-	-	8																																							
561-1	竪穴内P	54	50	7			29	37														66	○	○					○														
561-2	竪穴内P	40	40	9																																							
562	P	25	19	12																		0																					
563	P	20	18	16			3	6														9																					
564	P	38	-	19																		0																					
565	P	25	22	19																		0																					
566	P	-	37	12																		0																					
567	P	-	-	27																		0																					
568	P	-	40	12																		0																					
569	竪穴	-	-	13			12	13	3	3						2						33																		○	○		
570	P	-	-	17																		0																					
571	P	-	-	13																		0																					
572	P	25	22	8																		0																					
573	P	-	30	9																		0																					
574	P	28	28	13																		0																					
575	P	47	30	27																		0																					
601	土坑	106	50	8																		0																					
602	竪穴	355	330	12																																							
602-1	竪穴内P	12	12	16																																							
602-2	竪穴内P	14	14	16			35	55	91	18	1	1										201		○					○			○			○	○	○	○			○	○	○
602-3	竪穴内P	26	24	18																																							
602-4	竪穴内P	14	14	20																																							
603	竪穴	476	380	15																																							
603-1	竪穴内P	20	16	5																																							
603-2	竪穴内P	40	34	32																																							
603-3	竪穴内P	16	16	17			182	230	25	11		1				2						451		○	○	○		○	○			○		○	○	○							
603-4	竪穴内P	14	14	3																																							
603-5	竪穴内P	18	16	3																																							
603-6	竪穴内P	-	-	12																																							
603-7	竪穴内P	-	-	24																																							
604	竪穴	450	-	8																																							
604-1	竪穴内P	22	22	38																																							
604-2	竪穴内P	-	20	36			140	104	2	2						3						251	○	○					○													○	
604-3	竪穴内P	20	20	8																																							
604-4	竪穴内P	30	26	34																																							
604-6	竪穴内P	24	20	32																																							
遺物破片数　計					0	0	804	831	123	39	1	2	0	0	0	10	0	0	0	12	0	1822																					

別表2　包含層出土遺物一覧表

グリッド	遺物破片数																	計	土師器・須恵器の確認器種																		
	土器・陶磁器類														その他				土師器						須恵器												
			土師器		須恵器																																
	縄文土器	弥生土器	胎土精良	胎土粗	食膳具	貯蔵具	その他（陶錘）	灰釉陶器	輸入磁器	山茶碗	珠洲焼	中近世施釉陶器	近世磁器	時代不明の土師質・瓦質土器	金属製品	鍛冶関連遺物	石器・石製品		碗	高杯	大型高杯	壺	直口壺	小型壺	甕	杯蓋	杯身	摘み蓋	返り蓋	無台杯	有台杯	無台碗	有台碗	有台盤	高杯	甑	壺・鉢	甕	陶錘
1　ス			35	28	2	11						4						80		○	○				○													○	
2　シ			17	5		1		1							1			25		○																		
2　ス			4	1	2													7																				
3　シ			2	4		1		2				1	1			1		12																				
3　ス			20	28														48		○					○													
3　セ			111	143														254		○					○													
4　サ			199	135								6	1		1			342	○	○	○	○	○		○													
4　シ			35	37														72	○						○													
4　ス			234	355	3	4		2				2					1	601		○	○	○		○	○				○									○	
4　セ			195	349	1	2		2				1						550		○	○	○			○													
4　ソ				1														1																				
5　コ			3															3						○														
5　サ						1												1																				
5　シ			55	66	1							1						123		○		○			○													
5　ス			242	324	2	1									1			570		○	○	○			○													
5　セ	2		431	624	3	2										1	1	1064		○	○	○			○	○												
6　ケ			47	67		1												115		○					○													
6　サ			24	34	4	2		1				2						67		○					○							○						
6　シ			281	387	1	4		1				2					2	678		○	○	○			○		○											○
6　ス			83	164	3	2											2	254		○		○			○													○
7　コ	1		29	207	11	2						5						255		○					○												○	
7　サ	4		22	55	4	9		1				2		1				98		○	○	○			○											○		○
7　シ			94	111		4												209		○				○	○													○
8　カ				1	6													7										○			○	○						
8　コ			12	31														43		○					○													
8　サ	2			1	1			1										5														○						
9　カ			1	7	5													13							○						○	○						
9　キ			14	12														26			○				○													
12　オ				1														1																				
12　カ	5		263	330	19	27		9			1	35	2					691		○	○	○	○	○	○			○			○						○	○
12　キ			39	49	4	6						8						106		○					○												○	○
13　ウ			2	1	1	1		1				13	3					22		○																		
13　エ			11	114	9	12		3				36	1			2		188		○					○			○			○						○	
13　オ			74	213	12	10						1				1		311		○					○			○			○						○	
13　カ	2		35	76	6	1						11						131		○					○			○			○							
13　キ			66	117	1	2						6	1	5				198		○			○		○													
14　イ			8	6	2			1				6	3					26		○																		
14　ウ			26	38								3						67							○													
14　エ			16	81	1	4		4				12			1			119							○												○	
14　オ	5		86	128				1				2						222		○	○				○													
14　カ	4		33	28	3	6						9				6	2	91		○	○				○			○									○	○
14　キ			5	4	1	6						6				8		30																				○
15　イ			7	9	1			2				2						21		○																		
15　ウ	4			9	2	2		6				29	1					53													○							
15　エ				4		3						23		1				31																				
15　オ			95	121	2	3						10						231		○	○				○													○
15　カ			4	2		1												7		○																		
16　ウ	1	2	41	27	9	2					1	16					1	100		○											○							
16　エ	1			1								2						4																				
b区グリッド不明	1		349	498	18	26		4	1			14						911		○	○	○		○	○			○			○						○	○
b北西区グリッド不明			9	6	8	7						20						50		○	○				○													○
b北東区グリッド不明	8		23	41	2	3										3	1	81		○					○												○	○
aア					27	16		7	1	4		1						56										○	○			○			○			○
aイ					114	72		40		1	1	3		1			2	234									○	○	○		○	○	○	○			○	○
bア				3	49	53		24		1	1	3	1	1		1		137										○				○			○		○	○
bイ		1	7	24	360	404		112	2		1	15						926									○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
bウ			1	3	99	48		48	2		1	6		9	1	6	1	225									○	○			○	○					○	○
a区グリッド不明		1		17	136	121		35		5		32	2				2	351										○		○		○	○	○			○	○
計	40	4	3390	5128	935	883	0	308	6	11	6	350	16	18	5	29	15	11144																				

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
1	1号	L	土師器	碗	13.6	7.8	6.0		粗	9.0	体部内面横方向ナデ。口縁部外面横方向ナデ。体部外面ナデ。底部内外面ナデ。
2	1号	M	土師器	碗	10.0	6.3	2.6		粗	7.0	体部内面から底部内面にかけて斜め方向と横方向のハケ目。体部外面から底部外面にかけて斜め方向と横方向のハケ目。ゆがみ大きい。
3	1号	L	土師器	高杯	14.6				密	3.3	杯部内外面ナデ。内面は黒色を呈する。
4	1号	L	土師器	高杯	12.0	9.0	9.0		密	6.6	杯体部内面摩滅するが横方向へラミガキの痕跡がまばらに残る。杯体部外面摩滅。杯底部内外面摩滅。脚部内外面摩滅。
5	1号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅するが、杯底部内面にハケ目が認められる。橙色を呈する。
6	1号	L	土師器	高杯	13.0	8.7	9.0		密	5.3	杯体部内外面摩滅するが、横方向へラミガキの痕跡がまばらに残る。杯底部内外面摩滅。脚柱部内面摩滅、外面も摩滅するが横方向へラミガキの痕跡がわずかに残る脚裾部内外面摩滅。。
7	1号	M	土師器	高杯			9.8		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
8	1号	L	土師器	高杯			8.8		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
9	1号	L	土師器	高杯			10.2		密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ナデ。脚裾部内外面横方向ナデ。
10	1号	M	土師器	直口壺			7.2		密	0	頸部内面摩滅。頸部外面横方向ナデ。胴部内面ナデ･オサエ。胴部外面に部分的にハケ目(ハケ目を丁寧なナデにより消している)。底部内外面ナデ･オサエ。
11	1号	L	土師器	直口壺？			2.6		密	0	胴部から底部にかけての内面板ナデ。胴部から底部にかけての外面丁寧なナデ。胴部外面に炭化物付着。胎土は甕のものより密。
12	1号	M	土師器	甕	14.0				粗	1.5	内外面摩滅。
13	1号	L	土師器	甕	12.0	19.5	3.0		粗	1.5	口頸部内面摩滅。口頸部外面に縦方向のハケ目。胴部内面に斜め方向のハケ目。胴部外面上半部に斜め方向のハケ目、下半部は被熱により表面剥落。 底部内面ナデ･オサエ。底部外面摩滅。口頸部内面に炭化物付着。
14	3号	L	土師器	大型高杯	17.6	12.0	13.0		密	2.6	口縁部内面横方向ナデ。杯体部内面横方向へラミガキ、外面横方向ナデ。杯底部内面ナデ、外面横方向ナデ。脚柱部内面ナデ、外面上半部摩滅、下半部横方向へラミガキ。脚裾部内外面横方向ナデ。内外面黒色。3―13号遺構出土遺物と接合。
15	3号	L	土師器	高杯？			8.3		粗	0	杯底部内外面にハケ目。脚柱部内外面ナデ。脚裾部内外面ナデ。胎土粗く砂粒の混入多い。
16	3号	M･L	土師器	大型高杯	22.2		14.0		密	1.2	内外面摩滅。内外面黄灰色で本来は黒色であった可能性あり。
17	3号	M･L	土師器	小型壺	10.6	9.1			密	5.3	口頸部内外面に浅い横方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面丁寧なナデ。底部内面に横方向のハケ目。底部外面に横方向のハケ目と丁寧なナデ。胎土極めて密で砂粒の混入少ない。橙色を呈する。
18	3号	L	土師器	小型壺					密	0	胴部内面上半部指オサエ。底部内面から胴部内面下半部にかけて強い指ナデ。胴部外面に横方向のハケ目。底部外面にハケ目。
19	3号	L	土師器	甕			2.6		粗	0	内外面摩滅。
20	3号	U･M･L	土師器	甕	14.0				粗	3.5	口頸部内外面横方向ナデ、頸部外面には横方向の沈線を加える。胴部内面に特殊な原体によるハケ目とみられる横方向の幅広平行線(5条で1単位)。胴部外面に縦方向のハケ目。外面に炭化物付着。
21	3号	L	土師器	甕	9.8	9.9	3.1		粗	6.3	口頸部内外面横方向ナデ、外面はハケ目の痕跡がわずかに残る。胴部内面丁寧なナデ。胴部から底部にかけての外面に斜め～横方向のハケ目。底部内面ナデ。胴部から底部にかけての内面に炭化物付着。
22	3号	L	土師器	甕	14.6	19.7	0.9		粗	0.6	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面に横方向のハケ目、中央部に指オサエ。胴部外面に斜め方向のハケ目、部分的にナデによりハケ目を消している。底部内外面ナデ。
23	3号	L	土師器	甕	14.0				粗	2.0	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内外面摩滅。
24	3号	L	土師器	甕	12.2				粗	1.5	口頸部外面に横方向のハケ目。他の内外面摩滅。
25	3号	L	土師器	甕					粗	0	胴部内面ナデ。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。
26	3号	L	土師器	甕					粗	0	胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に縦から斜め方向のハケ目。
27	5-1号	-	土師器	高杯			9.6		密	0	内外面摩滅。
28	5号	L	土師器	高杯	14.2	9.4	10.3		密	10.3	杯体部内面摩滅するが部分的にへラミガキの痕跡が認められる。杯体部外面横方向ナデ。杯底部内外面ナデ。脚柱部内面ナデ・オサエ、外面ナデ。脚裾部内外面摩滅。
29	5号	L	土師器	壺	20.0				密	0.6	内外面摩滅。口縁部内面に羽状の列点文。口縁部外面に列点文。内面に赤彩の痕跡あり。
30	5号	M	土師器	甕	11.8				粗	8.5	口頸部内外面横方向ナデ。頸部から胴部にかけての内面指オサエ。胴部内面横方向を主とする板ナデ。胴部外面板ナデ、部分的にハケ目。胴部外面に炭化物付着。
31	5号	M	須恵器	甕	32.0				密	1.3	口頸部内外面回転ナデ。堅緻。
32	5号	M	石器	打製石斧	(12.1)	(2.1)	(4.7)				石材は凝灰岩。
33	6号	U	土師器	碗？					密	0	底部内面摩滅。底部外面丁寧なナデ。
34	6号	M	土師器	大型高杯？			15.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
35	6号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
36	6号	U	土師器	大型高杯？					密	0	脚部内面オサエ・ナデ。脚部外面縦方向へラ削りか。
37	6号	U	土師器	直口壺？			3.2		粗	0	胴部内外面ナデ。底部内外面ナデ。
38	6号	U	土師器	甕					粗	0	底部内外面ナデ。
39	6-2号	-	金属製品	鉄釘	(残存5.2)	(0.8)	(0.7)				鉄製。重さ7ｇ。
40	7号	-	鍛冶関連遺物	鉄滓	(3.2)	(1.5)	(2.4)				底面は比較的平滑。碗形滓。重さ7ｇ。
41	13号	L	土師器	甕	18.0				粗	0.7	内外面摩滅。
42	25号	M	土師器	小型壺					密	0	頸部内外面丁寧なナデ。胴部内外面丁寧なナデ。
43	25号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
44	38号	L	土師器	甕	13.0				粗	1.0	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内外面摩滅。
45	40-3号	1層	須恵器	甕	36.0				密	0.7	口頸部内外面回転ナデ。堅緻。
46	40-1号	M	土師器	高杯	14.2				密	7.0	杯体部内面横方向ナデ、外面ナデ。杯底部内外面ナデ。橙色を呈する。
47	53号	L	土師器	高杯	14.0				粗	0.2	杯体部内面ナデ、部分的に横方向のハケ目が残る。杯体部外面横方向ナデ。杯底部内外面ナデ。胎土粗い。
48	53号	L	土師器	甕	14.0				粗	4.6	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面ナデ。胴部外面横方向ナデ。
49	57-1号	-	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
50	70号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
51	70号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
52	70号	U	土師器	大型高杯？					密	0	内外面摩滅。
53	70号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
54	70号	U	土師器	大型高杯			15.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
55	70号	L	土師器	高杯			11.6		密	0	脚柱部内面ナデ。脚柱部外面・脚裾部内外面摩滅。橙色を呈する。
56	70-4号	-	土師器	高杯			9.7		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
57	70号	U･M	土師器	壺	14.0				粗	11.3	口縁部内外面と頸部上半部内面に横方向ナデ、下半部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。有段口縁壺。
58	70号	M	土師器	小型壺	6.8	8.6			密	6.8	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面ナデ・指オサエ。胴部外面ナデ。底部内面ナデ・指オサエ。底部外面板ナデ。橙色を呈する。
59	70号	M･L	土師器	甕	17.8	25.5	5.6		粗	6.0	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に斜め方向の横方向のハケ目。底部内外面ナデ。底部を除く外面と胴部下半部から底部にかけての内面に炭化物付着。
60	70号	L	土師器	甕			5.0		粗	0	底部内面板ナデ。底部外面ナデ。
61	70号	M・L	土師器	甕	13.0		2.5		粗	6.7	口頸部内面摩滅。口縁部内面摩滅。頸部から胴部上半部にかけての外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に斜め～横方向のハケ目、指オサエ。胴部外面中央部に横方向のハケ目、下半部に斜め方向のハケ目。底部内外面ナデ。底部を除く外面に炭化物付着。
62	70号	L	土師器	甕	12.2	17.4			粗	4.5	口頸部内外面横方向ナデ、頸部外面に部分的にハケ目が残る。胴部内面横方向ナデ、指オサエ。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目、部分的にナデ。底部内外面ナデ。外面に炭化物付着。
63	70号	L	須恵器	高杯？					密	0	内外面回転ナデ。堅緻。
64	70号	L	須恵器	瓿					密	0	胴部内面回転ナデ。胴部外面上半部回転ナデ、下半部手持ちヘラ削り後ナデ。底部内面ナデ。底部外面手持ちヘラ削り後ナデ。堅緻。
65	70号	L	鍛冶関連遺物	鉄滓	(5.4)	(2.3)	(5.3)				底面に砂礫付着。碗形滓。重さ26ｇ。
66	71号	M	土師器	高杯			10.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
67	71号	L	土師器	高杯			10.0		密	0	内外面摩滅するが、脚部外面には横方向ヘラミガキの痕跡が残る。橙色を呈する。
68	71号	M	土師器	高杯	14.2	12.3	11.0		密	1.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
69	71号	M	土師器	高杯	12.6				密	2.0	杯体部内面横方向ヘラミガキ、外面ナデ。杯底部内外面ナデ。橙色を呈する。
70	71号	L	土師器	甕					粗	0	胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。
71	74号	ＭＬ	土師器	高杯			9.0		密	0	内外面摩滅。
72	74号	1層	須恵器	高杯？					標準	0	内外面回転ナデ。
73	79号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
74	80号	U	土師器	大型高杯					密	0	内外面ナデ。橙色を呈する。
75	80号	L	土師器	甕	11.2	11.3			粗	12.0	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面上半部指オサエ･ナデ、下半部ナデ。胴部外面ナデ。底部内外面ナデ。底部を除く外面に炭化物付着。胴部内面下半部と底部内面に炭化物付着。
76	80号	U･L	土師器	甕	13.4				粗	11.0	内面摩滅。口頸部外面横方向ナデ。胴部外面ナデ。
77	80号	M･L	土師器	甕	15.4	24.4			粗	9.0	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面上端部指オサエ、中央部指ナデ、下端部に横方向のハケ目。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。底部内外面ナデ。胴部内面下半部に炭化物付着。
78	80号	U	土師器	甕	13.8				粗	0.8	口頸部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に縦方向のハケ目。
79	80号	M	土師器	甕	16.0				粗	2.6	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面指オサエ・ナデ。外面摩滅。
80	80号	U	土師器	甕	18.4				粗	1.1	内面摩滅。口縁部外面横方向ナデ。頸部から胴部にかけての外面に縦方向のハケ目。
81	80号	L	土師器	甕	12.0				粗	1.5	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面ナデ・オサエ。頸部から胴部にかけての外面に縦方向のハケ目。胴部外面に炭化物付着。
82	80号	U	土師器	壺？			5.2		密	0	内外面摩滅。
83	102号	U	土師器	甕	13.0				粗	3.0	口頸部内面に横方向のハケ目。口頸部外面に縦方向のハケ目。胴部内面指オサエ。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。胴部外面に炭化物付着。
84	102号	U	土師器	甕	12.8				粗	1.8	内外面摩滅。頸部外面に縦方向のハケ目。
85	102号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
86	102号	U	土師器	高杯			10.0		密	0	内外面摩滅。
87	108号	U	土師器	大型高杯			13.8		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
88	118号	M･ML	土師器	大型高杯					密	0	杯体部内面横方向ナデ、外面摩滅。杯底部内面ナデ、外面摩滅するがヘラミガキの可能性高い。橙色を呈する。
89	118号	M	土師器	高杯	14.4				密	0.6	杯体部内外面横方向ナデ。杯底部内面ナデ、外面横方向ナデ。橙色を呈する。
90	118号	M	土師器	高杯？	13.0				密	2.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
91	118号	U	土師器	大型高杯					密	0	杯底部内外面ナデ。内外面黒色を呈する。
92	118号	U	土師器	高杯？					粗	0	杯部内外面ナデ。胎土粗く砂粒の混入多い。
93	118号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
94	118-4号	-	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ヘラミガキ。橙色を呈する。
95	118号	L	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内外面ナデ。
96	118-3号	-	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ナデ。橙色を呈する。
97	118号	ＭＬ	土師器	甕	11.2				粗	3.5	内外面摩滅。
98	118号	ＭＬ	土師器	甕			3.7		粗	0	底部内外面ナデ。
99	118-3号	-	土師器	甕					粗	0	胴部内面ナデ。胴部外面に斜め方向のハケ目。
100	121号	L	土師器	高杯	12.8				密	10.8	内外面摩滅。杯体部は橙色、杯底部は黄橙色を呈する。
101	121号	L	土師器	高杯	10.0				密	0	脚柱部内面に横方向・縦方向のハケ目と縦方向の指ナデ、外面摩滅するが横方向ヘラミガキの可能性高い。脚裾部内外面横方向ナデ。
102	121号	M	土師器	高杯			9.0		密	0	内外面摩滅。
103	121号	M	土師器	大型高杯			18.0		密	0	脚裾部内外面横方向ナデ。橙色を呈する。
104	121号	M	土師器	高杯？	14.0				密	4.5	内外面摩滅。
105	121号	U	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
106	121号	U	土師器	壺	12.0				粗	3.5	口頸部内面横方向ナデ。口頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内外面に斜め方向のハケ目。胎土に砂粒の混入多い。有段口縁壺。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
107	121号	L	土師器	甕	13.0				粗	1.3	口頸部内外面横方向ナデ。
108	121号	L	須恵器	甕					密	0	胴部内面に当て具痕。胴部外面に平行線状の叩き痕。堅緻。
109	121号	M	石器	打製石斧	(残存11.5)	(2.9)	(7.7)				基端部折損。両側辺に装着痕。石材は凝灰岩。
110	125号	L	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面摩滅。橙色を呈する。
111	125号	L	土師器	高杯					密	0	脚柱部内面摩滅、外面横方向ヘラミガキ。内外面黒色を呈する。
112	125号	L	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面ヘラミガキ。橙色を呈する。
113	125号	L	土師器	大型高杯			15.2		密	0	内外面摩滅。
114	125-1号	1層	土師器	壺	12.8				粗	1.5	内外面摩滅。
115	125号	-	土師器	甕	15.6				粗	1.2	口頸部内外面横方向ナデ。胎土は他の土師器甕と同じだが、還元炎焼成で灰色を呈する。
116	125号	L	土師器	甕	14.4				粗	2.5	口頸部内外面横方向ナデ。
117	126号	M	土師器	直口壺？			2.9		密	0	内外面摩滅。
118	128号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
119	128号	U	土師器	高杯			11.8		密	0	杯部内外面摩滅。脚部内外面ナデ。橙色を呈する。
120	128号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
121	128号	U	土師器	壺	13.8				密	0.5	内外面摩滅。有段口縁壺。
122	128号	M	土師器	小型壺					密	0	頸部内外面横方向ナデ。胴部内外面横方向ナデ。
123	129号	U	土師器	高杯	13.4				密	4.0	杯体部内外面横方向ナデ。杯底部内面ナデ、外面摩滅。杯体部は橙色、杯底部は黄橙色を呈する。
124	129号	L	石製品	砥石	(10.9)	(3.3)	(4.0)				砥面は表面・裏面。石材は砂岩か。
125	130号	L	土師器	碗			5.6		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
126	130号	L	土師器	高杯			12.9		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
127	130号	L	土師器	高杯	15.9				密	0.9	内外面摩滅するが、脚柱部から裾部にかけての外面に横方向のヘラミガキの痕跡が残る。橙色を呈する。
128	130号	L	土師器	大型高杯	18.6				密	0.5	内外面摩滅。橙色を呈する。
129	130号	L	土師器	高杯			11.4		密	0	内外面摩滅。
130	130号	M	土師器	大型高杯			16.4		密	0	脚裾部内外面横方向ナデ。橙色を呈する。
131	130号	L	土師器	高杯	16.0	8.9	11.0		密	6.0	内外面摩滅。杯体部外面に部分的に横方向ヘラミガキが残る。橙色を呈する。
132	130号	L	土師器	高杯			11.2		密	0	内外面摩滅。
133	130号	L	土師器	高杯			11.4		密	0	内外面摩滅。
134	130号	M･L	土師器	高杯			12.4		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
135	130号	M	土師器	大型高杯？					粗	0	内外面ナデ。
136	130号	L	土師器	高杯			14.2		密	0	内外面摩滅。
137	130号	L	土師器	高杯					密	0	脚柱部内面ナデ。脚柱部外面・脚裾部内外面摩滅。
138	130号	L	土師器	高杯			11.2		密	0	内外面摩滅。
139	130号	L	土師器	高杯			12.2		密	0	内外面摩滅。
140	130号	L	土師器	甕	15.4				粗	6.6	口頸部内面に斜め方向のハケ目。口縁部外面横方向ナデ。頸部外面縦方向ナデ。胴部内面に横方向のハケ目とナデ。胴部外面に斜め～横方向のハケ目。胴部外面に炭化物付着。
141	130-1号	L	土師器	甕	15.4				粗	1.8	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内外面摩滅。外面に炭化物付着。
142	130-5号	-	土師器	甕	17.0				粗	1.0	口頸部内面横ナデ。口縁部外面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。
143	130号	L	土師器	甕	9.8				粗	1.4	内外面摩滅。
144	130号	L	土師器	甕	10.3	15.0	3.0		粗	7.2	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に斜め方向のハケ目。胴部外面に斜め～横方向のハケ目。底部内外面ナデ。外面に炭化物付着。
145	130号	M	土師器	甕			4.6		粗	0	胴部内面に斜め～横方向のハケ目。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。底部内面ナデ。底部外面摩滅。
146	130号	M･L	土師器	直口壺					密	0	胴部内面ナデ。胴部外面に部分的にヘラミガキが認められる。
147	130号	M	鍛冶関連遺物	鉄滓	(3.6)	(1.8)	(3.2)				重さ11ｇ。
148	130号	L	鍛冶関連遺物	鉄滓	(6.5)	(2.6)	(4.2)				底面に砂礫付着。碗形滓。重さ45ｇ。
149	131号	U	土師器	大型高杯	23.0				密	0.1	杯体部内面摩滅、外面横方向ヘラミガキ。外面黒色を呈する。
150	131号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。
151	132号	U	須恵器	甕					標準	0	内面に同心円当て具痕。外面に平行線状の叩き痕。堅緻。
152	132-7号	1層	土師器	大型高杯	16.8				密	1.8	内外面摩滅。橙色を呈する。
153	132号	U	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内外面ナデ。橙色を呈する。
154	132号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
155	132号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
156	132号	M･L	土師器	直口壺	9.0				密	4.0	胴部下半部外面以外は摩滅。胴部下半部外面に横方向ヘラミガキが部分的に認められる。胴部外面の一部に炭素吸着し、黒色を呈する。
157	133号	L	土師器	高杯			9.3		密	0	杯体部内外面横方向ナデ。杯底部内外面ナデ。脚柱部内外面横方向ナデ。脚裾部内外面横方向ナデ。
158	133号	M	土師器	甕			4.7		粗	0	底部内面ナデ。外面摩滅。
159	138号	1層	土師器	甕	14.8				粗	1.2	口頸部内外面横方向ナデ。
160	162号	L	土師器	大型高杯	17.0				密	2.3	杯体部内面摩滅、外面横方向ナデ。
161	162号	L	土師器	高杯	13.9				密	1.5	内外面摩滅。橙色を呈する。
162	162-5号	-	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
163	162号	L	土師器	高杯					密	0	脚部内外面ナデ。
164	162号	U	土師器	高杯					密	0	脚柱部内外面ナデ。橙色を呈する。
165	162号	L	土師器	小型壺	6.4	6.6			密	2.5	口頸部内外面摩滅。胴部内面ナデ・指オサエ。胴部外面摩滅。底部内外面ナデ・オサエ。焼成あまい。
166	162号	U･L	土師器	直口壺	9.4	13.0			密	0.5	口頸部内外面横方向ヘラミガキ。胴部内面ナデ（ハケ目がわずかに残る）。胴部外面横方向ヘラミガキ。底部内面ナデ（ハケ目が残る）。底部外面ヘラミガキ。外面は黒色を呈する部分がある。162−1号遺構出土遺物と接合。
167	162号	U	土師器	甕	15.0				粗	1.6	口頸部内面に横方向のハケ目。口縁部外面横方向ナデ。頸部外面に縦方向のハケ目。
168	162号	M	土師器	甕			4.0		粗	0	底部内外面ナデ。
169	162号	U	須恵器	高杯					標準	0	脚柱部内面ナデ、外面にカキ目。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
170	162号	L	須恵器	甕					密	0	内外面ナデ。外面に平行叩き痕。堅緻。
171	182号	1層	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
172	182号	1層	土師器	甕					密	0	頸部内面ナデ。頸部外面に縦方向のハケ目。土師器甕としては胎土密で堅緻。Ｓ字状口縁台付甕。
173	187号	U	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面板ナデ、外面ナデ。
174	301号	L	土師器	高杯			9.8		密	0	内外面摩滅。
175	301号	L	土師器	甕	11.0	14.2			粗	8.7	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面摩滅。胴部外面被熱により表面剥落。底部内外面摩滅。口縁部から底部にかけての内面に炭化物付着。
176	302号	M	土師器	大型高杯	22.5	16.1	15.0		密	0.3	内外面摩滅。橙色を呈する。
177	302号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
178	302号	L	土師器	大型高杯	17.1				密	1.1	杯体部内面摩滅、外面横方向ナデ。杯底部内面摩滅、外面ナデ。橙色を呈する。
179	302号	L	土師器	高杯			10.6		密	0	内外面摩滅。
180	302号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
181	302号	M	土師器	大型高杯	18.8	15.8	12.5		密	1.6	杯部内外面摩滅。脚柱部内面に斜め方向のハケ目、外面摩滅。脚裾部内外面摩滅。橙色を呈する。
182	302号	L	土師器	小型壺			2.8		密	0	胴部内外面摩滅。底部内面指オサエ、外面摩滅。橙色を呈する。
183	302号	L	土師器	甕	12.4				粗	10.5	口頸部内面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に横方向を主とするハケ目。胴部外面に縦～横方向のハケ目、部分的にナデにより消す。
184	302号	L	土師器	甕	15.7				粗	2.3	口頸部内外面横方向ナデ。
185	302号	L	土師器	甕			5.4		粗	0	内外面摩滅。
186	303号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
187	303号	U	土師器	高杯					密	0	脚柱部内外面ナデ。
188	303号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
189	303号	M	土師器	大型高杯	17.8	15.0	10.8		密	6.0	内外面摩滅。
190	303号	L	土師器	高杯	14.4	11.4	10.2		密	7.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
191	303号	L	土師器	大型高杯	21.0				密	1.5	杯体部内面上半部横ナデ、下半部に横方向のハケ目。杯体部外面横方向ヘラミガキ。杯底部内面にハケ目、外面横方向ヘラミガキ。杯部と脚部の境に縦方向のハケ目。橙色を呈する。
192	303号	L	土師器	甕	15.0				粗	3.3	口頸部内面ナデ。口縁部外面ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目と指オサエ。胴部外面に横方向のハケ目。
193	303号	M	土師器	甕			4.8		粗	0	内外面摩滅。
194	303号	L	土師器	小型壺	9.0	7.0			粗	3.0	内外面摩滅。
195	304号	L	土師器	甕	14.2				粗	6.0	口頸部内外面摩滅。胴部内面に斜め方向のハケ目。胴部外面に斜め～横方向のハケ目。胴部外面に炭化物付着。
196	304号	L	土師器	碗	11.0	4.7	3.2		粗	4.0	体部内面板ナデ。体部外面に斜め方向のハケ目。底部内面ナデ。底部外面にハケ目。
197	305号	1層	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
198	305-1号	1層	土師器	甕					密	0	胴部内面横方向ヘラ削り。胴部外面上半部に縦方向の細かいハケ目、下半部ナデ。土師器甕としては胎土密。内外面に炭化物付着。
199	305号	1層	土師器	甕	10.0				粗	0.7	口頸部内外面ナデ。
200	305号	1層	土師器	甕	15.0				粗	1.5	内外面摩滅。
201	305号	M	須恵器	杯身	11.0	4.5	6.8		標準	2.0	立ち上がり部内外面回転ナデ。体部内面回転ナデ。体部上端部外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。上端部を除く体部外面から底部外面にかけて回転ヘラ削り。回転台の回転方向は右回り。底部外面にヘラ状工具による刻み線あり。
202	307号	L	土師器	高杯			9.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
203	307号	L	土師器	高杯？	13.2				密	1.8	内外面摩滅。
204	307号	L	土師器	高杯？	14.0				密	1.5	内外面摩滅。
205	307号	1層	土師器	大型高杯	19.0				密	0.5	杯体部内面摩滅、外面も摩滅するが横方向ヘラミガキの痕跡残る。
206	307号	1層	土師器	甕	12.0				粗	0.8	口頸部内面摩滅、外面横方向ナデ。
207	308号	L	土師器	高杯			10.0		密	0	内外面摩滅。
208	308号	L	土師器	高杯			8.8		密	0	内外面摩滅。
209	308号	L	土師器	甕	14.4				粗	6.5	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面ナデ・板ナデ・指オサエ。胴部外面丁寧なナデ。胴部外面に炭化物付着。
210	309号	ＭＬ	土師器	高杯？					密	0	内外面摩滅。
211	309号	L	土師器	高杯			9.8		密	0	内外面摩滅。
212	309号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
213	309号	L	土師器	大型高杯	19.4				密	1.2	杯部内外面摩滅するが、横方向ヘラミガキの痕跡がわずかに残る。橙色を呈する。
214	309号	ＭＬ	土師器	壺	13.7				粗	0.8	口頸部内外面横方向ナデ。有段口縁壺。
215	309-7号	L	土師器	直口壺？					密	0	頸部内面ナデ。頸部外面に縦方向のハケ目。胴部内外面ナデ。
216	309-7号	L	土師器	甕	20.8				粗	0.6	口頸部内面に横方向のハケ目。口縁部外面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に斜め～横方向のハケ目。胴部外面に縦～横方向のハケ目。
217	309号	L	土師器	甕	15.0				粗	2.5	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に斜め方向のハケ目。胴部外面摩滅。
218	309号	1層	土師器	甕	15.9				粗	0.2	口頸部内面摩滅。口縁部外面摩滅。頸部外面に縦～横方向のハケ目。
219	309号	L	土師器	甕	14.2				粗	8.0	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に斜め方向のハケ目。頸部外面に縦方向と横方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に斜め方向のハケ目。
220	310号	L	土師器	高杯			10.8		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
221	310号	1層	土師器	高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ヘラミガキ。橙色を呈する。
222	310号	ＭＬ	土師器	甕	14.0				粗	1.9	内外面摩滅。
223	310号	L	土師器	甕	11.0				粗	1.2	内外面摩滅。
224	310号	L	土師器	甕			4.6		粗	0	胴部内面摩滅。胴部外面に縦方向のハケ目。底部外面摩滅。
225	310号	L	土師器	甕	10.6	14.5			粗	10.0	口頸部内面に横方向のハケ目。口頸部外面横方向ナデ。胴部内面に斜め方向のハケ目。胴部外面ナデ。底部内外面ナデ。
226	312号	U	土師器	高杯	15.8				密	5.3	杯部の口縁部内外面横方向ナデ。杯体部内面に横方向のハケ目、外面に横方向と縦方向のハケ目。
227	312号	U	土師器	碗	12.0	5.4			密	4.9	口縁部内面指オサエ。口縁部外面横方向ナデ。体部内面ナデ。体部外面に横方向のハケ目。底部内面ナデ。底部外面にハケ目。
228	312号	U	土師器	甕	9.4				粗	2.0	口頸部内面摩滅。口縁部内面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面ナデ。
229	312号	U	土師器	甕			5.2		粗	0	胴部外面に縦方向のハケ目。底部内外面ナデ。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
230	313号	1層	土師器	壺	14.4				粗	1.0	口頸部内面横方向ナデ。口縁部外面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。
231	315号	L	土師器	碗	11.0	6.0	1.8		粗	2.5	体部内面摩滅。体部外面に斜め～横方向のハケ目。底部内面摩滅。底部外面ナデ。
232	315号	L	土師器	大型高杯			12.0		密	0	内外面摩滅。
233	315号	L	土師器	甕	13.0				粗	7.0	口頸部内面摩滅。口縁部外面摩滅。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面摩滅するが横方向のハケ目が部分的に残る。胴部外面に斜め方向のハケ目。
234	315号	L	土師器	壺	16.6				粗	9.0	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向のハケ目。中央部を除く頸部外面に縦～斜め方向のハケ目、中央部横方向ナデ。有段口縁壺。
235	319号	L	土師器	甕	16.0	27.5	1.8		粗	3.5	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面摩滅。胴部外面に斜め方向のハケ目。底部内外面摩滅。
236	320号	-	縄文土器	深鉢？					標準	0	外面に縄文。
237	328号	L	須恵器	甕					標準	0	内面に平行線状の当て具痕。外面に平行線状の叩き痕。
238	330号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
239	330号	L	土師器	小型壺					密	0	胴部内面横方向ナデ・指オサエ。胴部外面ナデ。底部内面指オサエ。底部外面ナデ。
240	331-1号	-	土師器	甕	12.5				粗	2.7	口頸部内面摩滅。口頸部外面横方向ナデ。
241	363号	-	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
242	504号	ML	土師器	甕	16.0				粗	1.1	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。頸部外面に炭化物付着。
243	504号	ML	土師器	高杯？	14.0				密	1.0	内外面摩滅。
244	507号	L	土師器	高杯			10.5		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
245	511号	L	土師器	高杯？	15.0				密	2.7	内外面摩滅。橙色を呈する。
246	527号	-	須恵器	甕					密	0	内面に同心円当て具痕。外面に平行線状の叩き痕。堅緻。
247	530号	ML	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、外面摩滅。橙色を呈する。
248	531号	L	土師器	高杯	15.6				密	0.8	内外面摩滅。橙色を呈する。
249	531号	ML	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
250	531号	L	土師器	大型高杯	22.0				密	0.2	内外面摩滅。橙色を呈する。
251	531号	M	土師器	高杯			11.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
252	531号	ML	土師器	高杯			10.2		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
253	531号	L	土師器	壺	12.4				粗	1.2	内外面摩滅。有段口縁壺。
254	531号	ML	土師器	壺	14.0				粗	4.0	内外面摩滅するが、頸部外面に斜め方向のハケ目が残る。有段口縁壺。
255	531号	L	土師器	直口壺					密	0	胴部内面摩滅。胴部外面横方向ヘラミガキ。底部内外面摩滅。橙色を呈する。
256	531号	L	土師器	甕			5.6		粗	0	内外面摩滅。
257	531号	L	須恵器	甕					密	0	内面ナデ。外面に平行線状の叩き痕。堅緻。
258	535-1号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
259	536号	L	土師器	碗	13.0	4.1	4.2		密	2.8	内外面摩滅。橙色を呈する。
260	536号	L	土師器	碗	12.4	5.0	6.0		密	10.3	内外面摩滅するが、体部内面には横方向ヘラミガキの痕跡が残り、底部外面にはヘラ削りの痕跡が残る。橙色を呈する。
261	536号	L	土師器	高杯？	14.4				密	0.5	内外面摩滅。橙色を呈する。
262	536号	L	土師器	高杯？	15.0				密	1.5	内外面摩滅。
263	536号	L	土師器	高杯	14.4				密	12.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
264	536号	L	土師器	高杯	14.8				密	0.8	内外面摩滅。橙色を呈する。
265	536号	L	土師器	高杯			11.5		密	0	脚柱部内面横方向ヘラ削り、外面摩滅。脚裾部内面横方向ナデ、外面摩滅。橙色を呈する。
266	536号	L	土師器	高杯			9.4		密	0	内外面摩滅するが、外面には横方向ヘラミガキの痕跡が残る。橙色を呈する。
267	536号	L	土師器	高杯			9.2		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
268	536号	L	土師器	高杯			11.8		密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ヘラミガキ。脚裾部内面ナデ、外面横方向ヘラミガキ。内外面黒色を呈する。
269	536-5号	-	土師器	高杯			9.8		密	0	脚柱部内面ナデ、外面横方向ヘラミガキ。脚裾部内面横方向ナデ、外面横方向ヘラミガキ。内外面黒色を呈する。
270	536号	L	土師器	高杯			10.3		密	0	脚柱部内面横方向ヘラ削り、外面摩滅。脚裾部内面横方向ナデ、外面摩滅。
271	536号	L	土師器	高杯			9.7		密	0	脚柱部内面ナデ、外面摩滅。脚裾部内外面摩滅。橙色を呈する。
272	536号	L	土師器	高杯			10.8		密	0	内外面摩滅。
273	536号	L	土師器	高杯					密	0	脚柱部内面ナデ、横方向のハケ目が部分的に残る。脚柱部外面ナデ。
274	536号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
275	536号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
276	536号	L	土師器	高杯	13.7	8.3	9.8		密	9.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
277	536号	L	土師器	大型高杯	20.6				密	4.0	内外面摩滅。
278	536号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
279	536号	L	土師器	小型壺			2.7		密	0	頸部内外面摩滅。胴部内面ナデ。胴部外面摩滅。底部内面ナデ。底部外面摩滅。橙色を呈する。
280	536号	L	土師器	甕	13.6				粗	3.9	口頸部内外面横方向ナデ、頸部外面に特殊な原体によるハケ目とみられる斜め方向の幅広平行線（4本1単位か）。胴部内面板ナデ・指オサエ。胴部外面に斜め方向と横方向の頸部と同様の幅広平行線。外面に炭化物付着。「4サ」グリッド出土遺物と接合。
281	536号	L	土師器	甕	15.8				粗	8.6	口縁部内外面横方向ナデ。頸部内面横方向ナデ。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目、部分的にナデ。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。外面に炭化物付着。「4サ」グリッド出土遺物と接合。
282	536号	L	土師器	甕	17.0	28.1	5.6		粗	4.0	口頸部内外面横方向ナデ、頸部外面に縦方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に縦～斜め方向のハケ目。底部内外面ナデ。胴部下半部から底部にかけての内面に炭化物付着。
283	538号	L	土師器	大型高杯	22.1				密	1.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
284	553号	U	土師器	大型高杯			17.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
285	553号	M	土師器	大型高杯			17.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
286	553号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
287	553号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
288	553号	ML	土師器	甕	13.3				粗	0.1	内面摩滅。外面も摩滅するが頸部外面に斜め方向のハケ目が残る。
289	553号	M	土師器	甕	21.2				粗	1.0	口縁部内外面横方向ナデ。
290	553号	M	土師器	甕	19.1				粗	0.9	内外面摩滅。
291	553号	ML	須恵器	壺？					密	0	内面ナデ。外面にカキ目。堅緻。あるいは瓦か。
292	553号	ML	須恵器	甕					密	0	内面に同心円当て具痕。外面に平行線状の叩き痕。堅緻。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
293	553号	M	鍛冶関連遺物	鉄滓	(3.1)	(1.8)	(2.6)				鉄塊状で重い。重さ25ｇ。
294	553号	M	鍛冶関連遺物	鉄滓	(4.0)	(2.3)	(3.0)				鉄塊状で重い。重さ30ｇ。
295	554号	L	土師器	高杯	13.2				密	2.3	内外面摩滅するが、体部内外面にヘラミガキの痕跡が残る。
296	554号	M	土師器	壺	18.9				粗	1.3	内外面摩滅。胎土に砂粒の混入非常に多い。有段口縁壺。
297	560号	L	土師器	碗	12.6	5.5			密	1.3	内外面摩滅。橙色を呈する。
298	560号	M	土師器	高杯			9.0		密	0	内外面摩滅。
299	560号	M	土師器	大型高杯	16.2				密	0.6	内外面摩滅。橙色を呈する。
300	560号	U	土師器	壺	14.3				粗	0.1	口頸部内面摩滅。口縁部外面摩滅。頸部外面に斜め方向のハケ目。有段口縁壺。
301	561号	ＭＬ	土師器	碗	10.8	5.5			密	6.6	内外面摩滅。
302	602号	U	須恵器	摘み蓋	17.8				標準	1.8	天井部内面回転ナデ。天井部外面回転ヘラ削り。体部内外面回転ナデ。つまみ蓋か。
303	602号	M	須恵器	有台杯			9.8	8.6	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後回転ナデ。底部内面平滑化。
304	602号	M	須恵器	無台碗	13.5	3.5	7.0		標準	5.0	内外面摩滅するが体部内面に回転ヘラ削りの痕跡が残る。底部外面にヘラ切り痕が残る。口縁部内面に炭化物付着。灯明具として使用したものか。焼成あまい。
305	602号	U	須恵器	無台碗			6.0		標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面に回転糸切り痕。堅緻。
306	602号	U	須恵器	無台碗			7.0		粗	0	体部内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後、不調整。底部内面平滑化。
307	602号	M	須恵器	無台碗	12.4	3.6	6.6		標準	5.3	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ・オサエ。底部内面平滑化。603号遺構・「8カ」グリッド出土遺物と接合。
308	602号	M	須恵器	有台碗			9.8	7.7	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後回転ナデ。底部内面平滑化。底部内面に炭化物付着。堅緻。
309	602号	U	須恵器	有台盤？	13.9				標準	2.0	体部内外面回転ナデ。
310	602号	M	須恵器	有台盤	14.8	2.8		9.0	標準	3.6	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面回転ヘラ削り後回転ナデ。底部切り離しはヘラ切りによる。
311	602号	M･L	須恵器	有台盤	14.0	2.6		8.1	標準	4.3	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面回転ヘラ削り後回転ナデ。
312	602号	M	須恵器	有台盤？	14.0				標準	3.5	体部内面回転ナデ。体部外面摩滅。焼成あまい。
313	602号	M	須恵器	壺				11.7	標準	0	胴部内面回転ナデ。胴部外面回転ヘラ削り。底部内面回転ナデ。底部外面回転ヘラ削り。
314	602号	U･M	須恵器	壺	4.5				標準	0.5	口頸部内外面回転ナデ。胴部内面回転ナデ。胴部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。
315	602号	L	須恵器	陶錘	(4.8)	(1.6)	(1.8)		標準		外面ナデ・指オサエ。
316	602号	ＵＭ	灰釉陶器	碗			6.8	7.1	標準	0	内外面回転ナデ。
317	603号	M	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
318	603-2号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅するが、脚柱部内面に縦方向ナデ、外面横方向ヘラミガキの痕跡が残る。
319	603-2号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅するが、脚柱部内面に縦方向ナデの痕跡が残る。橙色を呈する。
320	603-2号	L	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面縦方向ナデ、外面摩滅。橙色を呈する。
321	603-2号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅するが、脚柱部内面に縦方向ナデ、外面に横方向ヘラミガキの痕跡が残る。橙色を呈する。
322	603-2号	L	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅するが、脚柱部内面に縦方向ナデの痕跡が残る。橙色を呈する。
323	603-2号	L	土師器	大型高杯					密	0	脚柱部内面縦方向ナデ、外面摩滅。橙色を呈する。
324	603号	U	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
325	603号	U	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
326	603号	U	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。
327	603号	L	土師器	小型壺					密	0	内外面摩滅。胴部下半部から底部にかけての内外面に炭化物付着。
328	603-2号	L	土師器	小型壺	8.4	6.2			密	11.0	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面上半部横方向ナデ、下半部ナデ・オサエ。胴部外面ナデ。底部内面ナデ・オサエ。底部外面ナデ。
329	603号	ＭＬ	土師器	壺	13.0				密	1.0	口頸部内外面横方向ナデ。有段口縁壺。
330	603号	L	土師器	甕	16.0				粗	2.5	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内外面ナデ。
331	603号	U	須恵器	有台杯			9.0	7.5	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。摩滅著しい。602号遺構からの流れ込み遺物か。
332	603号	U	灰釉陶器	皿				4.8	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面平滑化。底部外面回転ナデ。602号遺構からの流れ込み遺物か。
333	604号	M	土師器	碗	10.0	5.0			密	2.5	内外面摩滅。橙色を呈する。
334	604号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
335	604号	L	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈するが、むらがある。
336	604号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
337	604号	L	土師器	高杯			10.0		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
338	604号	M	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
339	604号	M	土師器	高杯？	12.6				密	2.0	内外面摩滅するが、体部外面に横方向ヘラミガキの痕跡が残る。
340	604号	ＭＬ	土師器	甕	15.0				粗	1.8	内外面摩滅するが、頸部外面に斜め方向のハケ目が残る。
341	604号	L	土師器	甕			3.8		粗	0	内外面摩滅。
342	604号	L	須恵器	甕					密	0	内面回転ナデ。外面にカキ目と平行叩き痕。堅緻。
343	ａイ	包含層	須恵器	杯身	10.5				標準	3.1	体部内面回転ナデ。体部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。
344	ｂウ	包含層	須恵器	杯身	8.0				密	1.4	体部内外面回転ナデ。胎土密で砂粒の混入少ない。
345	ａイ	包含層	須恵器	無台杯			8.0		標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ･オサエ。
346	ｂウ	包含層	須恵器	有台杯	10.6	3.9	9.6	8.3	標準	0.8	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外面に自然釉付着。
347	ａア	包含層	須恵器	無台碗	11.8	3.6	4.8		標準	2.2	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面に回転糸切り痕。堅緻。「ｂイ」グリッド出土遺物と接合。
348	ａイ	包含層	須恵器	無台碗	12.4	3.5	7.2		粗	3.5	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面回転ヘラ削り。
349	a区北畦	包含層	須恵器	有台碗？	17.4				標準	1.3	体部内面回転ナデ。体部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。
350	ｂア	包含層	須恵器	高杯					標準	0	杯底部内外面回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。
351	ｂア	包含層	須恵器	高杯			8.1		標準	0	杯底部内面回転ナデ。杯底部外面回転ヘラ削り。脚部内外面回転ナデ。
352	ａア	包含層	須恵器	高杯					標準	0	内外面回転ナデ。外面に波状文。三角形透かしを持つ高杯の脚部。
353	ａ区	包含層	須恵器	壺	11.5				標準	4.2	口頸部内外面回転ナデ。口頸部内面に自然釉付着。
354	ｂア	包含層	須恵器	鉢					標準	0	体部内面回転ナデ。体部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。「aイ」グリッド出土遺物と接合。
355	ｂイ	包含層	須恵器	甕	20.2				標準	4.0	口頸部内外面回転ナデ。胴部内面に同心円当て具痕。胴部外面に平行線状の叩き痕。焼成あまい。

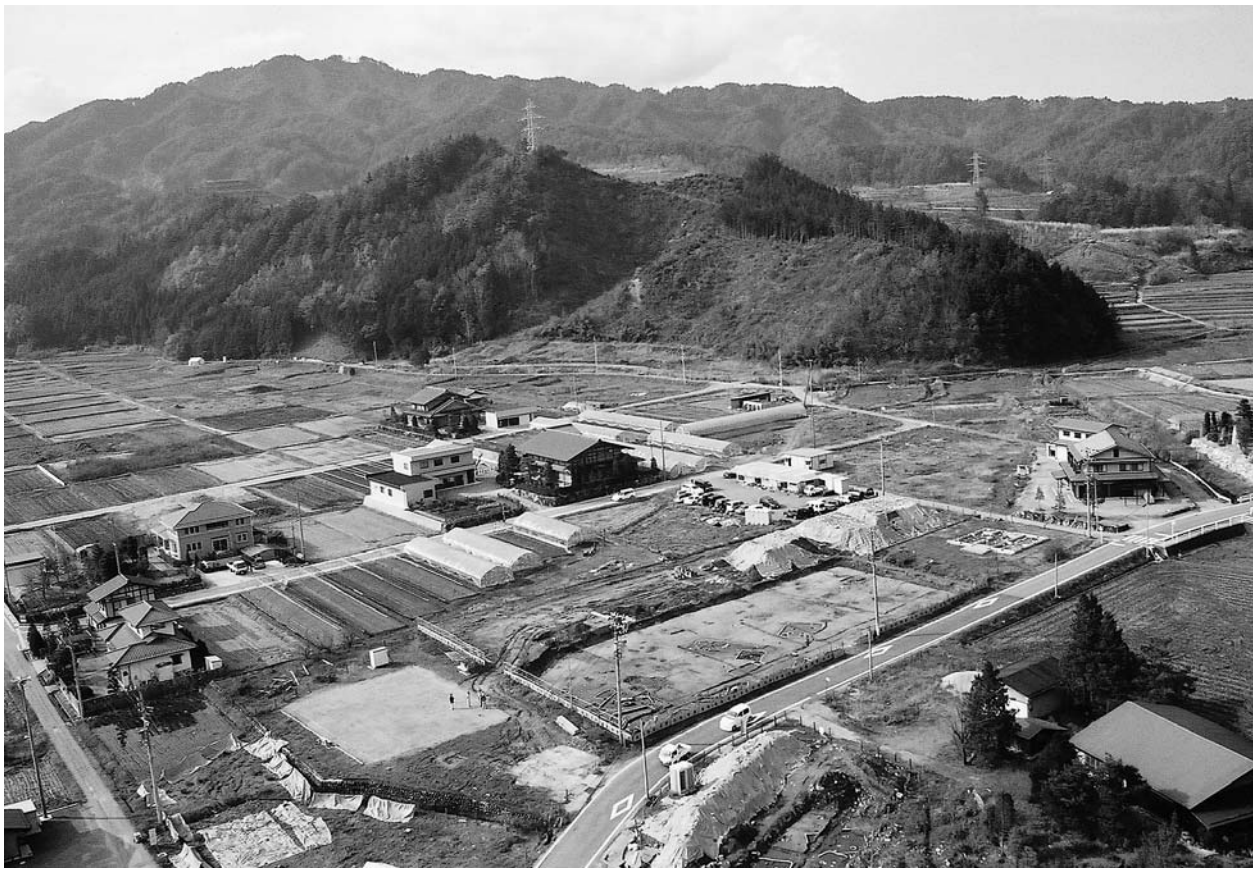
別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
356	aイ	包含層	灰釉陶器	碗	15.0				標準	0.8	体部内外面回転ナデ。
357	aイ	包含層	灰釉陶器	碗	13.6	4.7		7.1	標準	2.0	体部内外面回転ナデ。中央部を除く底部外面回転ナデ。中央部ナデ。
358	bウ	包含層	灰釉陶器	碗				8.5	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。体部内外面上半部に灰釉。底部内面中央部に灰釉。
359	aア	包含層	灰釉陶器	碗				7.0	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面ナデ。
360	bウ	包含層	灰釉陶器	碗	15.6	4.4		7.5	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。体部内面と外面上半部に灰釉。底部内面に重ね焼き痕。
361	bイ	包含層	灰釉陶器	碗	19.2	5.2		9.4	標準	1.0	体部内外面回転ナデ。中央部を除く底部外面回転ナデ、中央部ナデ。底部外面中央部を除く全面に灰釉。
362	bイ	包含層	灰釉陶器	碗	12.5	3.9		4.8	標準	0.8	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。
363	bウ	包含層	灰釉陶器	碗	15.2				標準	1.7	体部内外面回転ナデ。体部内面に灰釉（自然釉か）。
364	bア	包含層	灰釉陶器	碗	12.6	4.0		7.4	標準	1.7	体部内外面回転ナデ。体部内面に自然釉付着。
365	aイ	包含層	灰釉陶器	碗				7.0	標準	0	体部外面回転ナデ。中央部を除く底部外面回転ナデ、中央部ナデ。内面に自然釉付着。
366	a区	包含層	灰釉陶器	皿				7.8	密	0	底部内外面回転ナデ。内面平滑化。胎土極めて密で砂粒を含まない。東濃産か。
367	a区	包含層	灰釉陶器	皿				8.0	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。中央部を除く底部外面回転ナデ、中央部に回転糸切り痕。底部内面平滑化。
368	a区	包含層	灰釉陶器	陶錘	(6.0)	(2.4)	(2.6)		標準		外面ナデ・指オサエ。
369	aア	包含層	灰釉陶器	陶錘	(6.8)	(2.7)	(2.8)		標準		外面ナデ・指オサエ。
370	bイ	包含層	灰釉陶器	瓶	12.2	15.7	11.8		標準	10.0	口頸部内外面回転ナデ。胴部内面回転ナデ。胴部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。底部内外面ナデ・オサエ。焼成あまい。
371	a区	包含層	灰釉陶器？	水注					標準	0	外面ナデ・オサエ。内面回転ナデ。外面に灰釉。
372	a区中央畦	包含層	弥生土器	壺？					標準	0	外面に櫛描文。内外面摩滅。
373	aア	包含層	輸入磁器	青磁碗					密	0	内外面に青磁釉（緑色）。体部外面に蓮弁文。
374	bウ	包含層	輸入磁器	白磁碗	14.9				標準	0.8	内外面に白磁釉（灰オリーブ色）。
375	bウ	包含層	輸入磁器	白磁碗	17.8				標準	1.1	内外面に白磁釉（明オリーブ灰色）。
376	a区	包含層	山茶碗	碗				5.3	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面ナデ。底部外面に回転糸切り痕。高台端部にモミガラ痕。北部系山茶碗。
377	a区	包含層	山茶碗	鉢	30.3				標準	1.0	体部内外面回転ナデ。口縁部に自然釉付着。胎土に砂粒の混入多い。
378	aイ	包含層	珠洲焼	擂鉢	40.6				標準	1.8	体部内外面回転ナデ。体部内面に擂目（単位11本）。体部内面平滑化。堅緻。
379	bア	包含層	珠洲焼	擂鉢	41.0				標準	0.3	体部内外面回転ナデ。体部内面に擂目（単位10本以上）。体部内面平滑化。
380	aイ	包含層	近世施釉陶器	碗				8.0	標準	0	体部内面・体部外面上半部・底部内面に褐色の鉄釉。体部外面下半部回転ナデ。底部外面回転ナデ。
381	bイ	包含層	近世施釉陶器	碗				4.7	粗	0	体部内面・下端部を除く体部外面・底部内面に浅黄色釉。体部外面下端部回転ヘラ削り。底部外面回転ナデ。胎土粗い。
382	a区	包含層	近世施釉陶器	碗	11.4	7.2		5.4	標準	4.4	高台端部を除く全面に浅黄色釉。
383	bウ	包含層	石器	石鏃	(2.5)	(0.4)	(1.5)				石材は下呂石。
384	4サ	包含層	土師器	碗	12.2	5.0			密	6.0	体部内面横方向ナデ。体部外面上半部横方向ナデ、下半部ナデ。底部内外面ナデ。橙色を呈する。
385	4シ	包含層	土師器	碗	14.4	5.2	5.0		密	0.5	内外面摩滅。橙色を呈する。
386	4サ	包含層	土師器	高杯	15.0	9.6	10.0		密	4.0	口縁部内面・杯体部外面横方向ナデ。杯体部内面ナデ。杯底部内外面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚裾部内外面ナデ。
387	15オ	包含層	土師器	高杯	14.4		9.0		密	6.0	内外面摩滅。
388	4サ	包含層	土師器	高杯	13.6	9.8	10.2		密	3.3	杯体部内面横方向ナデ、外面摩滅。杯底部内面ナデ、外面摩滅。脚部内面摩滅、外面ナデ（部分的に横方向ヘラミガキの痕跡が残る）。
389	4ス	包含層	土師器	高杯	16.0				密	3.0	杯体部内外面横方向ナデ。杯底部内外面ナデ。
390	7コ	包含層	土師器	高杯？	14.0				密	1.1	内外面摩滅。
391	4サ	包含層	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。
392	4サ	包含層	土師器	高杯？	12.8				密	3.5	杯体部内外面横方向ナデ。橙色を呈する。
393	4サ	包含層	土師器	高杯？	13.0				密	3.0	内外面摩滅。橙色を呈する。
394	4サ	包含層	土師器	高杯			9.8		密	0	内外面摩滅するが、脚柱部内面に板ナデによるとみられる段差が認められる。橙色を呈する。
395	4ス	包含層	土師器	大型高杯					密	0	内外面摩滅。脚柱部内面指ナデ。橙色を呈する。
396	4サ	包含層	土師器	高杯			11.0		密	0	内外面摩滅。
397	5ス	包含層	土師器	高杯					密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。「5セ」グリッド出土遺物と接合。
398	14オ	包含層	土師器	高杯			10.4		密	0	脚部内外面ナデ。
399	5セ	包含層	土師器	高杯			8.2		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
400	4サ	包含層	土師器	高杯			11.8		密	0	内外面摩滅。
401	14カ	包含層	土師器	高杯			9.6		密	0	内外面摩滅。
402	4サ	包含層	土師器	大型高杯	23.0				密	2.0	体部内外面横方向ナデ。口縁部外面に沈線。橙色を呈する。
403	14オ	包含層	土師器	大型高杯	16.2				密	5.7	内外面摩滅。橙色を呈する。
404	4サ	包含層	土師器	大型高杯			18.4		密	0	内外面摩滅。橙色を呈する。
405	6ス	包含層	土師器	壺	14.8				密	1.2	内外面摩滅。
406	6シ	包含層	土師器	壺	17.4				粗	0.4	内外面摩滅。有段口縁壺。
407	7サ	包含層	土師器	壺	16.0				粗	0.7	口頸部内外面横方向ナデ。
408	12カ	包含層	土師器	小型壺			4.0		密	0	内外面摩滅。胎土密。
409	12カ	包含層	土師器	直口壺	8.0				密	0.1	口頸部内外面横方向ナデ。胴部内面ナデ・指オサエ。胴部外面上半部横方向ナデ、下半部横方向のヘラ削り。
410	15オ	包含層	土師器	甕	14.0				粗	3.0	口頸部内外面ナデ。胴部内外面ナデ。胴部外面に炭化物付着。
411	7コ	包含層	土師器	甕	15.1				粗	9.0	口頸部内面横方向ナデ。口縁部外面横方向ナデ。胴部内面に横方向のハケ目。頸部から胴部にかけての外面に縦～斜め方向のハケ目。内外面に部分的に炭化物付着。
412	6ス	包含層	土師器	甕	15.0				粗	1.0	内面摩滅。頸部から胴部にかけての外面に縦～斜め方向のハケ目。胴部外面に横方向のハケ目。
413	4サ	包含層	土師器	甕	16.0				粗	2.2	口頸部内面に横方向のハケ目。口頸部外面横方向ナデ、頸部外面に特殊な原体によるハケ目とみられる斜め方向の幅広平行線（5条で1単位か）。胴部内面摩滅。胴部外面に頸部と同様の幅広平行線。外面に炭化物付着。
414	12カ	包含層	土師器	甕	12.2				粗	2.2	内外面摩滅。胴部外面に炭化物付着。

別表3　遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 口径(長さ)	器高(厚さ)	底径(幅)	台径	胎土	残存率	観察事項
415	13エ	包含層	土師器	甕	16.4				粗	1.6	口頸部内外面横方向ナデ。頸部内面に横方向と斜め方向のハケ目。頸部外面に縦方向のハケ目。
416	4セ	包含層	土師器	甕	15.8				粗	1.6	口頸部内外面横方向ナデ。外面に炭化物付着。
417	12カ	包含層	土師器	甕	12.0				粗	1.3	口縁部内面横方向ナデ。口縁部外面に沈線。頸部内面に横方向のハケ目。頸部外面に斜め方向のハケ目。胴部内面に斜め方向のハケ目。
418	4ス	包含層	土師器	甕	13.0				粗	1.2	口頸部内外面横方向ナデ。頸部外面に縦方向のハケ目。胴部内面に横方向のハケ目。胴部外面に斜め方向のハケ目。胴部外面に炭化物付着。
419	5セ	包含層	須恵器	杯蓋	15.0				標準	0.8	体部内外面回転ナデ。外面に自然釉付着。
420	6シ	包含層	須恵器	杯身					標準	0	体部内面回転ナデ。体部外面上半部回転ナデ、下半部回転ヘラ削り。
421	13オ	包含層	須恵器	有台杯	14.2	3.6	13.4	12.1	標準	1.4	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面回転ヘラ削り。底部内面平滑化。
422	8カ	包含層	須恵器	有台杯	12.6	3.9	10.0	9.0	標準	3.2	体部内外面回転ナデ。底部内外面回転ナデ。
423	8カ	包含層	須恵器	無台碗	12.8	3.1	7.0		粗	3.2	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ・オサエ。底部内面平滑化。胎土粗く砂粒の混入多い。
424	8カ	包含層	須恵器	無台碗	12.2	3.2	6.4		粗	2.4	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ・オサエ。
425	4ス	包含層	須恵器	甕?	8.0				標準	1.6	口頸部内外面回転ナデ。
426	4セ	包含層	須恵器	甕?					密	0	口頸部内外面回転ナデ。胎土密。堅緻。
427	5ス	包含層	須恵器	甕?					密	0	頸部内外面回転ナデ。胎土密で砂粒の混入少ない。堅緻。
428	7サ	包含層	須恵器	甕					密	0	胴部内面回転ナデ後ナデ・オサエ。胴部外面中央部にカキ目、下半部丁寧なナデ。堅緻。
429	4ス	包含層	灰釉陶器	皿				7.0	標準	0	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外面回転糸切り後ナデ。
430	12カ	包含層	灰釉陶器	瓶			108	11.2	標準	0	胴部内面回転ナデ。下半部を除く胴部外面回転ナデ、下端部回転ヘラ削り。胴部外面に灰釉。底部外面に窯床融着。
431	14カ	包含層	縄文土器	深鉢					標準	1.1	内面摩滅。口縁部から頸部にかけての外面横方向ナデ。胴部外面上半部に7条の沈線と半截竹管状工具による連続刺突文、下半部に粗い削り調整。縄文時代晩期か。
432	16ウ	包含層	弥生土器	壺？					標準	0	内外面摩滅するが、外面に櫛歯状原体による列点文が残る。
433	1ス	包含層	中世施釉陶器	天目茶碗	8.3	3.8	4.2	3.6	標準	1.2	体部内外面と底部内面に黒色の鉄釉。堅緻。小天目。古瀬戸後期。
434	4サ	包含層	中世施釉陶器	鎧湯呑			6.0	4.4	標準	0	体部外面に短19個以上＋長9個を単位とする回転施文。内面に黒褐色の鉄釉、外面に光沢のある浅黄色釉。
435	14カ	包含層	鍛冶関連遺物	鉄滓	(18.1)	(10.7)	(14.8)				重さ1752ｇ。炉壁とともに出土。
436	14キ	包含層	鍛冶関連遺物	炉壁	(18.9)	(7.4)	(9.8)				スサ混じり粘土製。強く被熱し、青灰色を呈する。表面に鉄滓付着。重さ905g。
437	14カ	包含層	石製品	砥石	(6.2)	(1.2)	(3.7)				砥面は表面・裏面・左側面・右側面。石材は粘板岩。
438	6ス	包含層	石器	打製石斧	(残存5.4)	(2.0)	(5.5)				基部折損。刃部が残る。石材は凝灰岩。
439	6シ	包含層	石器	打製石斧	(10.1)	(2.1)	(5.5)				左側辺に装着痕。石材は砂岩。
440	4ス	包含層	石器	打製石斧	(10.4)	(2.7)	(5.7)				両側辺に装着痕。石材は凝灰岩。
441	6ス	包含層	石器	打製石斧	(9.6)	(2.1)	(4.8)				両側辺に装着痕。石材は砂岩。
442	14カ	包含層	石器	打製石斧	(9.7)	(2.0)	(5.2)				基端部折損。両側辺に装着痕。石材は凝灰岩。

調査前全景（西から）

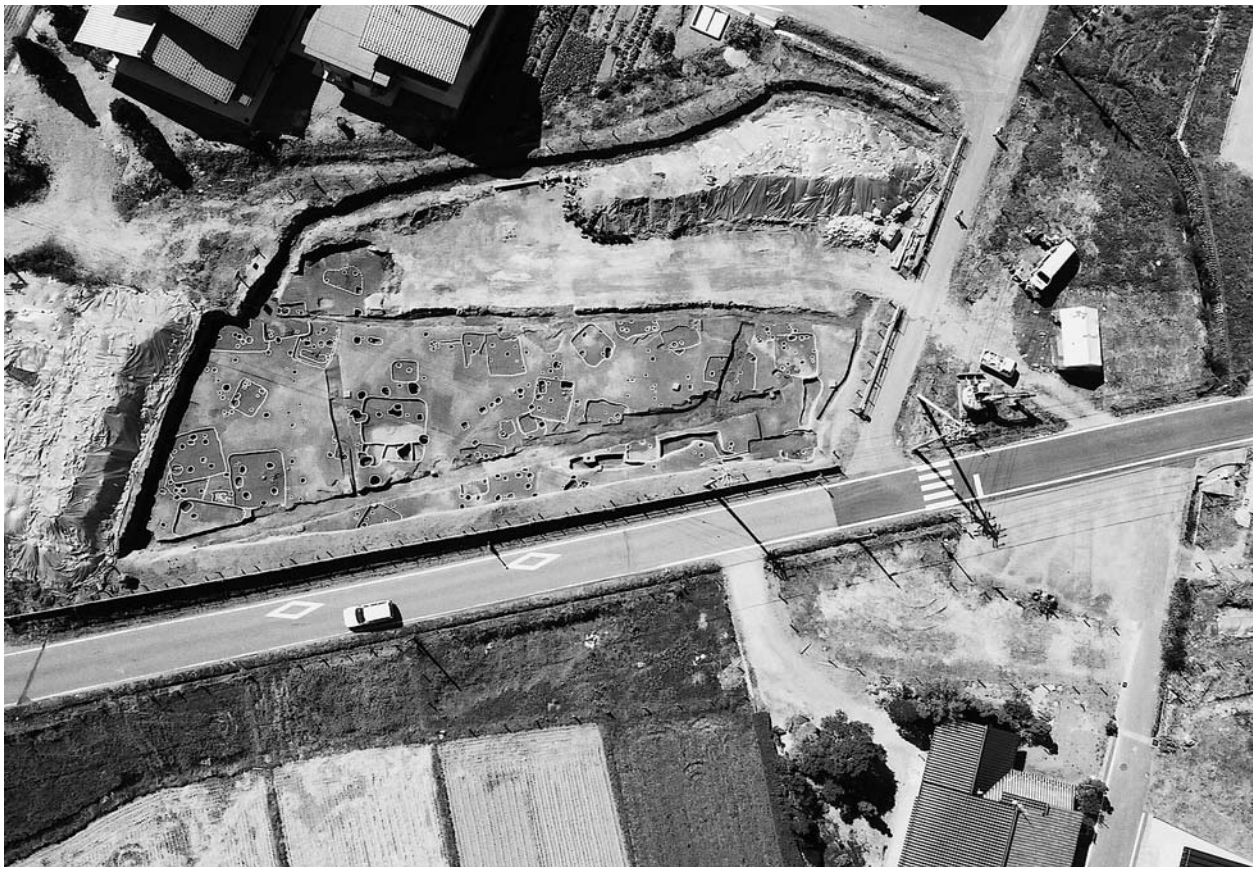


b 西区全景（南東から）

図版 2

b 西区全景（上が東）

b 東区全景（北から）



b 東区全景（上が南西）

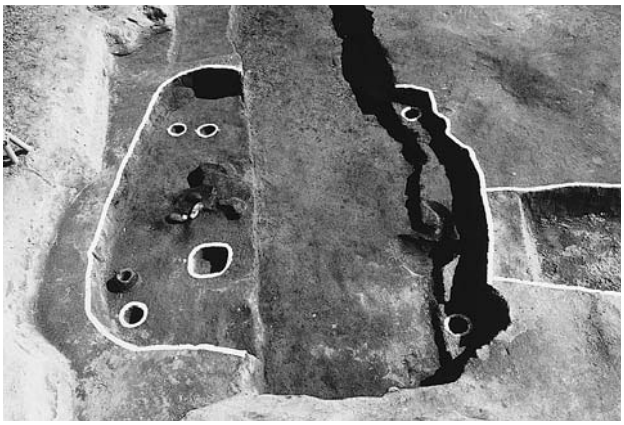
b 北西区全景（上が南西）

図版 4

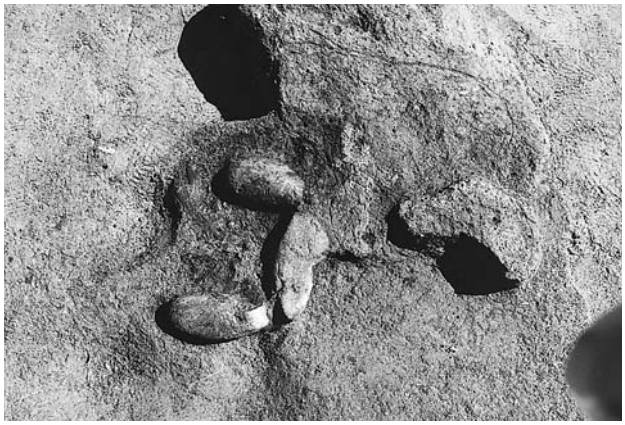
b 北東区西端部（上が南西）

b 北東区中央部（上が南西）

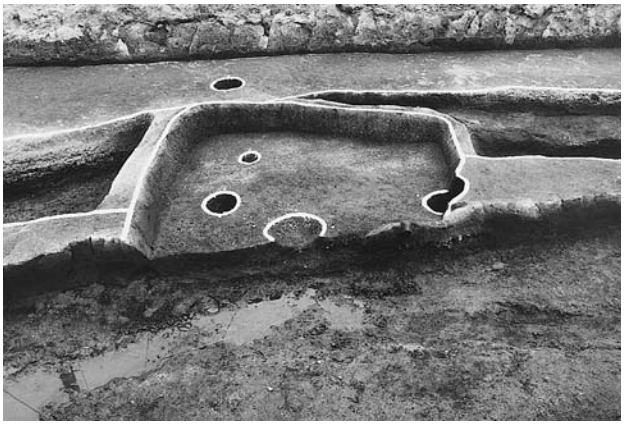
a 区全景（南から）



1号遺構（北西から）

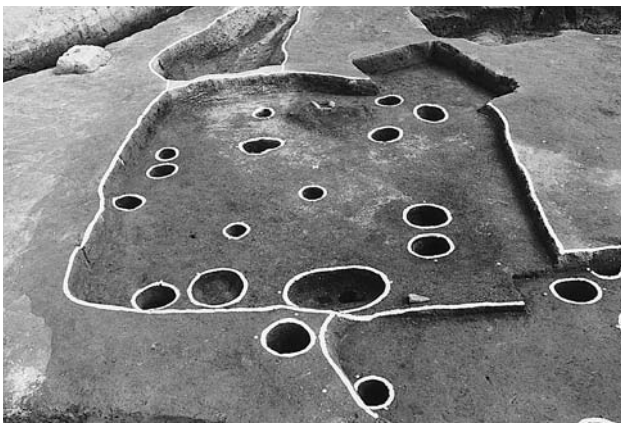


1号遺構 炉跡（北西から）



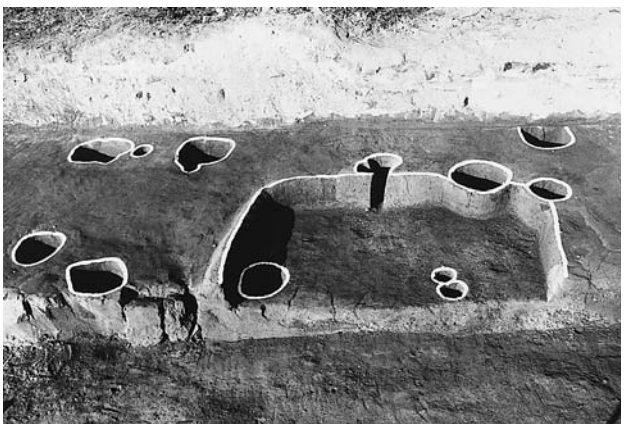
2号遺構（南から）

3号遺構 炭化材検出状況（南から）

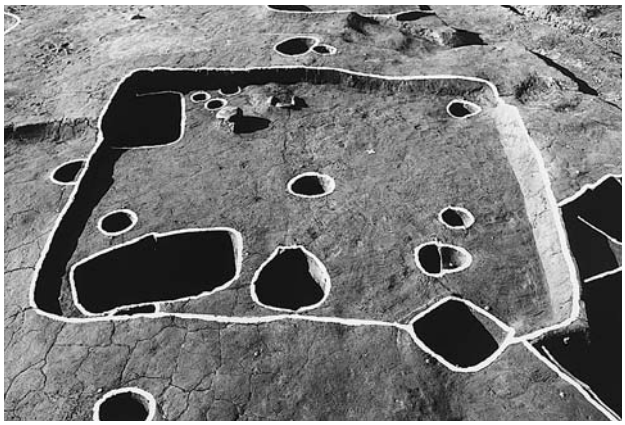


3号遺構（南から）

3号遺構 炉跡（西から）

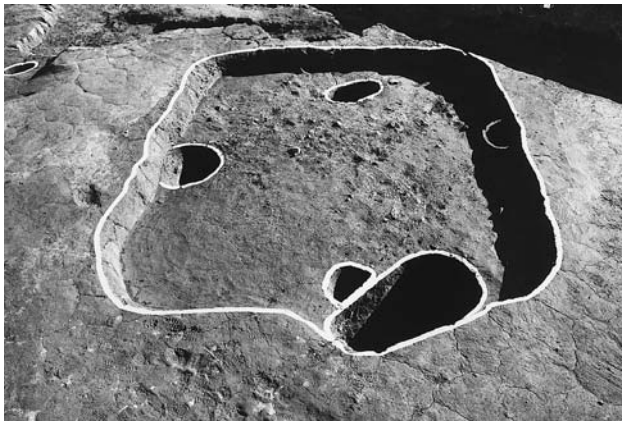


4号遺構（南から）



5号遺構（南から）

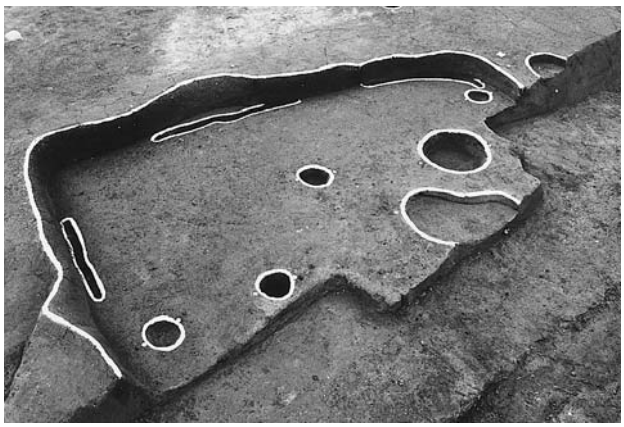
5号遺構 炉跡（北から）



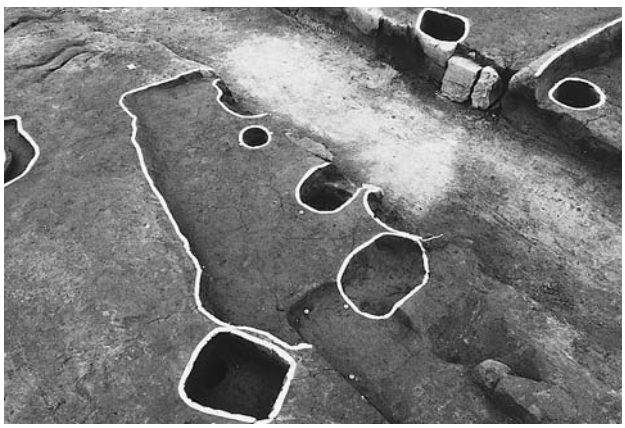
6号遺構（北から）

12・13号遺構（西から）

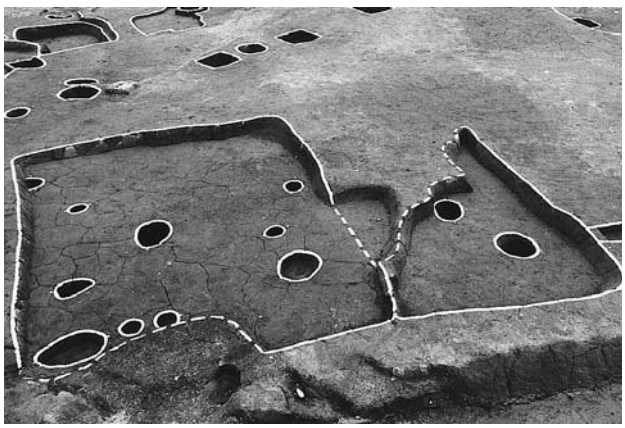
25号遺構（西から）



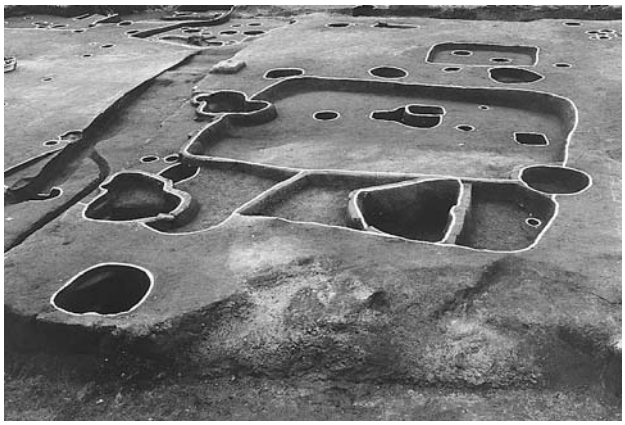
38号遺構（東から）



53号遺構（南から）

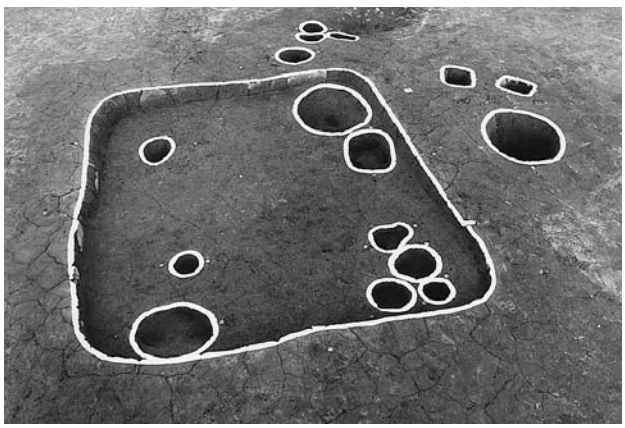


56･57号遺構（南西から）

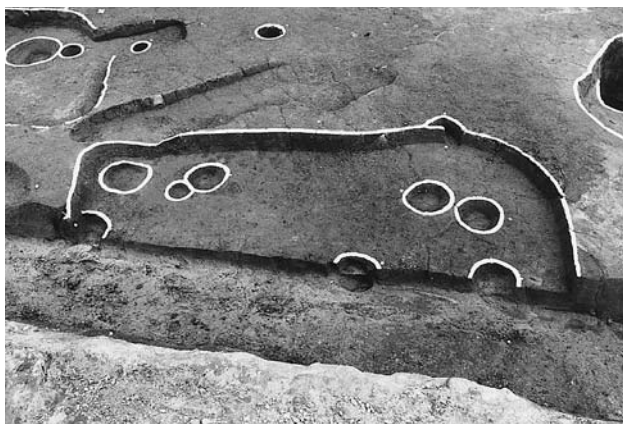


70・71・125号遺構（北から）

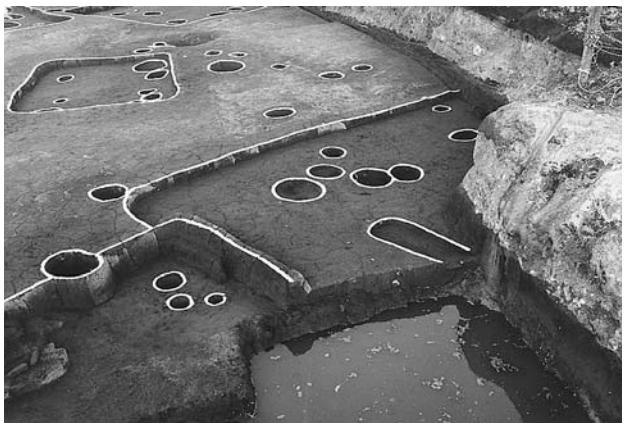
80号遺構（北から）



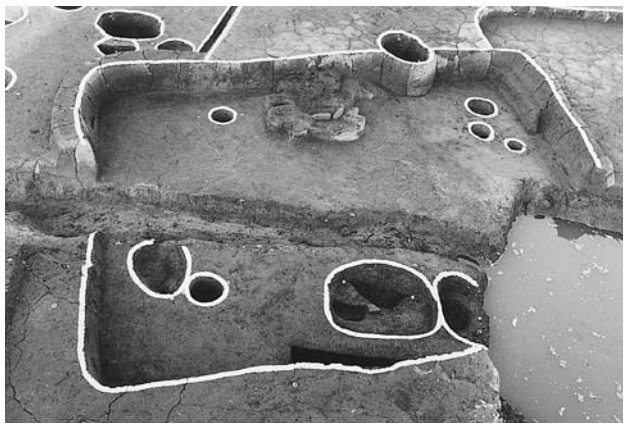
102号遺構（西から）



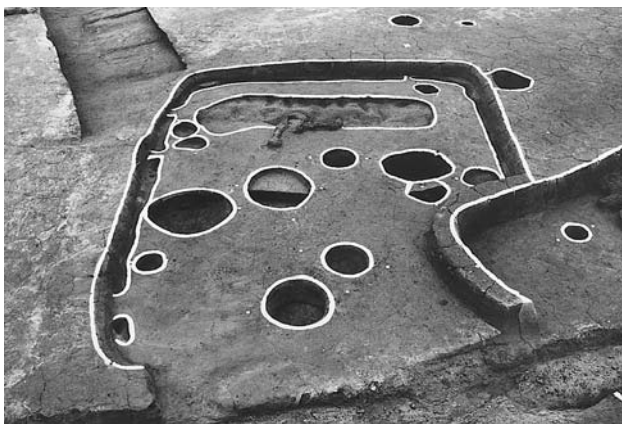
128号遺構（南から）



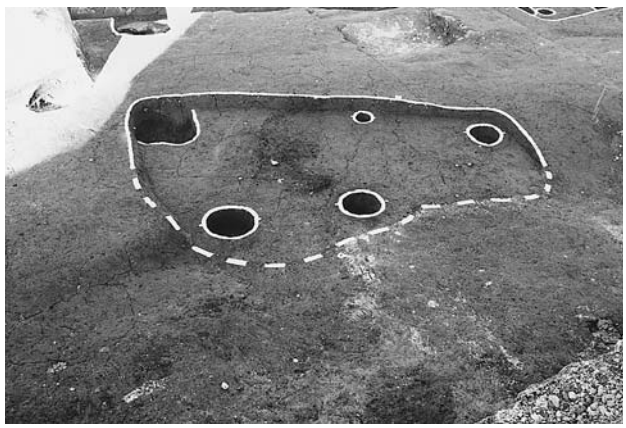
131号遺構（西から）



132号遺構（南西から）

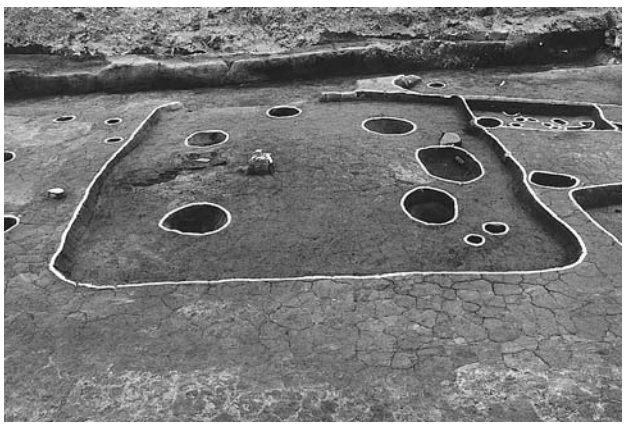


133号遺構（西から）



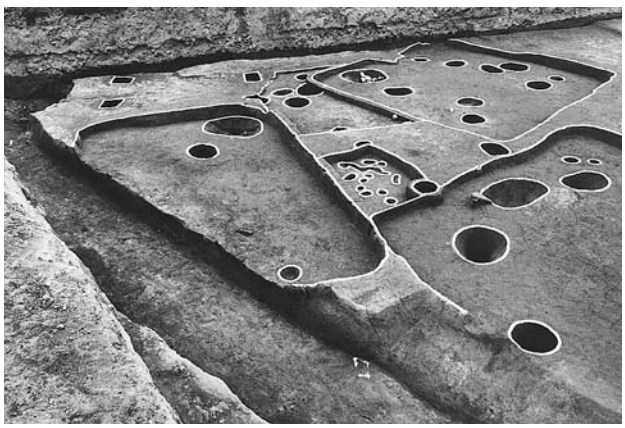
162号遺構（南西から）

118・120・121・129・130号遺構（上が西）

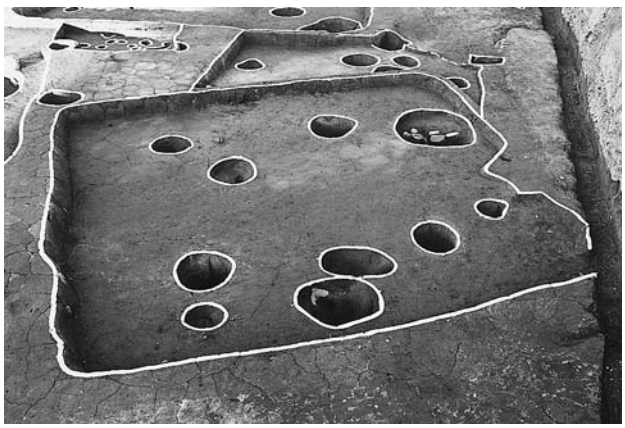


118号遺構（南西から）

118号遺構 炉跡（西から）



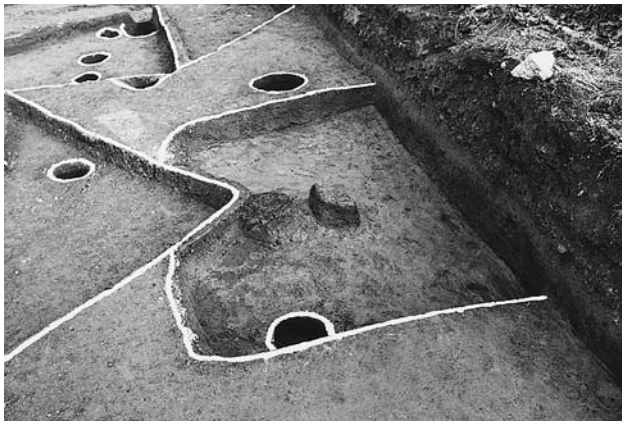
120・121号遺構（北から）



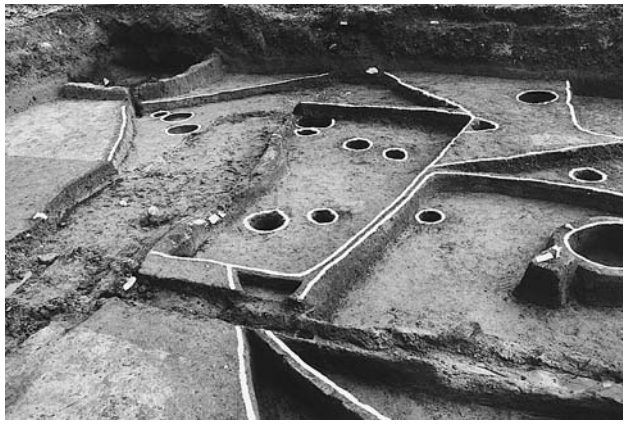
129・130号遺構（南西から）

301号遺構（北西から）

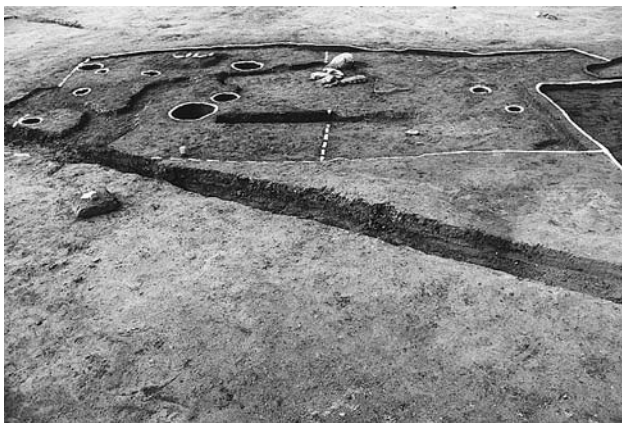
302・303・304号遺構（西から）



305号遺構（西から）

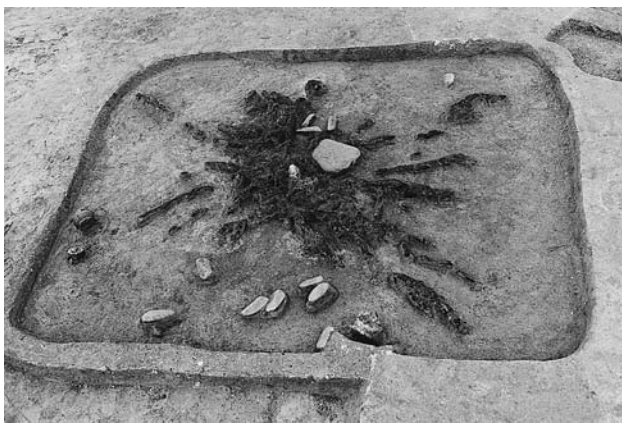


307・308号遺構（北西から）



309号遺構（東から）

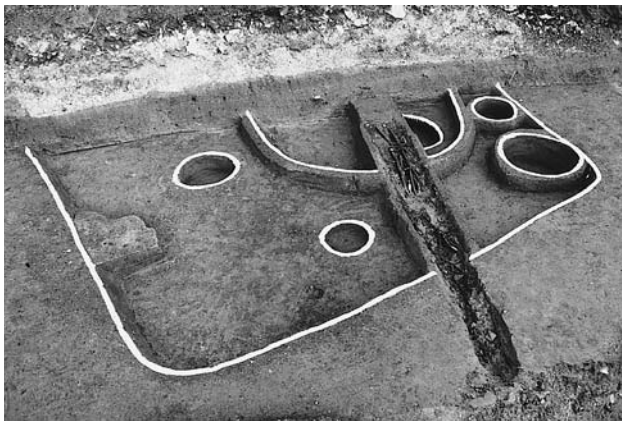
309号遺構 炉跡（東から）



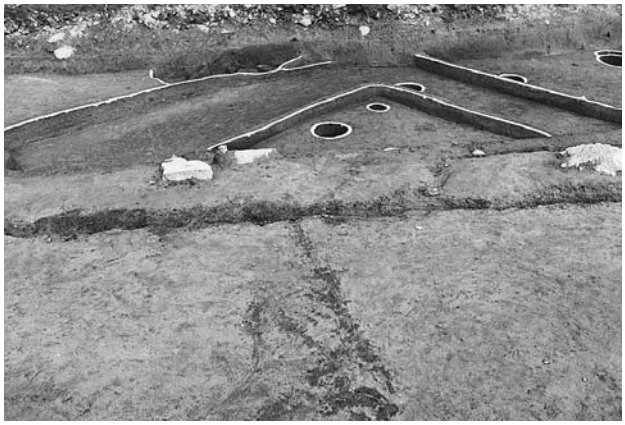
310号遺構 炭化材検出状況（南西から）

310号遺構（南西から）

310号遺構 炉跡（南西から）



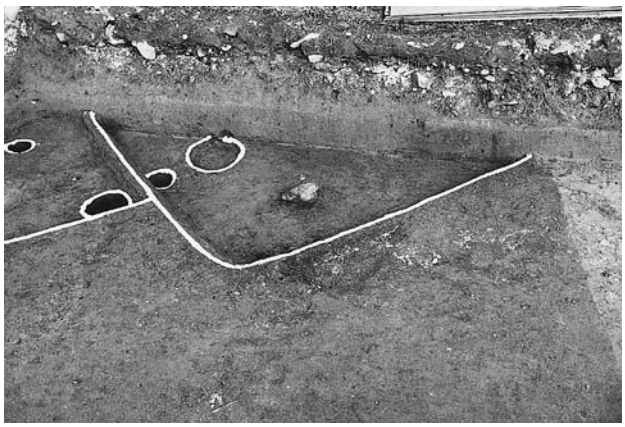
312号遺構（西から）



315・316・317・319号遺構（南西から）

318号遺構（東から）

328号遺構（西から）



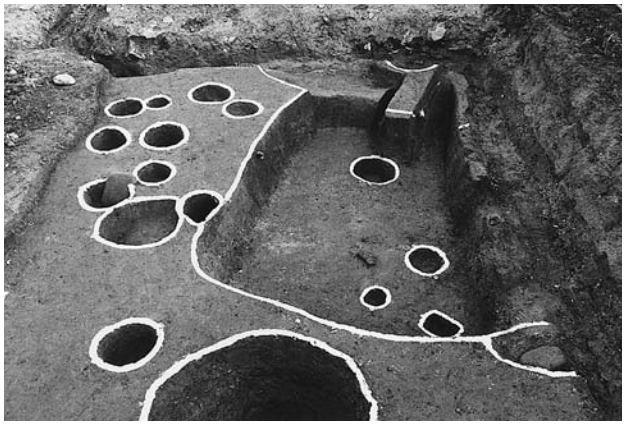
330号遺構（西から）

531号遺構（東から）

531号遺構 炉跡（南から）

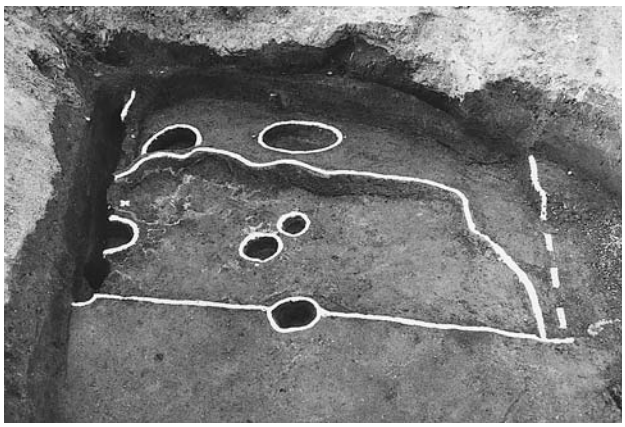
536号遺構 遺物出土状況（東から）

536号遺構（南から）

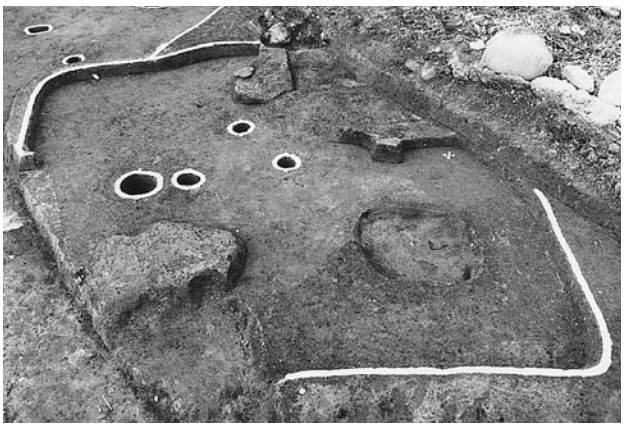


553号遺構（北西から）

559号遺構（北から）

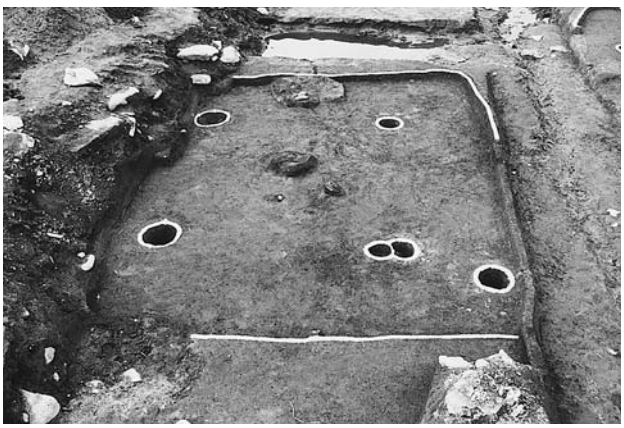


560・561号遺構（南東から）



602号遺構（南から）

603号遺構（南から）



604号遺構（南東から）

竪穴建物跡（1・3号遺構）出土遺物

20

31

21

30

55

22

57

45

58

28

46

47

29

52

61

竪穴建物跡（3・5・53・70号遺構）・土坑（40号遺構）出土遺物

竪穴建物跡（70・71・80号遺構）・土坑（74号遺構）出土遺物

75

82

87

76

83

89

92

79

86

100

101

77

102

106

竪穴建物跡（80・102・118・121号遺構）・ピット（108号遺構）出土遺物

114

119

120

122

123

125

126

127

129

131

133

134

135

136

137

138

139

140

竪穴建物跡（125・128・129・130号遺構）出土遺物

144

157

169

145

158

172

146

165

175

156

166

182

176

181

竪穴建物跡（130・132・133・162・301・302号遺構）・ピット（182号遺構）出土遺物

183

184

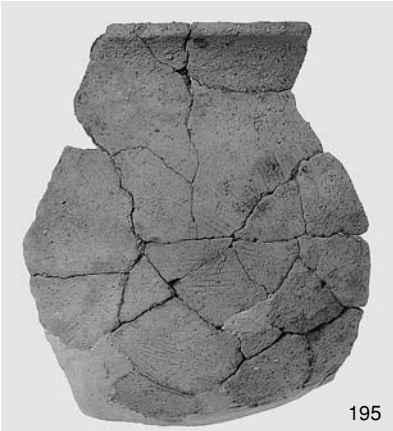
185

188

192

193

194


195

196

207

189

190

191

201

竪穴建物跡（302・303・304・305・308号遺構）出土遺物

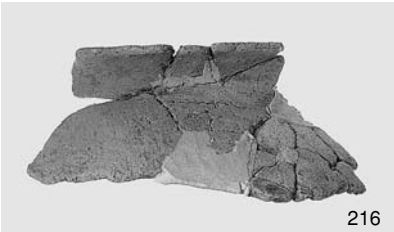
209

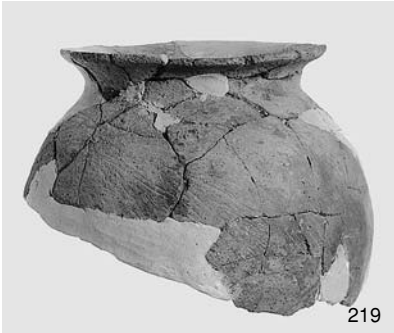
211

212

213

214


216


219

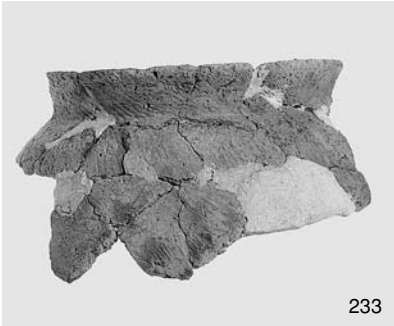
220

225

226

227

231


233

234

235

238

239

竪穴建物跡（308・309・310・312・315・319・330号遺構）出土遺物

244

248

250

251

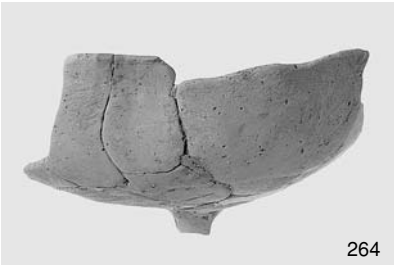
252

255

259

260

263


264

265

266

267

268

270

271

272

274

275

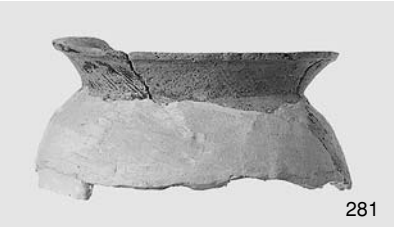
竪穴建物跡（531・536号遺構）・土坑（507号遺構）出土遺物

276

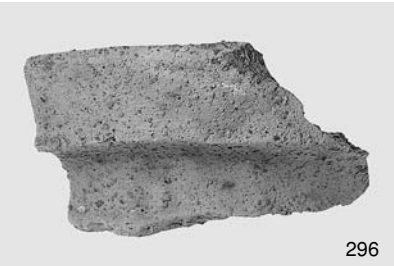
277

279

280


281

295


296

297

282

301

304

305

307

310

311

314

315

竪穴建物跡（536・560・561・602号遺構）・土坑（554号遺構）出土遺物

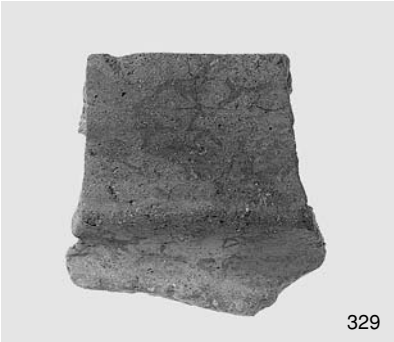
319

322

323

327

328


329

333

336

337

341

347

348

351

355

357

361

368

竪穴建物跡（603・604号遺構）・a区包含層出土遺物

369

370

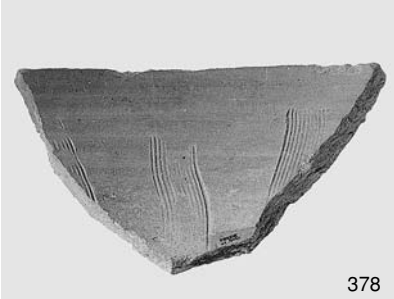
376

384

388

377

385


378

386

396

381

387

399

a区包含層・b区包含層出土遺物

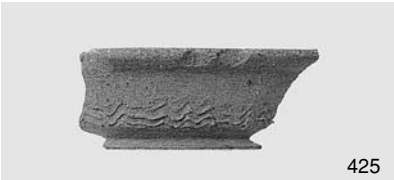
403

408

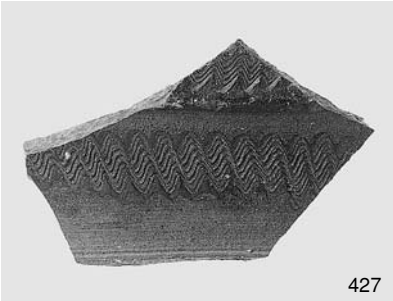
409

410

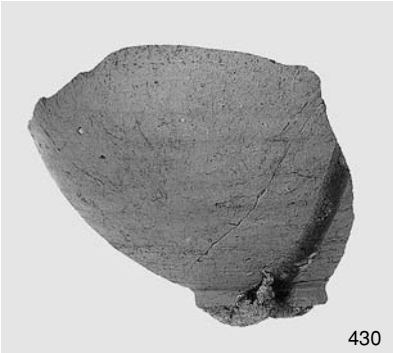
421

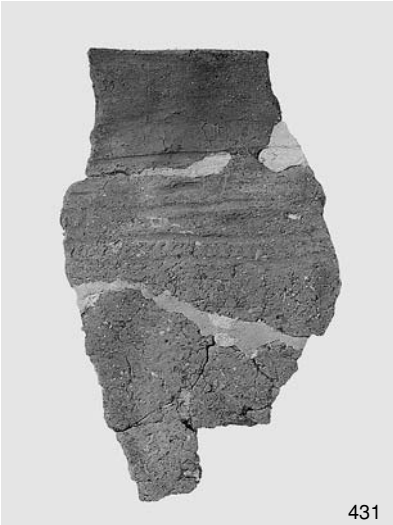

425

411


427

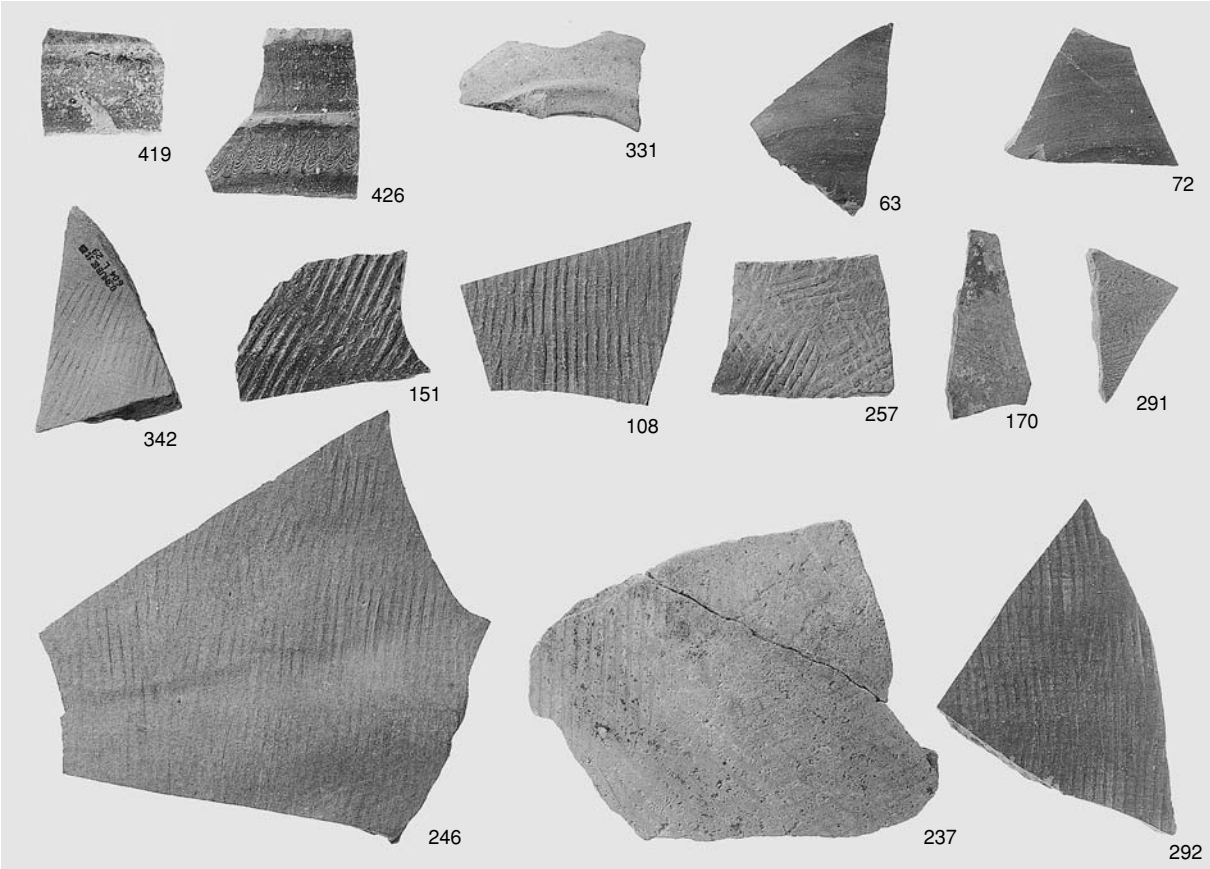
428


430

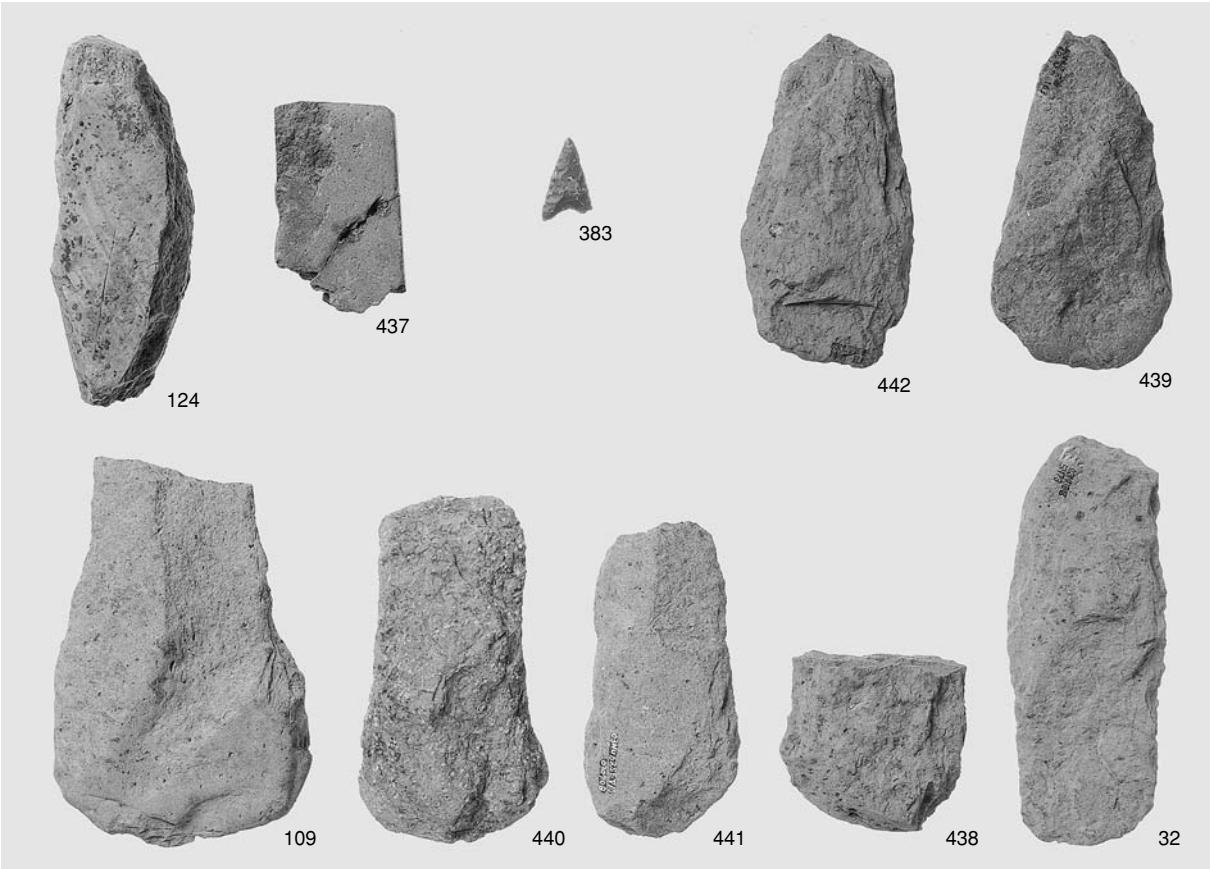

431

433

b区包含層出土遺物



須恵器破片集合



石器・石製品集合

報告書抄録

ふりがな	のうちいせきえいちく
書名	野内遺跡Ａ地区
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第102集
編著者名	小淵忠司
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1－26－1　TEL 058-237-8550
発行年月日	西暦2007年3月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
のうちいせきえいちく 野内遺跡A地区	ぎふけんたかやまし 岐阜県高山市 かみぎりまち 上切町	21203	09624	36° 09’ 47”	137° 14’ 09”	20030506 ～ 20031203	3,000m^2	高山国府バイパス建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野内遺跡A地区	集落跡	古墳時代 平安時代	竪穴建物跡58基 ピット　203基 土坑　23基 溝　4条	土師器　21,959点 須恵器　2,017点 灰釉陶器　316点	古墳時代中期の集落跡を検出 高杯、甕を主体とする土師器が出土

要　約	野内遺跡は縄文時代中期から中世にかけての複合遺跡である。遺跡東端に位置するＡ地区では、主に古墳時代中期の集落跡を検出した。建物内にカマドが導入される前の段階の集落跡であり、石をコの字状に組んだ石囲炉を備える建物が多い。出土遺物の大部分を占めるのは、高杯と甕を主体とする土師器である。器種構成やその時期的変遷の点で、周辺地域に比べ大きな隔たりは認められない。また、出土遺物には飛騨地域で最古級に位置づけられる須恵器が含まれ、当地域への須恵器導入初期の事例として注目される。集落の性格については、調査地点の南西約300mに位置する赤保木古墳群（県指定史跡）の造営主体者の居住地である可能性を指摘できる。

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第102集

野内遺跡Ａ地区

2007年３月１日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東１－26－１

印　　刷　高山印刷株式会社